

若宮遺跡

(第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点)

発掘調査概要報告書

－若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－



2002年3月

芦屋市
芦屋市教育委員会

若宮遺跡

(第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点)

発掘調査概要報告書

—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—

2002年3月

芦屋市
芦屋市教育委員会



第3地点 縄文時代晚期後半の自然河道（南東から）



第3地点 縄文時代晚期土器の出土状況（北西から）



第4地点 土器溜まり検出状況（南から）



第4地点 第12-13層境界突帯文土器の出土状況（東から）



第10-1地点 第2遺構面（南東から）



第25地点 3区第1遺構面（南から）



第34地点 護岸状遺構 獣骨・土器・石塊・粗朶の出土状況（北西から）



第34地点 護岸状遺構内における獣骨遺棄状態（南から）

序 文

阪神・淡路大震災から、7年の歳月が過ぎました。未曾有の被害を受けた本市では、今日までに多くの震災復興事業がなされています。それに伴い埋蔵文化財の発掘調査も膨大な件数となりましたが、全国自治体および兵庫県教育委員会から派遣された専門職員の支援によって迅速に発掘調査が実施されました。

そのような中、若宮遺跡は本市が震災復興事業として計画した若宮地区住環境整備事業に伴い、平成8年10月に行った試掘調査によって発見されました。それ以降、住宅や道路の建設などの復興事業に伴い合計34次の調査が行われました。そして、このたび、先に刊行された若宮遺跡第1・2地点の発掘調査報告書に続き、事業の完了にあわせて、第3～34地点の発掘調査成果をまとめ、刊行することになりました。

寛政八年（1796）に刊行された『摂津名所図会』をみると、江戸時代の若宮町付近の景観を知ることができます。それには京都へ通じる西国街道や打出村、そして、南に広がる白砂青松の美しい景色が描かれています。また、『太平記』には足利尊氏と楠正成が戦った打出の合戦（1336年）と足利尊氏と足利義直が戦った打出浜の合戦（1351年）が記されており、交通の要衝である打出の地が南北朝時代に戦乱の舞台となっていたことが知られています。

そして、若宮遺跡の発掘調査では、これら史料ではわからない当地域の歴史を復元することができました。本書を一読すると、遺跡でみつかる生活痕跡や土器などから当時の生活を推測するにとどまらず、土層の堆積や出土した獣骨を検討するなど、様々な視点からの復元が精力的に試みられていることがわかります。

本書が学術研究および教育の資料として広く活用され、郷土の歴史について関心を深めていただく一助となれば幸いと存じます。そして、今後とも文化財保護へのご理解をお願いしたく存じます。

発掘調査および本書の刊行にあたりましては、多くの方々のご協力をいただきました。最後になりましたが、この震災復興調査に全力で取り組んでいただきました全国からの支援専門職員および兵庫県教育委員会の専門職員の方々、並びに文化庁・兵庫県の関係者各位、芦屋市の関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月31日

芦屋市教育長
三浦清

例　　言

1 本書は、芦屋市教育委員会が芦屋市の若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査として実施した兵庫県芦屋市若宮町に所在する若宮遺跡第3・4・10-1・10-2・11・16-1・16-2 (1)・16-2 (2)・16-3・17・25・31~34地点の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2 若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査は、阪神・淡路大震災に伴う震災復興調査として実施された。市内の発掘調査および報告書作成にあたっては、文化庁をはじめ、兵庫県教育委員会・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、並びに全国自治体から派遣された専門職員より支援を受けて実施した。若宮遺跡の発掘調査では、下記の専門職員が兵庫県教育委員会支援により派遣され、発掘調査を担当した。

平成8年度

佐藤公保（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班・愛知県教育委員会派遣職員、第1地点担当）

小瀬忠司（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班・岐阜県教育委員会派遣職員、第1地点担当）

平成9年度

上垣幸徳（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班・滋賀県教育委員会派遣職員、第2地点担当）

福島孝行（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班・京都府教育委員会派遣職員、第2地点担当）

三輪晃三（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班・岐阜県教育委員会派遣職員、第3地点担当）

永光 寛（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班・和歌山県教育委員会派遣職員、第3地点担当）

平成11年度

山田清朝（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班、第11・16-2 (1)・25地点担当）

服部 寛（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班、第11・16-2 (1)・25地点担当）

3 若宮遺跡第3地点については調査時には、「打出小植遺跡第25地点」としていたが、その後、若宮遺跡が新たに周知されたため、遺跡および地点名を変更して報告する。なお、遺物・図面・写真等は、打出小植遺跡第25地点の旧称で整理・保管している。

4 若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査は、発掘調査は、事業の進捗状況と調整を図りながら平成8~13年度の間に実施した。第1地点は平成8年度、第2・3地点は平成9年度、第4・10-1地点は平成10年度、第10-2・11・16-1・16-2 (1)・16-2 (2)・16-3・17・25地点および第31~33地点確認調査は平成11年度、第34地点は平成12年度、第31地点は平成13年度に実施した。調査体制は本文に記載したとおりである。各調査地点の所在地・調査担当者・調査面積・調査期間・調査原因は、第1・2表に記載したとおりである。

なお、若宮遺跡第1・2地点については、平成11年8月に『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書－震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果－』<芦屋市文化財調査報告 第30集>を既に刊行している。併せ活用願いたい。

5 現地調査実施、報告書作成に際しては、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 上田 真・寺内幸治・大村敬通・小川良太・山本三郎・井守徳男・水口富夫（故人）・深井明比古・吉識雅仁・篠宮 正の各氏から懇切なる御指導・御助言を賜った。

6 本書の執筆は、各調査地点の調査担当者が執筆した。ただし、県支援で調査した第3地点については、調査を担当した三

輪晃三（岐阜県派遣）・永光 寛（和歌山県派遣）が作成した終了報告書をもとに、遺物報告を追加して、森岡秀人が執筆した。執筆者については、本文目次と本文に氏名を掲げ、その分担と責を明らかにした。

7 本書の編集については、各章節の個別編集は各担当者が行った。その分担は、第Ⅰ章を竹村忠洋、第Ⅱ章を辻 康男、第Ⅳ章を森岡秀人が行った。第Ⅲ章の各調査地点については、各調査担当者が個別編集を担当した。ただし、第3地点については、森岡が担当した。各担当者の個別編集を基礎として、竹村が統括編集を担当した。ただし、各担当者相互の協議を充分行えなかつたため、用語等の統一をはかることができなかつた。

8 発掘調査並びに報告書作成にあたつて、以下の調査補助員・整理補助員が参加した。

相澤敦子 荒木幸治 荒木由美子 石野照代 岩井美枝 梅本素子 岡 美和 岡本久仁子 岡本陽子 奥谷由香
奥出淑子 片岡亜紀 門田諭佳 川上博子 北島恭太郎 木ノ下淳美 楠 貴大 久保ふく子 小島静子 桜井雅子
篠山美津子 菅佐智子 高橋美代子 竹内里奈 竹林裕一 多田尋美 田中由理 旦 和子 戸塚由委子 中井みどり
中西邦子 永野 香 仲谷由利子 堀川憲子 山川かおり 山田みゆき 山本陽子 渡辺由布子

9 六甲土石流団体研究グループ 佐藤隆春氏には地質についての玉稿を、独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 藤田正勝氏・宮路淳子氏・松井 章氏には動物遺存体についての玉稿を賜り、付論として掲載した。記して謝意を申し上げる。

10 若宮遺跡第10-1地点の調査で出土した動物遺存体については、平成11年に奈良国立文化財研究所（当時）松井 章氏に御教示・御指導いただいた。

11 山本徹男氏には、若宮遺跡第3・4・10-1地点の発掘調査状況を復興調査記録の一環としてビデオ撮影していただいた。

12 若宮遺跡第25地点出土の水溜の樹種鑑定および保存処理については、株式会社 吉田生物研究所に委託した。

13 本書に掲載した芦屋市内遺跡分布図は国土地理院発行の50,000分の1地形図の「大阪西北部」を使用した。

14 本書に用いた方位の中で、磁北を用いたものは挿図中の方位マークに「M.N.」と記し、真北を用いたものは方位マークのみを記している。磁北は真北より $6^{\circ} 40'$ 西に振っている。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。

15 本報告に関わる出土遺物、実測図等の調査記録、写真資料、カラースライド等は、芦屋市教育委員会社会教育部文化財課 三条埋蔵文化財整理事務所において保管している。広く活用されることを希望する。

16 発掘調査および整理作業の過程で、多くの方々の御助言・御教示を賜った。記して感謝いたします。

明尾圭造 井上智博 岡田章一 瀬口真司 十河良和 千葉 豊 趙 哲済 辻本裕也 永井正浩 中村健二

橋本真紀夫 濱野俊一 古川久雄 別所秀高 松田順一郎 村上泰樹 矢野健一

独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 パリノ・サーヴェイ株式会社

（敬称略）

若宮遺跡

(第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点)

発掘調査概要報告書

—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—

序文 序言

本文目次

I	はじめに	1
1	芦屋市と阪神・淡路大震災	(竹村忠洋) 1
2	若宮地区住環境整備事業と埋蔵文化財調査	(竹村) 2
1)	震災復興・復旧事業と埋蔵文化財保護	2
2)	若宮地区住環境整備事業と埋蔵文化財保護	4
3)	若宮遺跡の発見と第1・2地点の発掘調査	4
3	第3地点以降の若宮地区住環境整備事業に伴う調査とその調査体制	(竹村) 5
II	若宮遺跡とその周辺	8
1	地理的環境	(辻 康男) 8
1)	はじめに	8
2)	堆積層の特徴とその年代	8
3)	堆積環境の変化と遺跡形成過程	12
2	歴史的環境	(辻) 16
1)	芦屋市の位置と環境	16
2)	芦屋川流域の考古遺跡と環境	16
3)	宮川流域の考古遺跡と環境	19
III	発掘調査の概要	24
1	第3地点の調査	24
1)	調査に至る経緯	(森岡秀人) 24
2)	調査の方法	(三輪晃三・永光 寛) 25
3)	層序	(三輪・永光) 25
4)	検出遺構	(三輪・永光・森岡) 26
5)	出土遺物	(森岡) 39
6)	小結	(森岡) 51
2	第4地点の調査	(竹村) 58
1)	調査に至る経緯・経過と調査の方法	58

2) 層序	59
3) 検出遺構	63
4) 出土遺物	74
5) 小結	79
3 第10-1 地点の調査	(竹村) 80
1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法	80
2) 層序	81
3) 検出遺構	86
4) 出土遺物	96
5) 小結	101
4 第10-2 地点の調査	(竹村) 102
1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法	102
2) 層序	102
3) 検出遺構	106
4) 出土遺物	111
5) 小結	113
5 第11地点の調査	(山田清朝・服部 寛) 114
1) 調査の方法	114
2) 層序	114
3) 検出遺構	116
4) 小結	116
6 第16地点（道路・換地用地全体）の確認調査	118
1) 調査に至る経緯	(森岡) 118
2) 調査の方法	(森岡) 119
3) 層序と所見	(森岡・若林純也) 119
4) 小結	(森岡) 121
7 第16-1 地点の調査	122
1) 調査の経緯	(森岡) 122
2) 確認調査の所見	(森岡・若林) 124
3) 全面調査の方法	(森岡) 125
4) 検出遺構	(森岡) 125
5) 出土遺物	(森岡) 125
6) 小結	(森岡) 125
8 第16-2 (1) 地点の調査	(山田・服部) 126
1) 調査の方法	126
2) 層序	126
3) 検出遺構	127
4) 小結	128
9 第16-2 (2)・16-3 地点の調査	130
1) 調査の方法	(辻) 130
2) 層序	(辻) 130

3) 検出遺構	(辻) 132
4) 出土遺物	(森岡) 136
5) 小結	(森岡) 142
10 第17地点の調査	(竹村) 146
1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法	146
2) 第17-1 地点の調査	146
3) 第17-2 地点 層序	147
4) 第17-2 地点 検出遺構	149
5) 出土遺物	150
6) 小結	152
11 第25地点の調査	(山田・服部) 154
1) 調査の方法	154
2) 層序	154
3) 検出遺構	155
4) 出土遺物	160
5) 小結	163
12 第31~33地点の確認調査	166
1) 調査に至る経緯と経過	(森岡) 166
2) 調査方法とその経過	(辻) 166
3) 層序	(辻) 166
4) 調査結果	(辻) 168
5) 出土遺物の分析	(森岡) 168
6) 小結	(森岡) 171
13 第31地点の調査	172
1) 調査に至る経緯と経過	(森岡) 172
2) 調査の方法	(坂田典彦) 172
3) 層序	(坂田) 173
4) 検出遺構	(坂田) 174
5) 出土遺物	(坂田) 176
6) 小結	(森岡・坂田) 177
14 第34地点の調査	178
1) 調査の方法	(辻) 178
2) 層序	(辻) 178
3) 検出遺構	(辻) 180
4) 出土遺物	(森岡) 188
5) 小結	(森岡) 196
IV まとめ	206
1 若宮地区震災復興調査6年間の総括	(森岡) 206
2 時代・時期別にみた若宮遺跡の様相と性格	(森岡) 207
1) 若宮遺跡の立地要件とその範囲について	207

2) 打出小槌遺跡と複合遺跡としての若宮遺跡	207
3) 若宮遺跡にみられる先住者の定着と画期	208
3 若宮遺跡をめぐる今後の課題	(森岡) 212
4 おわりに	(森岡) 213
引用・参考文献目録	214
付 論	220
1 若宮遺跡の地質	(佐藤隆春) 220
2 若宮遺跡第34地点出土の動物遺存体	(藤田正勝・宮路淳子・松井 章) 230
報告書抄録	244

巻頭図版目次

1 第3地点 繩文時代晚期後半の自然河道（南東から）	3 第10-1地点 第2遺構面（南東から）
第3地点 繩文時代晚期土器の出土状況（北西から）	第25地点 3区第1遺構面（南から）
2 第4地点 土器溜まり検出状況（南から）	4 第34地点 護岸状遺構 獣骨・土器・石塊・粗糞の出土状況（北
第4地点 第12-13層境界突帯文土器の出土状況（東から）	西から）
	第34地点 護岸状遺構内における獣骨遺棄状態（南から）

挿図目次

第1図 兵庫県と芦屋市の位置	1	ら) 12	
第2図 住環境整備事業実施前の若宮町と調査区位置図 1/1500	2	第15図 若宮遺跡遺跡形成過程模式変遷図の位置と主要調査地点	13
第3図 整備後の若宮地区と調査区位置図 1/1500	3	第16図 若宮遺跡遺跡形成過程模式変遷図	14
第4図 若宮遺跡第1地点 第1検出面全景（南西から）	4	第17図 芦屋市内遺跡分布図 1/50000	16
第5図 若宮遺跡第2地点 壁穴住居跡S B IV-01（北から）	4	第18図 寺田遺跡第95地点 古墳時代遺構全景（南から）	17
第6図 第4地点の発掘調査と若宮町住宅1号棟の建設工事（南から）	6	第19図 芦屋廃寺遺跡第62地点 寺院建物基壇全景（南から）	17
第7図 若宮町住宅1号棟建設現場から第4地点と若宮町を臨む（北から）	6	第20図 業平遺跡第26地点 古墳時代遺構全景（西から）	18
第8図 若宮遺跡周辺の地形分類図と主要調査地点分布図 1/2500	8	第21図 打出岸造り遺跡第32地点 大溝断面（北東から）	18
第9図 若宮遺跡第1地点 開析谷検出状況（南から）	9	第22図 芦屋川・宮川流域地形分類図	19
第10図 若宮遺跡第1地点 開析谷断面（南西から）	9	第23図 若宮遺跡第2地点 弥生時代中期遺構全景（東から）	20
第11図 若宮遺跡第10-2地点 遺跡堆積層断面（南西から）	10	第24図 若宮遺跡とその周辺遺跡の既往調査地点分布図 1/3000	20
第12図 若宮遺跡における遺跡堆積柱状図	11 21	
第13図 若宮遺跡第2地点 繩文時代晚期流路全景（東から）	12	第25図 打出小槌古墳第31地点 前方部周濠渡り堤検出状況（北から）	22
第14図 若宮遺跡第3地点 繩文時代晚期流路検出状況（南東か		第26図 打出小槌古墳第31地点 前方部周濠検出状況（南から）	22
		第27図 打出小槌古墳第31地点 周濠内遺物出土状況（東から）	

.....	22	35
第28図 金津山古墳第11地点 前方部周濠全景（南東から）	23	第66図 第3地点 2E区第9層土器出土状況（北から）	35
第29図 金津山古墳第11地点 前方部周濠内堆積状況（南東から）	23	第67図 第3地点 第4遺構面平面図 1/120	36
.....	23	第68図 第3地点 第5遺構面平面図 1/120	37
第30図 第3地点 調査風景（南東から）	24	第69図 第3地点 遺構完掘状況全景（南東から）	38
第31図 第3地点 発掘調査区割付図	24	第70図 第3地点 遺構完掘状況全景（西から）	38
第32図 第3地点 土層断面図（1） 1/50	27	第71図 第3地点 流路土層断面細部（南東から）	38
第33図 第3地点 土層断面図（2）	28	第72図 第3地点 流路土層断面全景（南東から）	38
第34図 第3地点 流路土層断面（南西から）	29	第73図 第3地点 流路完掘状態（北西から）	38
第35図 第3地点 調査区東壁土層断面（西から）	29	第74図 第3地点 出土遺物実測図（1） 1/4	40
第36図 第3地点 調査区東壁土層断面（北西から）	29	第75図 第3地点 出土遺物実測図（2） 1/4	42
第37図 第3地点 調査区西壁土層断面（南東から）	29	第76図 第3地点 繩文土器 成形・調整痕・突帯形態 拓影（1）	
.....	29	1/2	44
第38図 第3地点 調査区西壁土層断面（北東から）	29	第77図 第3地点 繩文土器 成形・調整痕・突帯形態 拓影（2）	
.....	29	1/2	46
第39図 第3地点 調査区西壁土層断面（北東から）	29	第78図 第3地点 出土遺物実測図（3） 1/4	48
第40図 第3地点 第1遺構面平面図 1/120	30	第79図 第3地点 出土遺物実測図（4） 1/4	50
第41図 第3地点 調査風景（南東から）	30	第80図 第3地点 主要出土遺物（1）	52
第42図 第3地点 第1遺構面全景（北西から）	30	第81図 第3地点 主要出土遺物（2）	52
第43図 第3地点 第2遺構面平面図 1/120	31	第82図 第3地点 主要出土遺物（3）	53
第44図 第3地点 第2遺構面全景（北西から）	31	第83図 第3地点 主要出土遺物（4）	53
第45図 第3地点 第2遺構面全景東半部（北から）	31	第84図 第4地点 調査区配置図 1/200	58
第46図 第3地点 第1遺構面（西から）	32	第85図 第4地点 調査風景（南西から）	59
第47図 第3地点 第1遺構面（北から）	32	第86図 トライヤるウイークでの中学生調査参加風景	59
第48図 第3地点 第1遺構面西半部（西から）	32	第87図 第4地点 土層断面図 1/50	60
第49図 第3地点 1D区耕作痕完掘状況（北から）	32	第88図 第4地点 深掘トレント土層断面図 1/50	61
第50図 第3地点 第2遺構面全景（西から）	32	第89図 第4地点 調査区西壁土層断面（東から）	62
第51図 第3地点 第2遺構面全景西半部（西から）	32	第90図 第4地点 南北深掘トレント南半部土層断面（西から）	62
第52図 第3地点 第2遺構面2E区南東側ピット（西から）	32	第91図 第4地点 第1遺構面全景（北から）	63
第53図 第3地点 第2遺構面2E区北西側ピット（西から）	32	第92図 第4地点 第1遺構面平面図 1/80	64
第54図 第3地点 第3遺構面平面図 1/120	33	第93図 第4地点 犁痕検出状況（西から）	64
第55図 第3地点 第3遺構面全景東半部（北から）	33	第94図 第4地点 S D04・05（西から）	64
第56図 第3地点 第3遺構面全景西半部（西から）	33	第95図 第4地点 第2遺構面全景（北から）	65
第57図 第3地点 第4遺構面平面図土器群分布 1/120	34	第96図 第4地点 第2遺構面平面図 1/80	66
第58図 第3地点 流路全景（南東から）	34	第97図 第4地点 S H01・02平面・断面図 1/50	67
第59図 第3地点 流路全景（北西から）	34	第98図 第4地点 S H01（西から）	67
第60図 第3地点 調査区東壁土層（北西から）	35	第99図 第4地点 S H02（西から）	67
第61図 第3地点 1E区第8層土器出土状況（東から）	35	第100図 第4地点 S H03～05平面・土層断面図 1/50, 床面ピット断面図 1/40	68
.....	35	68
第62図 第3地点 1E区第8層流路肩土器出土状況（北西から）	35	第101図 第4地点 S H03～05（北から）	68
.....	35	68
第63図 第3地点 1E区流路肩第8層落ち込み部（南から）	35	第102図 第4地点 S H03・04（西から）	68
.....	35	68
第64図 第3地点 2D区第9層上面土器出土状況（南から）	35	68
.....	35	68
第65図 第3地点 2E区第9層流路肩土器出土状況（北東から）	68

第103図 第4地点 S K02 (北から), S K02平面・土層断面図 1/20, ピット検出状況 (西から), ピット断面図 1/10	69
第104図 第4地点 第3遺構面全景 (北西から)	70
第105図 第4地点 第3遺構面平面図 1/80	71
第106図 第4地点 土器溜まり検出状況 (南から)	72
第107図 第4地点 土器溜まり検出状況 (北西から)	72
第108図 第4地点 S R01 (西から)	72
第109図 第4地点 第12-13層境界出土突帯文土器出土状況 (北東から)	72
第110図 第4地点 第4遺構面平面図 1/80, S R02土層断面図 1/40	73
第111図 第4地点 第4遺構面全景 (南西から)	73
第112図 第4地点 S R02土層断面 (南西から)	73
第113図 第4地点 出土遺物実測図 (1) 1/4	75
第114図 第4地点 出土遺物実測図 (2) 1/4	77
第115図 第4地点 出土遺物実測図 (3) 1/4	79
第116図 第10・17地点 調査区配置図 1/500	80
第117図 第10-1地点 調査風景 (南西から)	81
第118図 宮川小学校生徒の調査見学風景	81
第119図 第10-1地点 土層断面図 (1) 1/60	82
第120図 第10-1地点 土層断面図 (2) 1/60	83
第121図 第10-1地点 調査区西壁土層断面 (南東から)	84
第122図 第10-1地点 第1遺構面平面図 1/150	86
第123図 第10-1地点 第1遺構面全景 (北から)	87
第124図 第10-1地点 S D01・02検出状況 (南から)	87
第125図 第10-1地点 調査区北東部犁痕検出状況 (南から)	87
第126図 第10-1地点 第2遺構面平面図 1/150	88
第127図 第10-1地点 第2遺構面全景 (南東から)	89
第128図 第10-1地点 耕作溝 (北から)	89
第129図 第10-1地点 耕作溝埋土層 (南から)	89
第130図 第10-1地点 S K02 (南東から)	89
第131図 第10-1地点 S R01 (北から)	89
第132図 第10-1地点 第3遺構面畦畔 (南西から)	90
第133図 第10-1地点 第3遺構面全景 (南東から)	91
第134図 第10-1地点 畦畔2・3 (西から)	91
第135図 第10-1地点 畦畔2土層断面 (東から)	91
第136図 第10-1地点 畦畔3 (南から)	91
第137図 第10-1地点 足跡検出状況 (北から)	91
第138図 第10-1地点 第3遺構面平面図 1/150	92
第139図 第10-1地点 第4遺構面平面図 1/150	93
第140図 第10-1地点 第4遺構面全景 (南から)	94
第141図 第10-1地点 S K03・S D03 (東から)	94
第142図 第10-1地点 S R02・03 (南から)	94
第143図 第10-1地点 S R02土層断面 (東から)	94
第144図 第10-1地点 S R03土層断面 (東から)	94
第145図 第10-1地点 S R02刀装具出土状況 1/5	95
第146図 第10-1地点 S R02刀装具出土状況 (南から)	95
第147図 第10-1地点 S R02土器出土状況 (南から)	95
第148図 第10-1地点 S X01検出状況 (南から)	97
第149図 第10-1地点 S X01検出状況 (西から)	97
第150図 第10-1地点 S X02検出状況 (北西から)	97
第151図 第10-1地点 S X02埋土土層断面 (北西から)	97
第152図 第10-1地点 S X02完掘状況 (北西から)	97
第153図 第10-1地点 S X02完掘状況 (北東から)	97
第154図 第10-1地点 深掘トレンチ (南東から)	97
第155図 第10-1地点 深掘トレンチ第9層土器出土状況 (北西から)	97
第156図 第10-1地点 出土遺物実測図 (1) 1/2	98
第157図 第10-1地点 出土遺物実測図 (2) 1/4	100
第158図 第10-1地点 出土遺物実測図 (3) 1/4	101
第159図 第10-2地点 調査風景 (南東から)	102
第160図 浜風小学校生徒の調査見学風景	102
第161図 第10-2地点 土層断面図 1/60	104
第162図 第10-2地点 調査区北壁土層断面 (南東から)	105
第163図 第10-2地点 調査区北壁土層断面 (南から)	105
第164図 第10-2地点 調査区西壁土層断面 (北東から)	105
第165図 第10-2地点 調査区西壁土層断面 (南東から)	105
第166図 第10-2地点 第1遺構面平面図 1/100	106
第167図 第10-2地点 第1遺構面全景 (南東から)	107
第168図 第10-2地点 足跡検出状況 (南西から)	107
第169図 第10-2地点 S X01 (南西から)	107
第170図 第10-2地点 第2遺構面平面図 1/100	108
第171図 第10-2地点 第2遺構面全景 (南東から)	109
第172図 第10-2地点 S D01検出状況 (南東から)	109
第173図 第10-2地点 S D01 (南東から)	109
第174図 第10-2地点 S D01 (南から)	109
第175図 第10-2地点 S D01 (北西から)	109
第176図 第10-2地点 第3遺構面平面図 1/100	110
第177図 第10-2地点 第3遺構面全景 (南東から)	111
第178図 第10-2地点 第3遺構面全景 (南西から)	111
第179図 第10-2地点 深掘トレンチ (南西から)	111

第180図 第10-2地点 出土遺物実測図 1/4 112	第211図 第16-3地点 調査区南壁土層断面(北東から) 131
第181図 第11地点 調査区配置図 1/500 114	第212図 第16-27地点 調査区配置図 1/300 133~134
第182図 第11地点 遺構平面図 1/200, 土層断面図 水平: 1/200・垂直: 1/40 115	第213図 第16-2(2)地点 第5層上面遺構平面図 1/100 133~134
第183図 第11地点 基本層序(西から) 115	第214図 第16-2(2)地点 第12層上面遺構平面図 1/100 133~134
第184図 第11地点 溝(北から) 116	第215図 第16-3地点 第4層上面遺構平面図 1/80 133~134
第185図 第16地点 道路部分確認調査トレンチ配置図 1/400 118	第216図 第16-3地点 第5層上面遺構平面図 1/80 133~134
第186図 第16地点 道路部分確認調査基本土層図 1/20 119	第217図 第16-2(2)・16-3地点 遺跡堆積層模式断面図 水平: 1/200, 垂直 1/60 133~134
第187図 第16地点 東西線道路部分の現状(東から) 120	第218図 第16-2(2)地点 ピット断面(北から) 135
第188図 第16地点 2号線道路部分の現状(南から) 120	第219図 第16-2(2)地点 土坑1完掘状況(東から) 135
第189図 第16地点 1号線道路部分の現状(南から) 120	第220図 第16-2(2)地点 第10層内遺物出土状況(北から) 135
第190図 第16地点 第1トレンチ南壁土層断面(北から) 120	第221図 第16-2(2)地点 完掘状況(西から) 135
第191図 第16地点 第2トレンチ試掘作業風景(南西から) 120	第222図 第16-2(2)・16-3地点 出土遺物実測図(1) 1/4 138
第192図 第16地点 第2トレンチ南壁土層断面(北から) 120	第223図 第16-2(2)・16-3地点 出土遺物実測図(2) 1/4 140
第193図 第16地点 第2トレンチ完掘(西から) 120	第224図 第16-2(2)地点 出土遺物写真(1) 144
第194図 第16地点 第3トレンチ完掘状態(南から) 120	第225図 第16-2(2)地点 出土遺物写真(2) 144
第195図 第16地点 第4トレンチ東壁土層図 1/40 121	第226図 第16-2(2)地点 出土遺物写真(3) 145
第196図 第16-1地点 調査地近景(北から) 122	第227図 第16-2(2)地点 出土遺物写真(4) 145
第197図 第16-1地点 調査地現況(東から) 122	第228図 第17地点 調査地全景(西から) 146
第198図 第16-1地点 調査風景(西から) 122	第229図 第17-1地点 調査区全景(南西から) 147
第199図 第16-1地点 調査風景(南から) 122	第230図 第17-1地点 I区西壁土層断面(東から) 147
第200図 第16-1地点 検出遺構全景(西から), 調査区・遺構配置図 1/75 123	第231図 第17-2地点 土層断面図 1/50, 調査区北壁土層(南から) 148
第201図 第16-1地点 調査区土層断面図 1/50 124	第232図 第17-2地点 調査区南壁土層(北東から) 149
第202図 第16-1地点 調査区東壁土層断面(北西から) 124	第233図 第17-2地点 調査区西壁土層(東から) 149
第203図 第16-1地点 調査区南壁土層断面(北西から) 124	第234図 第17-2地点 遺構平面図 1/100 150
第204図 第16-2(1)地点 調査区配置図 1/500 126	第235図 第17-2地点 第1遺構面全景(南西から) 151
第205図 第16-2(1)地点 土層断面図 水平: 1/100・垂直: 1/45 127	第236図 第17-2地点 第1遺構面全景(北から) 151
第206図 第16-2(1)地点 遺構検出状況(北から) 128	第237図 第17-2地点 第1遺構面全景(東から) 151
第207図 第16-2(1)地点 遺構平面図 1/100, 断面図 垂直: 1/40 128	第238図 第17-2地点 SD01(北から) 151
第208図 第16-2(1)地点 調査区全景(北から) 129	第239図 第17-2地点 第2遺構面全景(北から) 151
第209図 第16-2(2)・16-3地点 調査区配置図 1/600 130	第240図 第17-2地点 第2遺構面全景(西から) 151
第210図 第16-2(2)地点 調査区北壁土層断面(南東から) 131	第241図 第17-2地点 SD01土層断面(西から) 151
	第242図 第17-2地点 深掘トレンチ全景(北西から) 151
	第243図 第17地点 出土遺物実測図 1/4, 3のみ 1/2 152
	第244図 第17-1地点 土層断面(南東から) 153

第245図 第25地点 調査区配置図 1/500	154	第276図 第31~33地点確認調査 第3トレントレンチ南壁土層断面(北から)	170
第246図 第25地点 基本層序	155	第277図 第31~33地点確認調査 第4トレントレンチ第5層上面検出状況(北から)	170
第247図 第25地点 2区第1遺構面平面図 1/150	155	第278図 第31~33地点確認調査 第4トレントレンチ南壁土層断面(北東から)	170
第248図 第25地点 2区水田跡(東から)	155	第279図 第31~33地点確認調査 第5トレントレンチ南壁土層断面(北から)	170
第249図 第25地点 2区第2遺構面平面図 1/150	155	第280図 第31地点 調査区配置図	172
第250図 第25地点 2区第2遺構面全景(西から)	156	第281図 第31地点 調査区設定状況(北から)	173
第251図 第25地点 2区SE1実測図 1/30	156	第282図 第31地点 2段目調査風景(北から)	173
第252図 第25地点 2区SE1断面(南から)	156	第283図 第31地点 3段目調査風景(北から)	173
第253図 第25地点 2区SE1水溜実測図 1/4	157	第284図 第31地点 調査区東壁(1段目)土層断面(西から)	174
第254図 第25地点 2区第3遺構面平面図 1/150	158	第285図 第31地点 調査区東壁(2・3段目)土層断面(北西から)	174
第255図 第25地点 2区落ち込み(北から)	158	第286図 第31地点 土層断面図 1/60	175
第256図 第25地点 落ち込み土層断面(北から)	158	第287図 第31地点 自然流路1平面図 1/30	176
第257図 第25地点 3区第1遺構面全景(南から)	159	第288図 第31地点 自然流路1完掘状況(北から)	176
第258図 第25地点 3区第1遺構面畦畔(西から)	159	第289図 第31地点 第2遺構面検出状況(東から)	176
第259図 第25地点 3区第1遺構面平面図 1/150	159	第290図 第31地点 出土遺物実測図 1/4	177
第260図 第25地点 3区第3・4遺構面平面図 1/150	160	第291図 第34地点 調査区配置図 1/700	178
第261図 第25地点 3区第4遺構面全景(南から)	160	第292図 第34地点 遺跡堆積層柱状図	179
第262図 第25地点 SD2出土土器 1/4	161	第293図 第34地点 東西トレントレンチ南壁土層断面(北東から)	180
第263図 第25地点 落ち込み上層出土土器 1/4	161	第294図 第34地点 東西トレントレンチ溝1断面(北東から)	180
第264図 第25地点 落ち込み下層出土土器 1/4	162	第295図 第34地点 東西トレントレンチ南壁遺跡堆積層断面図 1/50	181
第265図 第25地点 2区SE1水溜(処理前, 株式会社吉田生物研究所撮影)	164	第296図 第34地点 検出遺構平面図 1/250	182
第266図 第25地点 2区SE1水溜(処理前, 株式会社吉田生物研究所撮影)	164	第297図 第34地点 護岸状遺構(北西から)	183
第267図 第25地点 2区SE1水溜(処理後, 株式会社吉田生物研究所撮影)	165	第298図 第34地点 護岸状遺構獸骨出土状況全景(北から)	183
第268図 第25地点 2区SE1水溜(処理後, 株式会社吉田生物研究所撮影)	165	第299図 第34地点 護岸状遺構獸骨出土状況北東区(西から)	183
第269図 第31~33地点確認調査 試掘トレントレンチ配置図 1/500	167	第300図 第34地点 護岸状遺構獸骨出土状況南東区(西から)	183
第270図 第31~33地点確認調査 第1~5トレントレンチ土層断面図 1/40	169	第301図 第34地点 護岸状遺構南壁土層断面図 1/20	184
第271図 第31~33地点確認調査 第1・4トレントレンチ検出遺構平面図 1/40	169	第302図 第34地点 護岸状遺構断面(南から)	184
第272図 第31~33地点確認調査 調査地近景(南東から)	170	第303図 第34地点 護岸状遺構木材出土状況(南から)	184
第273図 第31~33地点確認調査 第1トレントレンチ南壁土層断面(北から)	170	第304図 第34地点 護岸状遺構獸骨出土状況平面図 1/20	185~186
第274図 第31~33地点確認調査 第1トレントレンチ第4層上面土坑土層断面(北東から)	170	第305図 第34地点 護岸状遺構下部木材出土状況平面図 1/20	185~186
第275図 第31~33地点確認調査 第2トレントレンチ完掘状況(南東から)	170	第306図 若宮遺跡南半部調査状況平面図(1) 1/1200	187
		第307図 若宮遺跡南半部調査状況平面図(2) 1/1200	187
		第308図 第34地点 出土遺物実測図(1) 1/4	190

第309図 第34地点 出土遺物実測図（2）	1／4	192	第319図 第34地点 出土遺物（1）	201
第310図 第34地点 出土遺物実測図（3）	1／4	194	第320図 第34地点 出土遺物（2）	201
第311図 第34地点 出土遺物実測図（4）	1／4	196	第321図 第34地点 出土遺物（3）	202
第312図 第34地点 出土遺物実測図（5）	1／2	196	第322図 第34地点 出土遺物（4）	202
第313図 第34地点 出土遺物実測図（6）	1／4	197	第323図 第34地点 出土遺物（5）	203
第314図 第34地点 出土遺物実測図（7）	1／4	198	第324図 第34地点 出土遺物（6）	203
第315図 第34地点 出土遺物実測図（8）	1／4	199	第325図 第34地点 出土遺物（7）	204
第316図 第34地点 出土遺物実測図（9）	1／4	200	第326図 第34地点 出土遺物（8）	204
第317図 第34地点 出土遺物実測図（10）	1／4	200	第327図 第34地点 出土遺物（9）	205
第318図 第34地点 出土遺物実測図（11）	1／4	200	第328図 第34地点 出土遺物（10）	205

表 目 次

第1表 若宮地区住環境整備事業に伴う確認調査一覧表	7	第7表 第3地点 その他の遺物観察表（1）	56
第2表 若宮地区住環境整備事業に伴う発掘調査一覧表	7	第8表 第3地点 その他の遺物観察表（2）	57
第3表 層相分類一覧	11	第9表 第16-2（2）・16-3地点 出土遺物層位別頻度表	
第4表 第3地点 繩文土器観察表（1）	54		137
第5表 第3地点 繩文土器観察表（2）	55	第10表 第16-2（2）・16-3地点 出土遺物観察表	141
第6表 第3地点 繩文土器観察表（3）	56		

付論挿図・表目次

1 若宮遺跡の地質（佐藤隆春）

第1図 若宮遺跡付近の微地形図とボーリング調査地点	221
第2-1図 若宮遺跡のボーリング調査による柱状図（1）	222
第2-2図 若宮遺跡のボーリング調査による柱状図（2）	223
第3図 沖積層基底面等高線図	224
第4図 第1b層	224

第5図 流路を埋積した塊状粗粒砂	225
第6図 第10-1地点第7層	225
第7図 第10-1地点第9層	226
第8図 第10-1地点第9c層のクロスラミナ	227
第9図 第9c層に含まれる礫とラミナ	227

2 若宮遺跡第34地点出土の動物遺存体（藤田正勝・宮路淳子・松井 章）

第1図 ウシ上腕骨への切痕	233
第2図 イヌ橈骨への切痕	233
第3図 出土動物遺存体（1）	234
第4図 出土動物遺存体（2）	234
第5図 出土獸骨位置図	242
第6図 動物遺存体の同定作業風景（1）（奈良文化財研究所 古環境研究室）	243
第7図 動物遺存体の同定作業風景（2）（奈良文化財研究所 古環境研究室）	243
第8図 動物遺存体の同定作業風景（3）（奈良文化財研究所 古環境研究室）	243

第1表 出土動物遺存体種名一覧	233
第2表 第34地点 出土獸骨種・部位別集計表	235
第3表 第34地点 出土獸骨一覧表（1）	236
第4表 第34地点 出土獸骨一覧表（2）	237
第5表 第34地点 出土獸骨一覧表（3）	238
第6表 第34地点 出土獸骨一覧表（4）	239
第7表 第34地点 出土獸骨一覧表（5）	240
第8表 第34地点 出土獸骨一覧表（6）	241

I はじめに

1 芦屋市と阪神・淡路大震災

芦屋市は、兵庫県の南東部に位置している（第1図）。その規模は、東西約2.5km、南北約8.3km、総面積18.57km²を測る。北方には六甲山地が横たわり、南方には大阪湾が広がっている。市域は狭いながらもJR神戸線、阪急電鉄神戸線、阪神電鉄本線、国道2号・43号線、阪神高速道路3号神戸線・5号湾岸線が東西に走っており、交通の要衝となっている。市街地は六甲山南麓に東西にのびる狭隘な平野を中心に形成されており、近年では六甲山地を切り崩し、また、海浜部を埋め立てることによって、住宅地を拡充している。

自然環境に恵まれた本市には、古くから人々が生活し、市内には彼らの生きた証である埋蔵文化財が数多く包蔵されている。しかし、近代以降の市街地化の進行によって、埋蔵文化財が破壊される状況が生じた。そのような状況において、本市では昭和31年（1956）に会下山遺跡が発掘調査されたのを契機として、住宅建設などに伴い遺跡が発掘調査され、記録保存されるようになった。

平成7年1月17日午前5時46分、マグニチュード7.2の規模で発生した巨大地震が、突如、芦屋市を襲った。震源地は淡路島の北方沖合の北緯34度36分、東経135度02分を震源地とし、震源の深さは16kmを測る。芦屋市では、三条町の一部と山手町の一部、およびJR芦屋駅付近で震度7が計測された。気象庁はこの地震を「平成7年（1995年）兵庫県南部地震」と命名し、さらに政府は今後の復旧・復興施策を推進する際の統一的な名称の必要性から、この都市直下型の大規模地震を「阪神・淡路大震災」と呼称することを了承した。



第1図 兵庫県と芦屋市の位置



第2図 住環境整備事業実施前の若宮町と調査区位置図（数字は調査地点名を示す） 1/1500

地震による被害状況は、全体で死者は6,400人以上（いわゆる関連死を含む）、負傷者は43,700人以上に及んだ。本市においては平成8年8月現在で死者443人（関連死を含む）、負傷者は判明しているだけでも3,000人以上、市内の建物の半数以上となる8,700棟余りが全半壊と判定されるなど、被害は甚大なものであった〔芦屋市2001a〕。

（竹村忠洋）

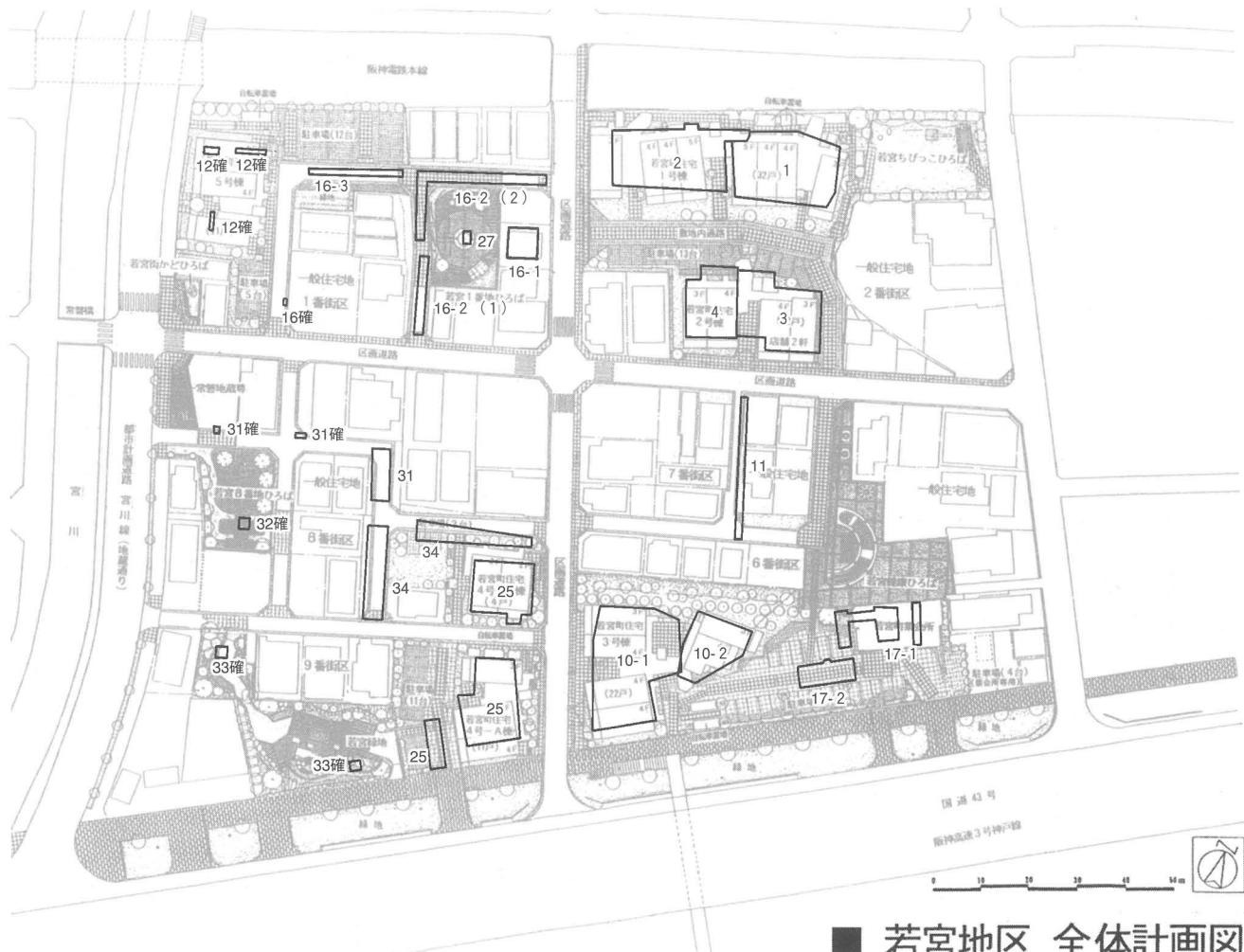
2 若宮地区住環境整備事業と埋蔵文化財調査

1) 震災復興・復旧事業と埋蔵文化財保護

震災後、被災した住宅や道路などの復旧・復興事業が周知の埋蔵文化財包蔵地内で一斉に行われることが予測された。復旧・復興事業の円滑な推進と同時に、埋蔵文化財保護の整合を図るために、文化庁は法的な緩和措置を行い、人的支援や財政確保の三位一体の施策をとることになった。その具体的な取り扱いは、平成7年3月29日付府保記第144号により文化庁次長通知である「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」（以下「基本方針」と略す）として定められ、弾力的対応による記録保存のための発掘調査体制が整えられていった。

この「基本方針」を受け、兵庫県教育委員会は関係諸機関と協議し、取り扱いに関する適用要領を県下の市郡町教育委員会に通知して、迅速な発掘調査が行えるよう被災市町との調整を図った。

人的支援については、全国知事会会長から各都道府県知事宛に依頼が行われ、被災地に専門職員が



■ 若宮地区 全体計画図

第3図 整備後の若宮地区と調査区位置図（数字は調査地点名を示す） 1/1500

派遣されることとなった。具体的には、自治省・文化庁が各都道府県および政令指定都市に対して派遣を要請し、平成7年6月1日に2府15県から25名の専門職員が兵庫県教育委員会に派遣され、同年10月1日にはさらに10県10名の派遣増員がなされた。平成8年度には、さらに支援職員の充実化が図られ、50名体制となり、平成9年度には25名の支援職員が派遣された。

当初、「基本方針」は、震災後3年にあたる平成9年度までに限定された取り扱いであったが、未だ復興事業が収束していない状況を勘案し、平成11年度まで延長されることとなった。平成10年度以降は、復興調査量が減少すると予測されたため、他府県からの支援職員の派遣は終了し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の復興調査班に属する県職員が県下市町に派遣され、復興事業に伴う埋蔵文化財調査を支援することとなった。

財政的措置については、文化庁が発掘調査量の激増を予測して国庫補助金の増額を行い、その対象枠の大幅な拡大に努めた。具体的には、個人住宅や中・小企業など零細企業が原因者となる復興事業については、発掘調査の公費負担を行った。

以上の経過を経て、震災下の発掘調査は被害の甚大な本市にあっても、埋蔵文化財保護を目的とした事前調査として実施されるようになり、今回、報告する若宮地区住環境整備事業に伴う若宮遺跡の発掘調査もその一つとなった。

2) 若宮地区住環境整備事業と埋蔵文化財保護

全・半壊建物の割合が約9割に達した若宮町は、市内で地震による被害が激しかった地域の一つである。本市が平成7年2月8日に策定した震災復興計画案では、若宮地区において住環境整備事業が計画された。当事業では、新規の土地区画道路や市営住宅・集会所・公園が建設されることとなった。

平成8年9月には、事業担当課である本市開発事業課（若宮地区担当）から教育委員会文化財課に当該事業計画の照会があった。事業区域については、これまで埋蔵文化財の調査がまったくくなされておらず、その状況が把握されていなかった。そして、大規模公共工事を伴う復興区域については、試掘調査を実施し、未周知の遺跡の不時発見を防ぐよう兵庫県教育委員会から指導を受けていた。そこで、文化財課では開発事業課と協議し、事業計画地について順次、試掘調査を実施して、工事中の埋蔵文化財不時発見を未然に防ぎ、埋蔵文化財が確認された場合は事前調査を復興調査として位置づけ、「基本方針」にしたがい、順次早期対応を図る旨を決めた。

（竹村）

3) 若宮遺跡の発見と第1・2地点の発掘調査

若宮地区住環境整備事業の一環として若宮町住宅（1号棟）の建築が計画され、文化財課は平成8年10月23日に文化財課森岡秀人係長・竹村忠洋係員を調査担当者として試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財包蔵の兆候を得たため、第2次確認調査を実施することになった。第2次確認調査は、兵庫県教育委員会に職員の派遣を依頼し、佐藤公保（愛知県派遣）・小淵忠司（岐阜県派遣）を調査担当者として平成8年11月7日～13日に実施した。その結果、埋蔵文化財の包蔵が確認されたため、全面調査が必要であると判断された。

なお、遺跡および調査地点名については、阪神電鉄の北側に広がっていた打出小槌遺跡が南方へさらに広がっていると理解し、打出小槌遺跡第23地点とした。しかし、その後の第24地点と第25地点の発掘調査の結果、打出小槌遺跡では確認されていない縄文時代晚期から弥生時代の遺構・遺物がまとまって検出されたことから、別の遺跡とした方が適切と考えられた。そこで、阪神電鉄以南の若宮町一帯に包蔵されることが推測される遺跡を打出小槌遺跡から分離して、「若宮遺跡」として新たに設定することにした。そして、打出小槌遺跡第23・24・25地点については、若宮遺跡第1・2・3地点と遺跡および調査地点名を変更することになった。

第1地点の発掘調査は、佐藤（愛知県派遣）・小淵（岐阜県派遣）を調査担当者として、平成9年1月29日から3月19日を調査期間として実施された。その結果、縄文時代晚期から中世の遺構面が4面検出された。

その後、若宮町住宅（1号棟）西半部の建築に伴い、第2地点の確認調査が実施された。本市文化財課森岡係長・木南アツ子嘱託を調査担当者として、平成9年2月26日に実施された。その結果、全



第4図 若宮遺跡第1地点 第1検出面全景（南西から）



第5図 若宮遺跡第2地点 積穴住居跡SBIV-01（北から）

面調査が必要と判断された。第2地点の発掘調査は、兵庫県教育委員会復興調査班支援職員である上垣幸徳（滋賀県派遣）・福島孝行（京都府派遣）が担当し、調査期間は平成9年5月8日～8月19日までであった。調査の結果、縄文時代晩期から中世の遺構面が6面検出された。

それまで本市では、阪神電鉄以南の遺跡の存在は近世の呉川遺跡を除いてまったく知られていなかったため、この第1・2地点の調査成果は大変意義のあるものとなった。なお、両地点の調査成果については、平成11年（1999）に刊行された発掘調査報告書〔森岡・竹村編1999〕によって、すでに公表されている。

（竹村）

3 第3地点以降の若宮地区住環境整備事業に伴う調査とその調査体制

今回報告する若宮遺跡第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点の調査は、若宮地区住環境整備事業に伴って、平成9年度から13年度まで芦屋市教育委員会が調査主体となって実施されたものである。若宮地区住環境整備事業に伴う調査体制は、次のとおりである。各調査地点の所在地などについては、確認調査と発掘調査に分けて、第1・2表にまとめた。

平成9年度

芦屋市教育委員会

教育長	三浦 清
社会教育部長	久内奎吾
社会教育部次長	小治英男
文化財課長	山本英明
文化財係長	森岡秀人（学芸員）
文化財係員	久家登志子
文化財係員	竹村忠洋（学芸員）
文化財課嘱託	木南アツ子（学芸員）

平成10年度

芦屋市教育委員会

教育長	三浦 清
社会教育部長	木戸正行
社会教育部次長	小治英男
文化財課長	西川孝夫
文化財係長	森岡秀人（学芸員）
文化財係員	久家登志子
文化財係員	竹村忠洋（学芸員）
文化財課嘱託	若林純也（学芸員）

平成11年度

芦屋市教育委員会

教育長	三浦 清
社会教育部長	小治英男

文化財課長	西川孝夫
文化財係長	森岡秀人（学芸員）
文化財係員	長岡一美
文化財係員	竹村忠洋（学芸員）
文化財課嘱託	辻 康男（学芸員）

平成12年度

芦屋市教育委員会

教育長	三浦 清
社会教育部長	小治英男
文化財課長	西川孝夫
文化財係長	森岡秀人（学芸員）
文化財係員	長岡一美
文化財係員	竹村忠洋（学芸員）
文化財課嘱託	辻 康男（学芸員）
文化財課嘱託	山内芳子（学芸員）

平成13年度

芦屋市教育委員会

教育長	三浦 清
社会教育部長	小治英男
文化財課長	西川孝夫
文化財係長	森岡秀人（学芸員）
文化財係員	長岡一美
文化財係員	竹村忠洋（学芸員）
文化財課嘱託	山内芳子（学芸員）
文化財課嘱託	坂田典彦（学芸員）

(竹村)



第6図 第4地点の発掘調査と若宮町住宅1号棟の建設工事（南から）



第7図 若宮町住宅1号棟建設現場から第4地点と若宮町を臨む（北から）

第1表 若宮地区住環境整備事業に伴う確認調査一覧表

調査地点	所 在 地	調査担当者	調査面積 (敷地面積)	調査期間	調 査 原 因	取り扱い
第3地点	芦屋市若宮町61・61-1・62-10・62-11・62-15・62-16・62-17番地	森岡秀人 竹村忠洋	28.75m ² (1,146.5m ²)	970724	若宮町住宅2号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設	発掘調査
第10地点	芦屋市若宮町33-1番地他22筆	森岡秀人 竹村忠洋	13.1m ² (1,984.0m ²)	980818・19・24	若宮町住宅3号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設	発掘調査
第11地点	芦屋市若宮町47-1番地の一部、47-3番地の一部、48-1番地の一部、48-2番地の一部	森岡秀人 竹村忠洋	12.0m ² (142.0m ²)	980817・18	街区内地盤の整備	発掘調査
第12地点	芦屋市若宮町64-7番地他5筆	森岡秀人 竹村忠洋	12.4m ² (766.0m ²)	980821	若宮町住宅5号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設	慎重工事
第16地点	芦屋市若宮町63-2番地の一部他15筆	森岡秀人 若林純也	9.9m ² (590.0m ²)	990309～990311	街区内地盤の整備・宅地造成	発掘調査
第17地点	芦屋市若宮町32番地他1筆	森岡秀人 若林純也	22.35m ² (500.0m ²)	990216・17	若宮町集会所(鉄筋コンクリート造1階建)の建設	発掘調査
第18地点	芦屋市若宮町72番地他8筆	森岡秀人 竹村忠洋	6.3m ² (900.0m ²)	990427	若宮町住宅4号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設	発掘調査(第25地点として実施)
第31・32・33地点	芦屋市若宮町68-2番地他7筆(第31地点) 芦屋市若宮町67-2・68-12・68-13番地(第32地点) 芦屋市若宮町83・85-2・86・87-1・87-2番地(第33地点)	森岡秀人 辻 康男	18.85m ² (1402.0m ²)	001023～001030	街区内地盤(第31地点)、若宮8番地広場(第32地点)、若宮緑地(第33地点)の整備	第31地点: 発掘調査 第32地点: 工事立会 第33地点: 工事立会

第2表 若宮地区住環境整備事業に伴う発掘調査一覧表

調査地点	所 在 地	調査担当者	調査面積 (敷地面積)	調査期間	調 査 原 因
第3地点	芦屋市若宮町61・61-1・62-10・62-11・62-15・62-16・62-17番地	三輪晃三 永光 寛 (県支援)	235.0m ² (1,146.5m ²)	971013～971205	若宮町住宅2号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設(東半部)
第4地点	芦屋市若宮町61・61-1・62-10・62-11・62-15・62-16・62-17番地	森岡秀人 竹村忠洋	140.0m ² (1,146.5m ²)	981019～981112	若宮町住宅2号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設(西半部)
第10-1地点	芦屋市若宮町33-1番地他22筆	森岡秀人 竹村忠洋	415.0m ² (1,984.0m ²)	990209～990312	若宮町住宅3号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設(西半部)
第10-2地点	芦屋市若宮町33-1番地他22筆	森岡秀人 竹村忠洋	147.2m ² (1,984.0m ²)	990426～990531	若宮町住宅3号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設(東半部)
第11地点	芦屋市若宮町47-1番地の一部、47-3番地の一部、48-1番地の一部、48-2番地の一部	山田清朝 服部 寛 (県支援)	43.0m ² (142.0m ²)	990524～990610	街区内地盤の整備
第16-1地点	芦屋市若宮町63-28番地他	森岡秀人 若林純也	43.88m ² (85m ²)	990201～990208	換地用地における個人住宅の建設
第16-2(1)地点	芦屋市若宮町63-2番地他	山田清朝 服部 寛 (県支援)	36.0m ² (590.0m ²)	990524～990610	街区内地盤の整備
第16-2(2)地点	芦屋市若宮町63-2番地他	森岡秀人 辻 康男	78.0m ² (590.0m ²)	991001～991015	街区内地盤の整備
第16-3地点	芦屋市若宮町63-5番地他	森岡秀人 辻 康男	22.8m ² (590.0m ²)	990817～990829	街区内地盤の整備
第17地点	芦屋市若宮町32番地他1筆	森岡秀人 竹村忠洋	100.1m ² (500.0m ²)	990426～990531	若宮町集会所(鉄筋コンクリート造1階建)の建設
第25地点	芦屋市若宮町72番地他8筆	山田清朝 服部 寛 (県支援)	351.0m ² (1,315.75m ²)	000221～000331	若宮町住宅4号棟(鉄筋コンクリート造4階建共同住宅)の建設
第31地点	芦屋市若宮町68-6番地他	森岡秀人 坂田典彦	63.0m ² (64.0m ²)	010409～010423	街区内地盤の整備
第34地点	芦屋市若宮町71-6番地他	森岡秀人 辻 康男	112.0m ² (393.5m ²)	001120～001211	街区内地盤の整備

II 若宮遺跡とその周辺

1 地理的環境

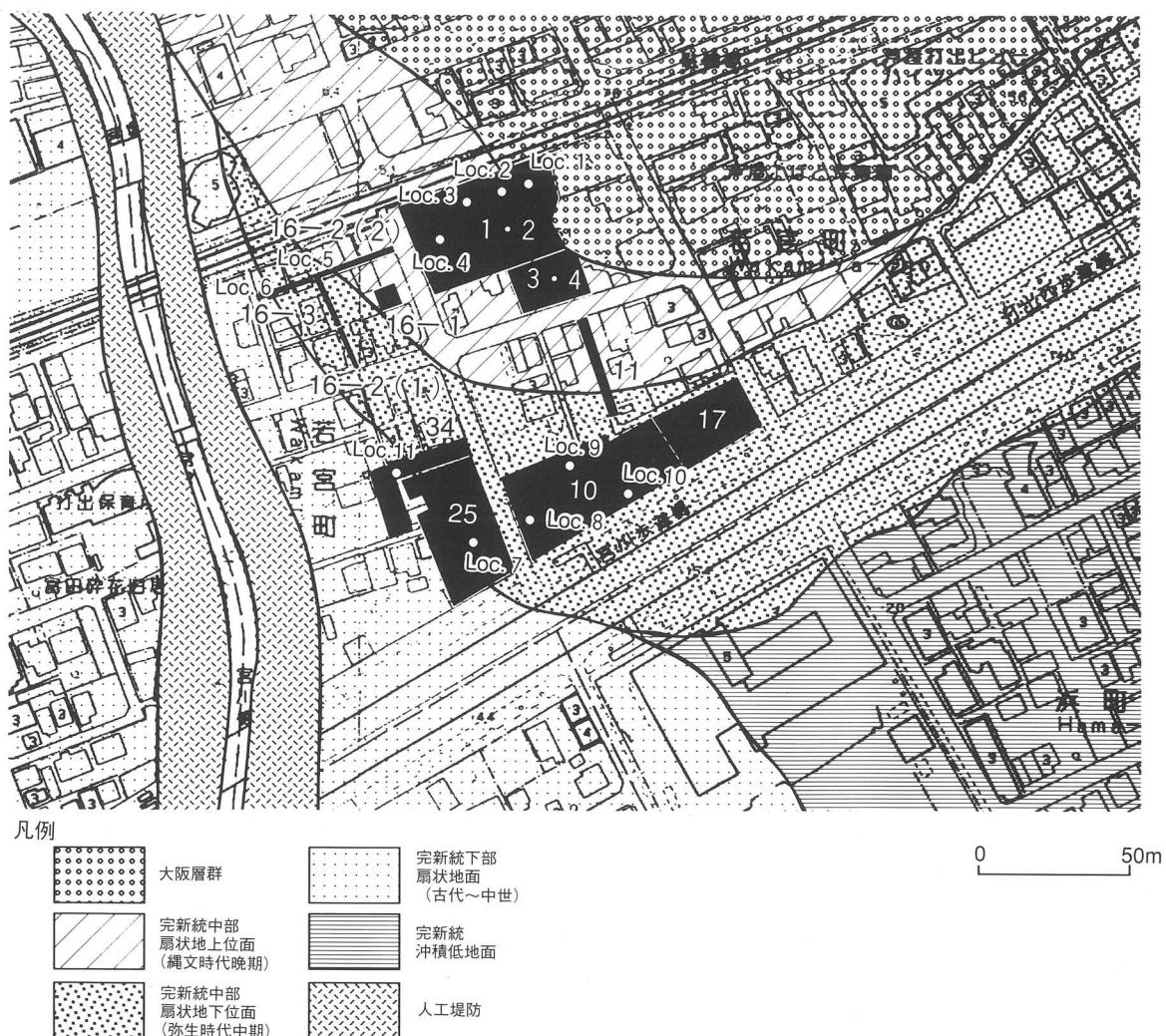
1) はじめに

若宮遺跡は、大阪層群からなる翠ヶ丘丘陵の南西端部～宮川の沖積扇状地上に立地している。これまで34次におよぶ発掘調査（確認調査・工事立会を含む）が行われており（第8図）、調査地点は遺跡範囲内の各所におよんでいる。しかし、これまでに遺跡内で確認されている堆積層については、第1・2地点を除いて〔佐藤1999〕、層序対比やその形成過程が検討されることはなかった。

そこで本章では、考古遺物の相対年代に基づく各調査地点間の層序対比および遺跡堆積層の層相から、若宮遺跡における地形形成と遺跡形成過程についての検討を行っていきたい。（辻 康男）

2) 堆積層の特徴とその年代

若宮遺跡におけるこれまで全面調査が行われた調査地点および柱状図の位置と空中写真の判読および表層地質の年代・層序を検討することによって作成した地形分類図を示したものが第8図である。



第8図 若宮遺跡周辺の地形分類図と主要調査地点分布図 1/2500

第12図には、第1・2・16地点および第10・25・34地点の柱状図を示した。堆積層から観察された層相および推定される堆積環境については、第3表に表している。第3表に示す層相分類は、松田〔1999〕に基づき一部変更・追加を加えたものである。

若宮遺跡の北半部では、第1～4地点、第16地点において全面調査が行われている。第1地点の東端部（Loc.1）では、T.P.4.2m付近でgSt、fSmをなす大阪層群の構成層が認められた。第1地点東部に位置するLoc.1・2にかけては、これらの大阪層群を侵食して形成された開析谷の谷壁斜面が検出されている。Loc.2では、大阪層群の直上に存在するFlをなす砂泥層から縄文時代晚期前半の土器が出土している〔森岡・竹村編1999〕。第1地点の西端部（Loc.3）では、掘削深度最深部であるT.P.3.4m付近で、大阪層群構成層は検出されておらず、縄文時代晚期前半と推定されるfSmやFlをなす堆積層が分布しているのが確認されている。

Loc.2・3でみられる縄文晚期前半の砂泥層上位には、fSmをなす砂層が堆積している。この砂層は、第2地点（Loc.4）の下部で検出されたStをなす砂礫層と同時異相をなす堆積物と考えられる。第2・3・4地点では、これらStおよびfSmをなす堆積層の上部付近から縄文晚期後半の土器群が検出されている〔森岡・竹村編1999、永光・三輪1998〕。

第1・2地点にかけて位置するLoc.2～4では、縄文晚期後半の砂礫層および砂層上位に、黒色を呈しFlやFmをなす堆積層が形成されている。Loc.2・3では、Fmをなす有機質礫質泥の下位にFlの有機質泥層が層厚15cm程度堆積している。これらFlやFmをなす堆積層からは、弥生時代前期～庄内式併行期の土器が出土している。Loc.4では、土壤であるFm上面において弥生時代中期初頭の竪穴住居跡などの遺構が検出されている〔森岡・竹村編1999〕。

Loc.1～4で認められたFmをなす黒色礫質泥の上位には、中世～近世に形成されたと考えられるFAをなす耕作土層が累重している。このうち中世に形成された耕作土層は、T.P.4.2～4.5m付近に累重している。これらの耕作土層は、数枚の単層から構成されており、それぞれの耕作土層上面では、耕作ないし耕作地の造成の際に形成されたと考えられる溝などの遺構が検出されている〔森岡・竹村編1999〕。この上位には、現代の盛土直下であるT.P.4.7mまで近世の耕作土層であるFAが認められる。近世の耕作土層上面においても、中世の耕作土層上面で検出されたものと同様の遺構が検出されている〔森岡・竹村編1999〕。

第2地点の西側では、第16地点で全面調査が行われている。第16-2(2)地点の東半部（Loc.5）では、Loc.4の最下部でみとめられたSIをなす縄文晚期後半の砂層が検出されている。トレンチLoc.5付近では、SIは侵食され、西側に向かって緩やかに傾斜をなして堆積している。その上位には、Stをなす砂礫層とFlをなす有機質泥層が累重している。この有機質泥層からは、弥生時代前期～庄内式



第9図 若宮遺跡第1地点 開析谷検出状況（南から）



第10図 若宮遺跡第1地点 開析谷断面（南西から）

併行期の土器が検出された。有機質泥層上位に位置するFlをなす泥層からは、古墳時代後期の須恵器・土師器や古代の須恵器が出土している。最下部に位置するStをなす砂礫層からは遺物が出土しておらず、その堆積年代を直接知ることはできない。ただし、St下位のSIと直上に載るFlに含まれる考古遺物の相対年代から、Stをなす砂礫層は縄文時代晚期後半～庄内式併行期までに形成されたことが推定できる。

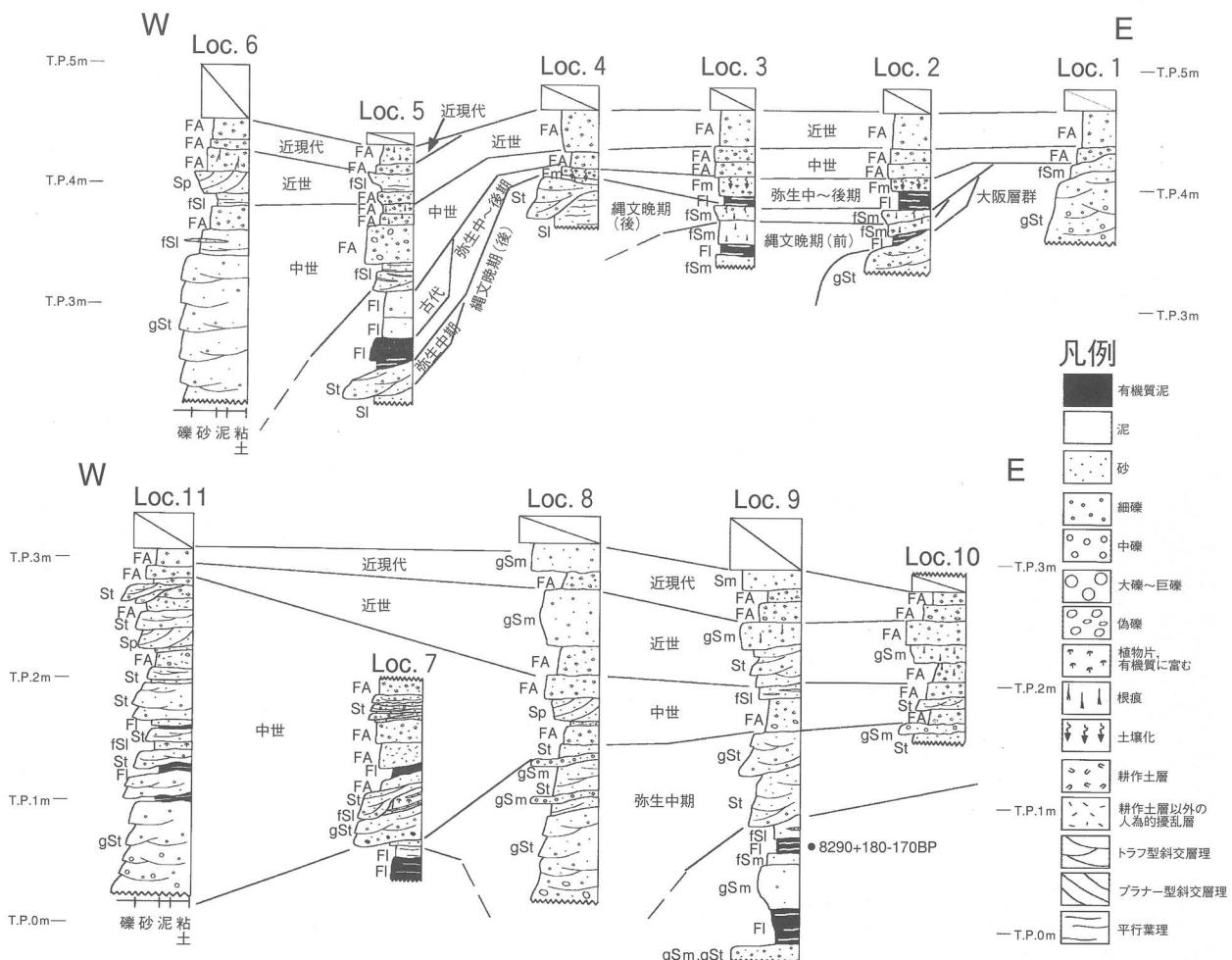
Flをなす古代の泥層上位には、中世後半の遺物を包含するfSIをなす泥質砂層や畑地耕作土層であるFAが堆積している。これらは、第16-3地点 (Loc. 6) でT.P.3.7m付近より以下で認められるgStをなす砂礫層と同時異相の堆積物と考えられる。Loc. 5・6で認められるこれらの堆積層の上位には、中世後半の遺物を含み水田耕作土層と推定されるFAが形成されている。この上位には、逆級化を示しSpをなす砂層およびこの砂層を母材として形成された粗粒な耕作土層であるFAが載る。この耕作土層は、これまでの確認調査によって、中世末期に形成されたことが判明している。この上位、T.P.4.5～5m付近に存在する現代の盛土直下までには、近世～近現代に形成された水田耕作土層であるFAが形成されている。

第1・2地点および第16地点の南側では、第10・25・34地点で全面調査が実施されている。第10-2地点 (Loc. 9) では、現地表面下270cm、T.P.0.5mまでの掘削が行われている。また、この下位、T.P.-0.5mまでの地層については、工事立会によって観察することができた。Loc. 9の最下部では、gSmないし gStをなす砂礫層が認められる。この上位には、Flをなし植物片に富む有機質泥層、gSmをなす礫質砂泥層が累重している。これらの上位T.P.0.5m付近には、Flをなす有機質泥層が認められる。この泥層は、検出高度から第25地点 (Loc. 7) の最下部で検出されたFlに対比されると考えられる。Flをなす有機質泥層については、Loc. 9においてC14年代測定が行われており、8290+180-170BP (PAL-887) の年代値が得られている。Flの上位には、T.P.1.5m付近までに弥生時代中期初頭を下限



第11図 若宮遺跡第10-2地点 遺跡堆積層断面（南西から）

年代とする考古遺物を含むgStないしStをなす砂礫層が堆積している。gStないしStに含まれる考古遺物の相対年代と直下に存在するFlのC14年代値には、大きな時間間隙が存在しており、この2つの堆積層が不整合の関係にあることがわかる。第10-1地点 (Loc. 8) では、掘削深度の最深部にあたるT.P. 0 mまでgSt、Stをなす砂礫層が累重しているのが確認されている。これらの砂礫層は、Loc. 7・9でみとめられるFlやgSmを下刻して形成されている。第10および25地点に位置するLoc. 7～10では、弥生時代中期と推定されるgStないしSt直上のT.P. 1.5 m付近に、中世後半の遺物を含みFAをなす水田耕作土層が形成されている。第10・25地点の西側に位置する第34地点 (Loc. 11) では、T.P. 1～3.5 m付近にかけて中世後半の遺物を含むgSt、St、FAが累重している。これらの堆積層最上部には、中世末期の遺物を含むFAが形成されている。中世末期のFA上位には、現代の盛土直下であるT.P. 3.5～4 m付近までに近世～近現代に形成された耕作土層のFAが形成されている。Loc. 8・9・10では、



第12図 若宮遺跡における遺跡堆積柱状図（地点は第8図に示している）

第3表 層相分類一覧

層相分類	岩質	堆積構造	堆積環境
gSt	極粗粒砂～細礫	トラフ型斜交層理	流路充填堆積物
gSm	極粗粒砂～細礫	塊状	土石流性堆積物
St	細礫混じり中粒砂～極粗粒砂	トラフ型斜交層理	流路充填堆積物
Sp	中粒砂～極粗粒砂	ブランナー型斜交層理	氾濫堆積物
fSI	シルト質砂～極粗粒砂	水平葉理, 浅いトラフ型斜交葉理	氾濫堆積物
fSm	シルト～極粗粒砂	塊状, 生物擾乱が顕著	土壤化した後背湿地ないし氾濫堆積物
FI	粘土質シルト～砂質シルト	水平葉理	後背湿地堆積物
Fm	礫質シルト	塊状, 有機質に富む	土壤
FA	泥～砂 (淘汰が極めて悪い)	人為的擾乱, 偽礫を多く含む	耕作土ないし遺構埋土

中世後半の耕作土層上位にgSmを母材とする非常に粗粒のFAをなす耕作土層が形成されている。Loc. 9では、このFA下部に初生的な堆積構造を残すgSmが認められる。これらgSmおよびFAは、堆積層内に含まれる考古遺物から近世に形成されたことが判明している。この上位、現在の盛土直下であるT.P.3.5～4 m付近までは、近代～現代に形成された水田耕作土層のFAおよびgSmをなす砂礫層が累重している。
(辻)

3) 堆積環境の変化と遺跡形成過程

各地点で推定された堆積環境の変化と考古遺物による相対年代から、若宮遺跡では以下のような地形発達および遺跡形成過程が推定される。

第1地点 (Loc. 2) のT.P.3.7m付近では、若宮遺跡で検出された遺物のなかで最も古い縄文時代晚期前半の土器が出土している。この土器は、大阪層群を下刻する開析谷の谷壁斜面基部付近を埋積する砂泥層から検出された。土器を包含していた砂泥層は、層相から後背湿地の堆積環境下で形成されたと推定される。この砂泥層には、数枚の砂泥～泥質砂からなる土壌が挟在しており、根の痕跡も顕著に観察される。このことから開析谷内では、離水と水没を繰り返すような後背湿地の堆積環境であったことが想定される。

以上のことから、縄文時代晚期前半には、開析谷の谷壁斜面基部に位置し、間欠的に離水するような後背湿地において人間活動が行われていたことが推定される。

縄文時代晚期後半には、遺跡の北部にあたる第2 (Loc. 4) ・3・4地点付近に流路が形成される。流路は大きく屈曲しながら遺跡内を流下しており、第2地点で東流した後、第1地点西端部で南に流向を大きく変更し、第3・4地点へと連続していく。第4地点の東端部付近で、流向は再び東向きを示すようになる。この流路の充填堆積物は、上方細粒化し泥質堆積物で埋積されるようなサクセッションを示さず、わずかに上方細粒化をなす砂礫によって充填されている。埋積された流路は、凸型の横断面形をなしており、周囲の氾濫原面に對して微高地となっている。第3・4地点では、流路充填堆積物の縁辺部付近において縄文時代晚期後半の土器を包含する土器群が多く検出されている。



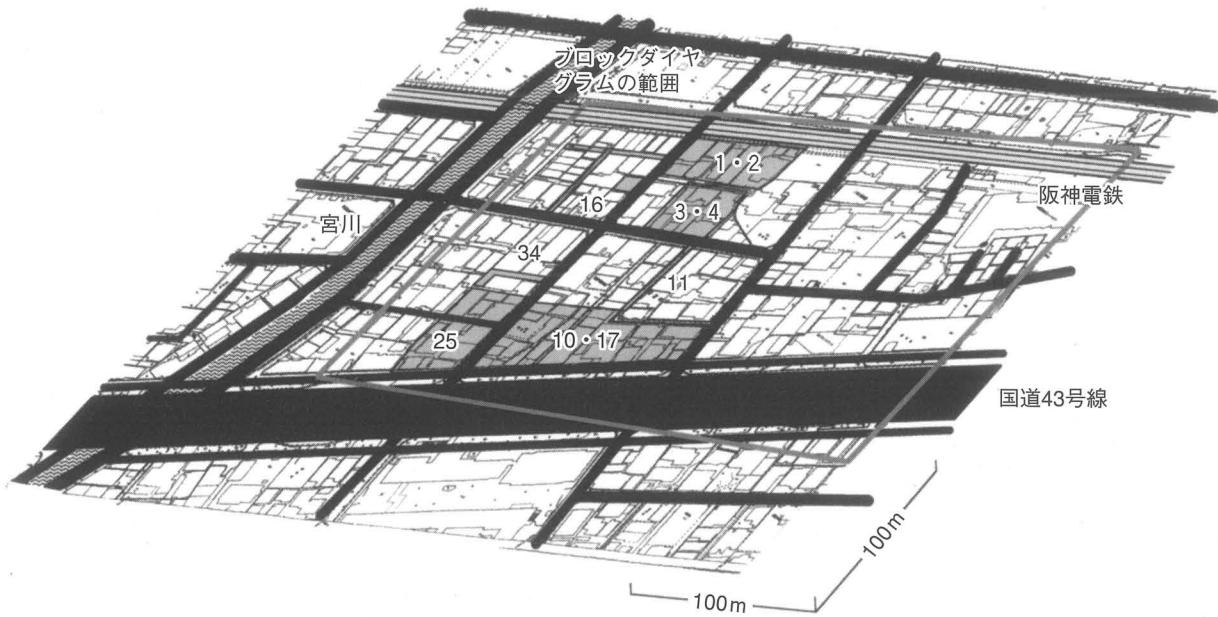
第13図 若宮遺跡第2地点
縄文時代晚期流路全景（東から）



第14図 若宮遺跡第3地点
縄文時代晚期流路検出状況（南東から）

以上のことから、縄文時代晚期後半には、開析谷の後背湿地に流入する屈曲度の大きい蛇行流路周辺で人間活動が行われていたことが想定される。

弥生時代中期には、遺跡の南半部において流路が形成される。第16-2 (2) 地点 (Loc. 5) 最下部付近で検出された流路充填堆積物は、その上位に載る堆積層に含まれる土器の相対年代および現地表面からの比高から、第10地点 (Loc. 8・9・10) においてT.P.1.5m付近で検出された弥生時代中期初頭の流路充填堆積物に對比されると考



第15図 若宮遺跡遺跡形成過程模式変遷図の位置と主要調査地点

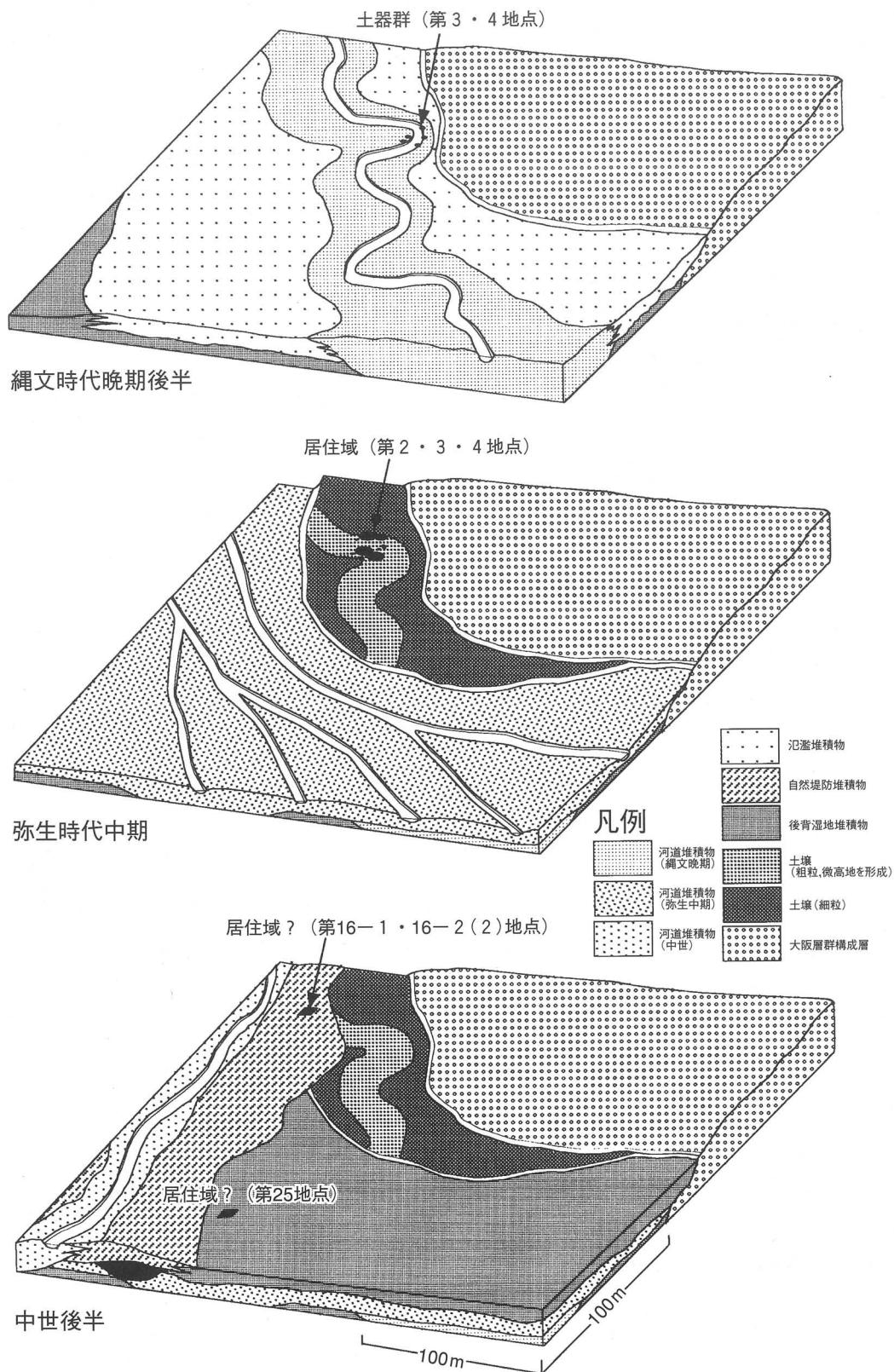
えられる。この流路充填堆積物内からは、縄文時代晩期までに堆積した地層で構成される偽礫や地層内に含まれていたと推測される縄文時代晩期前半の土器が検出されている。このような堆積層の特徴および地形分類図（第8図）から、弥生時代中期初頭頃に若宮遺跡の南西部において、縄文時代晩期までに堆積した地層を侵食するような流路形成があったことが推定される。この時期の流路充填堆積物は、側方に広く認められているが、顕著な上方細粒化を示さず、自然堤防堆積物などの河岸堆積物の発達が悪い。このことから、本時期の流路は、おそらく網状流路の形態をなして遺跡内を流下していたことが想定される。

この流路形成に伴って、縄文晩期後半までに形成された地形面である完新統中部扇状地上位面は離水する（第16図）。第1・2地点（Loc. 2～4）で認められるFmは、地形面の離水による土壤の発達によって形成されたものと解釈される。第1～4地点では、これらの土壤およびその下位の有機質泥層から弥生時代前期～庄内式併行期の遺物が検出されている。第2・4地点では、縄文時代晩期後半の埋没流路起源の微高地上に発達する土壤から、弥生時代中期初頭の竪穴住居跡や土坑などの遺構が検出されている。

以上のことから、弥生時代中期には、遺跡南部に網状流路が発達し、北東部にはこの流路形成に伴って離水した安定的な地形面が広がっていた景観が復元される（第16図）。離水した地形面上に位置する第1～4地点付近では、縄文時代晩期後半の埋没河道を起源とする微高地周辺に発達する土壤上面において居住域が形成される。この地形面上では、弥生時代前期～庄内式併行期の遺構・遺物が検出されており、弥生時代を通じて人間活動が行われていたことが推定される。

庄内式併行期～古代にかけて、第10・25地点で検出された河道の縁辺部にあたる第16-2（2）地点（Loc. 5）では、後背湿地となり泥層が累重するような堆積環境となる。この時期、若宮遺跡では堆積物の供給がほとんど認められない。地形分類図（第8図）によると、弥生時代中期頃に埋没する流路によって形成された完新統中部扇状地面を切って、前面に新たに完新統下部扇状地面が形成されている様子が判読される。芦屋市域のこれまでの発掘調査から、完新統下部扇状地面は、古墳時代以降～中世にかけて形成されたことが推定されている。

以上のことから庄内式併行期～古代には、沖積扇状地の堆積場が若宮遺跡より下流側に存在してい



第16図 若宮遺跡遺跡形成過程模式変遷図（位置と範囲は第15図に示している）

たことが推測される。このことが当該期に遺跡内において、堆積物の供給が認められないことの要因の1つとなっていることが推定される。若宮遺跡では、古墳時代～古代にかけての遺構・遺物はほとんど検出されておらず、この時期、遺跡内での人間活動は顕著でなかったことが想定される。ただし、第11地点では、古代後半と推定される耕作土層が検出されており、本遺跡内での耕作地形成の開始時期が当該期まで遡る可能性を示唆している。

中世に入ると若宮遺跡では、河川堆積物が遺跡堆積層の上方へと顕著に累重していくような堆積環境へと変化する。第16-3地点（Loc.6）では、中世後半頃に埋没した流路が検出されている。第16-1・16-2（2）地点（Loc.5）付近には、この流路と同時異相をなす自然堤防堆積物が分布している。中世の流路充填堆積物と指交する流路縁～自然堤防堆積物は、これまでの確認・全面調査で若宮遺跡西半部の各所に存在していることが確認されている。このような河川堆積物の層相から、流路はおそらく蛇行流路をなし、側方に自然堤防を形成しながら遺跡内を流下していたことが想定される。

自然堤防上に立地する第16-1および16-2（2）地点の東端部では、中世後半の遺物が高密度に検出されており、周辺に居住域が存在していた可能性が推測される。第25地点でも、中世後半に形成された井戸やピットなどが検出されており、居住域に近接した地点であったことが推定されている。このように中世後半には、若宮遺跡のいくつかの地点で居住域が形成されていたことが想定される。

その後、若宮遺跡では、これら居住域に関連すると思われる遺構を削平して、遺跡内の広い範囲で耕作地が造成されるようになる。第10・25地点では、この時期に形成されたと推定される中世後半の水田跡が検出されている。若宮遺跡南半部に位置する調査地点間の層序対比により、第10・25地点で水田が機能していた時期に、流路は第34地点付近からその西側を流下していたことが想定される。第10・25地点で検出された水田耕作土層は、氾濫堆積物によって埋没している。中世後半には、若宮遺跡内を流下する流路が埋没傾向にあったことが、第16-3地点（Loc.6）や第34地点（Loc.11）で検出された流路の発掘調査によって明らかとなっている。このような発掘調査結果から、第10・25地点の水田耕作土を覆う氾濫堆積物は、第34地点以西を流下する流路の埋没に伴う氾濫によってもたらされたものであることが推定される。

以上のことから、中世には、遺跡の西半部付近で側方に自然堤防を形成するような蛇行流路が発達し、中世後半には流路沿いの自然堤防上に居住域が形成されていたことが推定される。その後、中世後半～末期にかけては、埋没河道～自然堤防に至る遺跡の広い範囲で耕作地を造成するような人間活動が行われていたことが推定される。

その後、若宮遺跡では、近世～宅地開発が行われる昭和前半頃まで耕作地が連続して形成されていく。これらの耕作土は、氾濫堆積物である泥質砂ないし砂層を母材として形成されており、時折、洪水が発生するような堆積環境下において耕作地が形成されてきたことを示している。但し、近世以降の耕作地に挟在する氾濫堆積物には、第10地点でみられるように、中世以前の氾濫堆積物と比較して、粗粒化の傾向を示し、層厚が増大するものも認められる。このような氾濫堆積物の堆積環境変化は、山地流域の荒廃による土砂流出プロセスの変遷に起因していることが推測される。 (辻)

2 歴史的環境

1) 芦屋市の位置と環境

若宮遺跡が所在する芦屋市は、兵庫県南東部に位置している。市域は南北に細長い形態をなしており、南北8.3km、東西2.5km、面積18.57km²を測る。市域の北半部は六甲山地となり、主に白亜紀後半の花崗岩を基盤岩とする急傾斜な山地斜面が連続している〔後藤1988〕。山地斜面では、アカマツやコナラなどの代償植生が広く分布している〔高橋1988〕。南半部では山麓部に更新世後半～完新世に形成された段丘・沖積扇状地が発達しており、国道43号線より以南では沖積低地が形成されている(第22図)。

市内を流下する主要な河川は、芦屋川と宮川である。芦屋川は市域の西端部に位置し、長さ8km、源流点の標高は700m前後を測る。宮川は市域のほぼ中央部を流下しており、長さ5km、源流点の標高は500m前後を測る。今回報告する若宮遺跡は、宮川流域の下流部に位置している。

本章では、六甲山地南麓部に発達する沖積扇状地面上に立地する考古遺跡について、芦屋川、宮川の流域ごとにその概観を述べていく。

(辻)

2) 芦屋川流域の考古遺跡と環境

①芦屋川右岸扇状地上の考古遺跡

芦屋川流域の右岸地域の山麓部には、更新世末期から完新世に形成された沖積扇状地が分布している。この扇状地およびその周辺では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が高密度に分布している。縄文時代早期には、芦屋川支流の高座川沿いに発達する段丘面上に立地する山芦屋遺跡で土器・石器が多量に検出されている〔網干・米田・山口1985〕。近年、芦屋廃寺遺跡においても黄島式に比定される押型文土器が出土している。縄文時代前期には、芦屋川右岸に発達する沖積扇状地のうち新期扇状地下位面に立地する月若遺跡で土器が検出されている〔浅岡・姫路・古川1993〕。山芦屋遺跡でも同時期の土器が検出されている。縄文時代中期では、山芦屋遺跡において中期末～後期初頭の多量の土器・石器とともに竪穴住居が検出されている〔森岡・木南編1996〕。縄文時代後期には山芦屋遺跡のほか、新期扇状地下位面に立地する月若遺跡〔森岡編1995〕、寺田遺跡〔重藤・竹村編1999〕や新期扇状地上位～下位面に位置する芦屋廃寺遺跡〔長屋・佐藤1996〕で土器が確認されている。縄文時代晚期には、新期



第17図 芦屋市内遺跡分布図 1/50000

扇状地下位面の南縁部に立地する遺跡で遺物が検出されている。前半期の土器は六条遺跡で〔中川・深江・小川1999〕、後半期の土器は寺田遺跡で出土している〔南ほか編1985、重藤・竹村編1999〕。

弥生時代に入ると、新期扇状地下位面のうち弥生時代から古墳時代までに形成された完新統中部扇状地面に立地する遺跡で遺構・遺物の検出例が増加する（第22図）。弥生時代前期には、寺田遺跡南西部を中心として遺構・遺物が認められる〔森岡・木南編1996〕。近年、寺田遺跡の南西側に位置する清水遺跡からも、遺構・遺物が検出されるようになってきている。中期後葉には、月若遺跡、芦屋廃寺遺跡、寺田遺跡で遺構・遺物が確認されている〔森岡・白谷編1992、辻林・渡部1997a、重藤・竹村編1999〕。また、山麓部に立地する山芦屋遺跡においても、焼失住居や配石遺構などが検出されている〔多淵1987〕。弥生時代後期前半期には、芦屋川右岸の扇状地上で遺構や遺物がほとんど検出されなくなる。同時期の遺構としては、寺田遺跡で埋設土器が検出されている〔重藤・竹村編1999〕。この時期には、山地斜面に立地する会下山遺跡、城山遺跡で遺構・遺物が多く検出されるようになる〔森岡1980〕。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の庄内式併行期には、芦屋川右岸の沖積扇状地面上で多数の遺構・遺物が検出されるようになる。新期扇状地上位～下位面に存在する寺田遺跡、月若遺跡、芦屋廃寺遺跡とこれらの遺跡より高所に位置し新期扇状地上位面に立地する三条九ノ坪遺跡、冠遺跡には、遺跡の発展時期が当該期を1つのピークとする共通性が認められる〔森岡1988a〕。遺構・遺物の検出状況や同期の包含層の分布状況からこれらの遺跡は、同一の集落を構成するものとみなされている〔森岡1988a・1995b・1996b〕。

寺田遺跡・月若遺跡・芦屋廃寺遺跡では、古墳時代前期以降も引き続き集落が形成されていく。ただし、庄内式併行期とは異なり、集落の核はいくつかに分離していく傾向が認められるようになる。各集落の中心地は、月若遺跡では北西部、芦屋廃寺遺跡では南縁部、寺田遺跡では東半部付近に想定されている〔森岡1995b・1996b〕。古墳時代中期とりわけ5世紀後半以降になると、各遺跡ごとに個性が現れ始めるようになる。このうち、月若遺跡では、滑石製模造品が芦屋川右岸の他の集落と比較して高い比率で出土する特徴が認められる〔森岡1995b〕。古墳時代後期には、集落はそれぞれの個性を失い画一化の傾向を示すようになる〔森岡1995b〕。芦屋川右岸の沖積扇状地上に立地する遺跡では、7世紀初頭頃に竪穴住居から掘立柱建物へと急速に移行していく傾向が確認されている〔森岡1996b、竹村・森岡1999〕。

古代には、寺田遺跡と芦屋廃寺遺跡で多く遺構・遺物が検出されている。白鳳期に創建された芦屋廃寺遺跡では、古代瓦が多量に出土しており、さらに、古代の寺院建物基壇の一部も検出されている（第19図）〔村川1970・1971、村川・森岡1996、森岡・竹村2000a・c〕。また、平安時代に再建された



第18図 寺田遺跡第95地点 古墳時代遺構全景（南から）



第19図 芦屋廃寺遺跡第62地点 寺院建物基壇全景（南から）

建物の一部と推測される小規模な礎石建物も検出されている〔森岡1988c〕。遺物では、「寺」と刻印された鉄鉢形の須恵器の破片が8点確認されている〔芦屋市教委2001〕。

古代の掘立柱建物は、芦屋廃寺遺跡、寺田遺跡、三条九ノ坪遺跡で検出されている〔森岡・和田・後神編1990a・b, 森岡・木南編1996, 重藤・竹村編1999, 長屋・佐藤1996〕。寺田遺跡では、第1・52地点から大型の掘立柱建物掘形が検出されている〔南ほか編1985, 森岡・木南編1996〕。第1地点の東に隣接する第90地点では、「大領」・「小領」と記された墨書き土器が出土している。芦屋廃寺遺跡の東側に位置する西山町遺跡でも、古代の遺構・遺物が確認されている。また、芦屋廃寺遺跡の北西部に位置する三条九ノ坪遺跡では、河道内から壬子年（652年）銘の木簡が出土していることが注目される〔高瀬編1997〕。

中世には、寺田遺跡、芦屋廃寺遺跡で集落が形成されており、掘立柱建物などの遺構が各所で検出されている。芦屋廃寺遺跡では、鎌倉時代に再建された寺院のものと考えられる礎石建物が検出されている〔森岡1988c, 森岡・竹村2000a・c〕。中世後半～近世には、芦屋川右岸扇状地の広範囲で耕作跡が検出されるようになる。月若遺跡では、近世の礎石建物や日常生活もしくは醸造関連に使用したと推定される竈が検出されている〔森岡編1995, 森岡・木南編1996〕。

②芦屋川左岸扇状地上の考古遺跡

芦屋川左岸の沖積扇状地では、右岸側に比べ遺構・遺物の分布密度が低い特徴が認められる。左岸側に広く分布する完新統下部扇状地面は、これまでの発掘調査から、縄文時代前期～後期にかけて形成され、その後、縄文時代晩期～弥生時代前期にかけて土壌が発達するような安定した堆積環境であったことが推定される（第22図）。この扇状地面上には、業平遺跡および松ノ内遺跡が立地している。これらの遺跡からは、縄文時代前期～近世までの遺構・遺物が検出されている。縄文時代前期には、業平遺跡の中央部において前期初頭の土器群および石器製作跡と推定される石器ブロックが検出されている〔吉田・金森1997〕（第20図）。縄文時代晩期には、業平遺跡において晩期前半の土坑が検出されている〔森岡・竹村1997b〕。また、当遺跡では、縄文時代晩期と考えられる五角形石鏃も多く出土している。弥生時代前期には、業平遺跡南部で土坑および溝が検出されている〔辻林・渡部1997b, 小松・東1997, 岡本・家塚1998〕。弥生時代中期には、中期中葉の竪穴住居が業平遺跡南部で検出されている〔吉田・金森1997〕（第20図）。古墳時代後期には、業平遺跡南部で竪穴住居が〔小松・東1997〕、北部では掘立柱建物が検出されている〔鎌田・弘田1997〕。古代～中世には、業平遺跡の広い範囲において耕作地跡が検出されているほか、掘立柱建物や溝、土坑などの遺構が確認されている〔辻林・渡部1997b, 吉田・金森1997, 中村・三輪1997〕。近世には、遺跡全域で耕作地跡が確認されており、遺跡北部では石組み暗渠が多く検出されている〔鎌田・弘田1997, 佐藤・丸杉1998〕。

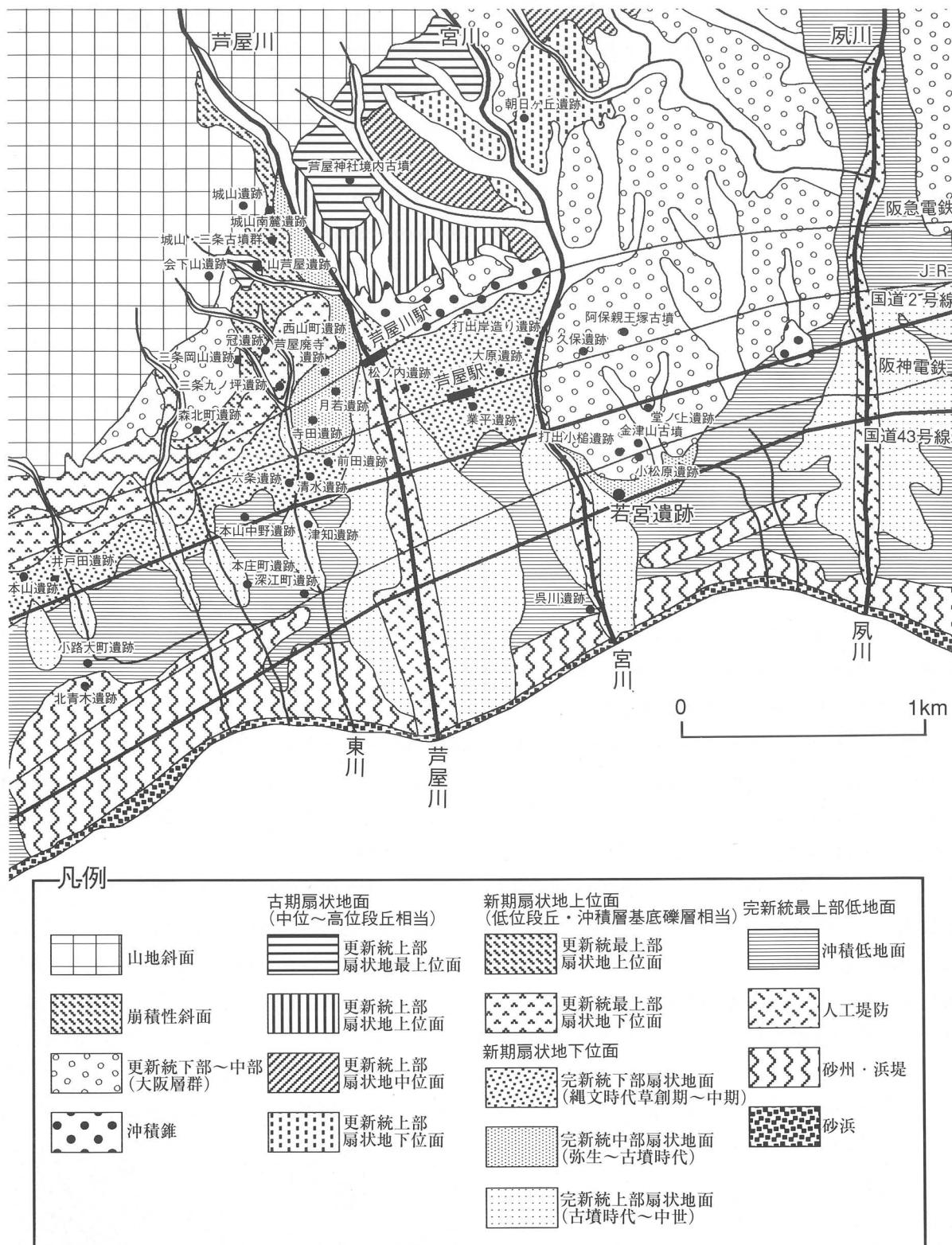
（辻）



第20図 業平遺跡第26地点 古墳時代遺構全景（西から）



第21図 打出岸造り遺跡第32地点 大溝断面（北東から）



第22図 芦屋川・宮川流域地形分類図

3) 宮川流域の考古遺跡と環境

① 宮川扇状地上の考古遺跡

宮川流域では標高18m付近より下流に、沖積扇状地面が広がっている。これより上流には、更新統

である大阪層群や段丘堆積物および基盤岩の花崗岩が分布しており、宮川はこれらを深く開析して流下している。沖積扇状地が分布する標高18m付近より下流側では、宮川を挟んで左右非対称の地形となっている。宮川の左岸側では、翠ヶ丘丘陵と呼称される大阪層群で構成される丘陵が、右岸側では、新期扇状地下位面のうち完新統下部扇状地面に区分される沖積扇状地が分布している。

宮川扇状地および芦屋川・宮川間の扇状地間低地では、縄文時代～近世までの遺構・遺物が検出されている。宮川扇状地に立地する考古遺跡としては、打出岸造り遺跡が存在している。本遺跡は完新統下部扇状地面上に形成されており、若宮遺跡の上流1.3kmの地点に位置している。遺跡からは、中世から近世までの耕作地跡のほか、古墳時代前期の人工水路が検出されている。水路内からは堰状遺構が検出されたほか、庄内式併行期の土器や鍬や横槌などの木製品が多く出土している〔矢口・北原1996、森岡・木南編1996、森岡・辻2001〕。これまでの全面および確認調査により、この人工水路は宮川扇状地を北東から南西方向に走向し、扇状地間低地へと連続していくことが推定される。この水路は復元される走向方向から、宮川のインターチェンジ付近の河床へと接続していることが予想される。扇状地間低地部には、大原遺跡が存在している。本遺跡では中世～近世までの耕作地跡のほか〔浅岡・古川・姫路1992〕、打出岸造り遺跡で確認されている庄内式併行期の人工水路との関連が示唆される小区画水田跡も検出されている〔渡辺1999〕。

②若宮遺跡の概観と周辺の考古遺跡

若宮遺跡は、翠ヶ丘丘陵南端部～新期扇状地下位面にかけて立地しており、現在の地盤高で標高3～5m前後の地点に存在している。大日本参謀部陸軍部の測量部（明治18年）によると、明治時代の汀線は、遺跡の南方約800mに存在している。

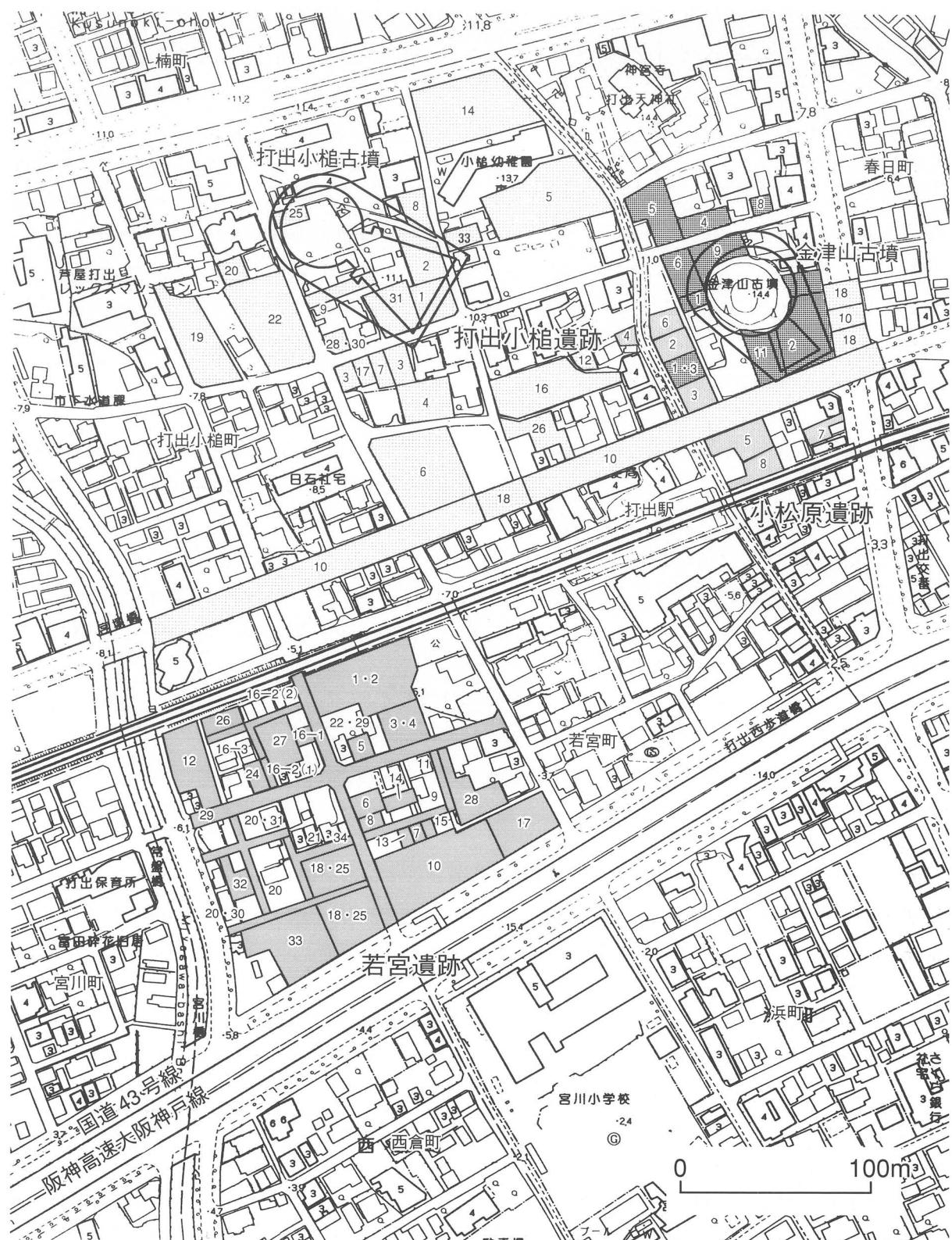
本遺跡は、震災復興住環境整備事業による市営住宅建設に先立つ試掘調査によって、平成8年に発見された。当初は、周知されている打出小槌遺跡の南縁部の一角を占める遺跡と考えられていた。その後、本遺跡が打出小槌遺跡とはかなり様相を異にする遺跡であると判断されたため、阪神電鉄沿線を北限とする遺跡については、新たに「若宮遺跡」と呼称されることになった。遺跡範囲は南北約190m、東西約200m、面積約28100m²を測る〔森岡・竹村編2001〕。

平成8年および9年に第1・2地点の全面調査が行われ、縄文時代晩期後半の土器群や弥生時代中期初頭の竪穴住居や溝、土坑、弥生時代後期の遺物、中世～近世の耕作地跡などが検出された。この発掘調査の成果については、平成11年8月に発掘調査報告書が刊行されている〔森岡・竹村編1999〕。第1・2地点の全面調査以降、平成13年3月現在までに、全面調査と確認調査・工事立会をあわせて34次の発掘調査が行われている（第24図）。この内、第3・4・10・11・16・17・25・31・34地点において全面調査が行われており、これらの地点の調査成果が今回の報告書に所収されている。

若宮遺跡の周辺では、北側に隣接して打出小槌遺跡、北東側には金津山古墳、東側には小松原遺跡が存在している。打出小槌遺跡は翠ヶ丘丘陵に立地しており、遺跡の基盤層は大阪層群で構成されている。この遺跡は、昭和61年に行われた確認調査によって発見された〔森岡・木許1986〕。同年に実施された全面調査によって、「打出小槌古墳」と命名された未周知の古墳が1基確認された。この調査によって、逆台形状を呈し、現存幅5.8m、深さ0.75mを測る周壕が検出された。墳丘側の周壕斜面には葺石が残存していたほか、長さ6m、



第23図 若宮遺跡第2地点
弥生時代中期遺構全景（東から）



第24図 若宮遺跡とその周辺遺跡の既往調査地点分布図 1/3000

幅1.2mの台形状の突出部（造り出し）が認められた。周壕内からは、5世紀後半～末の円筒埴輪や形象埴輪が多量に出土している〔芦屋市教委1986a・b, 森岡1986・1987・1995a〕。

その後、南西に位置する第3地点で行われた確認調査により周壕の変換部が確認され、一辺が35m程度の方墳であることが推定された〔森岡・白谷編1993a〕。平成11年には、第1地点の東側に隣接す



第25図 打出小槌古墳第31地点
前方部周濠渡り堤検出状況（北から）



第26図 打出小槌古墳第31地点
前方部周濠検出状況（南から）



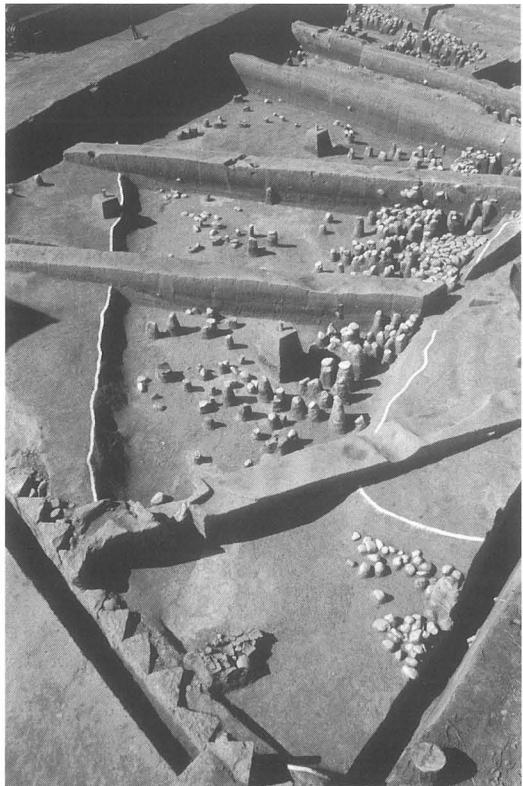
第27図 打出小槌古墳第31地点
周濠内遺物出土状況（東から）

る第31地点で全面調査が実施された。本地点では、北北東に向かって幅を広げながら走向する周濠が検出された（第25・26図）。周濠幅は狭い部分で6m、広い部分で9m

まで確認され、これより北側ではさらに西側へと幅を広げている。第31地点で確認された周濠の走向方向から、打出小槌古墳は盾形周濠をなす全長90mクラスの前方後円墳となることが新たに判明した。周濠内からは、第1地点と同様に多量の5世紀後半～末の円筒埴輪・形象埴輪が検出されている（第27図）〔森岡・辻2000a〕。

打出小槌古墳の周辺では、古代から中世の耕作地跡が遺跡内の広い範囲で検出されている。第4～7地点、第17地点などでは中世の耕作地跡の累重が認められている〔大手前女子大1990a・b、森岡・白谷編1993a、森岡・木南編1996、森岡1996b〕。第4地点では古代後半の耕作地跡が検出されており、若宮遺跡第3・11地点で検出されている当該期の耕作土層とともに、翠ヶ丘丘陵南縁部の耕作地開発の開始時期を示唆するものと考えられる。このほか、打出小槌遺跡では第4・22地点で国府型ナイフ形石器が〔大手前女子大1990a・b、大川・半澤1997〕、第5地点では弥生時代前期の土坑が〔和田1990a〕、第22地点では開析谷内から弥生時代中期～古墳時代後期の土器が検出されている〔大川・半澤1997〕。

金津山古墳は打出小槌古墳同様に翠ヶ丘丘陵上に立地している。本古墳は現在、後円部のみが残存している。後円部では、昭和20年代と50年代に墳丘測量図の作成が行われている〔魚澄編1957、藤岡・勇1976〕。昭和60年度に後円部の西側隣接地で初めて、確認調査による発掘調査が実施された。この調査によって古墳周濠内の堆積層から円筒埴輪・朝顔型埴輪などが検出され、本古墳築造時期が5世紀中葉～後半であることが判明した〔森岡1987・1988d〕。昭和62年には、後円部の南側に隣接



第28図 金津山古墳第11地点
前方部周濠全景（南東から）



第29図 金津山古墳第11地点
前方部周濠内堆積状況（南東から）

する第2地点で全面調査が行われた。この調査によって、中世段階に削平された前方部と周濠が検出され、金津山古墳は全長約55mの帆立貝形前方後円墳となることが明らかとなった〔芦屋市教委・金津山古墳周濠発掘調査会1989〕。平成11年には、第2地点の西側に隣接する第11地点で全面調査が行われ、第2地点をあわ

せると前方部をほぼ完掘する状態となった（第28・29図）。この調査によって確認された周濠は、馬蹄形を示し、前方部南半で幅4.7m、前方部前端で2.7mを測る。くびれ部対向面の外堤は調査区外となっており、周濠が最も広くなるこの部分については、幅十数m以上であると推測されている。第11地点の調査結果によって、従来推定されてきた古墳法量に若干の修正が加えられ、現在、金津山古墳は全長55m、後円部径44m、前方部長11m、前方部前端幅18mの規模となっている〔森岡・辻2000c〕。

後円部周辺では、昭和60年に実施された第1地点以来、第6・9・10地点で確認調査が行われており、後円部周濠範囲の推定がなされてきている〔森岡・木南編1996〕。後円部墳丘についても、トレンチ調査が行われており、墳頂部平坦面の下部から墓坑掘方が確認されるとともに、段築の有無や封土の築成および造成工程が検討されている〔森岡・和田・後神編1990b, 森岡1995a〕。

このほか金津山古墳では、多くの調査地点で弥生時代前期の土器・石器が出土しており〔芦屋市教委・金津山古墳周濠発掘調査会1989, 森岡・和田・後神編1990b, 森岡・木南編1996〕、古墳周辺に当該期の遺跡があることが推定されている〔森岡・竹村1999〕。

小松原遺跡は金津山古墳の南側に位置し、翠ヶ丘丘陵の南縁部付近に立地している。本遺跡は平成元年に行った試掘調査で発見された。その後に実施された全面調査によって、弥生時代後期の大溝や平安時代の土坑群が検出された。この調査では、金津山古墳に関連する遺構・遺物が検出されなかつたことから、金津山古墳と分離して新遺跡として認識されることとなり、周辺の字名を探り「小松原遺跡」と命名された〔和田1990b〕。その後、平成9年に全面調査が行われた第5地点では、近世の耕作地跡や瓦積み井戸などの遺構が検出されている〔森岡・竹村1997a〕。平成11年に第8地点で実施された第2次確認調査では、多量の礫を含む縄文時代晚期の土坑、方形周溝墓と推定される溝および溝内に供献された弥生時代中期後半の甕、弥生時代後期および奈良時代の土坑などが検出されている〔森岡・辻2000b〕。

（辻）

III 発掘調査の概要

1 第3地点の調査

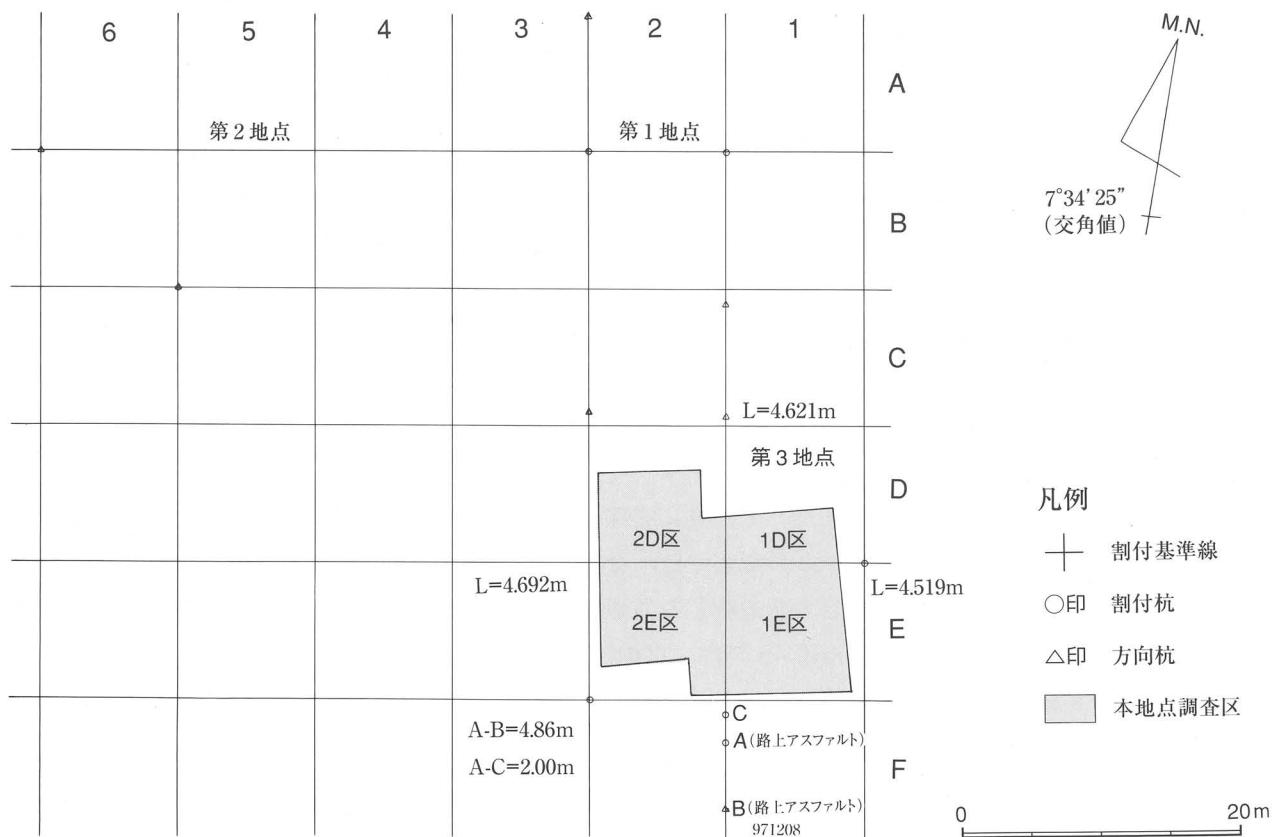
1) 調査に至る経緯

若宮地区住環境整備事業市営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成8年度より実施されている。事業対象地が埋蔵文化財包蔵地であるため、芦屋市長 北村春江から文化財保護法第57条の3第1項の規定により開発行為に伴う発掘通知書（平成9年6月2日付）が提出された。

同年7月24日、市教育委員会文化財課は森岡・竹村を担当者として確認調査を実施し、「当該地の確認調査では、遺物はほとんど出土しなかったが、隣接する第23・24地点（現若宮遺跡第1・2地点）に対応する土層の堆積が確認できた。このことから、当該敷地にも各遺構面の連続が推定され、遺跡が広がることが確認でき、工事前の全面調査が必要と判断する。」との調査所見を出した〔森岡・竹村1997b〕。その後、芦屋市教育委員会教育長から兵庫県教育委員会教育長に対し、「阪神・淡路大震災に係る埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定書」第3条第3号アの規定により調査支援の依頼文書（平成9年9月11日付）を提出した。



第30図 調査風景 (南東から)



第31図 発掘調査区割付図

兵庫県教育委員会は、支援協定書に基づき、当該調査担当者として三輪晃三・永光 寛の2名を調査支援にあてた。そして、平成9年10月8日に芦屋市都市計画部開発事業課・芦屋市教育委員会・兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所3者による発掘調査開始立会打合せを経て、同月13日より調査を開始した。調査種別は全面調査で、芦屋市教育委員会が調査主体となり、平成9年10月13日～平成9年12月5日（実働35日間）の期間実施された。発掘面積は235m²である（第30図）。 （森岡秀人）

2) 調査の方法

発掘調査は調査区を設定し、まず現代の盛土を重機で除去することからはじめ、その後、第1層以下は確認調査の成果に照らし合わせながら、掘削を行い、調査を進行させた。調査区の地区割設定（第31図）は、第1・2地点で設定・使用されたものに従った（調査区該当地区名……1D区・2D区・1E区・2E区の4区にまたがる）。なお、標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を使用、その水準の移設は、調査区北東約60mの市道に設置された仮B.M.6.19mを利用した。

調査は、水田耕作痕跡をもつ調査面（3面）を精査し、それらの下層に弥生土器・縄文土器の二次堆積層を確認、その後無遺物層に至るまで調査を続行した。また、調査区中央部に縄文晩期後半と考えられる自然流路を検出しているが、この流路を充填している粗粒砂～細礫には遺物が含まれず、かつ下位レベルまで掘り下げると、湧水の危険もあるため、中位レベルで調査を終了した。調査掘削深度は、最深部でG.L.-1.7m前後、標高にして2.7m程度である。 （三輪晃三・永光 寛）

3) 層序

調査地点において区分した堆積層序は、次のとおりである。以下に所見を記す（第32～39図）。

第1層	暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂。径0.2～0.5cmの極粗粒砂多く混入。表土直下にあって、近現代の染付磁器などが出土する水田耕作土である。
第2層	暗灰黄色（2.5Y5/2）中粒砂で、径0.2cmの極粗粒砂を少し混入、よくしまっている。上位水田の床土。第1・2層ともに表土層の搅乱・削平等で調査区東部にはみられない。
第3層	調査区全面を0.1～0.4mの厚さで覆っている。にぶい黄色（2.5Y6/3）粗粒砂で、径0.2～1.0cmの極粗粒砂～細礫混入、しまりがよく、全体に酸化して褐色を帯びる。斜行層理が観察できる。上流域での河川氾濫に伴うものか、一時期荒廃したことが窺われる。
第4層 a	灰オリーブ色（5Y5/2）粗粒砂で斑鉄・マンガン斑の沈着が認められ、しまりなし。
第4層 b	黄褐色（2.5Y5/4）シルトで粗粒砂が少し混入する。マンガン斑の沈着も認められる。
第4層 c	灰色（5Y5/1.5）粗粒砂で、2D区を除き第5a層の土粒径0.5～2.0cmを含む。マンガン斑の沈着が認められる。しまりなし。
第5層 a	第4層bと同じ。
第5層 b	灰色（5Y4.5/1）シルトで、極粗粒砂が少し混入し、よくしまる。
第6層 a	褐色（10YR4.5/6）極粗粒砂で、径15cm未満の第7層aの土がブロック状に混入。ただし、極粗粒砂を多く混入する。1D区のみ検出するもので、ブロック状を呈した土塊がみられることから、整地層と考える。
第6層 b	黄褐色（2.5Y5/3）極粗粒砂で細粒砂が混入する。自然木を少量含む。1E区のみ検出。
第7層 a	黒色（2.5Y2/1）シルト。遺物は認められない。
第7層 b	黒褐色（10YR2/1）細粒砂で、流路直上では粗粒砂を多く含む。少量の弥生土器片がみられる。
第8層 a	黒褐色（10YR3/1）シルトで、調査区西側では粗粒砂を含み、暗灰黄色（2.5Y4/2）シル

トとまだらである。

- 第8層b 灰色(5Y5/1)シルトで、粗粒砂を少し混入。黒褐色(2.5Y3/1)シルトとまだら。
- 第9層a 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂で、最下部に厚さ8cmの極粗粒砂が堆積する。炭化物を少量含む。
- 第9層b 灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂。
- 第9層c 灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂で、流路に接するところでは中粒砂となる。縄文晩期後半の土器が二次堆積として認められる。
- 第10層 灰オリーブ色(7.5Y5/2)極細粒砂で、下方ではオリーブ灰色(5GY5/1)シルトとなる。この第10層以下には遺物がみられず、したがって無遺物層となる。
- 第11層 黒褐色(2.5Y3/1)シルトで、炭化物を含む。
- 第12層 灰オリーブ色(7.5Y5/3)極細粒砂である。
- この他、基本層序とは異なり部分的、局部的に分布・堆積する土層(①～⑥)がある。
- ①層 黄褐色粗粒砂(2.5Y5/3)しまりなし。
- ②層 黄褐色粗粒砂(2.5Y5.5/3)中粒砂混入、ややしまる。
- ③層 暗灰黄色粗粒砂(2.5Y5/2)。第3層と類似……SD。
- ④層 灰オリーブ色粗粒砂(7.5Y6/2)。
- ⑤層 黒色細粒砂(2.5Y2/1)極粗粒砂を混入。
- ⑥層 にぶい黄褐色粗粒砂(10YR5/4)。特に2D区から2E区にかけてのみ分布。団粒(第4a層土粒径2cm)を多く含む。畑耕作土かもしれない。

なお、上記の土色に関しては、『新版標準土色帖(1993年版)』監修 農林水産省水産技術会議事務局を使用した。

(三輪・永光)

4) 検出遺構

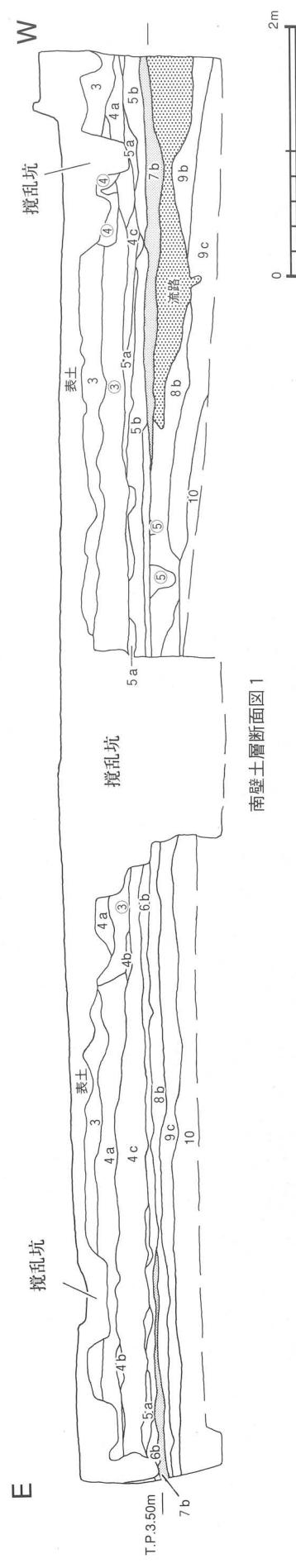
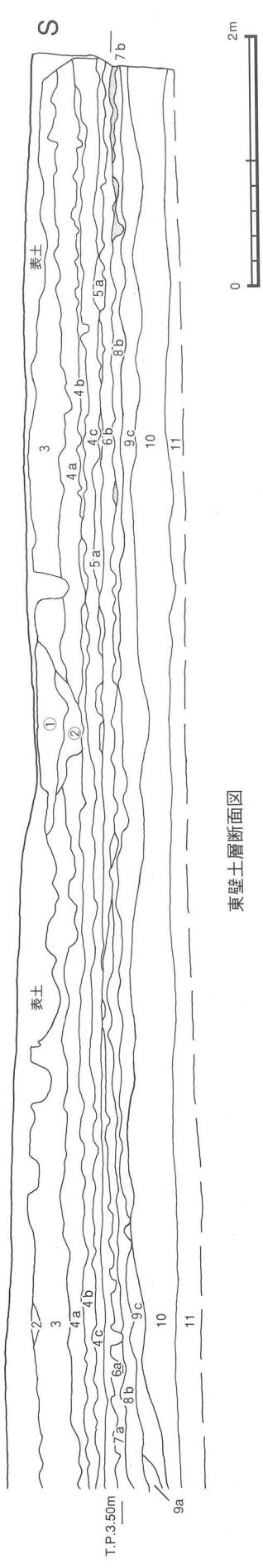
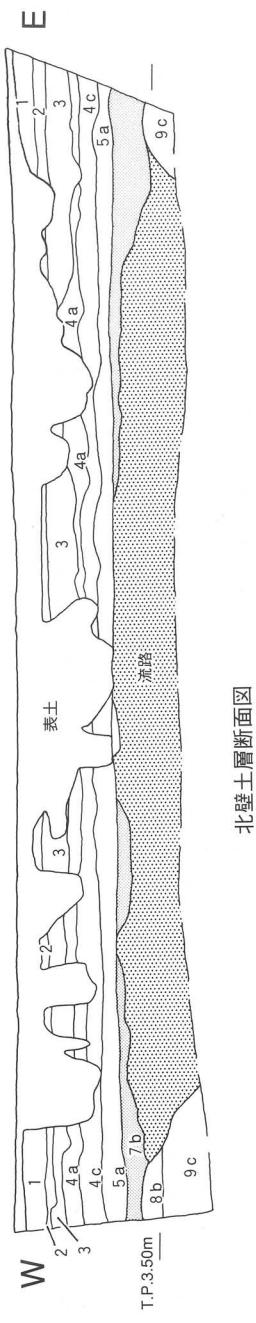
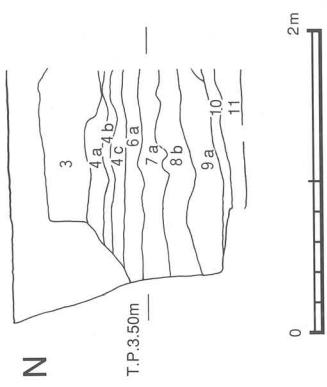
①第1遺構面(第40～42・46～49図)

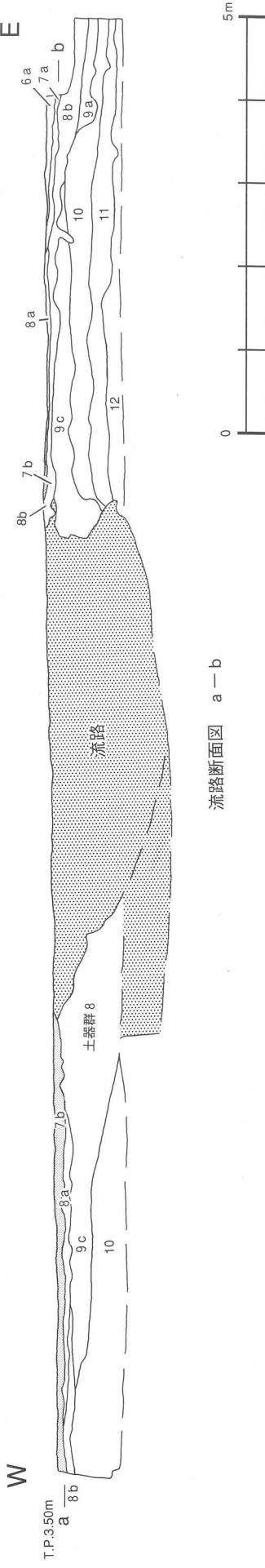
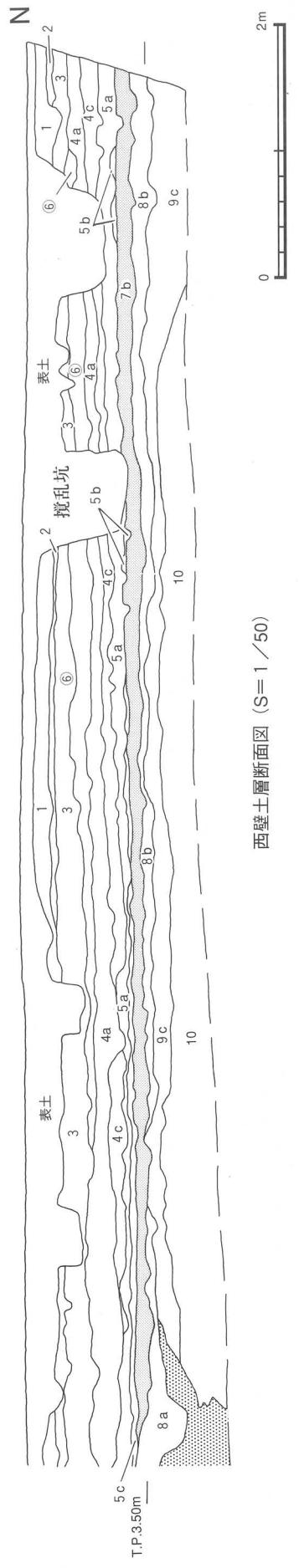
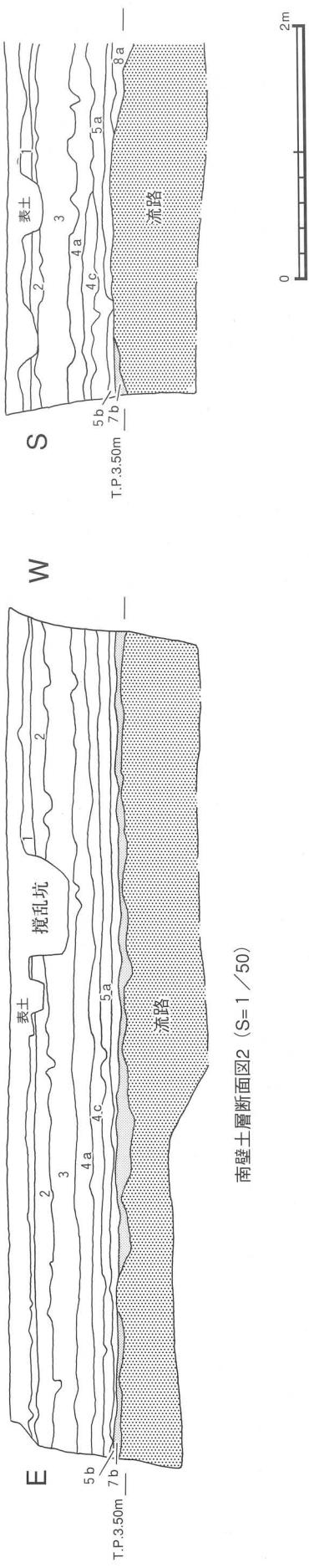
第3層上面で調査区に並行する略東西方向の耕作痕を検出した。第3層の厚さは最大で40cmを測るが、南東の1E区では厚さ10cmまで削平されており、この部分では遺構は検出されなかった。耕作痕は埋土の違いにより二分でき、第1は第1層と同色・同質の埋土で溝幅約20cm、深さ1.5～2cmを測り、1D区の北東端から6条と2D区の北西端から2条がこれにあたる。他に比べ形態が直線的かつ幅広で、溝の立ち上がりが明確であり、現代水田に属する可能性が高い。第2は暗灰黄色中粒砂(2.5Y5/2)を埋土として溝幅10～20cm、深さ1.5～3cmを測り、ほぼ全域で認められ、近代の所産とみられる。ただし、1D～1E区の最南端のSD1005は、溝幅約20cm以上、深さ14.7cmを測り、溝の立ち上がりが明確であるので、耕作痕の重複ではなく区画溝である。

②第2遺構面(第43～45・50～53図)

1D・E区では第4b層上面で2D・E区では第5a層上面で耕作痕を検出した。前者は暗灰黄色中粒砂(2.5Y5/2、マンガンを多く含む)を埋土として溝幅10～20cm、深さ0.5～3cmを測り、後者は黄褐色中粒砂(2.5Y5/3)を埋土として灰黄色細粒砂(2.5Y6/2)が溝の立ち上がりに帯状に入り込む。溝幅10～20cm、深さ0.5～3cmを測る。耕作痕の検出面と埋土の違いにとどまらず、耕作痕の方位も異なる。後者の方針は、第1遺構面と同じく調査区に並行するが、前者のうち東西溝の方針はやや南北に振り、南北溝はやや西に振る。以上のことから、両者は時間差を持つ可能性があるが、共に概ね近世に属するとみられる。

なお、2E区北西端で柱根が遺存するピット2基を検出した(第43図にSPと明示)。柱根はいず





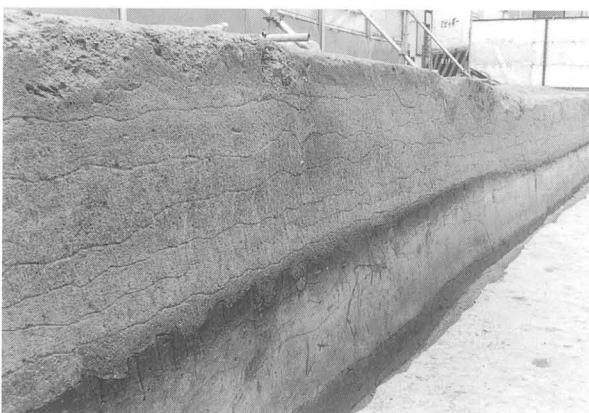
第33図 土層断面図(2)



第34図 流路土層断面（南西から）



第35図 調査区東壁土層断面（西から）



第36図 調査区東壁土層断面（北西から）



第37図 調査区西壁土層断面（南東から）



第38図 調査区西壁土層断面（北東から）



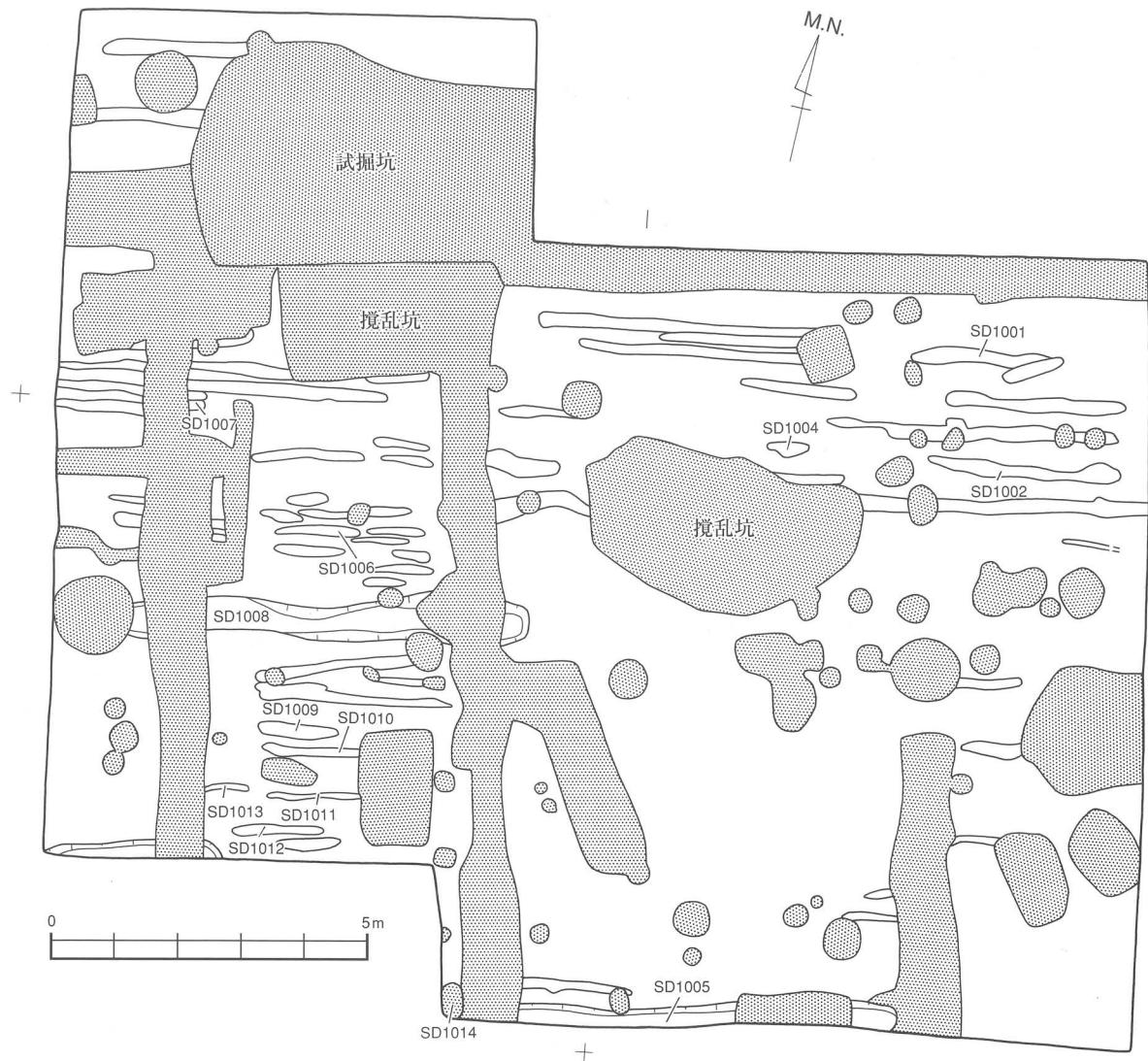
第39図 調査区西壁土層断面（北東から）

れも約10cm遺存し、直径は北西側が約9cm、南東側が約11cmを測る。端部は垂直に切断されている。調査区外への広がりを確認した上で検討する必要はあるが、とりわけ耕作痕以外の遺構はないため、建物の一部をなすものではなく、耕作に関する施設と考えられる（第52・53図）。

③第3遺構面（第54～56図）

第7a・b層上面で耕作痕と流路上面を検出した。

耕作痕の埋土は、いずれも灰オリーブ色細粒砂（5Y5/2, 混粗粒砂, 第7b層のブロックを含む）である。1D・E区では溝幅8～14cm、深さ0.5～2.5cmを測る。2D・E区では東西溝の幅は10～18cmに対し、南北溝の幅は18～22cmと広く、いずれも深さ0.5～3cmを測る。耕作痕の方位につい



第40図 第1遺構面平面図 1/120

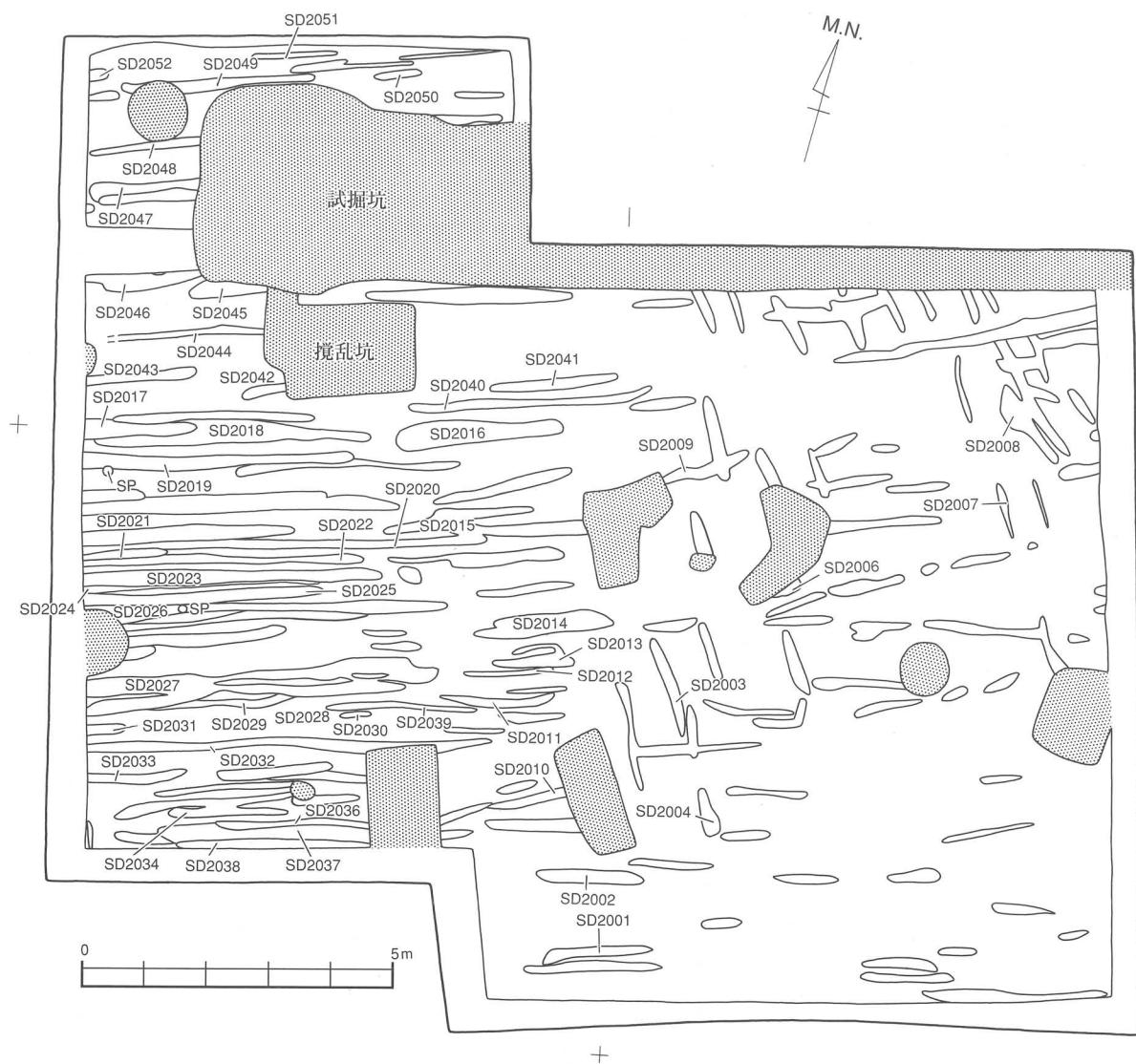


第41図 調査風景（南東から）



第42図 第1遺構面全景（北西から）

では、1D・E区では南北溝は第2遺構面と同様であるが、東西溝はさらに南北に振る傾向にあり、第4遺構面の落ち込みの方位と一致する。これに対し2D・E区では、第2遺構面と変化はないものの南北溝が存在する点が大きく異なる。なお、2E区の流路上面では少なくとも5条の耕作痕が検出されており、流路が埋没して第7b層が薄く堆積した後に耕作が営まれたことがわかる。ただし1D



第43図 第2遺構面平面図 1/120



第44図 第2遺構面全景（北西から）



第45図 第2遺構面全景東半部（北から）

区の東壁を観察すると、第7b層の直上の極粗粒砂（第6a・b層）の堆積後に水田のレベルが水平となっており、この時点をもって開始されたとみるのがより正確である。



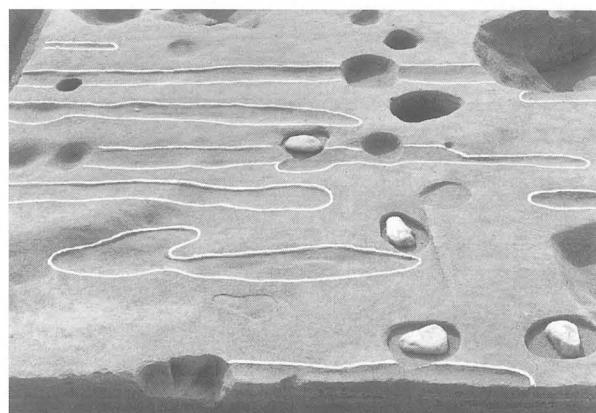
第46図 第1遺構面（西から）



第47図 第1遺構面（北から）



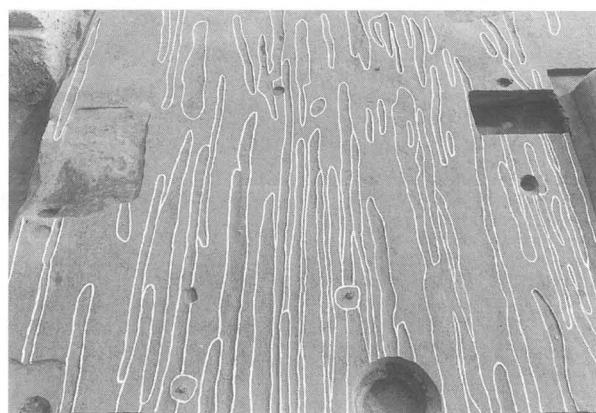
第48図 第1遺構面西半部（西から）



第49図 1D区耕作痕完掘状況（北から）



第50図 第2遺構面全景（西から）



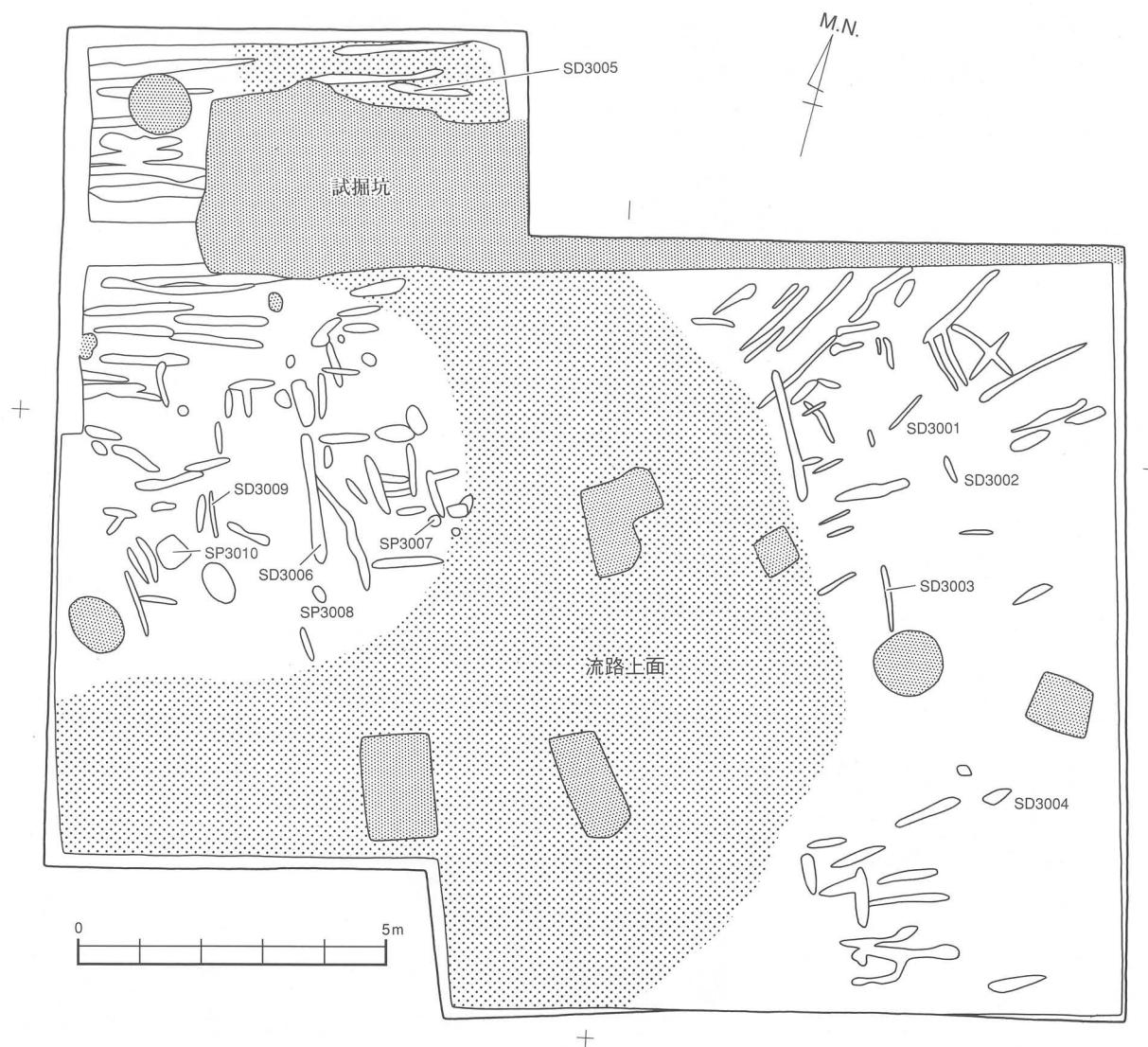
第51図 第2遺構面全景西半部（西から）



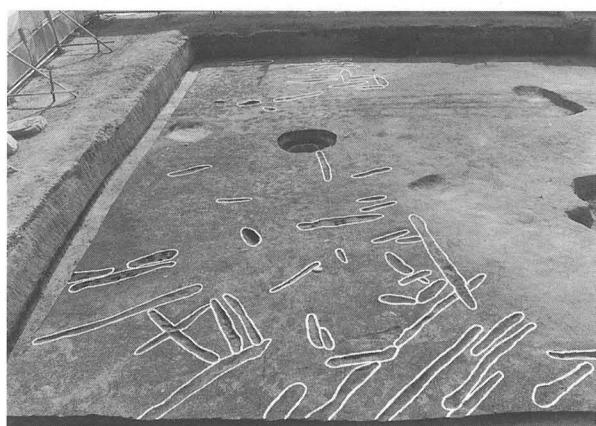
第52図 第2遺構面2E区南東側ピット（西から）



第53図 第2遺構面2E区北西側ピット（西から）



第54図 第3遺構面平面図 1/120



第55図 第3遺構面全景東半部（北から）



第56図 第3遺構面全景西半部（西から）

④第4遺構面（第57～67図）

第8a・b層上面で2D区北端から2E区西端へ大きく蛇行する自然流路を1条と1D区北東端に位置する落ち込みを検出した。

流路は幅4～8m、深さ約130cmを測る。流路は極細粒砂～細礫で充填されており、比較的緩やか



第57図 第4遺構面平面図土器群分布 1/120



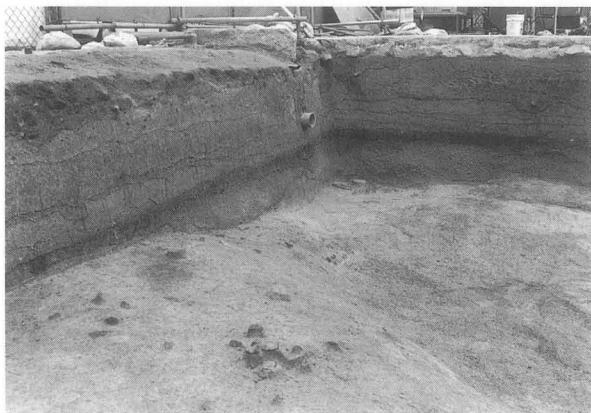
第58図 流路全景（南東から）



第59図 流路全景（北西から）

な流速であったことが推測される。1E区の流路の肩からは、縄文時代晩期の土器が少量出土したが（土器群2・3）、他の地区や調査区中央での深堀においても流路内からは遺物の出土は全く認められなかった。

一方の落ち込みは、調査区内で確認できた深さは最大で約55cmを測る。出土遺物は認められない。



第60図 調査区東壁土層（北西から）



第61図 1E区第8層土器出土状況（東から）



第62図 1E区第8層流路肩土器出土状況（北西から）



第63図 1E区流路肩第8層落ち込み部（南から）



第64図 2D区第9層上面土器出土状況（南から）



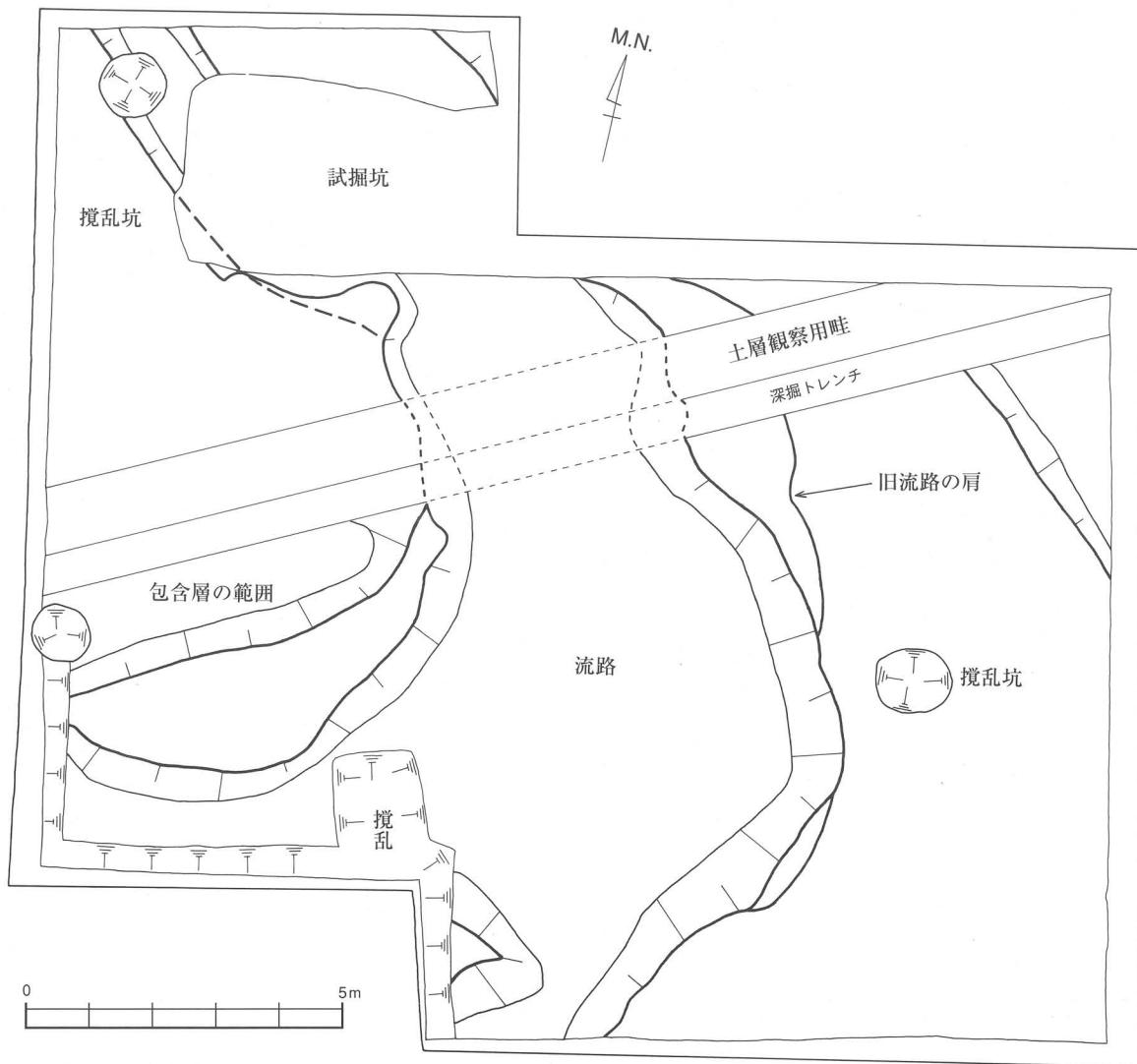
第65図 2E区第9層流路肩土器出土状況（北東から）



第66図 2E区第9層土器出土状況（北から）

土器群遠景	土器群4
土器群3	土器群3
土器群1	土器群5
土器群6	

第3地点 土器群写真の配列



第67図 第4遺構面平面図 1/120

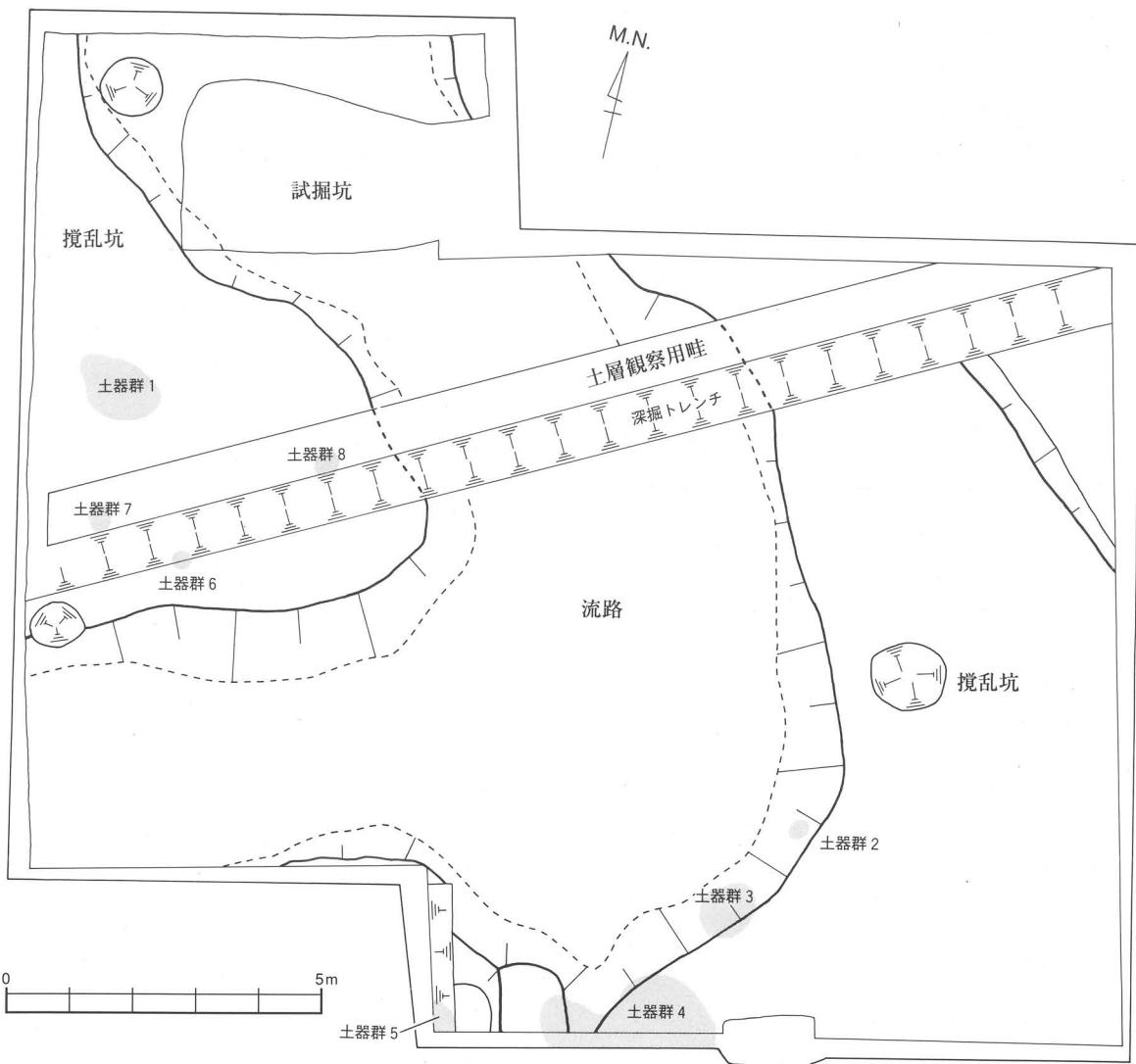
やや粘質のシルトから成っており、沼沢地や湿地であったと考えられる。

第9層からは縄文時代晚期の土器が2E区西端と1E区南西端で出土したが、精査の結果、遺構は存在せず、自然堆積の中に混入したと考えられる。出土状況からみて、流路によって遺構が分断された可能性がある。
(三輪・永光)

⑤縄文・弥生時代遺物の出土状態と流路の時期（第57・60～73図）

弥生土器および縄文土器は一見混じって出土したような印象を受けるが、両者は層位的にも出土状態としても明瞭に分離できるものであった。それは出土遺物の整理作業を通して追認し得ることであり、2者の関係について改めて項を立て、整理しておこうと思う。

弥生土器はI・II様式に比定されるもので〔寺沢・森岡編1989・90〕、その様相は第2地点〔森岡・竹村編1999, 福島・上垣・藤井1999〕並びに第4地点〔森岡・竹村1999, 竹村 本書III-2〕の傾向と変わることはない。出土地区は2E区と1E区に最も集中し、1D区で散見される。出土層位は第8層上面が多く、第8層最上部がこれにつぐ。壺・甕の器種が認められ、鉢や高杯は少ない。器形の判る資料は甕に限られる。



第68図 第5遺構面平面図 1/120

縄文土器は、当初、弥生土器との伴出関係が注意にのぼったが、第7層などに遊離したものがみられる他は、第8層や第9層で出土するか、同層内で土器群を形成するものが大半を占める。晩期に属する突帶文土器であり、弥生土器との共伴関係がない点が重要である。

縄文土器はすべて破片となって出土したが、総破片数は1,114点を数える。第8b・9c層など出土層位は自然流路のベースないしは最終埋没時の肩を形成する土層である。したがって、第8層出土資料はとくにこの河道の放棄された時期を示唆し、弥生土器はこれらが埋積して充填土により局部的に微高地が生成をみた時点以降に土壤層中に包含されたとみなしたい。

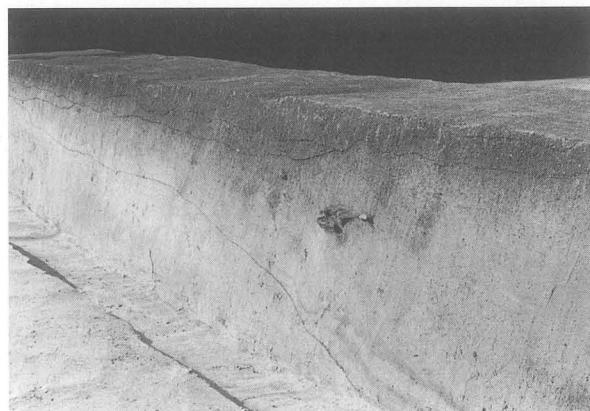
縄文晩期の突帶文土器は第57図に分布を示したように、8群から成る土器群を形成した。土器群の分布は土器群1・6～8の4群が河道西岸に、土器群2～5の4群が東岸側に遺存し、東側のものは流路肩ベースに含まれる態様で出土し、例えば土器群4は第8層中、土器群5は第9層中といった具合に弁別されており、層位的には時間差を感じさせる。西岸域でも土器群6は第9層内において検出されている。したがって、この突帶文土器の使われている段階に河道の形成をみ、当突帶文土器群が継起している比較的短期間のうちにこの河道が埋没したと考えたい（第58・59・67・68図）。（森岡）



第69図 遺構完掘状況全景（南東から）



第70図 遺構完掘状況全景（西から）



第71図 流路土層断面細部（南東から）



第72図 流路土層断面全景（南東から）



第73図 流路完掘状態（北西から）

5) 出土遺物

調査区内から出土した遺物は概ね次の品目から成る。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・中世須恵質土器・古瓦・瓦器・陶器・磁器・瓦質土器・鉄製品・石製品・土錐などであり、以下、若干順序を異にするけれど、実測図の配列にしたがい、遺物の内容を簡単に報告する（第74～83図、第4～7表）。

①縄文土器（第74～77・80・81図、第4・5表）

縄文土器は破片数にして1,114点が出土した。すべて晩期に属するもので、他の時期のものは認められなかった。現場で担当者が認識した以上に縄文土器の分布範囲は広く、地区・層位・群別からみると、1E区第7層・第8層・第9層、2E区第8層・第9層に広がり、土器群1～8にまたがっている。しかし、時期的には概ね同一時期の所産と考えられるため、ここでは縄文土器として一括して報告する。

まず、資料の中から器種や器形の判別可能な破片91点を抽出し、図化した。実測図は器種・器形による分類を基礎として配列し（第74・75図）、各資料の掲載図番号・実測図番号・出土地区・層位・帰属土器群・色調・胎土・焼成・製作技術・型式名などについては、第4・5表に委ねた。近接地での共伴関係や出土層位の違いなどについても、この表にしたがって頂きたい。また、第76・77図には突帯や刻目、あるいは調整技法がわかるようにできる限り表裏の拓影を掲げた。

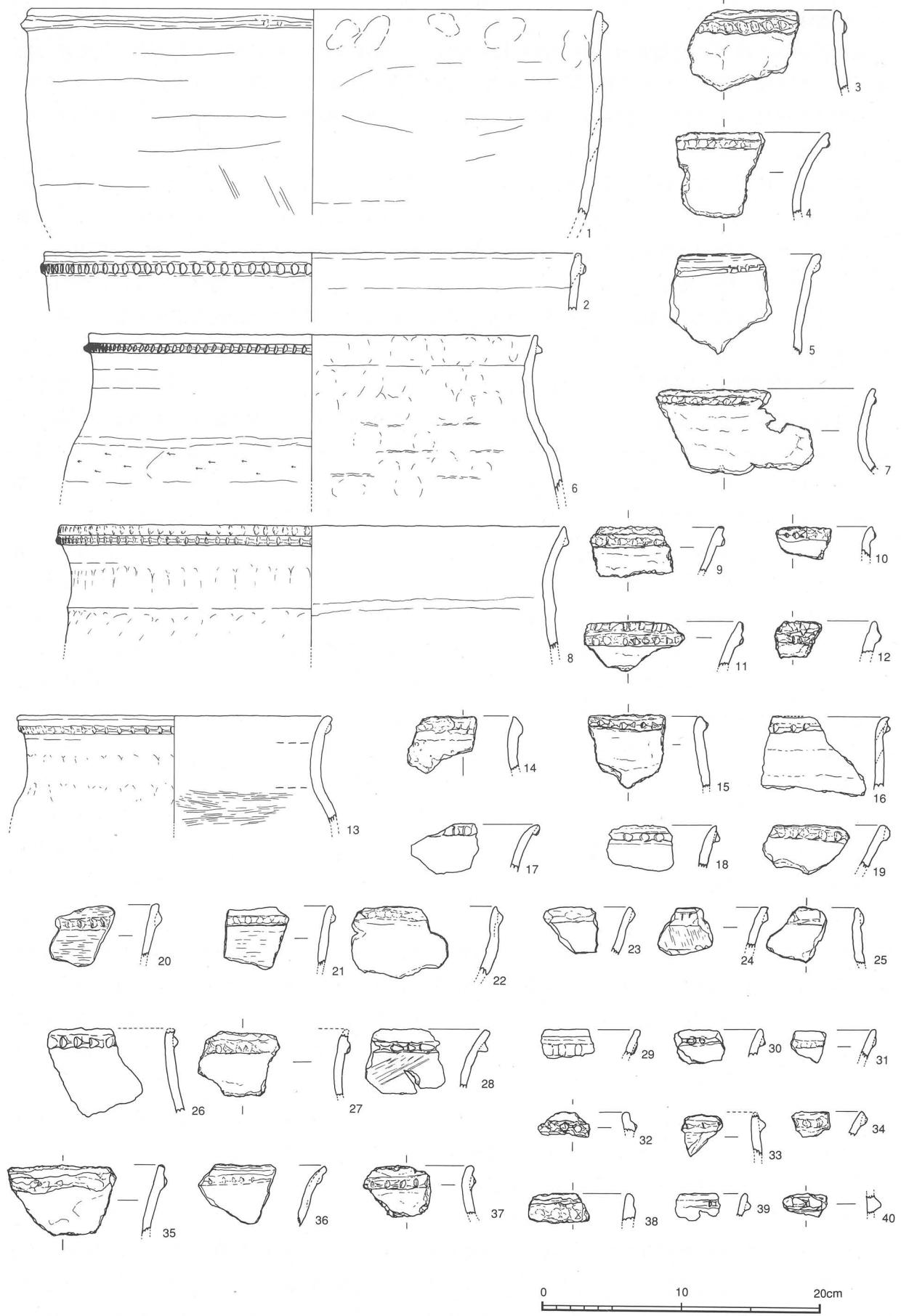
1～50は、口縁部外面に主として刻目突帯を施す深鉢形土器を配列した。深鉢は他にも存在する。

1・2・6・8・13は口径の復元がある程度可能な資料であり、1・6・8・13の4点は胴部への移行が判明するものである。この4点を観察する限り、胴部に刻目突帯を施す深鉢は認められないが、75・76・78・80・81・85のように胴部突帯とおぼしき破片も散見されるところから、これらの口縁部突帯部位片の中にも胴部突帯を共在させる土器が存在することが予想される。何分細分化した資料なので、1条突帯のみとなるか、2条突帯になる土器かは、それぞれの破片について不確かなことが多い。口縁部突帯が刻目突帯になるか否かについても、1のごとく全体に刻まれていないものや、あっても刻目自体が弱く、現状では観察不能なものもかなり認められる（5・31・35・39・41・42・44・45・47・48・49・50など）。

1は口縁部の外反度の弱い深鉢で、復元口径41.2cm、残存器高15.0cmを測る大型品である。色調は外面淡黄茶色～淡褐色、内面淡灰茶色を呈し、胎土中に石英粒が目立つ。突帯は口縁端から6mm下降した位置に貼り付けられ、断面二等辺三角形で、底辺幅は7～10mmを測る。突帯下辺側の一部に弱い刻目が観察される。僅かに外反させる口縁部の内面には器形を変化させるための指頭圧痕が看取できる。この土器は他の深鉢と比べ外面調整などが異なるようである。

2は直口するタイプの口縁部を有し、口径は39cm前後に復元できる。突帯は丸味を帯びた台形様のもので、口縁端より7mm程下降した位置にあり、底幅8mmを計測する。内面には粘土帶接合痕跡を認めることができ、その幅2.2cmを測るが、接合時のひねりにより粘土紐がつぶされた結果の幅と理解している。口縁端部は新たに粘土の細紐を継ぎ足し、丸く収めて再調整を行っており、面取り風の処理もなされている。突帯上の刻みは「O」字状に施されており、4～5mmの間隔を置いている。色調は外面が淡黄灰色、内面が淡灰茶色で、口縁の一部は黒斑状の黒灰化をみる。胎土には長石・石英の他、シャモット状の粒子を含み込む。

3は口縁部全体が内傾する深鉢で、突帯の断面は低く丸く、刻目も横広げに押圧された変形「O」字状である。口縁端も刻まれているように思えるが、器面が荒れており、その点は定かでない。口縁端の丸味についても問題が残る。突帯は口縁端より6mm近く下に貼り付けられる。口縁外反度の著しい4は、器壁5～6mmとやや薄く、突帯は全体的にローリングが激しいため、刻目が判読できな



第74図 出土遺物実測図(1) 1/4

い。外面が淡灰黄色を呈しているのに対し、内面は黒褐色を呈している。突帶の貼り付け位置は口縁端より5mm下がる。胎土には石英・長石を包含する。5も磨耗があって刻目が部分的にしか把握できない突帶を保有する。口縁端部は丸味をもたせてナデる。

上半部の器形の知り得る6は、口頸部の屈曲変化が胴部に比べ短く、古い器形要素をとどめる。全体的に粘土帶積み上げ痕跡を残す深鉢で、口頸部外面はナデ調整、胴部外面は右回りの削り調整を加えている。内面は指頭圧調整が顕著に行われ、口縁部先端付近は細くシャープに作られる。突帶は口縁端より7mm下に貼り付けられ、刻目は比較的精緻な「D」字タイプのものが施されている。口縁端両面と上面はヨコナデによるていねいな調整仕上げがなされる。口径32.4cmに復元できる比較的大きな破片で、残存高も10.5cm前後となる。7は4と同一個体になる公算高い破片で、器厚や口縁外反度、突帶の付け方、色調や胎土に類似点を多くみる。出土地区・層位も全く同じである。

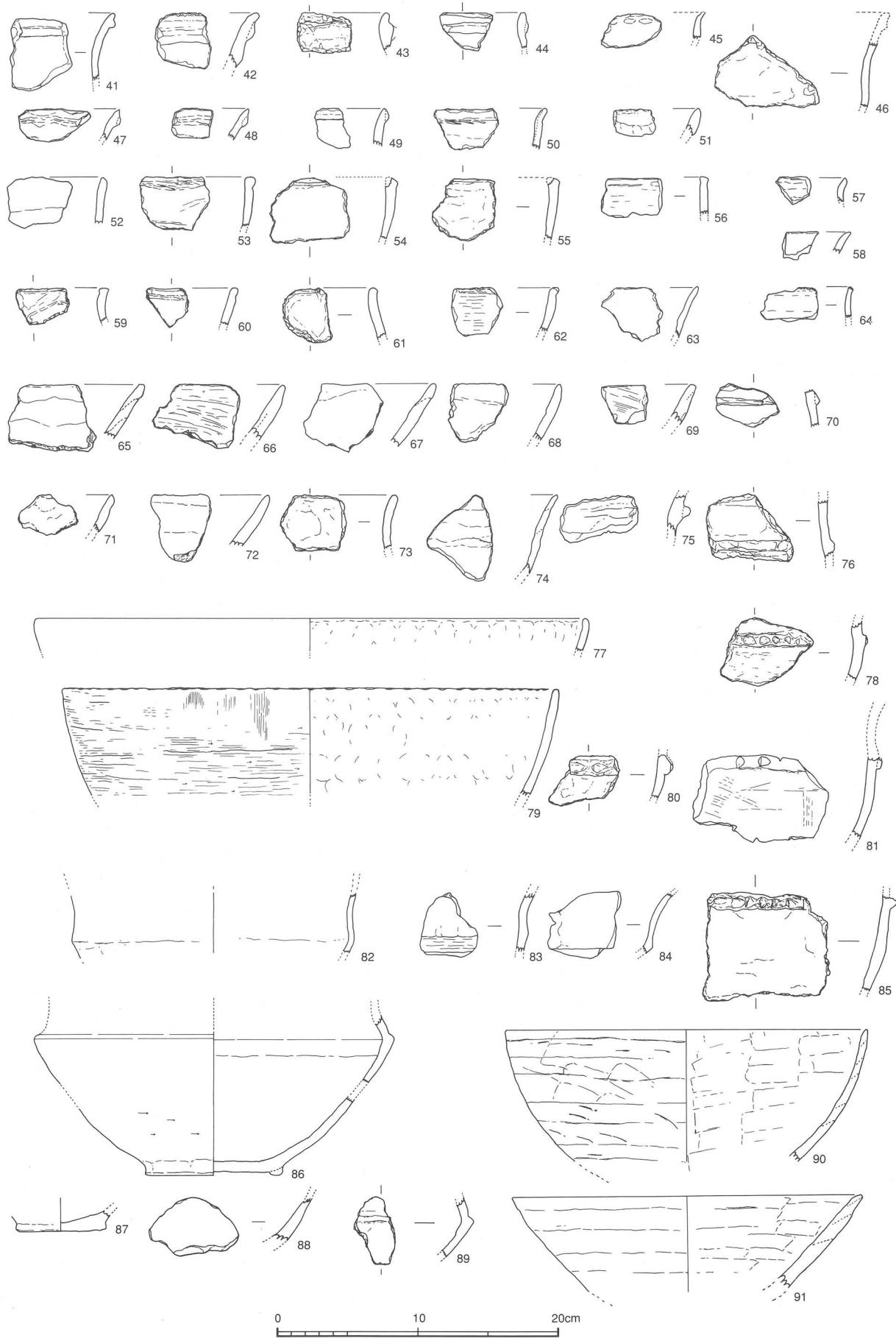
8も頸胴部界の調整境稜線が上寄りにくる深鉢の破片で、1・6同様に1条突帶になることを明証し得る資料である。刻目突帶は口縁端より7mm下に貼り付けられ、刻目のピッチは6~7mmを測る。刻目は右側に緩斜広面をもつ細身の「D」字タイプである。口縁部は外端面にも同様の刻目を施していることが看取される。復元口径36.6cm、残存高8.8cmを計測する。頸胴部界の稜線は図化すると、鋭利な感がするも、胴部の張り出しあは少ない器形と考えられる。外面淡黄褐色、内面淡黄色を呈し、胎土にはやや粗い石英・長石粒を含む。9~12もやや尖りぎみの口縁端部を刻む深鉢で、11・12などは8と同じような器形とみられる。刻目は9・11が変形「O」字状、10は「V」字状の小さく鋭利な刻みを浅く入れる。口縁端部の刻目は9が上端に入れるも、11・12などは外面側に施している。

復元口径22.8cmを測る13は、小型品ではあるものの、基本形態は大型品6と似るもので、やはり口縁部突帶のみの1条突帶である。胴部の強い張りが特徴である。小型品の割には器厚があり、厚いところでは7~8mmを計測する。口縁部は丸くていねいな調整がなされ、外面にはその調整痕跡が走る。口縁部突帶は口端から4mm下に貼り付けられ、断面は低いカマボコ形を呈する。刻目は細い「D」字形で、8~9mm間隔でピッチを離して施される。胴部内面には二枚貝条痕調整が明瞭に残る。色調は外面淡茶褐色、内面暗橙褐色で、胎土は砂粒が密に入る。14・15・19などは突帶が上向した位置に貼り付くが、口縁端部の摩耗度が著しいため、正確な貼り付け位置は定かでない。26や27も口縁端部を欠損している。17も口縁端直下に突帶が貼り付けられており、器壁の薄いシャープな深鉢片である。

口縁部の形状から分類すると、直口タイプのもの(20・21)、全体がやや外反化するもの(28・35)、口縁端近くのみ外反するもの(15・16・22)などの変化がみられ、突帶幅も幅広のもの(19・24・25・29・38・40)と細く高くシャープなもの(21・28・39)などに分けられる。刻目の形状もバリエーションがみられ、「O」字風(18・21・23)、「D」字状(15・16・17・19・20・26・28・33・40)、小刻み「V」字状(36・37)などに識別し得る。口縁部端面の調整は尖りぎみに終わらせるもの(21・22・31・39)と面取り風の平滑面をもつもの(24・28)などに分けられる。

41は突帶の形状・器形ともに4・7と近似する。ただし、突帶上の刻目は異なるようである。42~44・47などの口縁部突帶も磨滅が進んでおり、断面形や刻目のタイプはよく判らない。細身の器壁の45・50などにも突帶の痕跡とかろうじて刻目が認められるので、口縁部突帶を有する深鉢片とみられる。46は器壁に屈曲がみられ、深鉢の胴部片であることが知れる。53~55の3点は、口縁部がいずれも直口内弯し、口縁端部が肥厚ぎみに終わる点で共通する。どれも口縁部外端面に突帶風の造作が残る点でも同じ特性がみられるので、直口砲弾形の器形を呈する1条突帶の深鉢になるかもしれない。59は口縁部が反りぎみに立ち上がる器形で、口端は内面に肥厚する。浅鉢になる可能性もあろう。

70・75・76・78・80・81・85は胴部片で、すべて突帶を有する部位とみられる。ただし、80・81・



第75図 出土遺物実測図(2) 1/4

85のように破片端に突帯が観察され、破断面に磨滅がみられる土器片は、口縁部突帯か胴部突帯かの判別も難しく、80・81・85の3点は砲弾形深鉢の口縁部になる可能性も強い。しかし、78のごとく器形の変化部分に刻目突帯のある土器は、ほぼ胴部突帯になるものとみて大過なく、二条突帯の深鉢が存在することを示唆していよう。突帯上の刻目は80・81・85共に「D」字の形態を探るものが多い。

65～69・71・72・77・79・90・91は皿形ないしは浅いボル状を呈する浅鉢である。器壁の分厚い粗製品とやや器壁が薄くなる半精製品とがある。65～69・72・90・91は粗製の浅鉢であり、65・68・72・90・91にみられるがごとく、粘土帶の接合痕跡が顕著に残る。器壁自体も厚いものでは91のように厚さ1cm前後になるような資料も存在する。粘土帶は粘土紐の巻き上げ成形によるものと理解されるが、65や90・91を観察する限り、内外面で1.5cm前後を計測するものが多い。粘土紐に直せば、直径1cm強ぐらいのものを用いたとみることもできよう。器形としては、口縁端を尖りぎみに調整して口縁部を内弯させるもの（66・68・72・90）と、斜上方に直線的に口縁部をのばし、器厚もあり減じないタイプのもの（65・67・69・91）とに分かれる。調整技法では、90や91が内面を中心に板状工具を横方向に用いて特徴的な仕上げを行っている。

粗製度の落ちる77・79は、共通して内面などに指頭圧痕調整を施し、粘土帶痕跡を残していない。

82～84・86・88・89は、口頸部が屈曲して「く」の字形に立ち上がる精製の浅鉢であり、器壁も総じて薄い。口頸部と体部の屈曲は、器厚を変え、稜線のしっかり入るもの（86・89）と、変化がナイーヴで稜が際立たないもの（82～84）とに分かれる。86は底部底面に輪台状の粘土紐貼り付けがみられ、上げ底風に仕上げられる。体部下半は横方向の削り調整がなされる。88も体部下半であろう。87は薄く仕上げられた底部で、晩期の浅鉢の底と思われる。

以上、縄文土器全般を通じて色調は暗黄褐色～暗黄色を基調とし、胎土には適度な砂粒をまじえることで共通している。これらは、原則的にすべて在地の胎土で、打出の翠ヶ丘丘陵先端部の粘土を採掘、採取して作ったものであろう。中河内生駒西麓産胎土の搬入品が1点だけ認められなかった点が特筆できよう。

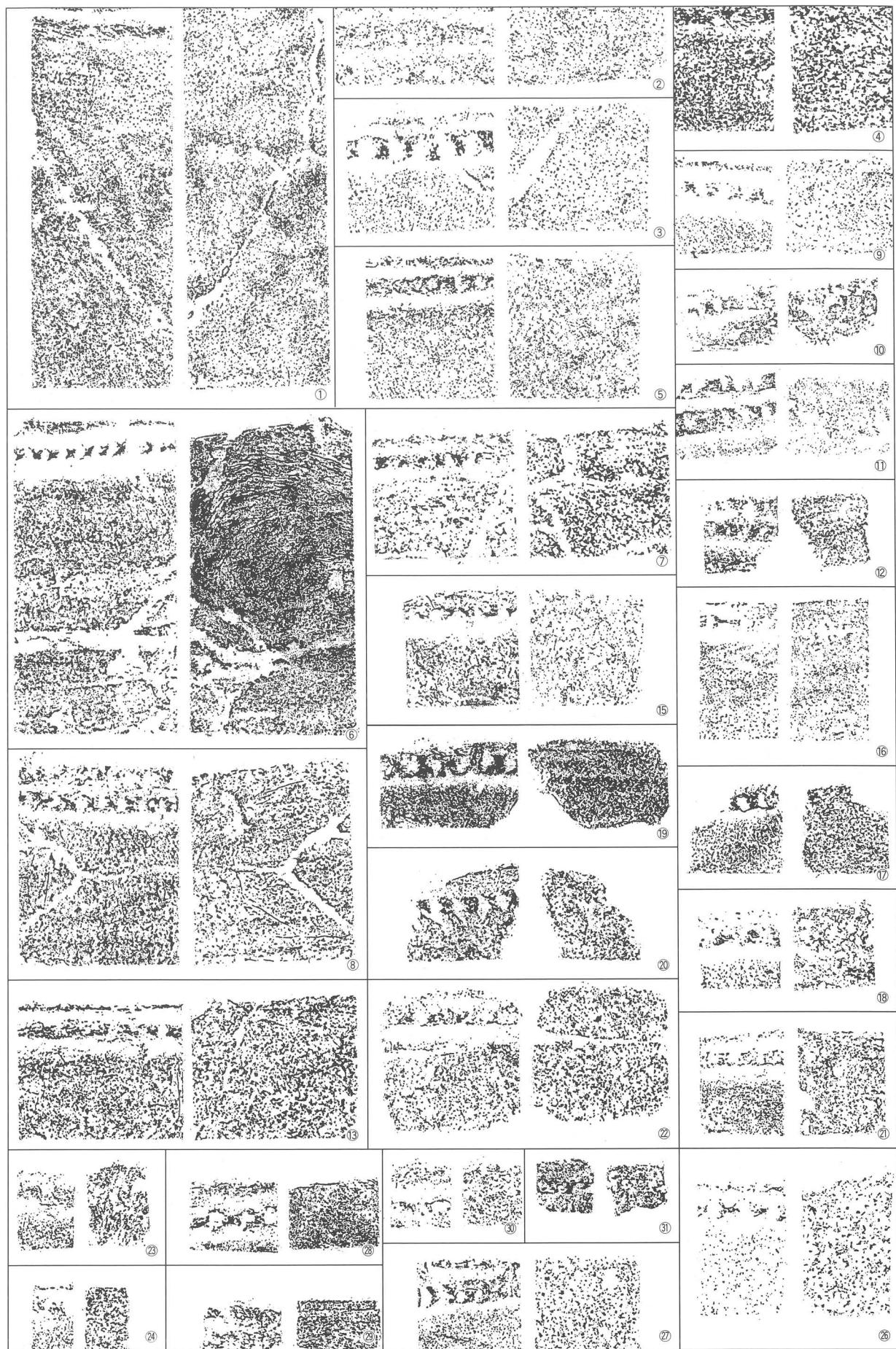
②弥生土器（第78・82図）

第78図1～3は、弥生土器である。弥生土器片は第8層の層序から出土するものが多い点に留意したい。1は甕の口縁部片で、第Ⅱ様式のものとみられる。底部2も胎土粗く、中期前半にさかのぼる資料であろう。3も同時期の底部で、石英・長石の粗い粒を胎土中に散見する。3は底径6cmを測る。

③須恵器（第78・82図）

第78図4～11は、須恵器である。4は無蓋高杯の杯部片で、口縁部・脚部への接続部の両方を欠く。復元径11.1cmを測り、小型化したものであるため、おそらく7世紀代に下るものであろう。杯部立ち上がりの稜線はあまり。淡灰色を呈し、焼成は良好である。5・6は高台の付く段階の杯身である。5は高台部分での復元径7.8cmの小型品で、底部への変換点内側にかなり外方にふんばる高台を貼り付ける。やや大型で深さを増す6は、復元径11.0cmを測る底部を有し、高台は断面方形で垂直に立つしっかりしたもので、高さも5mmある。これらは7～8世紀の年代のものとみられる。色調淡灰色で、焼成は良好である。7は短頸壺の口頸部片。口縁の立ち上がりは短い。

8は須恵器で塊形を呈し、焼成は良好。9は8世紀後半頃の直口長頸壺の底部とみられ、復元径4.4cmの底部底面には回転糸切り痕が認められる。残存高1.7cm、色調は淡灰色、胎土は比較的緻密である。底面は僅かに上げ底となる。また、底部近くに爆裂寸前の器壁の膨らみが認められる。復元径14.4cmを測る10は、須恵器の杯蓋になろうか。色調は外面淡灰色、内面淡灰白色で、胎土は緻密である。残欠11は器台の一部になる可能性がある。細片のためよくわからず。色調は内外面ともに淡灰色、断面は淡紫色を呈する。復元径は27cm近くになろう。これらの須恵器は主として2E区サブト



第76図 縄文土器 成形・調整痕・突帯形態 拓影(1) 1/2

(外面・内面)

レンチの第3・4層や1E区の第3・5層、1D区の第4・5層などから出土しており、基本層序の第3～5層に顕著に認められるようである。

④埴輪（第78・82図）

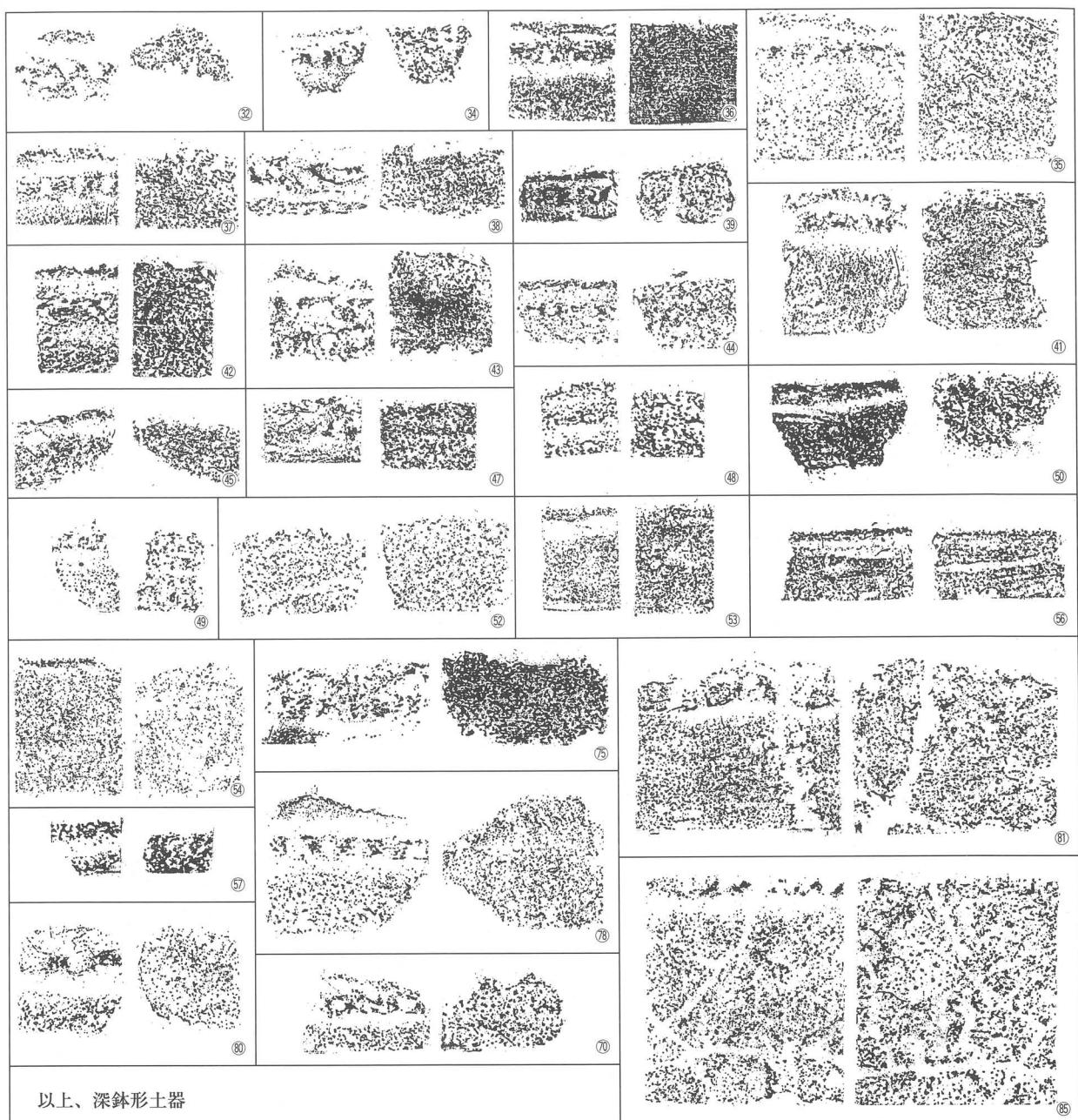
第78図12～15の4点は埴輪片である。12は円筒埴輪の基底部である。底径18.9cmを測る。下から7.6cmのあたりに貼り付けられた突帶は断面が低い三角形を呈し、頂点は3mm前後の不整な面をなすのみである。外面は調整痕（ハケ目）がよく残っていないが、おそらくタテハケであろうと思われる。器壁は下から5cm前後ぐらいまでが平均9mmと厚いが、それ以上は数mm程度の薄さとなる。内面調整は専ら縦方向のナデで、基底付近左上がりとなる。外面淡橙色、内面淡黄橙色を呈し、胎土中には若干のシャモットを混和する。14も円筒埴輪片であるが、中～上半部片とみられ、突帶の断面形は「M」字風の逆台形を呈し、突帶のやや凹む上面、および側面は入念にヨコナデ調整が施される。器表の残りが悪く、外面の調整ハケは観察しにくいが、器全体はしっかりとしており、内面には指頭圧調整痕が看取される。黄白色の明るい焼き上がりをなし、極小の長石粒をはじめ若干の鉱物粒を混えるが、胎土は総じて良好。この埴輪片は5世紀後半～末のものと判明する。

13・15は形象埴輪の残欠であろう。13は厚さ1.3cmの平らな板状部分にやや高めの突帶を貼り付ける埴輪片で、断面には接合痕跡が明瞭に残る。突帶は丈高で、上頂は指おさえにより丸味をもつてつくられる。色調・胎土ともに14と類似し、黄白色を呈し、明るい。突帶左手の広い方には端面をもつようである。特徴的な断面をなす15は、蓋の一部になるかもしれない。つながりを知る部分を三方ともに欠くので、全形をはかりかねるが、外面には線刻が施されており、幅2～3mmの太めの沈線を水平に走らせて区画をつくり、その上側に斜線文か綾杉文のような文様を2cm間隔程度でかなり弱めに施している。上端への移行は1.2cm程で斜角が変化しており、このままの角度ではつながっていない。下へののびは筒部を形成するように復元でき、蓋の笠部になる公算が大きい。他の埴輪片に比べ、やや赤茶味を帶び、石英・長石の小粒子を顕著に含む。色調淡橙黄色。埴輪片は1列（1D・1E区）に顕著に認められ、須恵器同様、第3～5層に多く存在するようである。

⑤土師器・黒色土器（第78・82図）

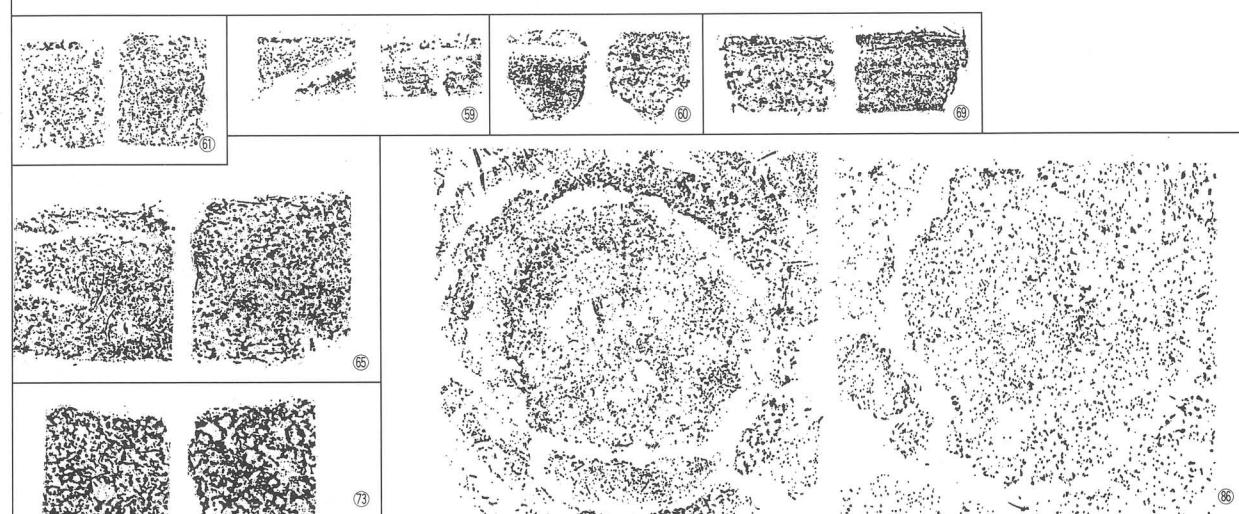
第78図16～25は土師器・黒色土器の類を一括した。

高い高台の16は、橙色を呈するが、白色化著しいもので、吉備系の土師器碗と思われる。復元底径8.9cmを測り、高台部は回転ヨコナデ調整が加えられる。17は内黒焼成の黒色土器A類で9世紀後半頃の貼付け輪高台を有する碗とみられる。精製された緻密な胎土で、外面は黄橙色の明るい焼き上がりであり、堅緻な仕上がりとなっている。高台径は5.6cmを測る。18・20・22の3点は、口縁部の立ち上がりが短く斜め上方に立ち上がる土師器小皿である。外面には弱い1段ナデが加えられる。胎土は精良。12世紀頃のものか。20は小片のため、口径があやしい。復元口径8.6cmを計測する1段ナデ整形の小皿で、ヨコナデは入念である。底部はやや厚く、張り出しがみに終わる。19・21はいわゆるヘソ皿であろう。19は土器・陶磁器畿内編年Gbタイプ〔伊野1995〕の典型的なヘソ皿で、薄手のGb-2形式に属し、14世紀後半の時期が与えられる。指頭圧痕がみられ、内型つくりの成形法が採用され、口縁部はヨコナデが施される。胎土はきわめて精良である。21も底部復元が未確定だが、ヘソ皿様の口縁部となっている。口縁部はヨコナデで仕上げられる。復元口径がやや大きくなる24は、口縁部が真っ直ぐ外斜め上方にのびきり、端面を丸くおさめる皿である。色調は淡橙色、胎土・焼成は良好。皿25は復元径10.8cmを測り、口縁部が斜め上方にシャープに直線的に発達する点を特徴とする。この特徴からみて15世紀末～16世紀初頭頃の時期に比定し得よう。色調淡灰茶色で、胎土・焼成ともに良好である。洛北産の中世末期の土師器とみられ、内底面周端にくぼんだ圈線を加えることがある。搬入品であろうか。検討を加える余地を残す。



以上、深鉢形土器

以下、浅鉢形土器



第77図 縄文土器 成形・調整痕・突帯形態 拓影(2) 1/2

(外面・内面)

⑥磁器（第78・82図）

第78図26～29の4点は青磁類である。

26は器表面が荒れて灰緑色を呈するものとなっている。口縁端部を短く外反させるもので、端部外面に有段風の平行線に入る。16世紀を前後する時期のものであろう。磁胎は堅緻である。27は口縁部が「て」の字状になるもので、鍔縁丸形小鉢の断片と思われる。磁胎は灰緑色を呈し、器表には貫入がみられる。28は龍泉窯系青磁碗の体部片で蓮弁と間弁がかろうじて判読できる小片である。残りは悪い。淡い黄緑色を呈する。14世紀代のものとみられる。29も龍泉窯系青磁碗の破片で、底部を欠くものの口縁部までかろうじて残っており、28と比較すると、蓮弁は細身で鍔は判然とする。また、口縁部は僅かに外反する。15世紀に下るものであろう。

第78図30は京焼系の磁器碗で、釉調は淡黄茶色でウロコ状の貫入がみられる。外面下半は露胎のままである。産地などは特定しかねる。第4地点出土の第113図23と接合した。

⑦須恵質土器（第78・82図）

第78図32～38は東播系の須恵質土器捏鉢で、復元口径や口縁部の断面形にはバリエーションがみられる。32は口縁端部が未発達で、古い要素をもつが、須恵質焼成というより瓦質っぽい焼き上がりである。胎土は砂粒を全体に含む。33・34は若干上下拡張がみられる口縁部を有する。色調は灰色～暗灰色。丸みを帯びた口縁部で上方への拡張を示す35・36などもみられる。38には口縁端に小隆起をもち内面に細沈線が走る。時期については33・34が13世紀初頭頃、35・36は12世紀後半にさかのぼる。32はさらに古い年代のものであろう。

これらの出土層位は、第2～5層にまたがる。

⑧陶器（第78・82図）

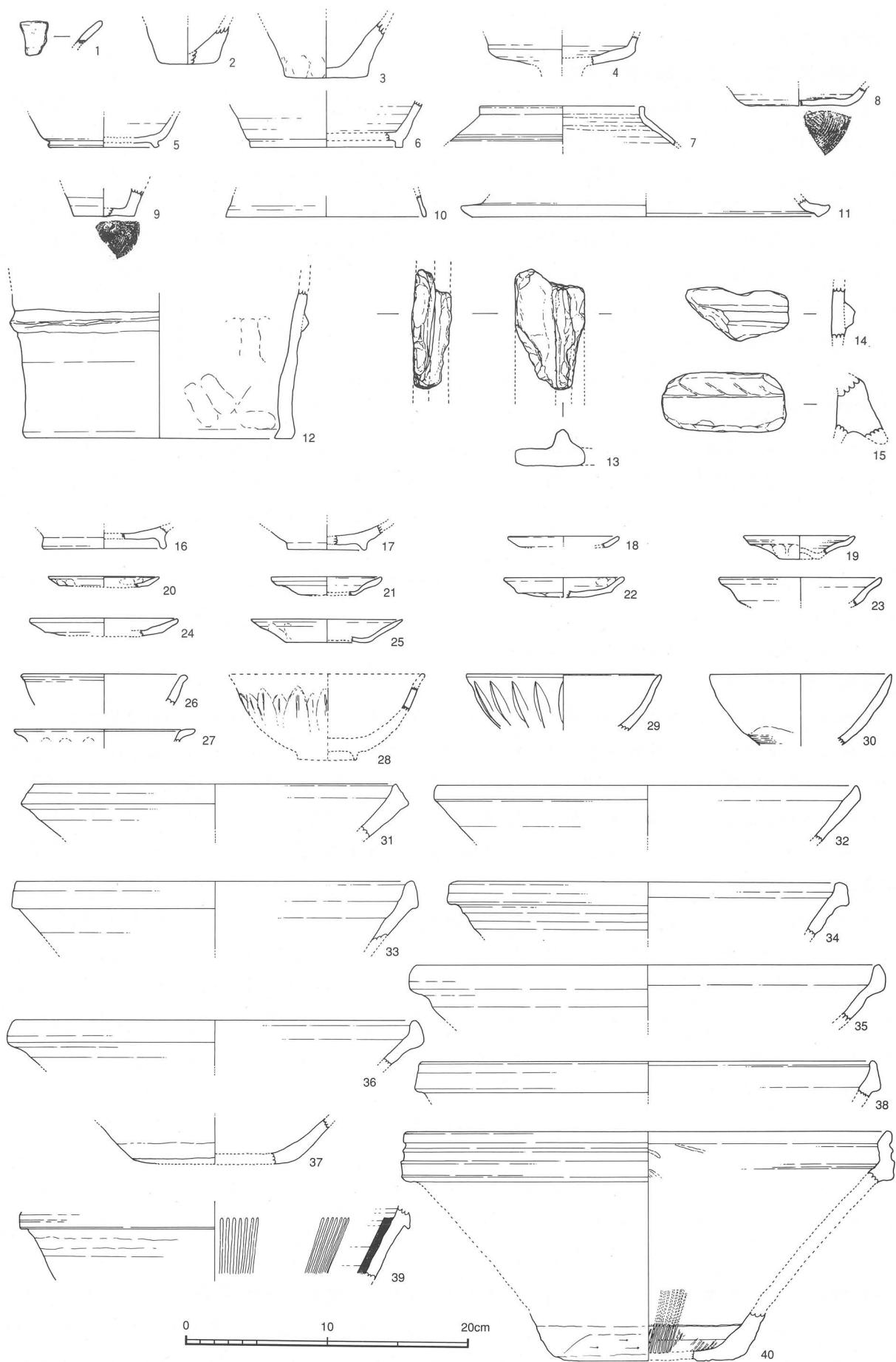
第78図31・39・40の3点は備前擂鉢である。古い形態を示す31は、口縁端部の拡張が未発達で、発色も器肉の一部が淡赤紫色を呈する以外は灰色を示す。胎土中には白色の砂粒を散見し、焼成は堅緻である。14世紀前半頃のものであろう。1E区第4層出土。39は口縁部が上方によく発達する段階のもので、端面下端は若干下垂する。胎土良好で、堅牢に焼き上げられている。色調は暗紫茶色で、胎土は緻密で砂粒が目立たない。焼成も堅緻。内面の擂目は6条1単位である。1E区第3・4層対応側溝出土。

第78図40は胎土・色調から同一個体と判断した備前擂鉢の口縁部および底部片である。口縁部は上方に大きく立ち上がり、幅広の端面には2条の明確な凹線と1条の弱い凹線が入る。口縁端部はしっかりした内傾面をもつ。底部は底面が薄く、凹凸が著しい。内面には、12条1単位の細密な擂目が施されている。淡灰紫色を呈し、断面は深層部が淡灰黒色、器表近くが淡い灰色を呈する。胎土は39よりさらに精良となり、堅い焼成となる。1D区第2層出土。

⑨瓦質土釜・土堀（第79・83図）

第79図41～44は土釜、45・46は土堀である。41は、鍔は短めで、それより上はヨコナデ、体部の下半はヘラケズリ仕上げ。口縁端は平滑である。灰黒色。42は鍔の上側に段差をもつ。灰色～灰白色。堅い瓦質の焼き上がりの43は、口縁端部を内側にやや肥厚させぎみに終わる。44は断面三角形の鍔を貼り付ける。これらはいずれも瓦質焼成で、器肉深層は淡灰白～白色の明るい色調を呈している。時期は14～15世紀の幅に取まる。第4～6層の出土。

第79図45・46は直線的な体部と受口状の口縁部をもつ瓦質土堀で、焼成は堅緻。口縁端部は上方に尖りぎみの拡張をみせる。したがって、新しい要素をもっている。体部が直立せず、外傾するのも新しい傾向である。45は体部上端が受口部の中で突帯状に突き出る。また、46は口縁部外面に1条の擬凹線が入る。これらはいずれも第4層出土で、14世紀後半～15世紀初頭に比定されよう。こうした瓦



第78図 出土遺物実測図(3) 1/4

質無耳壺は京都を代表的生産地とするものである。また、摂津西辺では京都周辺同様、土釜と共に使われている。47は瓦質三足釜の脚部残欠である。上下端の両方を欠く。

⑩陶器・磁器（第79・83図）

第79図48は胎土目もしくは砂目の唐津焼皿で、口縁端は特徴的に尖る。外面は部分施釉。色調はにぶいにごった黄色。49はにごった白色を呈する碗。口縁部は尖りぎみに終わる。50は、腰部が僅かに上向きに横方向にのび、口縁部は外反ぎみに斜め上方に立ち上がる。端部は丸く収められる。外面は口縁部のみ施釉。これもおそらく唐津の皿とみられよう。51は京焼系の碗である。61は常滑の甕であろう。細片で時期不詳であるが、外面には押印文が施されている。

⑪土錘（第79・83図）

第3～4層を中心に出土したものに土錘がある（52～55）。完品（52・53）と半欠品（54・55）に分かれる。52～54は土師質焼成であるが、55は須恵質の焼きである。有孔棒状土錘と呼ばれるものが多く、すべて管状土錘であるが、いずれも径1.0cm未満、長さ3～4cm程度の小型品が主体をなす。

⑫鉄製品（第79・83図）

第79図56～58は鉄釘と思われる。第3～4層からの出土である。いずれも方形断面を呈し、57・58は頭部をL字状に曲げ、つくり出している。錆化によりややふくれるものが多い。

⑬瓦（第79・83図）

第79図59・60は瓦片である。59は平瓦片で、凹面には弱い布目痕が看取される。胎土中には粗い白色の鉱物粒・岩片を含む。60は太めでおそらく軒平瓦の破片とみられる。凹面にはかろうじて布目痕、凸面には面取り的なヘラ切り痕を残す。これらは中世とみてよい資料である。

⑭石器・石製品（第79・83図）

第79図62～64は剥片・石屑の類で、すべてサヌカイトである。第4～8層までの各層位にちらばって出土しているが、おそらく、縄文晩期段階の土器類に由来するものと思われる。66にはトリミングが認められ、製品途上のものである可能性が高い。産地は一見四国・金山産に似るが、おそらく二上山産のものが大半を占めると考えられる。

第79図65はサヌカイト製の石核である。堅く緻密で、ごく一部の断口面の色調からみて、二上山産のサヌカイトのものとみられる。剥離面は風化しており、淡灰色を呈する。長軸方向に長さ7cm、幅4.3cm、厚み2.7cmを測る。1E区第8層の土器群4に伴出した。

⑮弥生土器〔追加分〕（第79・83図）

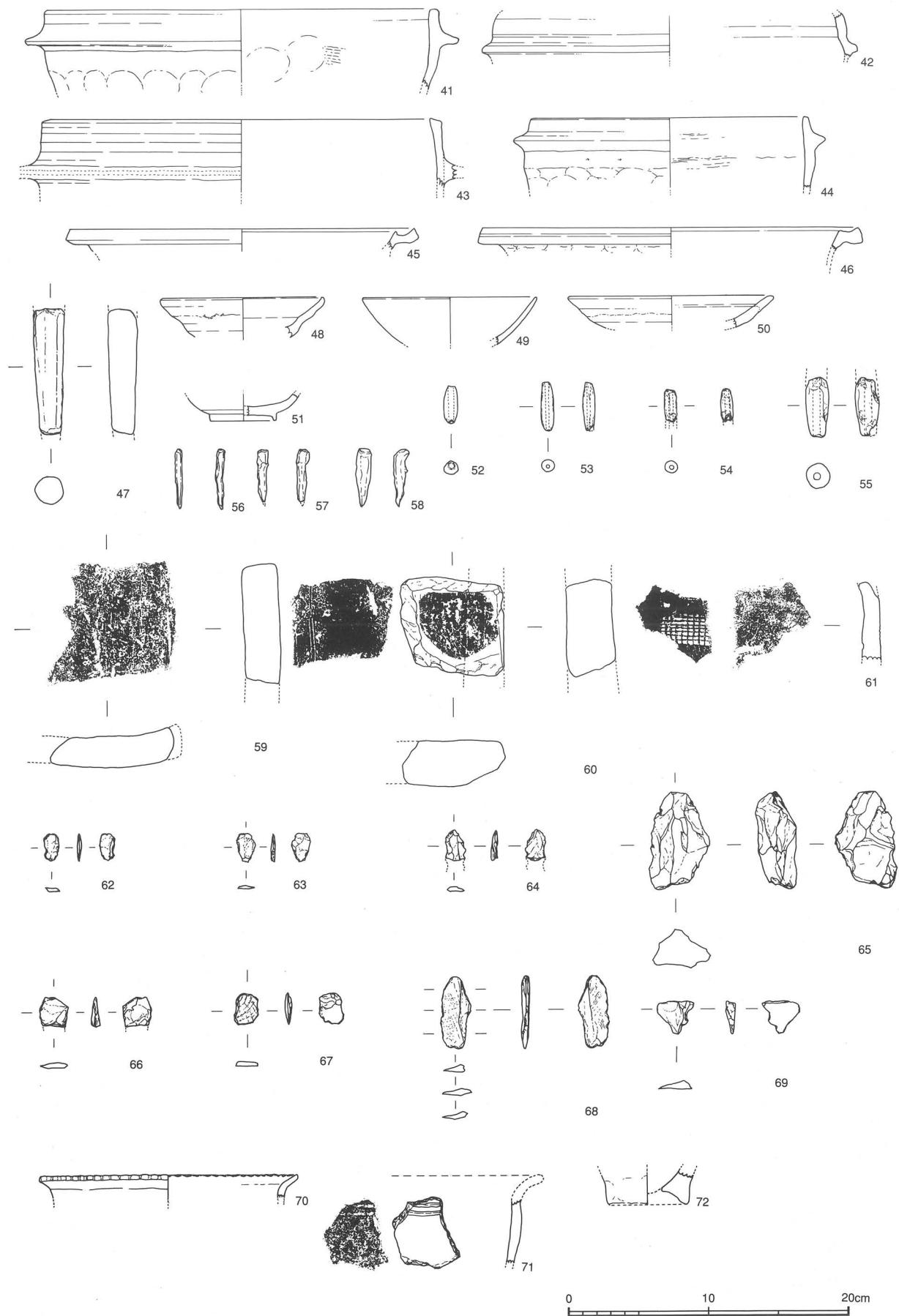
第79図70～72は第I様式から第II様式にかけての資料である。甕口縁部（70）、甕頸・体部（71）、底部（72）などであり、いずれも多くの砂粒を浮き立つように含んでいる。70は端部に刻み目を施しているかもしれない。（71）は頸部に太くやや浅めのヘラ書き沈線文が2条認められる。

⑯縄文土器〔追加分〕（第83図）

実測および採拓からもれた突帯文土器片が他に2点みられたので、ここで扱う。展示品として、市内施設にまわっていたため、整理作業からもれてしまったというのが実情であるが、復興関連の調査ではこれまでにもまま起こっている。第83図右下にA・Bとして写真だけ掲げている。

Aは、口頸部が短く外反する深鉢の破片で、屈曲以下の胴部下半はケズリ調整により仕上げている。やや尖りぎみの口縁端部には刻目を施し、口縁部にも有刻目の突帯を1条めぐらす。刻みは右から左に傾斜をもって入れられ、結果として、「D」字を呈する。淡黄褐色で、胎土には粗い砂粒を含む。Bも同様な器形の深鉢で、色調・胎土ともに似る。口縁部の突帯はAに比べやや細身で、端部には刻目を施す。

（森岡）

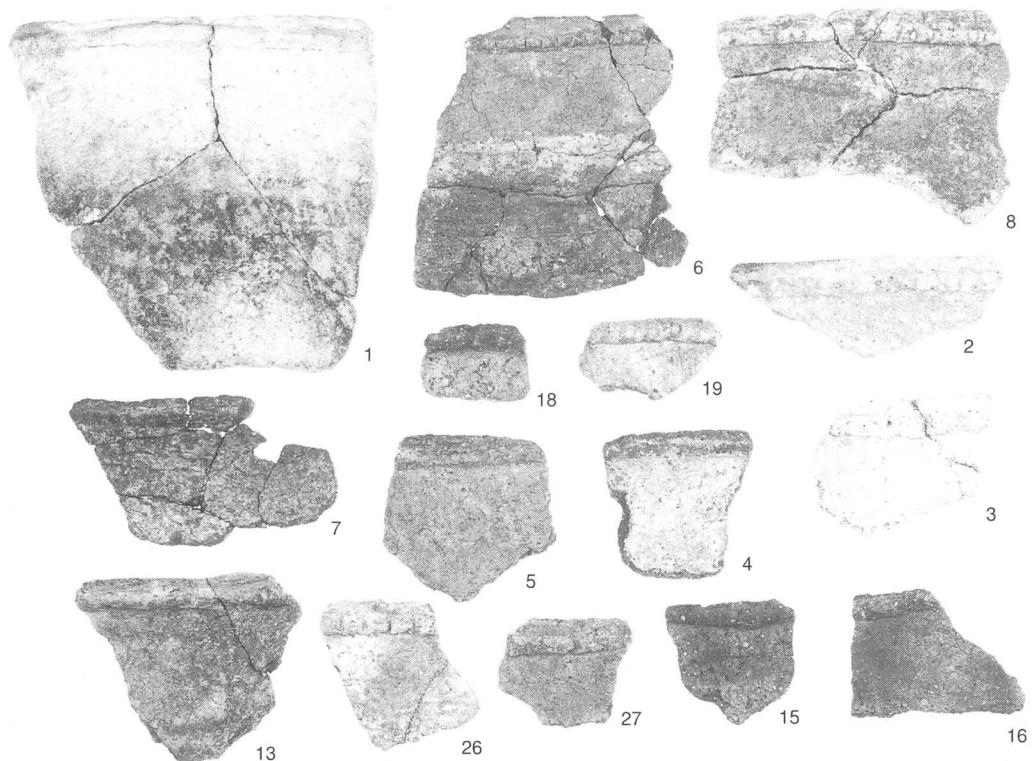


第79図 出土遺物実測図(4) 1/4

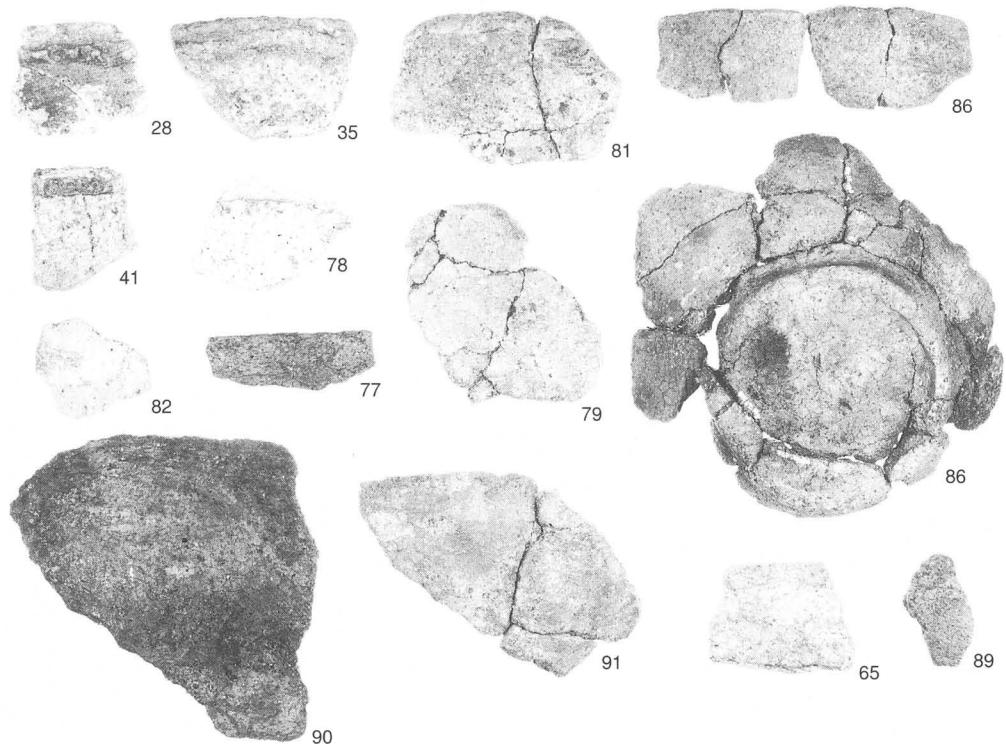
6) 小結

調査結果を要約すると、下記のようになろう。

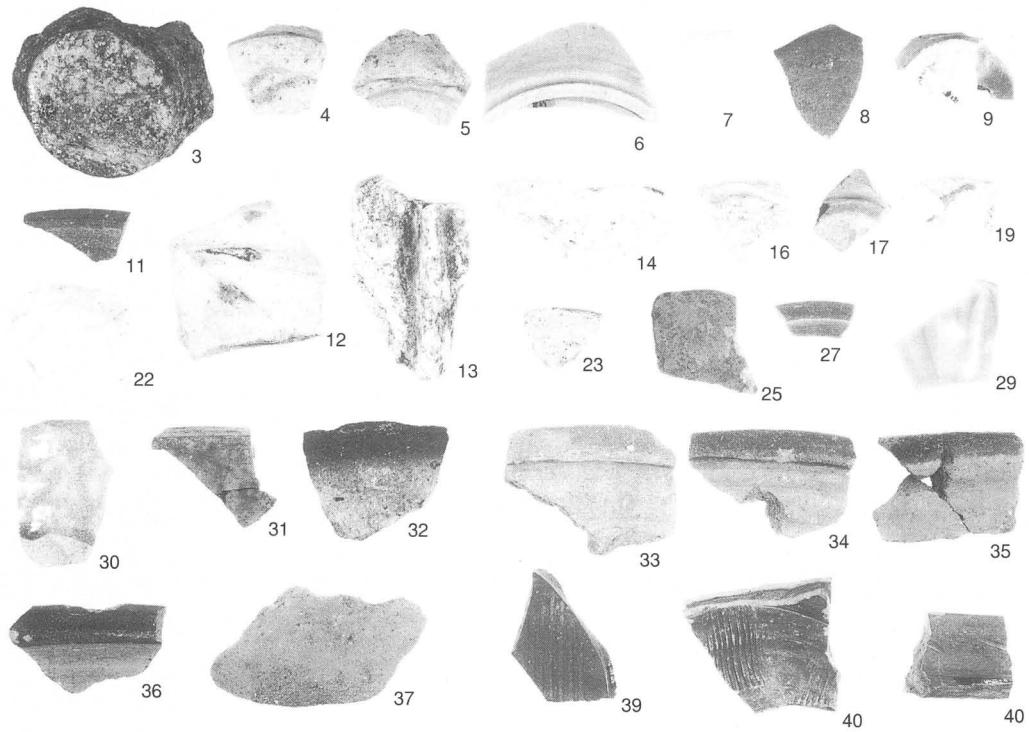
- ①検出遺構面は4面で、各々の想定時期は、第1面が近代、第2面が近世、第3面が中世後半期（14～15世紀）、第4面が縄文時代晚期後半段階となる。そして、完掘面精査を第5面とした。西に隣接する第4地点（後述、III-2）では、本地点第1・2面対応面の調査を近世以降という点でオミットしており、本地点の第3・4面と第4地点の第1～3面との対応が可能となる。
- ②遺跡の立地する標高を発掘結果から整理すると、現地表面がT.P.4.4m、第1面がT.P.4.15m、第2面がT.P.3.7m、第3面がT.P.3.45mを測り、最終確認面は第4面の遺構掘削中間段階放棄面でT.P.2.3mを計測する。発掘調査はこのレベルで進行を止めている。
- ③本地点の立地する地形は、翠ヶ丘丘陵の最先端部に相当するが、第1地点東半域に存在したような大阪層群そのものは検出されておらず、宮川左岸の沖積扇状地面と丘陵地形が互いに接近する場所と考えられる。したがって、本地点は旧宮川の分流路の堆積域にあったと考えられる。
- ④当時の海浜部に近い場所に立地するが、汀線までには300m程の距離がなおり、いわゆる浜堤上に存在するわけでもない。この点、近傍に所在する北青木遺跡（神戸市東灘区）や深江北町遺跡（神戸市東灘区）などの立地条件ともかなり異なりをみせている。
- ⑤第1～3面は、すべて水田耕作関係の犁溝が検出されており、その方向性の推移が認められた。第1面は略東西方向であるが、第2面からは現行の土地割とはやや向きを異にし、南北方向の犁溝も加わっている。第3面ではそれがさらに極端化し、斜め方向をとり、東西方向のものは北西隅に収束する。また、流路埋積土の上面では耕作痕が検出できなかった。これらは、近世以前の土地区画が現在とは異なっていたことを予想させる。第4面で確認された段差地形の一部はその微証となろう。
- ⑥第3面でその兆候が確認できた蛇行する自然河道は、第4面において縄文土器群を伴うことが判明した。縄文土器群は1～8の8群から成り、その上部包含層に含まれる弥生時代前期～中期初頭の土器群とは弁別可能であった。これらの土器群は一見流下してきたもののようにみえるが、土器の接合関係などから、近在の地より投棄あるいは移動してきたものとみられる。居住域は近いと判断する。
- ⑦縄文土器群の時間的主体は、突帯文土器段階の前半期に限定でき、船橋式・長原式は含まれず、滋賀里IV式が中心である。器種構成は深鉢を中心に少量の浅鉢が加わるが、本地点における浅鉢の占有率は35%で、縄文晚期終末段階よりはかなりウェイトが高く、古い要素をみせている。
- ⑧縄文土器群の主要属性は、深鉢形土器では口縁部の1条突帯と口縁先端の有刻みであり、黄灰色系を基調とする色調と砂粒を比較的含む胎土にも斉一性があって、中河内地域からの搬入品も全く認められなかった。器形の判別し得るものが少ないが、深鉢は丸底を呈するものが多いと思われる。
- 以上の属性から、これらの土器群の中心時期は滋賀里IV式期にあるとみられるが、浅鉢のうち、口縁部にくの字の屈曲をみせるものの中には上方への口縁部ののびが長くなるものや、ボール状の形態をなすものなど新しい要素を志向する資料が散見され、型式学的にみて一部は口酒井式に併行する可能性が高い。一部に二条突帯の存在を想起させる深鉢胴部片が存在することもそれを裏づけている。深鉢の口縁端部が面をもつもの以外に尖りぎみのものへと変化をみせ、粗雑化した端部刻目が目立つてくる点も、これらの資料が滋賀里IV式単純でないことを物語っている。
- ⑨限定された時期の突帯文土器群が得られた調査成果は、出土状態に関する情報も一定程度確保されている関係から、当地域固有の縄文晚期突帯文土器の編年細分作業を進める上で貴重である。（森岡）



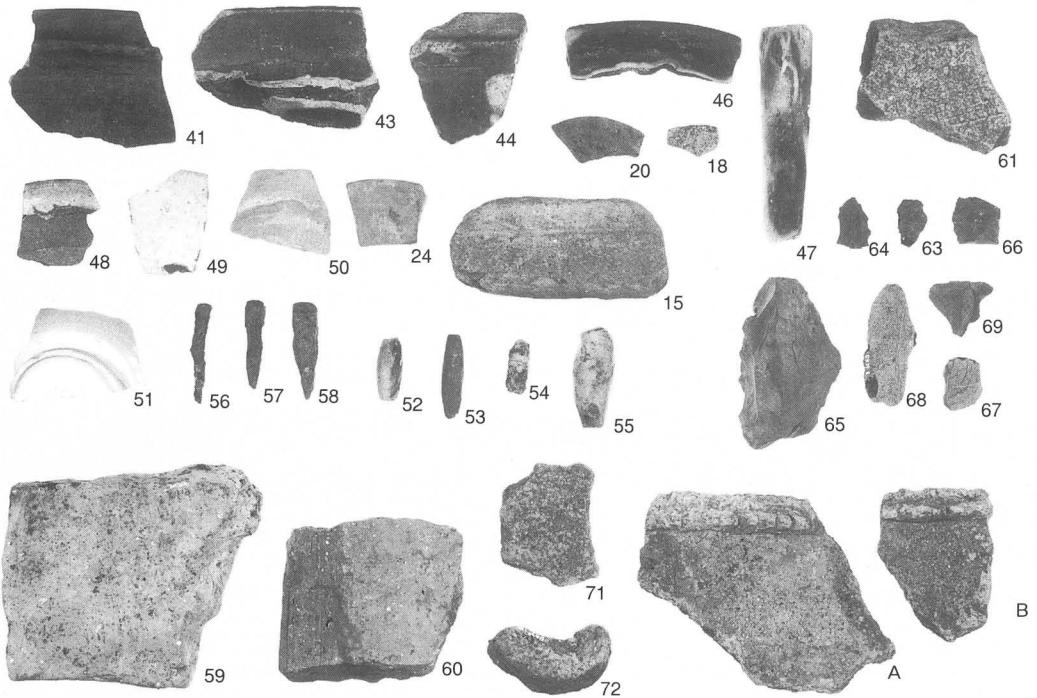
第80図 主要出土遺物(1)



第81図 主要出土遺物(2)



第82図 主要出土遺物(3)



第83図 主要出土遺物(4)

第4表 繩文土器観察表 (1)

(単位: cm)

報告書番号	器種	実測図番号	出土地区	色調 (内面・外面)	胎 土	焼成	文様・製作技術	備考
1	縄文土器深鉢	156	2 E 区 9 層 土器群 5	外一淡黄茶～淡褐色 内一淡灰茶色	石英・長石を全体に含む	普通	器表磨滅 口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部～体部 上半 大型破片
2	縄文土器深鉢	32	8 層 土器 4	外・断面一淡黄灰色 内一淡灰茶色 (口縁の一部 黒斑)	径 1 mm 以下の長石・石 英・シャモット・チャートを含む	やや不良	口唇部刻目なし 口縁部突帯有刻目 粘土帶接合痕跡	口縁部 全体に磨滅 大型破片
3	縄文土器深鉢	3	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡橙黄色 内一淡灰褐色～淡黄灰色	径 2 mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部刻目不明 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
4	縄文土器深鉢	164	2 E 区セクション 8 b 層 土器群 7	外一淡灰黄色 内一黒褐色	径 1.5mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
5	縄文土器深鉢	153	1 E 区流路肩内 土器群 3	外一淡茶橙色 内一茶褐色	石英・長石を全体に含む	普通	口唇部刻目不明 口縁部突帯部分刻目	口縁部 小破片
6	縄文土器深鉢	54	2 E 区 8 層	外一淡橙褐色 内一淡灰黑褐色	やや粗 (径 2 mm 以下の 石英・長石を含む) 内面に顕著	普通	口唇部刻目なし 口縁部突帯有刻目 粘土帶・体部削り	口縁部～体部 上半 大型破片
7	縄文土器深鉢	162	2 E 区セクション 8 b 層 土器群 7	外一淡黄橙色～茶褐色 内一灰褐色	粗雜 (径 1.5mm 以下の石 英・長石を多量に含む)	良好	口唇部有刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
8	縄文土器深鉢	53	2 E 区 8 層 土器群 1	外一淡黄褐色 内一淡黄色	やや粗 (径 2 mm 以下の 石英・長石を含む)	普通	口唇部有刻目 口縁部突帯有刻目 体部 ケズリ	口縁部 大型破片
9	縄文土器深鉢	25	1 E 区 9 層 土器群 4	外一淡黄橙色～淡灰色 内一淡灰色	径 1.5mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部有刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 細破片
10	縄文土器深鉢	11	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡茶黄褐色 内一灰黑色 断面一黑褐色	径 2 mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部有刻目 口縁部突帯有刻目 突帯上付き	口縁部 微細片
11	縄文土器深鉢	2	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡灰黄色～灰褐色 内一淡黄色～淡灰色	径 2 mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部外端刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 細破片
12	縄文土器深鉢	8	1 E 区 8 層 土器群 4	外一灰色～淡灰色 内一灰色～淡灰色	径 1 mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部外端刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片
13	縄文土器深鉢	56	2 E 区 9 層 土器群 6	外一淡茶黄褐色 内一暗橙褐色	密 (径 2 mm 以下の石英・ 長石を若干含む)	普通	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 大型破片
14	縄文土器深鉢	5	1 E 区 8 層 土器群 4	外・突帯部分一灰色 外・口縁～胴部一淡灰黄色 内一淡灰色	径 2 mm 以下の石英・長 石を比較的含む	良好	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目 接合残痕	一部磨滅 口縁部 細破片
15	縄文土器深鉢	1	1 E 区 8 層 土器群 4	外一茶灰色～黄茶色 内一黄茶色 断面一茶褐色	径 3 mm 以下の石英・長 石・金雲母を含み、粗雜 である	やや軟質	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目 刻目ピッチ短い	口縁部 小破片
16	縄文土器深鉢	31	1 E 区 8 層 土器群 4	外・断面一暗茶褐色 内一暗橙褐色	径 1 mm 以下の長石・石英・ チャート・雲母を含む	軟質	粘土帶内傾接合 口唇部刻目不詳	口縁部 小破片
17	縄文土器深鉢	62	1 E 区 7 層	外一淡黄灰色 内一淡灰赤色	径 0.5 ～ 3 mm の長石・ 石英を多く含む		口唇部刻目不詳 突帯貼付位置高い	口縁部 細破片
18	縄文土器深鉢	37	1 D 区 7 層	外一暗黄褐色 内・断面一暗黄灰色	径 0.5 ～ 3 mm の長石・ 石英・風化雲母を多く含 む	やや軟質	口唇部風化 口唇部有刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
19	縄文土器深鉢	135	1 E 区 8 層	外一淡黄茶色 内一淡灰褐色	白色粗砂 (径 2 ～ 5 mm) を含む	普通	口唇部有刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
20	縄文土器深鉢	43	1 D 区 8 層	外一淡黄灰色 内一暗灰黄色	密 (径 2 mm 以下の石英・ 長石を若干含む)	やや不良	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
21	縄文土器深鉢	50	2 E 区トレーナ 8 ～ 9 層	外一淡灰橙色 内一黒灰色	密 (径 1 mm 以下の石英・ 長石を少量含む)	普通	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
22	縄文土器深鉢	152	1 E 区流路肩内 土器群 3	外一灰茶色 内一淡黄茶色	径 1 ～ 2 mm の石英・長 石を含む	普通	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
23	縄文土器深鉢	140	1 E 区 9 層直上	外一淡灰色 内一淡灰オリーブ色	石英・長石の鉱物粒を散 見する	良好	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 細破片
24	縄文土器深鉢	45	2 E 区トレーナ 8 ～ 9 層	外一淡黄灰白色 内一淡灰黄色	密 (径 1 mm 以下の石英・ 長石を含む)	普通	口唇部平滑 口縁部突帯有刻目	口縁部 細破片
25	縄文土器深鉢	143	1 E 区 9 層	外一灰橙色 内一灰黄色	白色細砂	やや軟質	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 細破片
26	縄文土器深鉢	34	1 E 区側溝 8 層 土器群 4	外・内一淡黄灰色 断面一黄灰色	径 2 mm 程度の長石・石 英・チャートを多く含む	軟質	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
27	縄文土器深鉢	23	1 E 区 8 層 土器群 4	外一暗橙色～淡灰黄色 内一暗黄褐色	径 1.5mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部不詳 (欠落) 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
28	縄文土器深鉢	63	1 E 区 7 層	外一暗黄灰色 内・断面一淡黄白色	径 0.5 ～ 4 mm の長石・ 石英を多く含む。不良	やや軟質	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
29	縄文土器深鉢	65	1 E 区 8 層 土器 4	外・断面一淡灰茶色 内一淡灰茶色～黒灰色	径 2 mm 以下の石英・長 石を含む	やや軟質	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片
30	縄文土器深鉢	38	1 D 区 7 層	外一淡黄灰色 内一淡灰茶色 断面一淡灰色	径 2 mm 程度の石英・長 石・雲母を含む	やや軟質	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片
31	縄文土器深鉢	46	1 D 区 8 層	外一暗灰茶色 内一暗灰茶色	密 (径 1 mm 以下の石英・ 長石を含む)	普通	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片
32	縄文土器深鉢	24	1 E 区 8 層 土器群 4	外一灰黑色 内一灰黑色 断面一暗灰黄色	径 1.5mm 以下の石英・長 石を含む	良好	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片
33	縄文土器深鉢	58	2 E 区 9 層 土器群 6	外一淡黄茶色 内一淡灰黄色	密 (径 1 mm 以下の茶褐 色シャモット・石英・長 石を含む)	普通	口唇部刻目不詳 端部欠損 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片
34	縄文土器深鉢	138	1 E 区 8 層	外一淡黄橙色 内一淡橙色	白色粗砂 (径 2 ～ 3 mm)	普通	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 微細片

第5表 縄文土器観察表 (2)

(単位: cm)

報告書番号	器種	実測図番号	出土地区	色調(内面・外面)	胎土	焼成	文様・製作技術	備考
35	縄文土器 深鉢	29	1E区8層 土器群4	外一淡黄橙色 内一灰黄黑色	径1.5mm以下の石英・長石・金雲母を含む	良好	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
36	縄文土器 深鉢	150	1E区流路肩内 土器群3	外一淡茶色 内一暗灰褐色	径1~2mmの石英・長石を含む	普通	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
37	縄文土器 深鉢	13	2E区9層	外一淡橙~淡灰黄色 内一淡黑灰色	径3mm以下の石英・長石・小礫を含む	良好	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 小破片
38	縄文土器 深鉢	7	1E区8層 土器群4	外一淡黄~淡灰色 内一淡黄灰色	径1mm以下の石英・長石を含む	良好	口唇部刻目 口縁部突帯有刻目	口縁部 細破片
39	縄文土器 深鉢	64	1E区7層	外一黄茶色 内一暗茶褐色 断面一黑色	径2mm以下の長石・石英を含む	やや軟質	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目 全体に磨滅	口縁部 微細片
40	縄文土器 深鉢	12	1E区8層 土器群4	外一灰褐色 内一淡黄橙色	径2mm以下の石英・長石を含む	良好	突帯上の刻目はD字 状	胴部突帯か? 微細片
41	縄文土器 深鉢	59	2E区9層 土器群6	外一淡黄茶色 内一淡黄灰色	密(径1mm以下の石英・長石を含む)	普通	口唇部刻目不詳 突帯刻目不詳	口縁部 小破片
42	縄文土器 深鉢	157	2E区9層 土器群5	外一淡黄茶色 内一淡灰~黒灰色	径2~5mmの白色粗砂 を含む	普通	口唇部刻目不詳 突帯上刻目も不詳	口縁部 細破片
43	縄文土器 深鉢	10	1E区8層 土器群4	外一淡黄色(ローリングが 著しい) 内一淡灰~灰色	径2mm以下の石英・長石を含む	良好	口唇部刻目不詳 突帯上面欠損のため, 刻目不詳	口縁部磨滅著 しい 微細片
44	縄文土器 深鉢	142	1E区9層	外一淡黄茶色 内一暗灰色	白色粗砂 まんべんなく 含む	普通	口唇部刻目不詳 突帯上の刻目不詳	口縁部 微細片
45	縄文土器 深鉢	151	1E区流路肩内 土器群3	外一淡黄茶色 内一淡茶色	径1~2mmの石英・長石粒を含む	普通	口唇部の状態不詳 口縁部突帯欠損か	口縁部 微細片
46	縄文土器 深鉢	22	1E区8層 土器群4	外一淡橙色 内一灰黄色	径1.5mm以下の石英・長石を含む	良好	胴部突帯はなし	頸胴部 小破片
47	縄文土器 深鉢	137	1E区8層	外一淡茶褐色 内一茶褐色	白色粗砂(径2~3mm) を含む	普通	口唇部刻目不詳 口縁部突帯有刻目?	口縁部 微細片
48	縄文土器 深鉢	161	2E区セクション8b層 土器群7	外一暗灰色 内一暗灰色	砂粒を散見する	普通	口唇部刻目不詳 突帯有刻目?	口縁部 微細片
49	縄文土器 深鉢	35	1E区側溝8層 土器群4	外一淡黄橙色 内一断面一淡黄灰色	径1mm以下の長石・石英・チャートと径3mmの岩片を含む	軟質	口唇部刻目不詳 突帯は有刻目か?	口縁部 若干ローリング 微細片
50	縄文土器 深鉢	159	1E区流路肩内	外一褐色 内一淡灰褐色	白色粗砂を含む	普通	口唇部有刻目? 突帯の形成不詳	口縁部 細破片
51	縄文土器 深鉢	139	1D区9層直上	外一淡茶色 内一淡茶色	シャモット混入	普通	口唇部刻目不詳 突帯形成有?	口縁部 微細片
52	縄文土器 深鉢	36	1E区側溝8層 土器群4	灰黃白色	径2mm程度の長石・石英・チャートを含む	軟質	粘土帶接合痕跡 突帯不詳	口縁部 細破片
53	縄文土器 浅鉢	18	2E区9層	外一黄茶褐色 内一淡灰褐色	径2mm以下の石英・長石を含む	良好	口縁端部肥厚	口縁部 小破片
54	縄文土器 浅鉢	15	2E区9層	外一灰褐色~淡灰褐色 内一淡灰褐色	径1.5mm以下の石英・長石を含む	良好	口縁端部肥厚 端部内側欠損	口縁部 小破片
55	縄文土器 浅鉢	16	2E区9層	外一淡黄灰色 内一淡黄灰褐色	径1.5mm以下の石英・長石を含む	良好	口縁端部肥厚 端部内側欠損	口縁部 小破片
56	縄文土器 深鉢	51	2E区トレンチ8・9層	外一淡茶灰色 内一暗黄灰色	密(径1mm以下の石英・長石を含む)	普通	口縁端部微肥厚	口縁部 細破片
57	縄文土器 浅鉢	160	2E区セクション8b層 土器群7	外一淡黄茶色 内一淡黄茶色	長石・石英を含み込む	普通	器壁シャープなつくり	口縁部 微細片
58	縄文土器 浅鉢	39	2D区8層	外一明橙色 内一淡灰褐色 断面一黑色	径1mm程度の長石・石英を含む	やや軟質	口縁先端はシャープ なつくり	口縁部 微細片
59	縄文土器 浅鉢	28	1E区(側溝)9層	外一灰茶色 内一淡橙茶色	径1.5mm以下の石英・長石を含む	良好	口縁端平滑	口縁部 微細片
60	縄文土器 浅鉢	14	2E区9層	外一暗黒黄色 内一黄灰茶色	径1mm以下の石英・長石を含む	良好	口縁部外面に沈線状 の凹み	口縁部 微細片
61	縄文土器 浅鉢	27	1E区8層 土器群4	外一淡橙褐色 内一淡灰褐色	径1.5mm以下の石英・長石を含む	良好	「く」の字形に屈折する 器形か?	口縁部 細破片
62	縄文土器 浅鉢	44	2E区セクション9層	外一暗茶橙色 内一暗灰茶色	密(径1mm以下の石英・長石を含む)	普通	口縁端部僅かに屈折	口縁部 細破片
63	縄文土器 浅鉢	144	1E区9層	外一淡黄灰色 内一淡灰色	長石・石英を混える	普通	器壁薄い	口縁部 細破片
64	縄文土器 浅鉢	52	2E区トレンチ8・9層	外一暗灰褐色 内一暗灰黄色	密(径1mm以下の石英・長石を含む)	普通	器壁薄づくり	口縁部 微細片
65	縄文土器 浅鉢	61	1E区7層	外一淡灰赤色 内一淡橙赤色	径2mm程度の長石・石英を含む	やや軟質	粗製。粘土帶接合痕。 内傾接合	口縁部 小破片
66	縄文土器 浅鉢	149	1E区流路肩内 土器群3	外一淡橙茶色 内一淡茶色	白色粗砂混じる	普通	成形粗倣 器壁厚ぼったい	口縁部 小破片
67	縄文土器 浅鉢	66	1E区7層	外・断面一黄赤白色 内一淡橙赤色	径2mm以下の長石・石英を含む	やや軟質	粘土帶接合痕 器壁厚ぼったい	口縁部 小破片
68	縄文土器 浅鉢	145	1E区9層	外一淡黄茶色 内一淡茶色	白色粗砂	普通	粗製なつくり 粘土帶接合痕	口縁部 細破片
69	縄文土器 浅鉢	148	1E区流路肩内 土器群3	外一淡灰橙色 内一淡茶色	長石・石英粒を含む	普通	厚ぼったい粗倣なつくり	口縁部 微細片
70	縄文土器 深鉢	141	1E区9層直上	外一淡黄茶色 内一淡灰色	白色粗砂多量に含む 粗雑な胎土	普通	突帯有 刻目の有無不詳	口縁部 細破片
71	縄文土器 浅鉢	155	2E区9層 土器群5	外一淡灰茶色 内一淡灰色	赤色砂粒含む。シャモットか	普通	器壁調整など不明	口縁部 微細片

第6表 繩文土器観察表(3)

(単位:cm)

報告書番号	器種	実測図番号	出土地区	色調(内面・外面)	胎土	焼成	文様・製作技術	備考
72	繩文土器 浅鉢	60	1 E 区 7 層	外一黄白色 内一淡赤褐色	径 1mm 程度の長石・石英を含む	やや軟質	粘土帯接合痕跡	口縁部 細破片
73	繩文土器 浅鉢	163	2 E 区セクション 8 b 層 土器群 7	外一淡灰茶～淡灰橙色 内一灰茶色	径 1.5mm 以下の石英・長石を含む	良好	「く」の字形に屈折する器形か	口縁部 細破片
74	繩文土器 浅鉢	136	1 E 区 8 層	外一淡灰褐色 内一淡黄茶色	白色細砂(長石の鉱物粒が目立つ)	普通	器壁薄く、粘土帯接合残痕明瞭	口縁部 細破片
75	繩文土器 深鉢	154	2 E 区 9 層 土器群 5	外一淡黄灰色 内一淡黄～暗灰色	白色粗砂(長石粒を主に散見)	普通	突帯貼り付け痕看取。 刻目不明瞭	胴部か? 細破片
76	繩文土器 深鉢	9	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡黄灰色(肌色) 内一淡黄灰色(肌色)	径 2 mm 以下の石英・長石を含む	良好	胴部突帯上の刻目不明瞭	頭・胴部 細破片
77	繩文土器 浅鉢	41	2 E 区 8 層 土器群 1	外一暗黄灰色 内一淡茶褐色	密(径 1 mm 以下の石英・長石を含む)	不良	内面に微指圧調整	口縁部 小破片
78	繩文土器 深鉢	4	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡黄灰色 内一灰色	径 2 mm 以下の石英・長石を含む	良好	胴部突帯有刻目	胴部 小破片
79	繩文土器 浅鉢	55	2 E 区 9 層 土器群 6	外一淡橙色 内一暗灰褐色	やや粗(径 2 mm 以下の石英・長石を含む)	普通	外面に粘土帯接合痕跡残存	口縁部 大型破片
80	繩文土器 深鉢	6	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡黄～淡灰黄色 内一淡橙黄色	径 1 mm 以下の石英・長石を含む	良好	胴部突帯有刻目	胴部 細破片
81	繩文土器 深鉢	33	1 E 区側溝 8 層 土器群 4	外一淡黄灰色 内一淡黄灰色	径 0.5～2 mm の長石・石英・チャートを多く含む	軟質	胴部突帯付近で破断。 突帯上有刻目	胴部下半 小破片
82	繩文土器 浅鉢	158	2 E 区 9 層	外一淡灰茶色 内一暗灰色	白色粗砂(長石を中心とする鉱物粒)	良好	器壁薄いつくり 外面に屈接点残す	頭胴部 小破片
83	繩文土器 浅鉢	57	2 E 区 9 層 土器群 6	外一淡橙褐色 内一淡茶褐色	密(径 1 mm 以下の石英・長石を含む)	普通	外面に粘土帯接合痕跡	頭胴部 細破片
84	繩文土器 浅鉢	42	2 E 区 8 層 土器群 1	外一淡黄茶色 内一暗黄灰色	密(径 1 mm 以下の石英・長石を含む)	不良	外面に接合痕跡	頭胴部 細破片
85	繩文土器 深鉢	26	1 E 区 8 層 土器群 4	外一淡橙褐色 内一淡灰黄色	径 1.5mm 以下の石英・長石を含む	良好	胴部突帯有刻目	胴部下半 小破片
86	繩文土器 浅鉢	30	2 E 区セクション 9 層 土器群 8	外一灰茶褐色 内一茶橙色	径 2 mm 以下の石英・長石を荒く含む	良好	胴部外面ヨコ方向ケズリ	底部～頭胴部 大型破片
87	繩文土器 浅鉢	40	1 E 区流路 (酸化部分)	外一淡褐灰色 内一褐色 断面一黄灰色	径 0.5～4 mm の長石・石英・チャートを含む	やや軟質	平底。円板は比較的 薄くつくられる	底部 小破片
88	繩文土器 浅鉢	49	2 E 区トレングチ 8・9 層	外一暗橙色 内一淡橙赤色	密(径 1 mm 以下の石英・長石を含む)	普通	屈曲はみられないが、 器壁の厚さが変化	底部付近 細破片
89	繩文土器 浅鉢	17	2 E 区 9 層	外一淡灰黄～淡灰褐色 内一淡灰褐色	径 1.5mm 以下の石英・長石を含む	良好	屈曲部器壁を増し、 稜線を形成	頭～胴部
90	繩文土器 浅鉢	146	1 E 区流路肩内 土器群	外一茶褐～淡灰褐色 内一淡黄茶～淡茶色	石英顯著。長石粒も含む	良好	粘土帯の接合痕跡明瞭。 粗製なつくり	口縁～体部 大型破片
91	繩文土器 浅鉢	147	1 E 区流路肩内 土器群 3	外一淡灰橙色 内一淡灰黄茶色	白色細砂(長石粒の混和)	普通	粘土帯の接合痕がみ られる。精製	口縁～体部 大型破片

第7表 その他の遺物観察表(1)

(単位:cm)

報告書番号	実測図番号	器種	部位	出土地区	出土層位	残存度	復元口径	残存高	色調	胎土	焼成	時期・型式・その他
1	47	甕	口縁部	1 D 区	8 層	1/20	不詳	1.5	淡黄橙色	密	不良	弥生(II 様式)
2	119	甕	底部	2 E 区	SP 3010	1/4	底	3.8	2.7	淡黄灰色	やや粗	不良
3	48	甕	底部	2 E 区	8 層	底部完形	底	6.0	4.1	淡橙褐色	粗	普通
4	77	高杯	杯部	1 D 区	4 層	1/6	11.1	2.15	淡灰色	密	良好	須恵器(古墳時代)
5	71	杯身	底部	1 E 区	3 層	1/5	底	8.0	2.3	淡灰色	密	良好
6	67	杯身	底部	1 E 区	5 層	1/5	底	11.0	3.4	淡灰色	密	良好
7	93	陶器壺	口縁部	2 E 区	第 1 遺構面 精査	1/12	11.9 底 7.2	2.9	淡白灰色 (施釉)	精良	良好	京焼風
8	81	杯身	底部	2 E 区側溝	3・4 層	1/6	7.2	1.35	灰色	密	良好	須恵器(古代)
9	131	壺	底部	1 D 区	4・5 層	1/6	底	4.4	1.7	淡灰色	密	良好
10	128	杯蓋	口縁部	1 D 区	SD 2008	1/20	14.4	1.5	淡灰色	密	良好	須恵器
11	83	器台(裾)	底部	2 E 区側溝	3・4 層	1/16	26.6	1.3	淡灰色	密	良好	須恵器
12	126	円筒埴輪	基部	1 D 区	5 層	1/20	16.4	11.5	淡橙色	シャモット 含有	良好	古墳時代中期
13	75	形象埴輪	破片	1 E 区	3 層	1/40	8.65	5.0	淡橙色	やや密	良好	古墳時代中期
14	115	円筒埴輪	胴部	1 E 区	4・5 層	1/20	不詳	3.5	淡黄白色	密	普通	古墳時代中期
15	114	形象埴輪	傘部	1 E 区	4・5 層	1/40	不詳	4.3	淡黄橙色	密	普通	古墳時代中期
16	78	台付壺	底部	1 D 区	4 層	底	1/6	8.9	1.6	淡橙色	密	良好
17	113	塊	底部	1 E 区	4・5 層	1/7	5.7	1.8	淡橙黄色	密	普通	黒色土器 A 類(古代)
18	85	小皿	口縁部	2 E 区側溝	3・4 層	1/10	7.9	0.8	淡灰橙色	ほぼ精良	良好	土師器(古代)
19	70	小皿	口縁部	1 E 区	4 層	1/5	8.0	1.2	乳茶色	密	良好	B 2 タイプ(14 C)
20	129	小皿	口縁部	2 E 区	SD 2020	1/6	8.0	0.7	淡灰色	密	良好	土師器(中世)
21	122	小皿	口縁部	2 D 区	3 層	1/6	8.0	1.3	淡灰黄色	密	良好	土師器(中世)

第8表 その他の遺物観察表 (2)

(単位: cm)

報告書番号	実測図番号	器種	部位	出土地区	出土層位	残存度	復元口径	残存高	色調	胎土	焼成	時期・型式・その他
22	132	小皿	口縁部	1 D 区	4・5層	1/5	8.6	1.4	淡橙～淡乳白色	密	良好	土師器(中世)
23	86	皿	口縁部	1 D 区	2層	1/10	11.6	2.05	灰白色(施釉)	ほぼ精良	良好	陶器唐津焼(近世)
24	134	小皿	口縁部	1 D 区	4・5層	1/30	10.6	1.3	淡橙色	密	良好	土師器
25	123	小皿	口縁部	2 E 区	4層	1/10	10.6	1.7	淡灰茶色	密	良好	土師器
26	110	青磁端反形中碗	口縁部	2 D 区	第1遺構面精査	1/30	12.0	2.3	灰白色	精良	堅緻	中国製輸入陶磁器
27	109	青磁縁丸形	口縁部	1 E 区側溝	3・4層	1/10	13.0	0.9	淡灰色	精良	堅緻	中国製輸入陶器
28	130	蓮弁文青磁碗	体部	2 E 区	S D 2 0 2 8	1/20	14.0	2.8	淡灰色	精良	堅緻	中国龍泉窯系
29	68	中国製蓮弁文	口縁部	2 E 区	S D 2 0 3 3		14.0	4	白色	精良	堅緻	中国龍泉窯系
30	69	平形中碗	口縁部	1 E 区	4層		13.0	5.1	灰茶白色	精良	堅緻	黄瀬戸か
31	96	擂鉢	口縁部	1 E 区	4層	1/16	26.0	3.85	灰色	密	良好	備前擂鉢(14C初)
32	95	捏鉢	口縁部	1 E 区	4層	1/16	30.0	4.1	淡黄茶色	密	良好	瓦質土器(和泉産か?)(14C初)
33	94	捏鉢	口縁部	1 E 区	4層	1/12	28.5	3.9	淡灰色	密	良好	中世須恵器(14C初)
34	72	捏鉢	口縁部	1 E 区	3層	1/10	28.8	4.0	淡灰色	密	良好	中世須恵器(14C中頃)
35	117	捏鉢	口縁部	2 E 区	5層	1/20	33.2	4.0	淡灰色	密	良好	中世須恵器
36	92	捏鉢	口縁部	1 E 区	4層	1/12	28.6	3.3	淡灰色	密	良好	中世須恵器(13C末)
37	76	捏鉢	底部	1 D 区	4層	1/5 底	11.8	3.3	淡灰～淡赤灰色	密	良好	中世須恵器
38	97	捏鉢	口縁部	1 E 区	4層	1/20	33.4	2.6	淡灰色	密	良好	中世須恵器(14C中頃)
39	111	擂鉢	体部	1 E 区側溝	3・4層	1/20	28.0	5.4	セビア	精良	良好	備前焼
40	90	擂鉢	口縁部・底部	1 D 区	2層	1/24	35.0	16.5	淡灰紫色	精良	良好	備前焼
41	79	羽釜	口縁部	1 D 区	4層	1/12	28.4	6	灰黒色	精良	良好	瓦質土器(中世)
42	91	羽釜	胴部	1 E 区	6層	1/12	27.2	3.2	淡灰色	精良	良好	瓦質土器(中世)
43	118	羽釜	口縁部	1 E 区側溝	5層	1/16	29.0	5	暗灰黄色	密	普通	瓦質土器(中世)
44	80	羽釜	口縁部	1 D 区	4層	1/16	20.0	5.2	暗灰～灰色	密	良好	瓦質土器(中世)(13～14C)
45	124	土堀	口縁部	2 E 区	4層	1/10	22.0	1.4	淡灰色	密	良好	瓦質土器
46	89	土堀	口縁部	1 E 区	4層	1/10	26.2	1.75	灰黒色	密	良好	瓦質土器(山城型に近似)
47	98	土釜、土堀の足(三足タイプ)	足	1 E 区	4層	1 本	9.2	1.65	淡灰～灰～暗灰色	密	良好	瓦質土器(13～14C)
48	108	折縁形小皿	口縁部	2 E 区側溝	3・4層	1/12	12.0	2.9	褐色	精良	堅緻	唐津(江戸前期)
49	87	陶器碗	口縁部	1 D 区	2層	1/12	12.6	3.5	白灰色	堅緻	良好	唐津焼(17C)
50	88	陶器皿	口縁部	1 D 区	2層	1/12	14.9	2.3	淡灰白色	精良	良好	唐津焼(17C)
51	74	陶器碗	底部	1 D 区	S D 1 0 0 5	1/3	4.8	2.0	淡白黄色	堅緻	良好	京焼(近世)
52	125	土錐	完存品	2 E 区	4層	ほぼ完形	2.8	1.0	淡茶～茶色	ほぼ精良	良好	管状
53	102	土錐	ほぼ完形	2 E 区側溝	3・4層	ほぼ完形	3.55	0.9	暗橙褐色	ほぼ精良	良好	管状
54	84	土錐	半完形	2 E 区側溝	3・4層	1/2	2.4	0.9	淡橙色	やや精良	良好	管状
55	107	土錐	半完形	1 E 区	4層	ほぼ完形	4.4	1.7	灰茶白～淡灰色	密	良好	管状
56	121	鉄釘	身部	1 E 区	3層	不詳	長	4.4	0.5	茶褐色	銹化	時期不明
57	120	鉄釘	身部	1 E 区	3層	不詳	長	3.9	0.6	茶褐色	銹化	時期不明
58	127	鉄釘	身部	1 E 区	4層	不詳	長	4.2	1.0	茶褐色	銹化	頭部作出
59	112	平瓦		1 E 区	4・5層	1/20	9.4	10.3	淡黄灰色	やや密	普通	中世
60	116	軒平瓦(瓦当なし)	平瓦部	2 E 区	5層	1/20	7.3	7.5	淡灰色	やや密	普通	古代
61	73	甕	肩部か?	1 E 区	3層	極小	7.1	5.8	淡黄茶色	細砂	良好	常滑か渥美?
62	99	サヌカイト剥片	チップ	1 E 区	5層上面	細片	2.0	1.0	淡灰色			繩文～弥生時代
63	100	サヌカイト剥片	チップ	2 E 区	5層	細片	2.1	0.7	灰色			繩文～弥生時代
64	105	サヌカイト剥片	チップ	2 D 区	8層	細片	長	2.3	1.4	灰～灰黒色		繩文～弥生時代
65	106	石核(コア)	残核	1 E 区	8層			7.0	4.3	淡灰色		繩文～弥生時代
66	104	サヌカイト剥片	チップ	2 E 区	4層	細片	長	2.1	2.0	淡灰～灰黒色		繩文～弥生時代
67	103	サヌカイト剥片	チップ	2 D 区	5層上面	細片	長	2.3	1.75	淡灰～淡灰黄色		繩文～弥生時代
68	82	サヌカイト剥片		2 E 区側溝	3・4層	細片	長	5.25	2.1	淡灰色		繩文～弥生時代
69	101	石器(石錐か?)	頭部	1 D 区	S D 3 0 0 1	細片	長	2.35	2.7	淡灰色		繩文～弥生時代
70	19	甕	口縁部	2 E 区	8層上面	1/10	18.6	1.75	淡黄橙色	やや粗	良好	弥生(II様式)
71	21	甕	口縁部	2 E 区	8層上面	1/10	不詳	不詳	淡橙色	粗	良好	弥生(I様式)
72	20	甕	底部	2 E 区	8層上面	1/3	6.0	2.35	淡橙色～淡灰色	やや粗	良好	弥生(II様式)

2 第4地点の調査

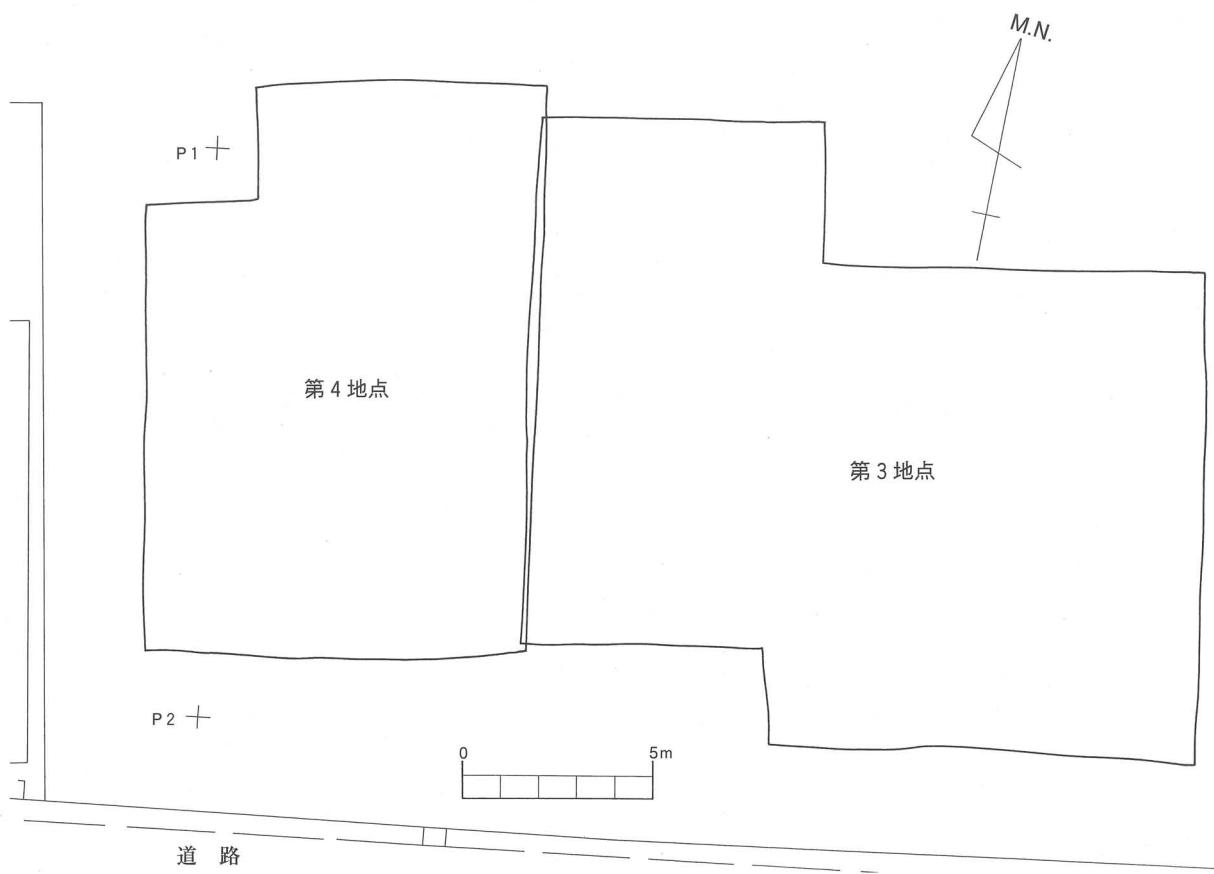
1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法

当該敷地では、鉄筋コンクリート造4階建である市営若宮町住宅（2号棟）の建設によって遺構面・遺物包含層の損壊を回避することができないため、記録保存を目的とした事前の発掘調査が必要となった。調査対象範囲は、埋蔵文化財が損壊を受ける計画建物の建築部分に限られた。しかし、事業計画の関係から建物建設工事による損壊部分全域を一度に調査することができなかつたため、建物範囲を東西に分けて2つの地点として別々に調査することとなった。平成9年度は建物範囲の東半部を第3地点として発掘調査し、残る西半部を平成10年度に本節で報告する第4地点として発掘調査することになった。なお、本調査は阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、「基本方針」に基づいて実施した。

遺物包含層数・遺構面数などの基礎データは、平成9年7月24日に実施した第3地点の確認調査結果と隣接する第1～3地点の発掘調査成果から得た。調査期間は、平成10年10月19日から11月12日までとした。

第1～3地点では縄文時代晚期、弥生時代、中世の遺構面が検出されているが、当地点においてもこれらの地点に対応する遺構面が検出された。

発掘調査の範囲は、「基本方針」にしたがい遺構面・遺物包含層が損壊を受ける範囲（140m²）に限定した（第84図）。調査深度は、建設工事の掘削深度である現地表面より2mの深さまでとした。最終的には、無遺物層に達した現地表より1.2mまでの深さとなった。基準高は、本市道路課設置のマンホール上面基準高（T.P.4.18m）より得た。



第84図 調査区配置図 1/200



第85図 調査風景（南西から）



第86図 トライやるウィークでの中学生調査参加風景

掘削の方法は、近世以降の堆積土層（第4層まで）と中世耕作土の一部（第5・6層上部）を重機により掘削した。第5・6層からは人力により一層ずつ掘削した。各土層の境界面で精査し、第1～3遺構面を検出した。第4遺構面は調査期間の都合により、調査区北東部に限って検出した。残土は場外に搬出して仮置きした。そして、発掘調査終了後には再び残土を搬入し、調査区を埋め戻した。

（竹村）

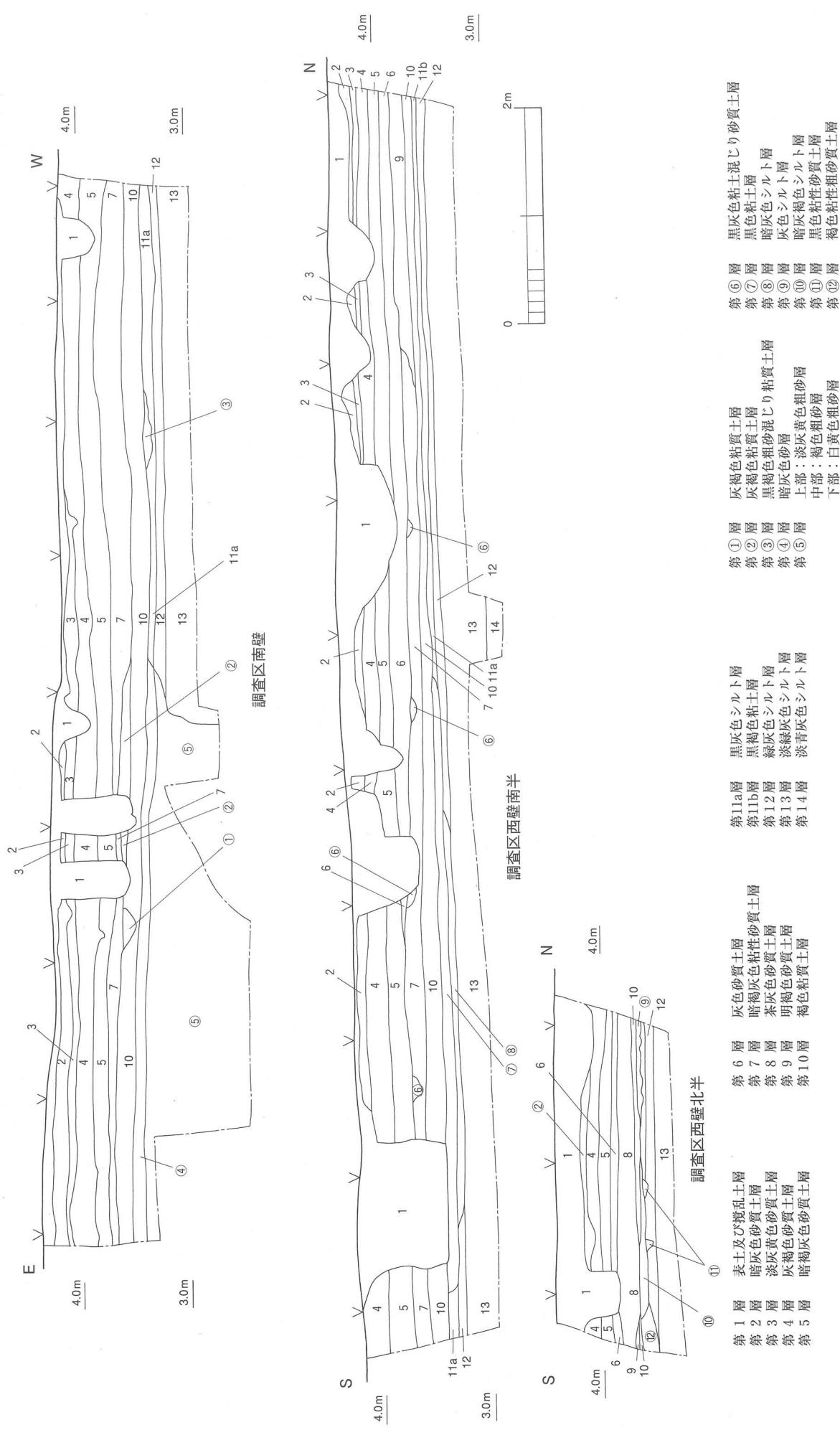
2) 層序（第87～90図）

本調査地点は若宮遺跡分布範囲の北半部に位置しており、縄文時代以降、南半部でみられるような厚い砂層の堆積は認められない。

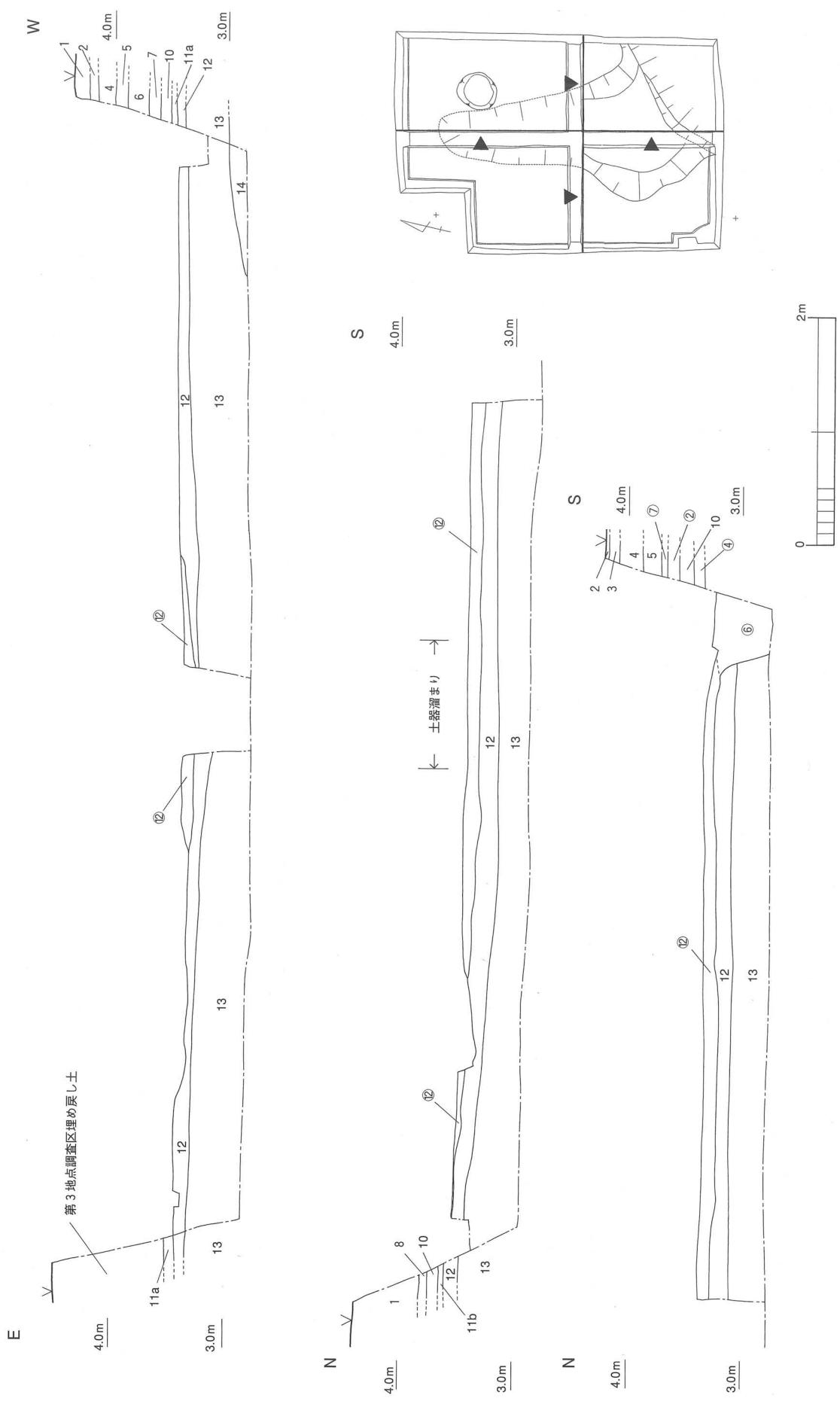
近・現代の表土・盛土・搅乱土である第1層を除く第2～4層はいずれも耕作土層と考えられるが、確認調査の結果をもとに第5・6層上部までを重機で掘削したので、包含される遺物や各層の境界面の遺構は確認できなかった。当該敷地には木造住宅が建っていたが、現地表面より10cm程度の深さには近世末～近代水田耕作土である第2層が遺存しており、大きな搅乱は受けていない状況であった。

第5層と第6層は第1遺構面を覆っている。第5層は細砂からなっており、径1cm程度の粘土ブロックを含んでいる。粘土ブロックを含んでいることから、宮川などから運ばれた洪水砂と粘質土を混ぜ合わせて耕作土をつくる方法で、洪水災害にあった耕作地を復旧していたことが推測される。保水性はなく、畠の耕作土であろう。当遺構面からは、犁痕などの耕作関連遺構が検出された。第1遺構面のベース層は北部が第8層、南部が第7層、西部が第9層からなっている。土質に違いが認められるが、第7層と第8層は同一層である可能性が高い。第7層には、径1cm程度の粘土ブロックが含まれていた。第7層には14～15世紀代を中心とする遺物が包含されていた。弥生土器も多く包含されていることから、耕作によって下層の弥生時代の遺物包含層が搅乱を受けたと推測される。第10層も中世の耕作土と考えられ、その上面では磁北から70°～90°東偏して東西方向に走る犁痕が若干検出された。

第2遺構面を覆う第11層は黒灰色のシルト～粘土層で、弥生土器を含んでいる。土壤化しており、当時の表土と考えられる。黒色で見分けやすく、本遺跡北半部の鍵層になり得る。当層を除去した面が第2遺構面である。第12層が当遺構面のベース層であり、同時に最上層に縄文時代晚期の土器（滋賀里IV式（新相））を包含する。第12層はシルトからなる。暗灰色を呈し、土壤化している。第13層はシルト～極細砂で、鉄分による褐色の縞模様がみられる。第12層と第13層の境界からは、縄文時代晚期の土器（滋賀里IV式（新相）、第109図・第114図85）が出土した。炭化物を含んでいる。第14層はシルトからなる。



第87図 土層断面図 1/50





第89図 調査区西壁土層断面（東から）



第90図 南北深掘トレンチ南半部土層断面（西から）

第14層より深部は、調査区南東部を深掘し、現地表より2.5mの深さ（T.P.2.81m）まで確認した。自然流路内に当たったようで、流路内の埋土と推測される砂層やシルト層がみられた。植物遺体を多く含む土層も確認された。深掘坑では、サヌカイト剥片が1点出土した。当深度では、大阪層群は検出されなかった。

なお、第87・88図の土層の註記は、次のとおりである。土層は基本土層と遺構埋土に分け、前者にはアラビア数字、後者には円囲いのアラビア数字で通し番号を付した。基本土層のなかで土質に若干の差違が観察されたものには、土層番号の後にアルファベットの小文字を付け細分を図った。土層註記には、土層番号の次に土層名、続けて粒度・包含物などを順に記し、最後に土層の性格を述べた。

【第4地点 土層】

第1層 表土および搅乱土層。

第2層 暗灰色砂質土層 極細砂～細砂。近世末～近代の水田耕作土。

第3層 淡灰黄色砂質土層 細砂。しまりはやや悪い。近世末～近代の水田床土。

第4層 灰褐色砂質土層 細砂。しまりはやや悪い。断面には耕作痕と考えられる薄い灰白色の縞模様が観察される。
下部には粘土ブロックを含み、ややしまっている。近世の耕作土。

第5層 暗褐灰色砂質土層 細砂。直径1cm程度の粘土ブロックを含む。中世の耕作土。第1遺構面を覆っている。

第6層 灰色砂質土層 細砂。直径1cm程度の粘土ブロックを含む。しまりはやや悪い。中世の耕作土。第1遺構面を覆っている。

第7層 暗褐灰色粘性砂質土層 細砂。直径1cm程度の粘土ブロックを含む。中世の耕作土。当層上面が第1遺構面である。

第8層 茶灰色砂質土層 細砂。中世の耕作土。当層上面が第1遺構面である。

第9層 明褐色砂質土層 細砂。鉄分を多く含む。中世の耕作土。当層上面が第1遺構面である。

第10層 褐色粘質土層 粘土・細砂。しまりは良い。上面には磁北から70°～90° 東偏する犁痕が若干検出されている。

第11a層 黒灰色シルト層 シルト。しまりは良い。弥生時代頃の表土。第2遺構面を覆っている。

第11b層 黒褐色粘土層 粘土。粗砂を含む。第11a層より黒く、粘りが強い。弥生時代頃の表土。第2遺構面を覆っている。

第12層 緑灰色シルト層 シルト。しまりは良い。最上部からは突帯文土器（滋賀里IV式（新相））が出土している。

また、第13層との境界付近から、突帯文土器（滋賀里IV式（新相））が出土している。当層の上面が第2・3遺構面である。

第13層 淡緑灰色シルト層 シルト～極細砂。第12層との境界付近から突帯文土器（滋賀里IV式（新相））が出土している。第4遺構面を覆っている。

第14層 淡青灰色シルト層 シルト。やや粘性がある。

第①層 灰褐色粘質土層 細砂・粘土。

第②層 灰褐色粘質土層 細砂・粘土。

第③層 黒褐色粗砂混じり粘質土層 粘土。直径3mmの粗砂を含む。しまりは良い。

第④層 暗灰色砂層 細砂～中砂。直径3cm程度の粘土を含む。第11層と同時に土壤化している。

第⑤層 上部：淡灰黄色粗砂層 中部：褐色粗砂層 下部：白黄色粗砂層 粗砂。ラミナが顕著にみられる。S R01の埋土。

第⑥層 黒灰色粘土混じり砂質土層 細砂。黒色粘土ブロックを多く含む。S D01～05の埋土。

第⑦層 黒色粘土層 粘土～シルト。しまりは良い。S H01の埋土。

第⑧層 暗灰色シルト層 シルト。S H01の埋土。

第⑨層 灰色シルト層 シルト。しまりは良い。炭化物を含む。S K07の埋土。

第⑩層 暗灰褐色シルト層 シルト。しまりは良い。褐色の斑点がみられる。S K08の埋土。

第⑪層 黒色粘性砂質土層 細砂。粗砂を含む。ピットの埋土。

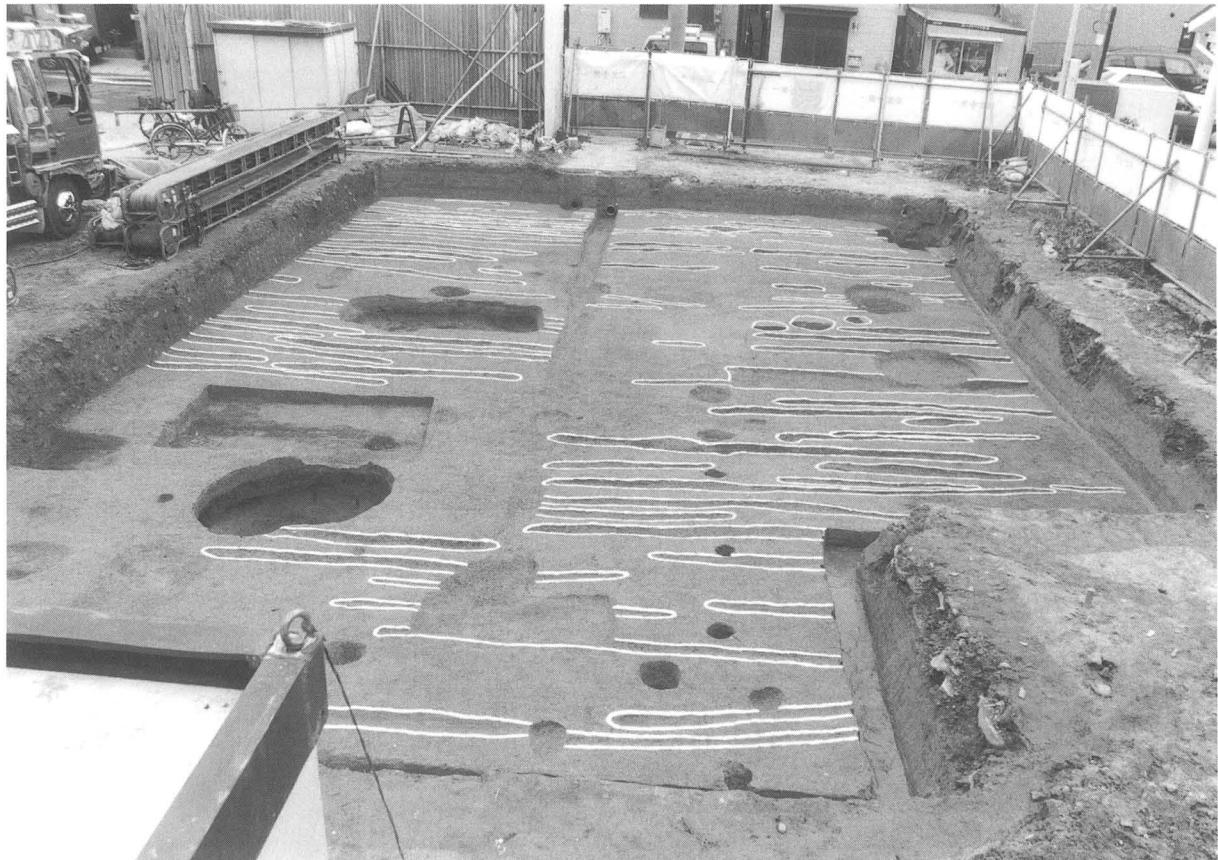
第⑫層 褐色粘性粗砂質土層 粗砂。しまりは良い。S R01から供給された砂で、第3遺構面を覆っている。（竹村）

3) 検出遺構

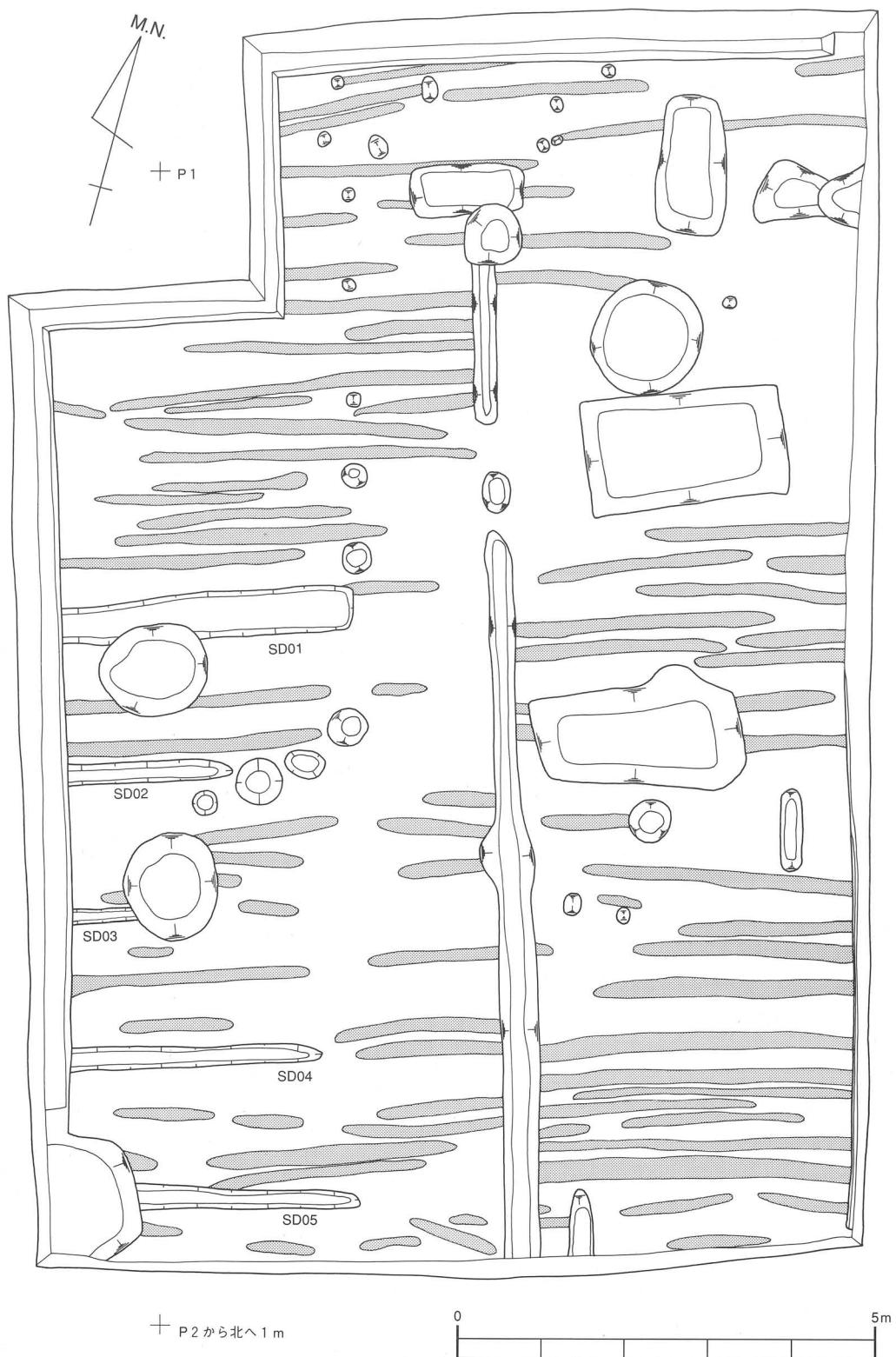
①第1遺構面

第1遺構面は第5・6層に覆われ第7～9層をベース層とする遺構面で、犁痕をはじめとする多数の耕作痕が検出された（第91～94図）。基盤層からは14世紀～15世紀代を中心とする時期の土器が出土していることから、当遺構面が15世紀以降の耕作面であることがわかる。

犁痕 犁痕は東西方向に走っており、磁北から75° 前後東に振っている。掘形は不明瞭で、幅10～



第91図 第1遺構面全景（北から）



第92図 第1遺構面平面図 1/80



第93図 犁痕検出状況 (西から)



第94図 SD04・05 (西から)

20cm程度の白っぽい筋として検出された（第93図）。

溝 S D01～05は犁痕と同じく東西方向に走る溝であり、畠の畝と推測される（第92・94図）。犁痕と比べて幅が広い。埋土は黒色の粘質土である。これら各溝は、1.4m～1.5mの間隔をあけて東西に平行して走っている。S D01は幅55cm、他は幅20cmを測り、深さはいずれも5cmを測る。

②第2遺構面

第2遺構面は、第11層に覆われ第12層をベース層としている（第95～103図）。第11層を鍵層として、若宮遺跡第2地点の第4・5遺構面〔森岡・竹村編1999〕と対応させることができ、当遺構面の時期は弥生時代前期末（畿内第I様式新段階）から中期初頭（第II様式）であると考えられる。竪穴住居跡、土坑、ピットが検出された。遺構は最も多いもので3回の切り合い関係が確認されており、当遺構面の遺構には少なくとも3期のものが含まれている。

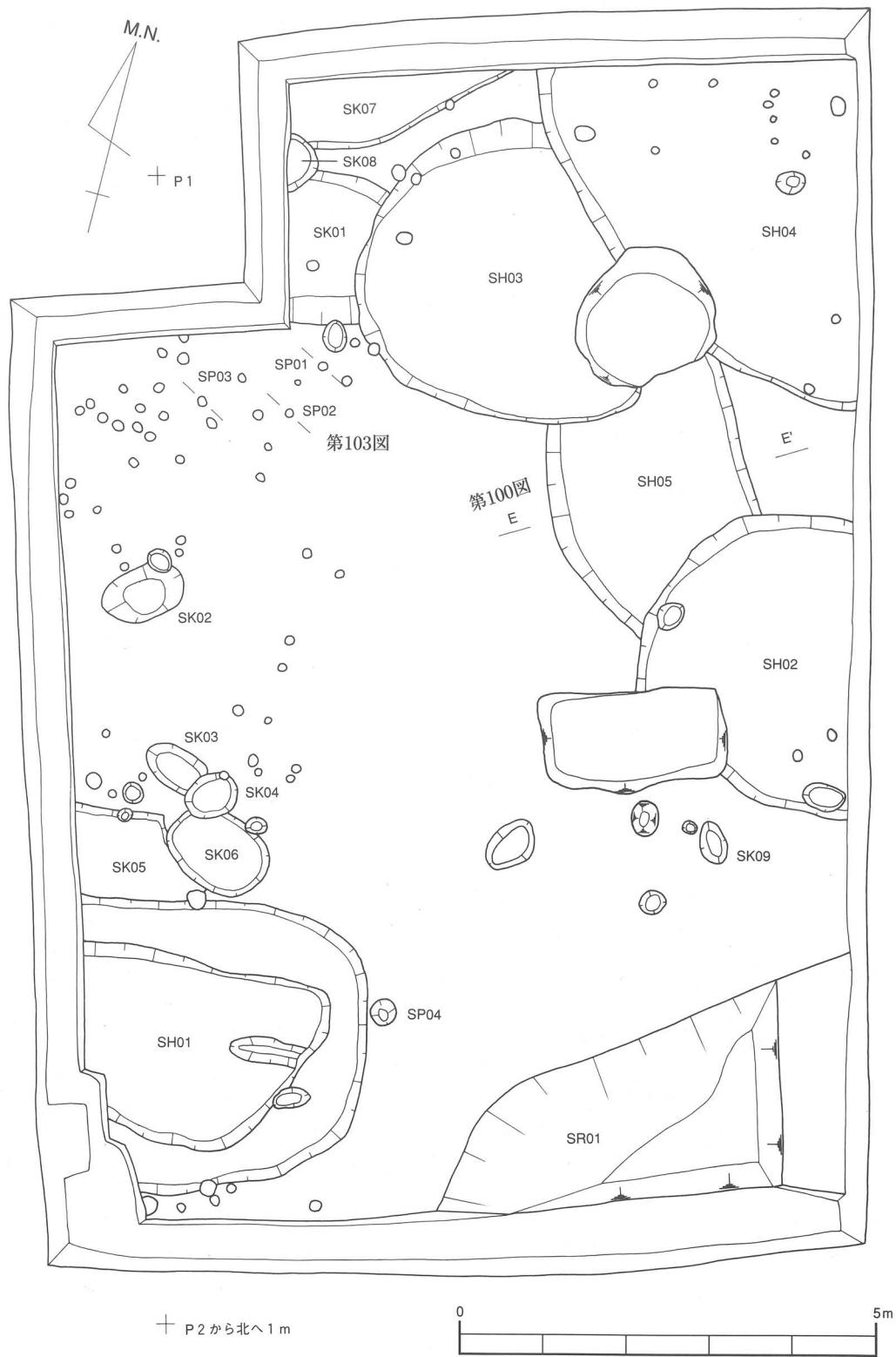
竪穴住居跡 当遺構面では、5棟の竪穴住居跡が検出された（第95～102図）。これらの竪穴住居跡の床面には明確な炉跡や柱穴がみられないことから竪穴住居跡と断定することはできないが、ここでは竪穴住居跡として報告する。竪穴住居跡覆土には弥生土器の細片が少量しか含まれておらず詳細な時期決定は困難であるが、当遺構面で検出された他の遺構の時期や若宮遺跡第2地点第4・5遺構面との層序の対応関係から、弥生時代前期末から中期初頭のものであると推測される。

竪穴住居跡の平面形は、長方形のもの（S H01）、円形のもの（S H02・03・04）、橢円形のもの（S H05）に分けることができる。

S H01は、調査区南西部で検出された（第96～98図）。西側は調査区外となっており、遺構全体を検出することはできなかった。不整な長方形を呈し、長辺3.5m以上、短辺3.5m、深さ10cmを測る。床面には高低差5cmの段差によって設けられた高床部がある。床面の東部において幅30cm、深さ5cmの東西方向の溝が検出された。

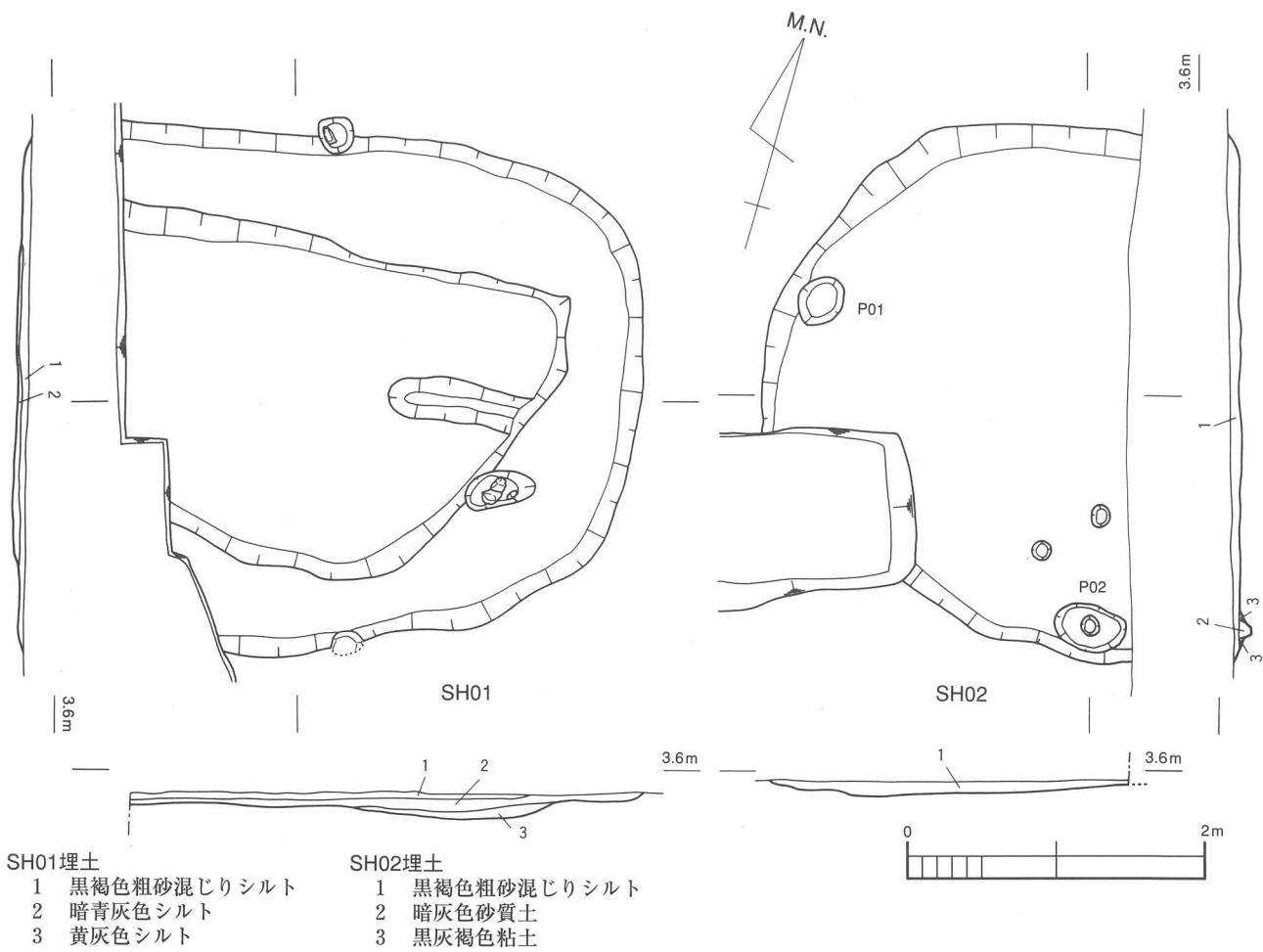


第95図 第2遺構面全景（北から）

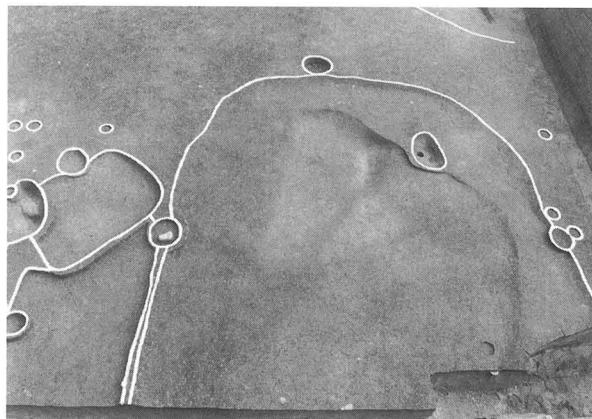


第96図 第2遺構面平面図 1/80

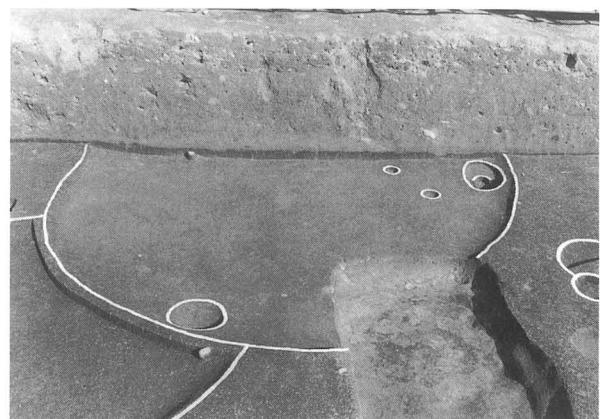
S H02は、調査区中央部東側で検出された（第96・97・99図）。豎穴住居東部は調査区外となっており、遺構全体を検出することはできなかった。切り合い関係では、S H05を切っている。円形を呈し、径は南北方向で3.6m、深さ10cmを測る。床面は平坦で、2基の柱穴が認められた（P 01・02）。P 01は径30cm、深さ5cmを測る。P 02は楕円形を呈し、長径48cm、短径30cm、深さ10cmを測る。P 02では、直径12cmを測る柱痕が検出された。



第97図 SH01・02平面・断面図 1/50



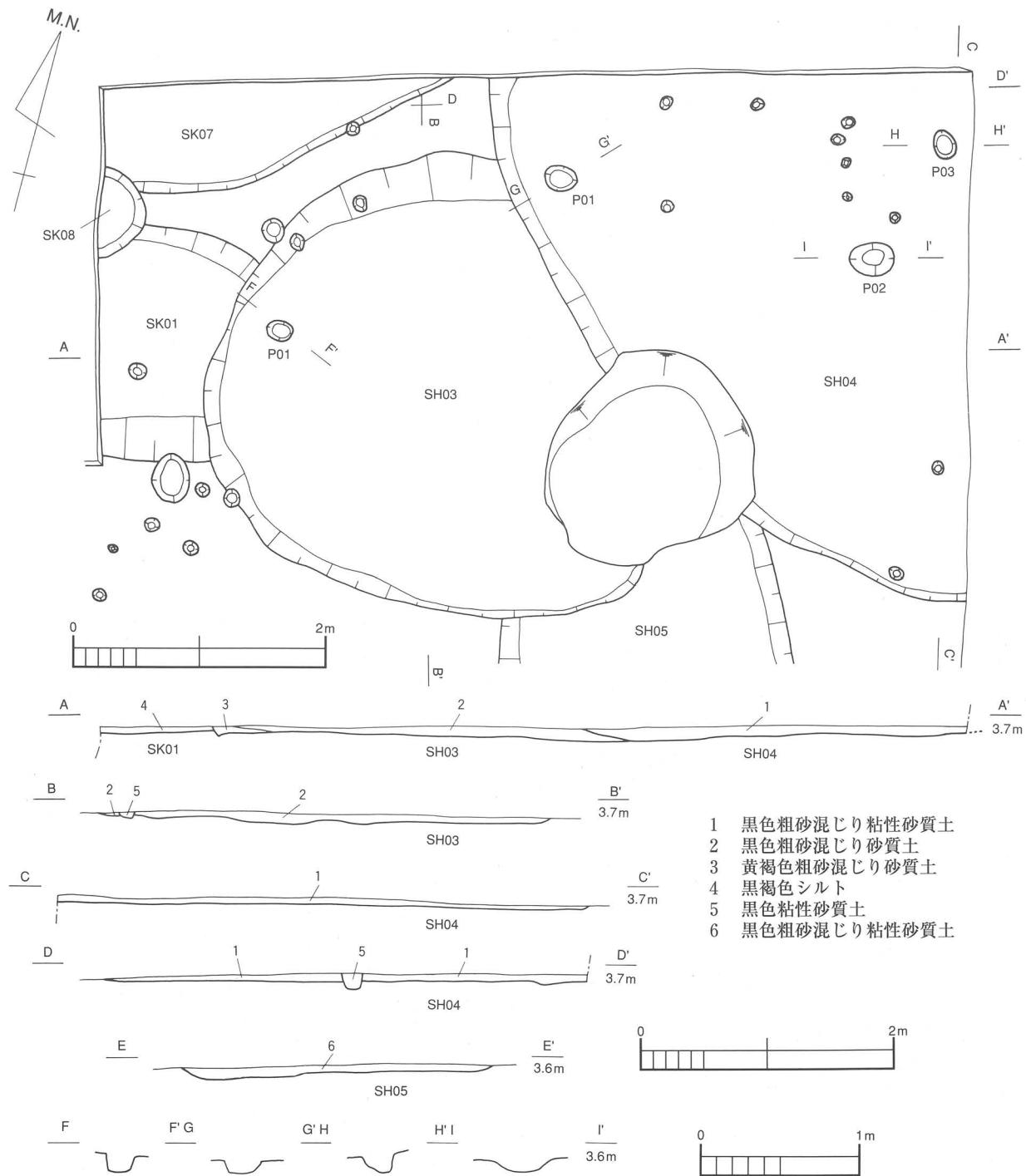
第98図 SH01 (西から)



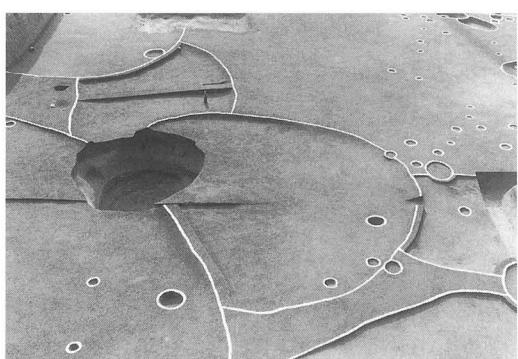
第99図 SH02 (西から)

S H03は、調査区北半部で検出された（第96・100～102図）。切り合い関係ではS H05を切り、S H04に切られている。円形を呈し、径は南北方向で3.7m、深さ10cmを測る。床面はやや皿状を呈し、1基の柱穴（P01）が認められた。P01は楕円形を呈し、長径20cm、短径10cm、深さ10cmを測る。

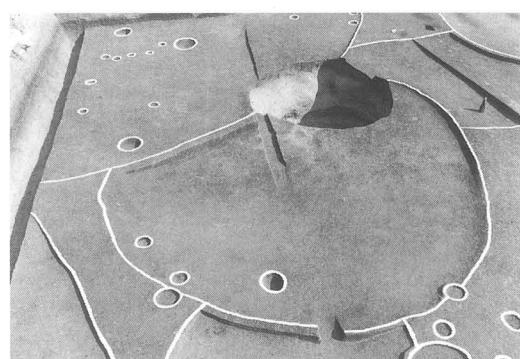
S H04は、調査区北東部で検出された（第96・100～102図）。今回検出された竪穴住居跡の中では、最も大きい。切り合い関係はS H03を切っている。北部と東部が調査区外となっており、遺構全体を検出することはできなかった。円形を呈し、南北方向で4.2m以上を測る。今回の調査ではおおよそ全体の4分の1しか検出されていないが、円形の竪穴住居跡とすれば径8m前後の大型の竪穴住居となる。深さは10cmを測る。床面は平坦で、3基の柱穴が認められた（P01～03）。P01は円形を呈し、



第100図 SH03～05平面・土層断面図 1/50, 床面ピット断面図 1/40



第101図 SH03～05 (北から)



第102図 SH03・04 (西から)

径22~25cm、深さ8cmを測る。P02は橢円形を呈し、長径33cm、短径27cm、深さ9cmを測る。P03は円形を呈し、径20cm、深さ12cmを測る。

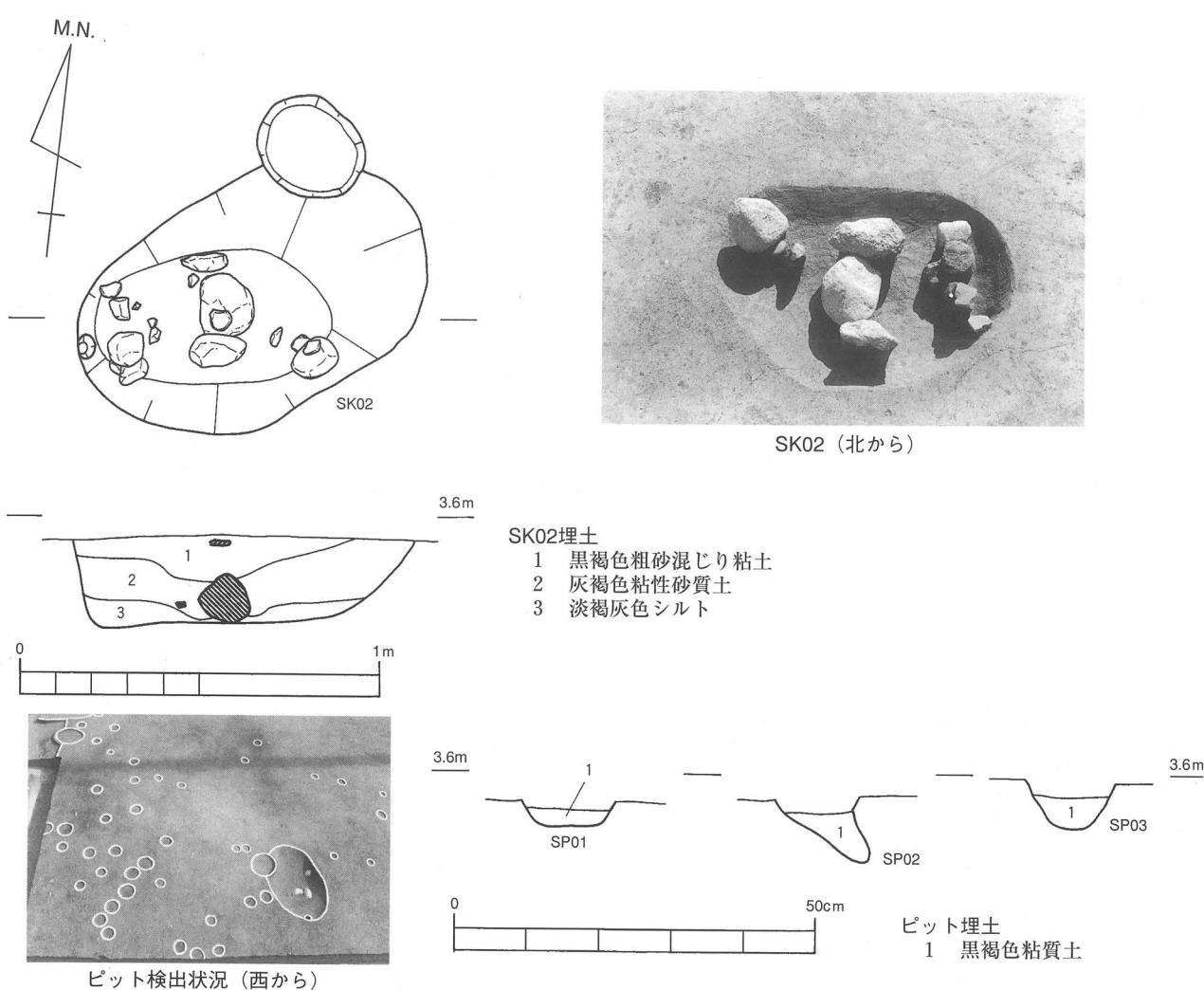
S H05は、調査区北東部で検出された（第96・100・101図）。S H02とS H03に切られており、切り合ひ関係から最も古い堅穴住居跡であると判断される。橢円形か不整な長方形を呈するようである。南北長は2.5m以上、東西長は2.5mを測る。床面は平坦で、深さ7cmを測る。床面において柱穴などは確認されなかった。他の堅穴住居跡と比べて、平面形が円形ではないことなど様相が異なる点が多く、性格が違う可能性が高い。

土坑 土坑は9基検出された（第96・103図）。SK01は調査区北部で検出された。西側が調査区外の上、S H03とSK08に切られており、遺構全体を確認することはできなかった。径2m前後の橢円形を呈する土坑と推測される。深さは12cmを測る。弥生土器の細片が出土している。

SK02は調査区西部中央で検出された（第96・103図）。橢円形を呈し、長径102cm、短径63cm、深さ25cmを測る。土坑内には径20cm以下の礫が十数石入っていた。弥生土器とサヌカイト剥片が出土している。

SK03は調査区南西部で検出された。SK04に切られる。橢円形を呈し、長径70cm以上、短径48cm、深さ11cmを測る。弥生土器の細片が出土している。

SK04は調査区南西部で検出され、SK03とSK06を切っている。橢円形で、長径65cm、短径51cm、深さ11cmを測る。埋土の観察から、当土坑は2基の土坑が切り合っているようである。弥生



第103図 SK02平面・土層断面図 1/20, ピット断面図 1/10

土器の細片が出土している。

S K05は、調査区南西部で検出された。S H01・S K06に切られており、西側が調査区外となっているため、平面形は不明である。径1.4m以上の大きなものであるが、深さは4cmと浅い。弥生土器片が出土している。

S K06は調査区南西部で検出され、S K05を切り、S K04に切られている。楕円形を呈し、長径125cm、短径93cm、深さ6cmを測る。

S K07は、調査区北部で検出された。径2.7m以上のかなり大きなものであるが、北側と西側は調査区外で全体を検出することができなかった。S K08に切られている。深さは2cmで非常に浅く、ベース層のくぼんだ部分である可能性がある。弥生土器の細片が出土している。

S K08は調査区北部で検出され、S K01とS K07を切っている。西側は調査区外となっているが円形を呈するものと考えられる。径70cm、深さ2cmを測る。S K07と同じく非常に浅いため、ベース層の低い部分に残った第11層の可能性がある。

S K09は、調査区南東部で検出された。楕円形を呈し、長径51cm、短径32cm、深さ7cmを測る。弥生土器の細片が出土している。

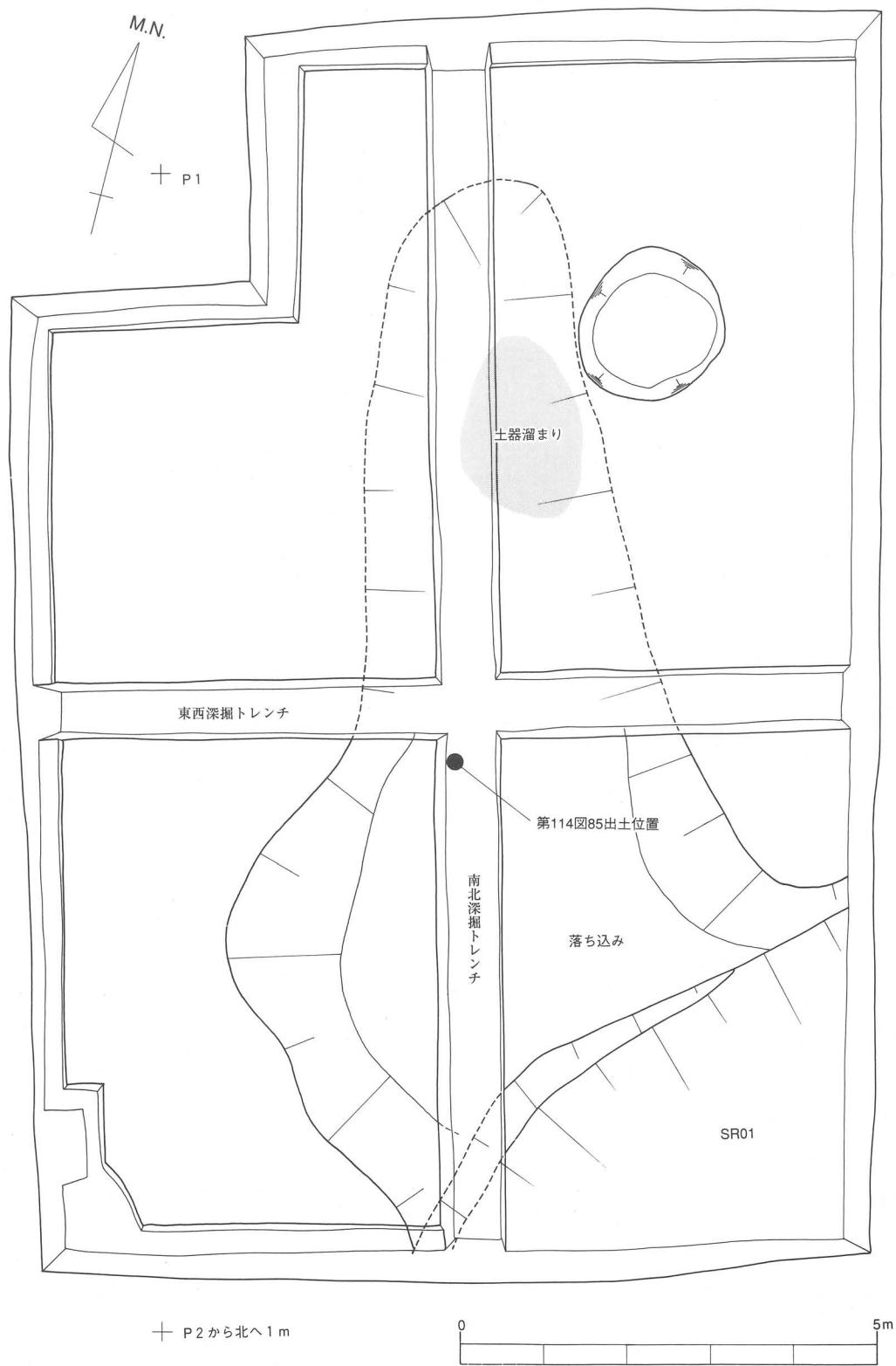
ピット 小さいものを含め、66基のピットが検出された（第96・103図）。特に、調査区北西部で、径20cm、深さ10cm程度のピットが多数検出された。これらの中には、斜めに穿たれているものも認められる（第103図）。

③第3遺構面

第3遺構面は第12層をベース層としており、自然流路S R01からオーバーフローした粗砂である第⑫層に覆われる落ち込み以外は第2遺構面と同一面である（第104～109図）。自然流路1条と落ち込みが検出された。第⑫層と第12層の境界面からは滋賀里IV式（新相）、第12層と第13層の境界付近か



第104図 第3遺構面全景（北西から）



第105図 第3遺構面平面図 1/80

らは滋賀里IV式（新相）に比定される突帯文土器（第114図85）が出土していることから、当遺構面の時期は滋賀里IV式（新相）期であることがわかる。

自然流路 調査区南東部において検出された（第105・108図）。当流路は第1・2・3地点の調査においても検出されており、蛇行しながら南流していたことが確認されている。当地点では規模はわからないが、第2地点では幅3.6~4.8m、第3地点では幅4.8~8.4mを測る。当地点では検出面より



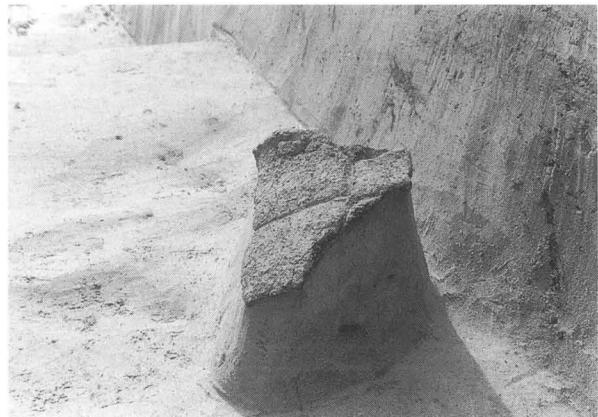
第106図 土器溜まり検出状況（南から）



第107図 土器溜まり検出状況（北西から）



第108図 SR01（西から）



第109図 第12-13層境界出土突帯文土器出土状況（北東から）

105cmまで埋土を除去したが、それ以上は安全が確保できなかったために掘削を断念した。なお、他の調査地点においても、当流路の深さは確認されていない。

当流路の時期については、埋土から遺物は出土しなかったが、後述する土器溜まり（滋賀里IV式（新相））が当流路からオーバーフローした砂（第12層）によって覆われていることとベース層（第12層）から滋賀里IV式（新相）に比定される突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期後半（滋賀里IV式（新相））に流动していたということができる。

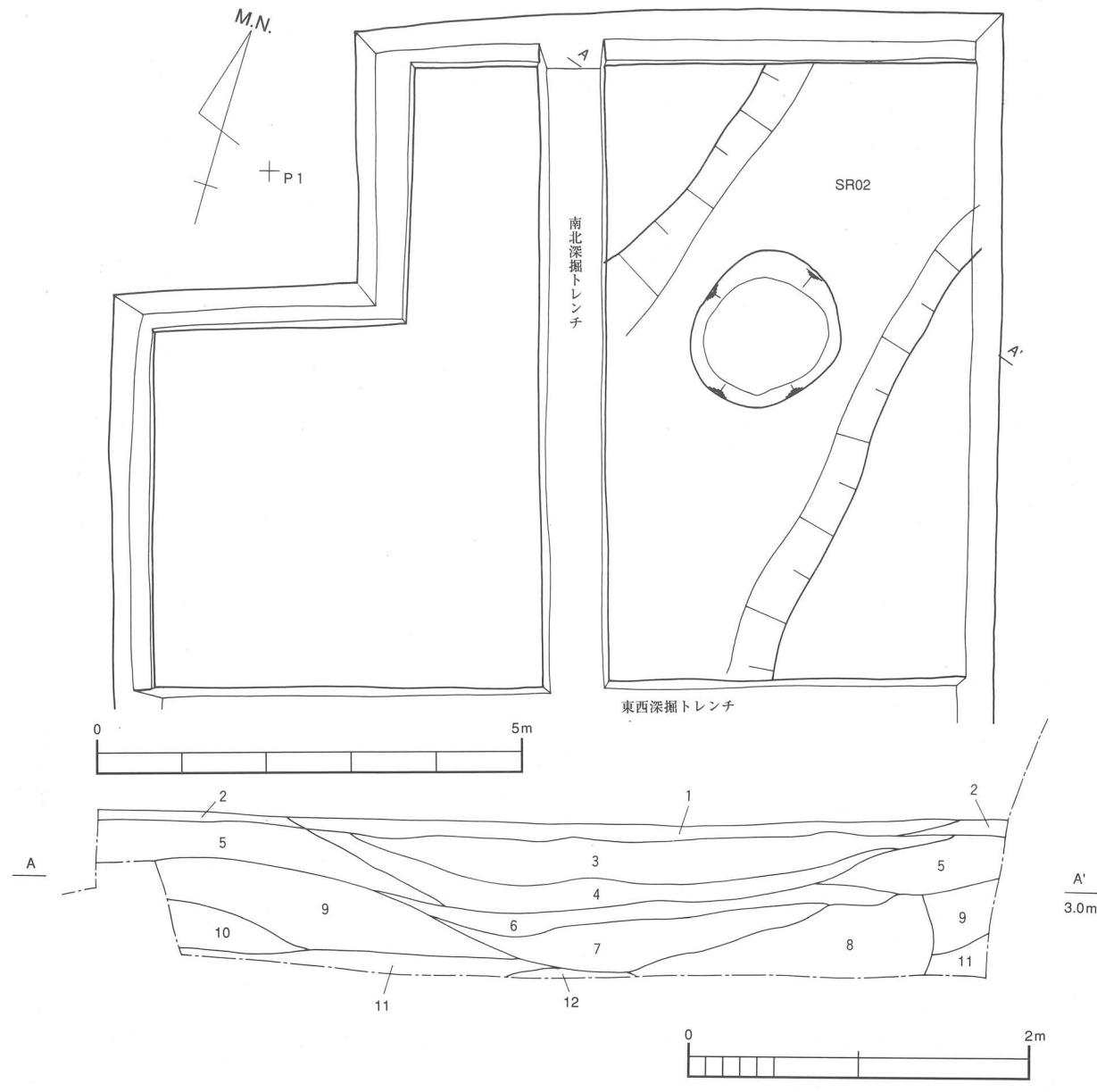
第12層によって当流路は完全に埋没している。第2遺構面では砂層が土壤化しており、弥生時代前期には流路は完全に埋没して地表面となっていたことが推測される。

落ち込み 調査区中央部では、SR01から北へのびる落ち込みが検出された（第104・105図）。落ち込みの広がりは調査区南半でのみ確認されており、北半部の範囲は土層観察用土手に残った土層断面から推定復元された。落ち込みは深さ10cm程度の浅いもので、SR01からオーバーフローした粗砂（第12層）が堆積していた。

土器溜まり 落ち込みの北部において、おおよそ径2mの範囲に縄文土器が集中して出土した（第105～107図）。この土器群は落ち込み面直上（第12層最上部）から出土しており、SR01の埋土と同一の粗砂（第12層）によって覆われていた。出土した土器は突帯文土器で、滋賀里IV式（新相）に比定される。

④第4遺構面

当遺構面は調査期間の制約から、調査区北東部しか調査できなかった（第110～112図）。第3遺構面から第12層を少し掘り下げた面で、南西へ流れる自然流路SR02が検出された。



1	黄灰色極細砂質土	7	淡灰黃色砂 (SR02b埋土)
2	基本土層第12層	8	淡黃色砂
3	淡灰色極細砂 (SR02a埋土)	9	淡灰色シルト (SR02bベース層)
4	淡灰褐色シルト (SR02a埋土)	10	淡青灰色粘土
5	基本土層第13層 (SR02aベース層)	11	暗灰色シルト
6	灰色粘土 (SR02b埋土)	12	淡黃褐色砂礫

第110図 第4遺構面平面図 1/80, SR02土層断面図 1/40



第111図 第4遺構面全景 (南西から)



第112図 SR02土層断面 (南西から)

S R 02は土層断面の観察から、2つの時期に分けられた（第110・112図）。上層のもの（S R 02 a）は基本土層第13層をベース層としており、シルト～極細砂で埋まっている。下層のもの（S R 02 b）は、基本土層第13層で覆われている。下部は粗砂層で埋まり、上部は粘土層で埋まっている。S R 02 bに伴い、S R 02土層断面第7層と第8層の境界面からは、滋賀里Ⅲ b式と滋賀里Ⅳ式（古相）に比定される土器が出土した。

当流路の時期は、S R 02 bは埋土から滋賀里Ⅲ b式と滋賀里Ⅳ式（古相）の土器が出土しており、滋賀里Ⅳ式（新相）の土器が出土した第13層に覆われていることから滋賀里Ⅳ式（古相）のものであると判断される。S R 02 aは滋賀里Ⅳ式（新相）の土器溜まりの検出面より深部から検出されており、基盤層である第13層の最上部からは滋賀里Ⅳ式（新相）の土器が出土していることから、滋賀里Ⅳ式（新相）のものであると考えられる。
(竹村)

4) 出土遺物

コンテナ5箱分の遺物が出土した。

①機械掘削時出土土器（第113図）

1は東播系須恵器捏鉢の口縁部、2は円筒埴輪の基底部である。

②第5層出土土器（第113図）

第5層からは、中世の土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器が出土した。耕作土に包含されるものため、細片が多く、図化できるものはほとんどなかった。

3は土師器小皿である。4は東播系の須恵器捏鉢の口縁部である。

③第1遺構面（第7層直上）出土土器（第113図）

土師器・瓦質土器・須恵器・磁器・瓦が出土した。当層も耕作土であるために、細片が多く図化できるものは少なかった。

5～16は土師器小皿である。ヘソ皿が含まれており、14～15世紀頃のものと考えられる。17は土師器壙である。18は瓦器皿、19は瓦器塊、20は瓦質の土壙である。21は須恵器塊、22は須恵器捏鉢である。23は京焼系の磁器碗で、第3地点出土の第78図30と接合した。内面および外面上半は施釉され、淡黄緑色を呈する。近世のものである。

④第7層出土土器（第113図）

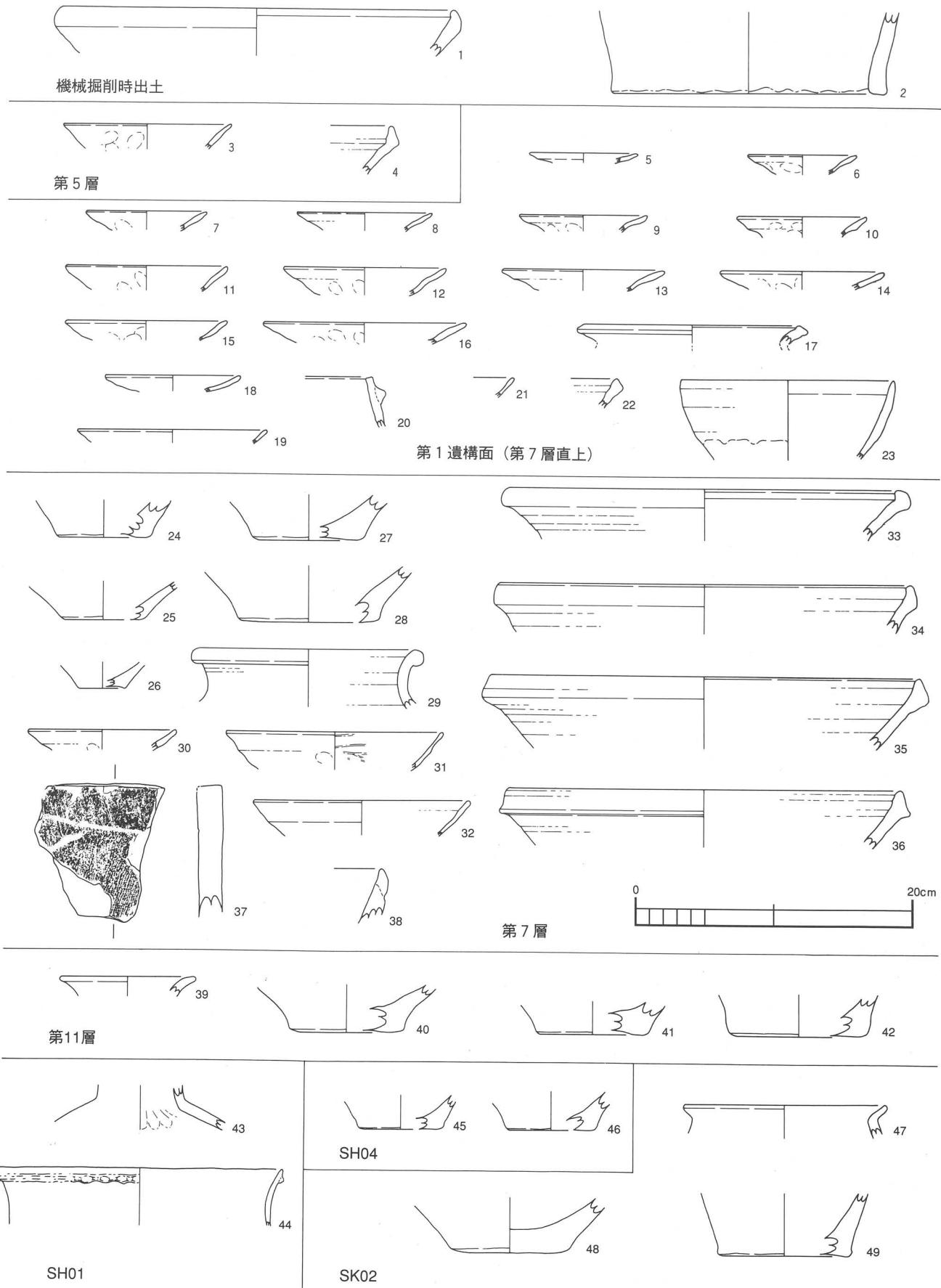
当層は第1遺構面のベース層であり、比較的多くの土器片が出土した。弥生土器・土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器・陶器・製塙土器・瓦がみられる。中世土器は14～15世紀代を中心とする。備前焼の破片が認められるが、図化できなかった。

24～28は弥生土器である。弥生土器の出土点数は多いが、器表が摩耗した破片が多く、底部付近以外は図化することができなかった。29は須恵器壙の口縁部である。30は土師器小皿である。31は和泉型瓦器塊である。口縁部にはヨコナデが加えられ、口縁端部は丸くおさめる。内面にはヘラミガキが施される。32は東播系須恵器の塊である。33～36は東播系の須恵器捏鉢である。口縁端部が上下に肥厚しており、14世紀前半のものである。37は平瓦で、凹面に布目が認められる。38は製塙土器である。須恵質で、灰色を呈する。外面には粘土紐接合痕が残るが、内面は粗いナデが施されている。

⑤第11層出土土器（第113図）

第2遺構面を覆う当層からは、弥生土器が出土した。しかし、土器片は器表が激しく摩耗しており、図化できるものはほとんどなかった。文様の認められるものはまったくなく、詳細な時期を判断する根拠に乏しいが、第2地点の成果から畿内第Ⅱ様式であると推測される。

39は壺の口縁部である。40・41は壺の底部、42は甕の底部であろう。



第113図 出土遺物実測図(1) 1/4

⑥第2遺構面出土土器（第113図）

当遺構面からは、堅穴住居跡覆土や土坑埋土から少量の弥生土器が出土している。

S H01出土土器 43は弥生土器で、外面はナデで仕上げられ、内面には絞り目がみられる。44は突帯文土器である。口縁部は外反し、口縁端部より下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯上には「O」字を呈する刻み目が施される。なお、この突帯文土器はS H01の床面に密着して出土していることから、S H01に伴うものではなくベース層である第12層の最上部に包含されていたものと判断される。口酒井式であろう。

S H04出土土器 45は弥生土器の甕の底部、46は壺の底部である。

S K 02出土土器 47は甕の口縁部、48は壺の底部、49は甕の底部である。

⑦第3遺構面土器溜まり出土土器（第114図）

第3遺構面の落ち込みに伴って検出された土器溜まりからは、突帯文土器の小片が多数出土した。しかし、遺存状態は悪く、器表は激しく摩耗しており、図化できるものは31点に留まった。深鉢（50～78）と浅鉢（79・80）が認められる。深鉢は、口縁部に1条の突帯を貼り付けるもので、胴部付近に緩い屈曲をもち、口縁部は外反するものと直線的なものがある。調整は口頸部はナデで仕上げられ、胴部はヘラケズリが施される。口頸部のナデ調整は横方向を主体とするが、縦方向のものも少數認められる。胎土は長石・石英を多く含む在地系のものである。色調は灰黄色を呈するものが主体である。

次に、口縁部の形態と口縁部突帯の貼り付け位置、口縁端部および突帯上の刻み目の有無について詳述する。50～52は丸くおさめる口縁端部に、小さい刻み目が浅く施されている。口縁部突帯は口縁端部より下がった位置に貼り付けられ、50・51は突帯上に「D」字形の刻み目が施される。52の突帯上の刻み目の有無は、不明瞭でわからなかった。

53～60は、口縁端部より下がった位置に突帯を貼り付け、その上に「D」字形を呈する刻み目を施す。口縁端部は丸くおさめる。ただし、54と59は「D」字形の刻み目であると思われるが、不明瞭で断言できない。56と57は、同一個体の可能性がある。

61～63は、口縁端部より若干（1mm程度）下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯上には小さめの「D」字形刻み目を浅く施す。口縁端部は、丸くおさめる。

64～66は、口縁端部よりやや下がった位置に突帯を貼り付け、突帯上には「O」字形を呈する刻み目を施す。口縁端部は丸くおさめる。

67～72は、口縁端部より下がった位置に突帯を貼り付け、突帯には刻み目を施さない。口縁端部は丸くおさめる。

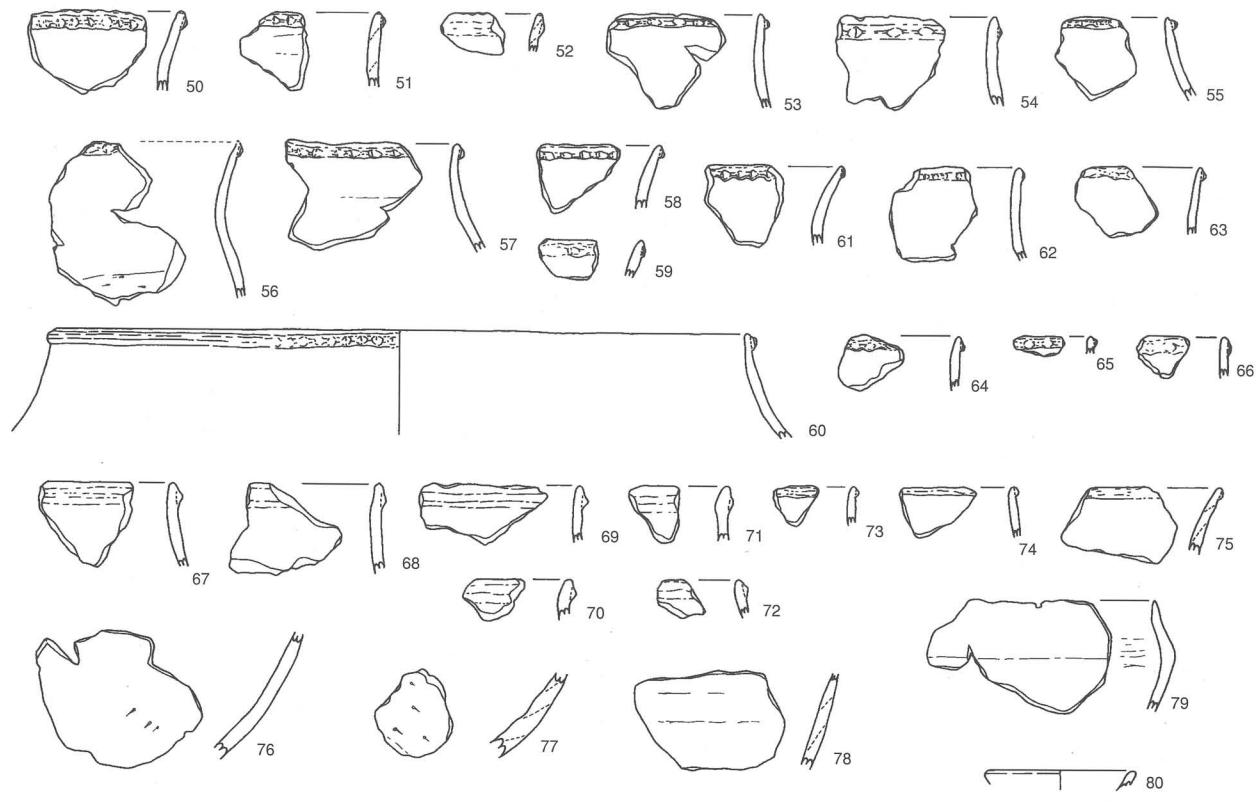
73～74は、口縁端部からやや下がった位置（1mm程度）に細い突帯を貼り付ける。突帯には、刻み目を施さない。75は口縁端部に接して無刻みの細い突帯を貼り付けている。

76～78は深鉢の底部付近と考えられる。おそらく、尖り気味の丸底を呈するのであろう。外面には下から上へ斜め方向にヘラケズリが施され、内面はナデ調整である。

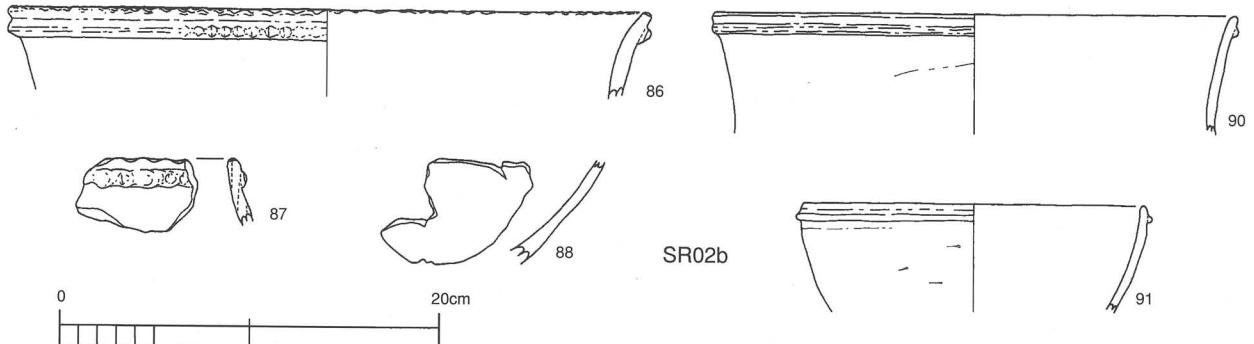
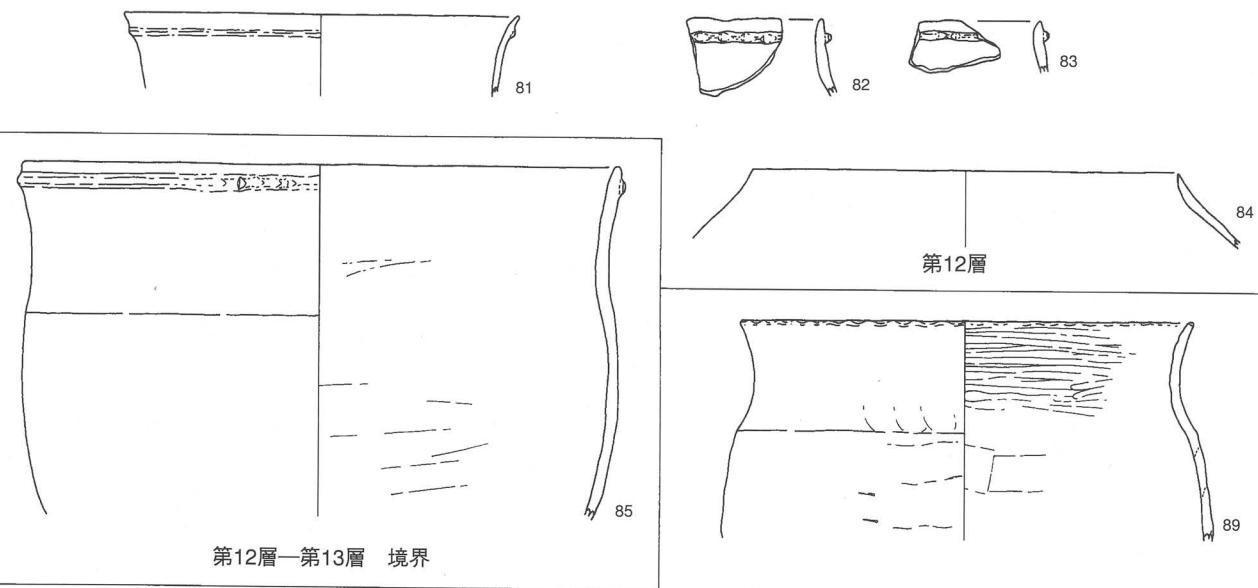
79は浅鉢で、肩部で緩く屈曲し、口縁端部は尖らせる。外面はナデ、内面は幅3～5mm程度の原体で横方向にナデ調整されている。80は椀形を呈する小型の浅鉢で、復元口径7.6cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデで仕上げられる。

以上、第3遺構面の落ち込みに伴う土器溜まりから出土した突帯文土器について述べてきたが、ここでその特徴についてまとめる。まず、胎土は長石や石英を多く含む在地系のもので占められており、搬入品は認められなかった。灰黄色を呈するものが主体である。

器種には深鉢と浅鉢がある。浅鉢は、摩耗の激しい破片の中から識別することが困難であった。したがって、浅鉢は2点しか図化することができなかつたが、さらに多くの破片があると推測される。



土器溜まり



第114図 出土遺物実測図(2) 1/4

深鉢は、口縁端部より下がった位置に突帯を貼り付け、胴部は緩い屈曲をもち、口頸部のナデと胴部のヘラケズリによる調整の変化でその境を示すものが主体である。口縁部突帯には「D」字形の刻み目を施す。口縁端部は丸くおさめ、刻みを施さないものが主体である。底部は平底が確認されておらず、尖り気味の丸底であると推測される。

これらの特徴から、当土器群は滋賀里IV式の新相に比定される。

⑧第12層出土土器（第114図）

81～84は第12層上部（第3遺構面検出時）から出土した突帯文土器である。出土層位からは、土器溜まりと同時期と言える。82～84は同じ場所から出土した。胎土も土器溜まりのものに酷似しており、灰黄色を呈する。81～83は深鉢で、81は口縁端部より下がった位置に細い無刻みの突帯を貼り付ける。口縁端部は尖らせる。口頸部に種子と思われるものの圧痕がみられる。82・83は口縁端部より下がった位置に突帯を貼り付け、突帯上には「D」字形の刻み目を施す。口縁端部は丸くおさめる。この2点は、同一個体の可能性がある。84は浅鉢の口縁部で、緩やかに屈曲しながら内傾する。口縁端部は尖らせている。内外面はナデで仕上げられる。肩部で「く」字状に屈曲する浅鉢と考えられる。

これらの土器は土器溜まりの土器群と同じ特徴をもち、滋賀里IV式の新相に併行すると考えられる。

⑨第12層～第13層境界出土土器（第114図）

85は深鉢である。肩部に緩い屈曲をもち、口縁部に突帯を巡らせる。口縁部突帯は口縁端部より下がった位置に貼り付けられ、突帯上には「D」字形の刻み目が施される。外面の調整は器表の磨滅が激しく不明であるが、口頸部がナデ、胴部がケズリであろう。内面の調整は、口頸部内面がナデによって仕上げられ、胴部内面は板状工具によって横方向にナデ調整されている。胎土は長石や石英を含む在地系のものであり、色調は赤褐色～暗灰色を呈する。この1点の土器から型式を比定することは困難であるが、滋賀里IV式の新相と考えられる。ただし、第12層上部出土の深鉢に比べて、口縁端部が面を意識しておさめられており、85の方が古い様相を示している。

⑩第4遺構面S R02b出土土器（第114図）

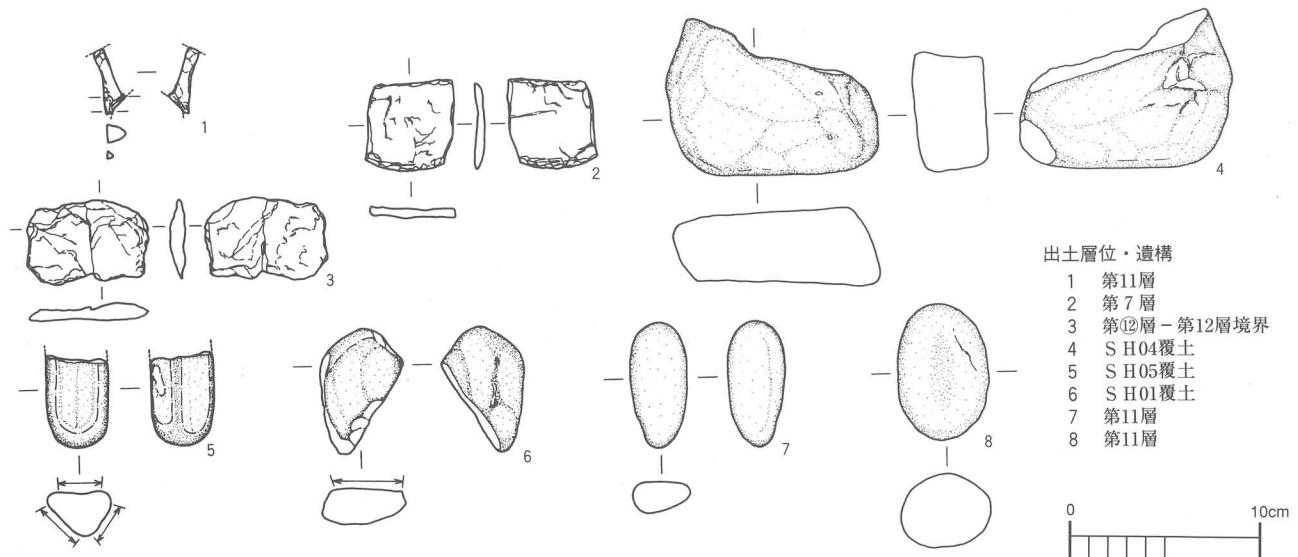
86～91はS R02bに伴って、まとまって出土した。86～88は在地系の胎土をもつ土器で、89～91は角閃石を含む生駒西麓産胎土をもつ搬入品である。

86・87は在地産胎土をもつ深鉢の口縁部で、口縁端部よりやや下がった位置に太めの突帯を貼り付け、突帯上には「D」字形の刻み目を施す。口縁端部は面をもち、刻み目が施されている。88は深鉢の底部である。尖り気味の丸底となるのであろう。いずれも、淡黄色を呈する。

89・90は生駒西麓産胎土をもつ深鉢である。89は肩部に稜をもって屈曲する。面取りされた口縁端部には、工具を強く押さえつけることによって楕円形を呈する刻み目が施される。調整は、外面は口頸部がナデ、胴部が左から右へ横方向のケズリが施され、内面は口頸部内面が5mm程度の幅をもって工具により横方向にナデ調整されており、胴部内面はヨコナデが施されている。90は口縁端部より下がった位置に突帯を貼り付け、刻み目は施さない。口縁端部は面を意識して、丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。

91は、生駒西麓産胎土をもつ鉢である。椀形を呈し、口縁部に突帯を巡らす。口縁部突帯は、口縁端部より下がった位置に貼り付ける。刻み目は施されない。口縁端部は面を意識して、丸くおさめる。調整は外面が左から右へ横方向のケズリが施され、内面はナデで仕上げられる。

これらの土器については、生駒西麓産の89が突帯を巡らさず、滋賀里IIIb式に比定される。突帯を巡らすものについては、在地産胎土の86・87が口縁端部を面取りし、そこに刻み目を施しており、第12層～13層境界出土の85より古い様相を示している。滋賀里IV式の古相に比定される。生駒西麓産胎土をもつ90・91については刻み目が施されていないことに特徴が見出せる。



第115図 出土遺物実測図(3) 1/4

⑪石器・石製品（第115図）

縄文時代晩期と弥生時代中期初頭の包含層からは、石器・石製品が出土している。1はサヌカイト製で、突起をもつが欠損している。石錐であろうか。2は珪化木製の打製石包丁である。3は粘板岩風の剥片で、調整・使用痕は認められない。4は砂岩製の石皿である。5は棒状を呈する砂岩製の砥石である。6は砂岩で、砥石であろうか。7・8は第2遺構面の竪穴住居付近から出土した礫である。7は砂岩で、8は花崗岩である。いずれも顕著な使用痕は認められない。時期については、3のみ第3遺構面から出土しており縄文時代晩期（滋賀里IV式）のものであり、他は出土層位などから弥生時代中期初頭（第II様式）のものと考えられる。

（竹村）

5) 小結

当地点の調査では、4面の遺構面が検出された。第1遺構面からは室町時代（15世紀以降）の耕作痕などが検出された。また、面的には検出していないが、第10層上面でも室町時代（14~15世紀代）の耕作痕が検出された。これらのことから、当該敷地付近が14世紀頃から耕作地として開発・利用されはじめたことが推測される。

第2遺構面からは、弥生時代前期末～中期初頭（畿内第I様式新段階・第II様式）の竪穴住居跡などが検出された。近接する第2地点においても当該時期の竪穴住居跡が検出されており、当該敷地付近にまで居住域が確実に広がっていることが明らかとなった。

第3遺構面からは、縄文時代晩期の土器溜まり（滋賀里IV式（新相））が検出された。明らかな建物の遺構は確認されなかったが、土器の出土量からは調査地付近に集落があったと推測できる。今後、土器溜まりなどの遺構が形成される過程を堆積環境とあわせて復元することによって、当地域の縄文時代晩期の集落像を明らかにしなければならない。

第4遺構面ではS R02bに伴って、縄文時代晩期の土器（滋賀里IIIb式・滋賀里IV式（古相））が出土した。出土土器には、生駒西麓産胎土をもつ搬入品が含まれる。

第3・4遺構面から出土した土器は、一括性が高く、さらに層位的に出土しており、第3地点出土の土器と合わせて西摂地域の突帯文土器の編年を構築していく上で有効な基準資料となる。

遺物では古墳時代中期の円筒埴輪や中世の瓦の破片が出土しているが、当該時期の遺構は検出されなかった。このことから、当該敷地周辺に埋没古墳や瓦葺建物が存在するものと考えられる。（竹村）

3 第10-1地点の調査

1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法

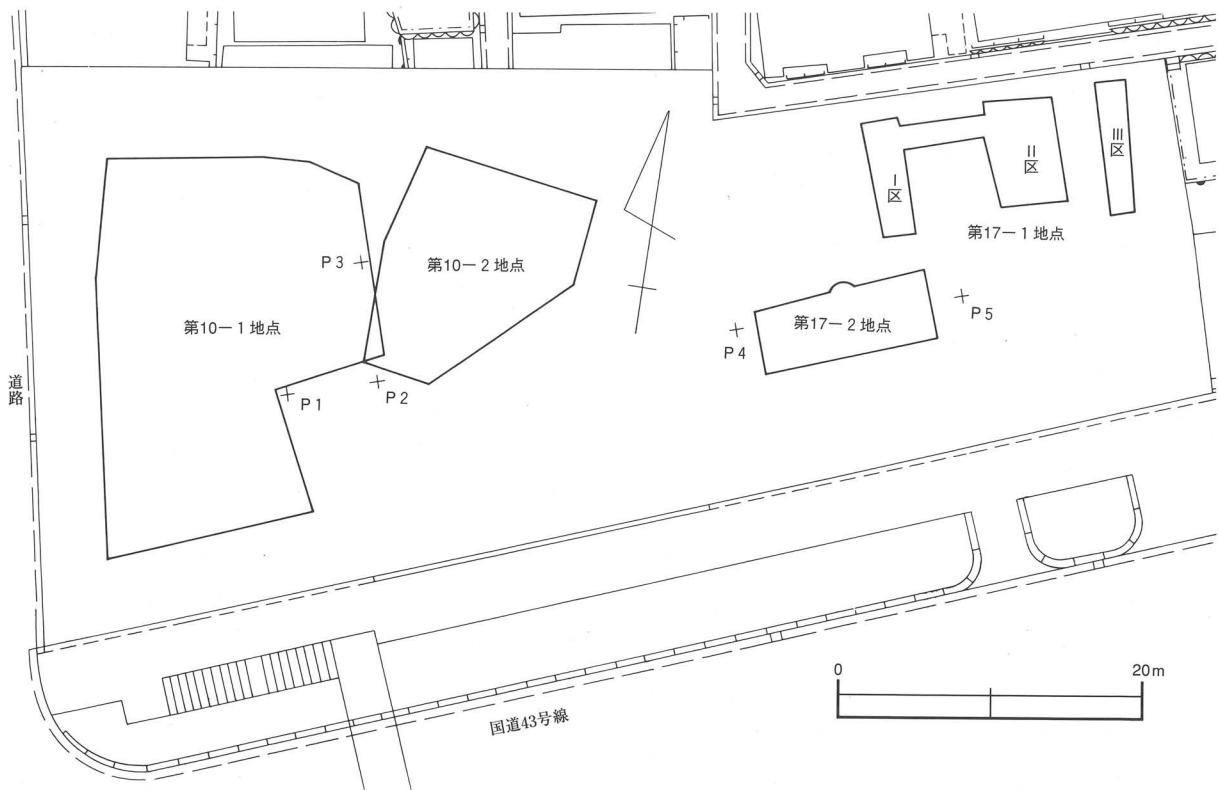
当該敷地では、鉄筋コンクリート造4階建である市営若宮町住宅（3号棟）の建設によって遺構面・遺物包含層の損壊を回避することができないため、記録保存を目的とした事前の発掘調査が必要となった。調査対象範囲は埋蔵文化財が損壊を受ける計画建物の建築範囲に限られた。しかし、事業計画の関係で建物建設工事による損壊部分全域を一度に調査することができなくなったため、建物範囲を東西に分けて発掘調査しなければならなかった。そこで、平成10年度は建物範囲の西半部を若宮遺跡第10-1地点として発掘調査し、残る西半部を平成11年度に第10-2地点として発掘調査することになった。調査期間は平成11年2月9日から3月5日までとしたが、実際は発掘調査の遅れから3月12日まで延長した。本調査は阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、「基本方針」に基づいて実施した。

確認調査は平成11年8月18・19・24日に実施しており、遺物包含層数・遺構面数などの基礎データを得ていた。「基本方針」にしたがって、調査範囲は計画建物建築による損壊部分のみに限り（第116図）、調査深度は無遺物層までとした。最終的な調査深度は、現地表面より2.5mとなった。基準高は、本市道路課設置のマンホール上面基準高（T.P. 3.50m）より得た。

掘削の方法は、近世以降の堆積土層および中世の耕作土層の一部（第5層まで）を重機により掘削した。第6層からは人力により一層ずつ掘削した。各土層の境界面で精査し、4面の遺構面を検出した。第4遺構面調査終了後、第9層以下の深部を確認するために調査区中央に南北方向に幅約2mのトレーナーを設定した。

残土はすべて場外に搬出し、発掘調査終了後に埋め戻しは行わなかった。

（竹村）



第116図 第10・17地点 調査区配置図 1/500



第117図 調査風景（南西から）



第118図 宮川小学校生徒の調査見学風景

2) 層序（第119～121図）

本調査地点は、若宮遺跡分布範囲の南部に位置している。分布範囲の北半部と違って何度も耕作土の上に洪水砂が被さっており、宮川の氾濫により幾度も土砂が堆積していたことがわかる。

確認調査の結果をもとに近世以降の堆積土と中世耕作土の一部（第5層まで）を重機で掘削し、同時に第1遺構面を検出した。したがって表土・盛土・搅乱土である第1層を除く第2～5層はいずれも耕作土と考えられるが、包含される遺物や各層の境界面に遺存したであろう遺構は確認していない。

第1遺構面を覆っている第5層は極細砂～中砂からなっており、水田耕作土であると考えられる。第1遺構面のベース層である第6層は、同時に第2遺構面を覆っている。第1遺構面では、犁痕が検出されている。覆土である第5層には16世紀代の遺物が包含されており、ベース層である第6層には16世紀代の遺物が包含されていることから、第1遺構面は室町時代後半（16世紀代）の水田耕作面と考えられる。

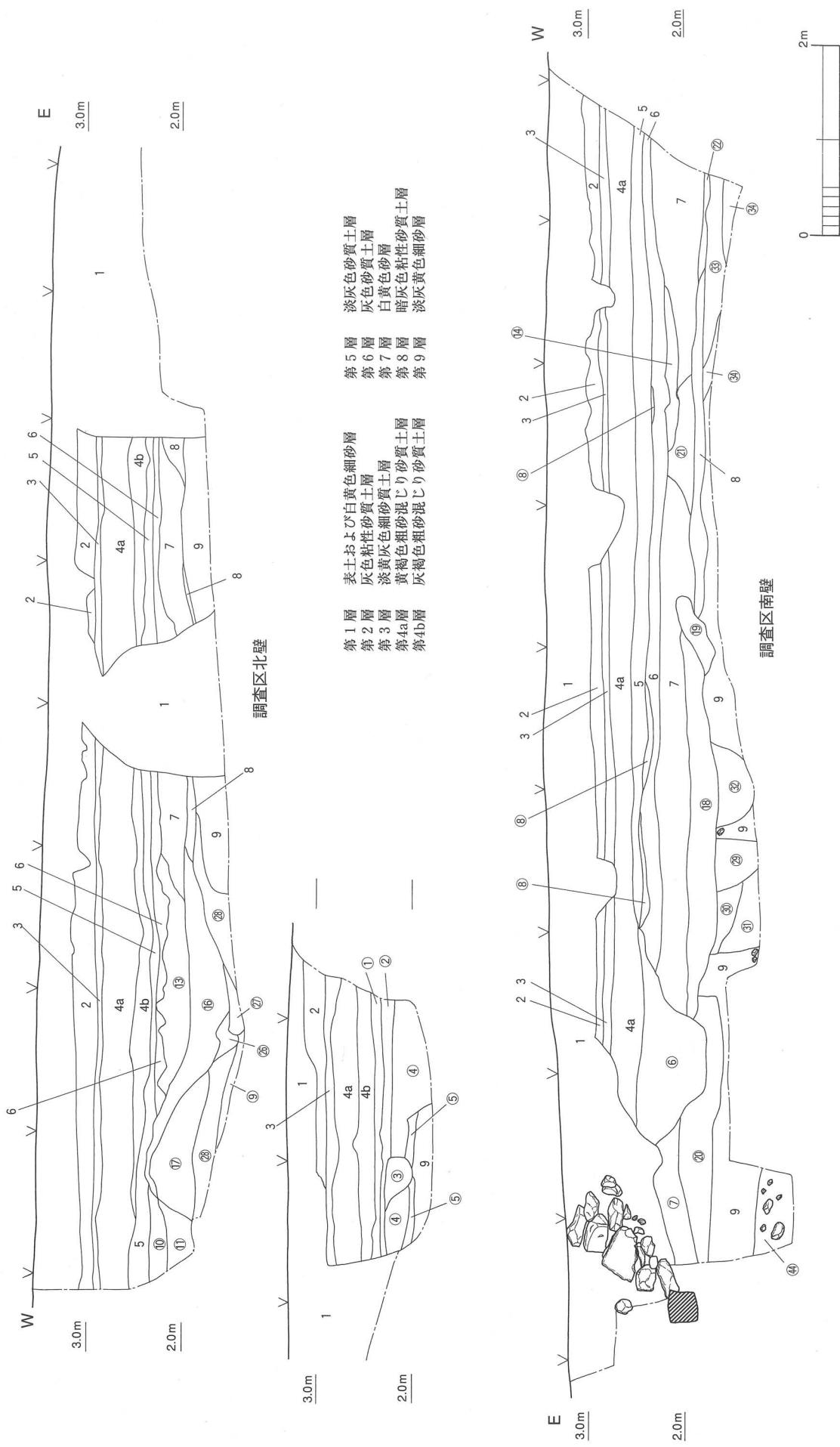
第2遺構面を覆う第6層は、畠耕作土と考えられる。第2遺構面のベース層となる第7層は洪水砂で、当遺構面では南北方向にのびる耕作溝が検出された。覆土である第6層には16世紀代の遺物が包含されており、ベース層である第7層には14～15世紀代の遺物が包含されていることから、第2遺構面は室町時代（16世紀代）の畠耕作面と考えられる。

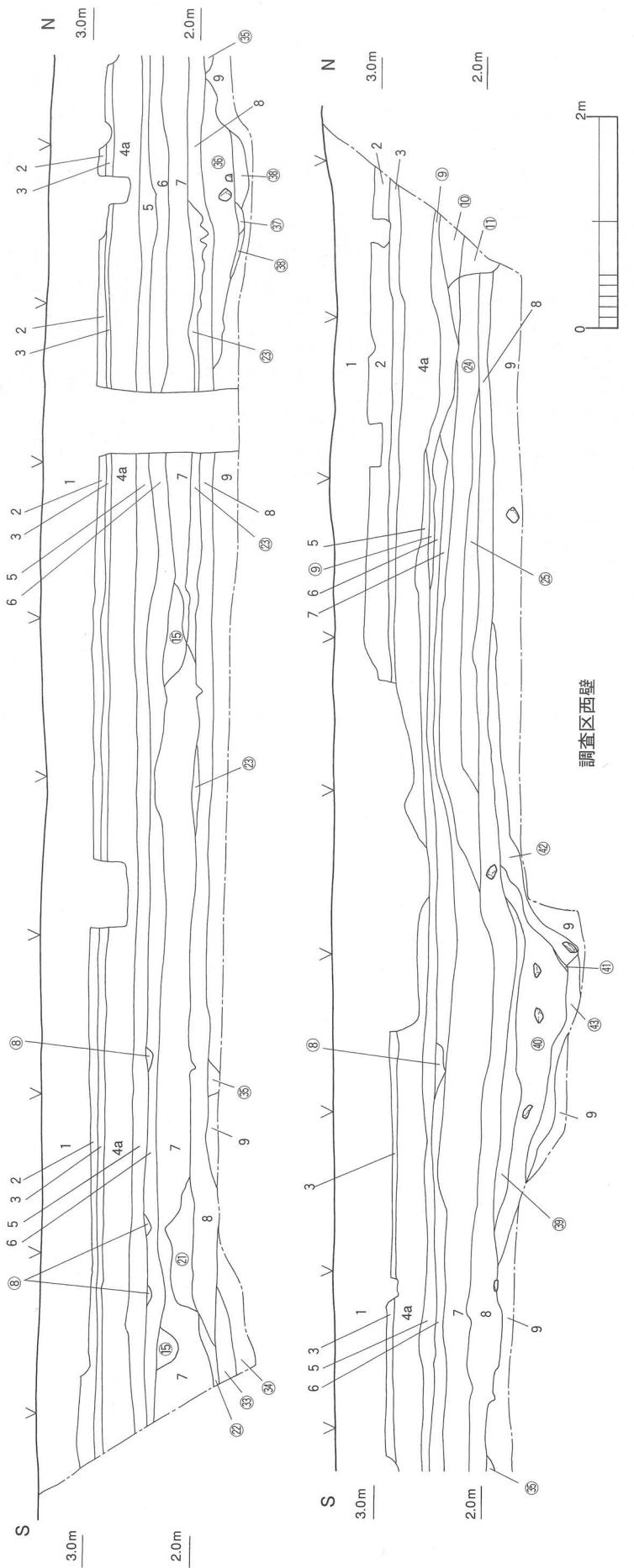
第2遺構面のベース層である第7層は、同時に第3遺構面を覆っている。第3遺構面のベース層である第8層は水田耕作土であり、当遺構面では畦畔が検出された。覆土である第7層には15～16世紀代の遺物が包含されており、ベース層である第8層には14～15世紀代の遺物が包含されていることから、第3遺構面は室町時代（15世紀代）の水田面と考えられる。

第3遺構面のベース層である第8層は、同時に第4遺構面を覆っている。第4遺構面のベース層である第9層は層厚1m以上を測る砂層で、弥生時代中期初頭の土器を含んでいる。当遺構面では南北方向に走る溝と犁痕が検出された。覆土である第8層には14～15世紀代の遺物が包含されており、室町時代（14～15世紀代）の水田耕作面と考えられる。ベース層である第9層は弥生時代に堆積した砂層であり、それ以降、遺構・遺物ともに確認されていないことから、当調査地周辺が14世紀頃から耕作地として開発・利用されはじめたと推測される。

第9層は、縄文時代晚期から弥生時代中期初頭の土器を含んでいる。ラミナが顕著に認められ、流水によって運ばれた砂の堆積である。

なお、第119・120図の土層の註記は、次のとおりである。土層は、上層から順に土層番号を付けた。その際に基本土層と遺構埋土に分け、前者にはアラビア数字、後者には円囲いのアラビア数字で通し番号を付した。基本土層のなかで土質に若干の差違が観察されたものには、土層番号の後にアルファ





第120図 土層断面図(2) 1/60

第①層	明黄色粗砂混じり粘土層
第②層	黄白色細砂層
第③層	白黃色砂層
第④層	淡黃灰色砂質土層
第⑤層	黃褐色細砂層
第⑥層	淡綠灰色細砂層
第⑦層	白色粗砂層
第⑧層	灰褐色細砂混じり粘土層
第⑨層	白黃色細砂層
第⑩層	淡灰色細砂層
第⑪層	灰褐色細砂混じり砂質土層
第⑫層	暗褐色細砂層
第⑬層	灰色粘土層
第⑭層	暗褐色細砂土層
第⑮層	暗褐色細砂層
第⑯層	黃灰色細砂層
第⑰層	黑色粘土層
第⑱層	淡灰褐色細砂土層
第⑲層	黑灰色細砂土層
第⑳層	淡黃灰色細砂土層
第㉑層	黑灰色細砂土層
第㉒層	黑灰色細砂土層
第㉓層	黑灰色細砂土層
第㉔層	明黃褐色細砂層
第㉕層	黃灰色細砂土層
第㉖層	黑色粘土層
第㉗層	明茶色細砂土層
第㉘層	明茶色細砂土層
第㉙層	暗灰茶色細砂土層
第㉚層	明茶色細砂土層
第㉛層	暗黃灰色細砂土層
第㉕層	暗黃灰色細砂土層
第㉖層	暗黃灰色細砂土層
第㉗層	暗黃灰色細砂土層
第㉘層	暗黃灰色細砂土層
第㉙層	暗黃灰色細砂土層
第㉚層	暗黃灰色細砂土層
第㉛層	明黃褐色細砂層



第121図 調査区西壁土層断面（南東から）

ベットの小文字を付け細分を図った。土層註記には、土層番号の次に土層名、続けて粒度・包含物などを順に記し、最後にその土層の性格を述べた。

【第10-1 地点 土層】

- 第1層 表土および白黄色細砂層（近代の洪水砂層）
- 第2層 灰色粘性砂質土層 細砂～粗砂。しまりは良い。近世末～近代の水田耕作土。
- 第3層 淡黄灰色細砂質土層 極細砂～粗砂。近世末～近代の水田床土。
- 第4a層 黄褐色粗砂混じり砂質土層 極細砂～粗砂。径1cm程度の礫を若干含む。近世の耕作土。
- 第4b層 灰黄色粗砂混じり砂質土層 粘土～細砂。粗砂を含む。近世の耕作土。
- 第5層 淡灰色砂質土層 極細砂～中砂。第1遺構面を覆っている。中世の水田耕作土。
- 第6層 灰色砂質土層 極細砂～粗砂。当層上面が第1遺構面である。また、第2遺構面を覆っている。中世の水田耕作土。
- 第7層 白黄色砂層 シルト～粗砂。下部10cmにシルトを含む。ラミナが顕著にみられる。しまりは悪い。当層上面が第2遺構面である。また、第3遺構面を覆っている。中世の洪水砂層。
- 第8層 暗灰色粘性砂質土層 極細砂～細砂。当層上面が第3遺構面である。また、第4遺構面を覆っている。中世の水田耕作土。
- 第9層 淡灰黄色細砂層 細砂～中砂。ラミナがみられる。しまりは非常に悪い。洪水砂。
- 第①層 明黄色粗砂混じり粘土層 粘土。粗砂を含む。粘性が強い。第1遺構面落ち込みの埋土。
- 第②層 黄白色細砂層 細砂。
- 第③層 淡黄灰色砂質土層 極細砂。
- 第④層 黄褐色細砂層 極細砂～細砂。ラミナがみられる。S R01の埋土。
- 第⑤層 淡緑灰色シルト層 シルト。ラミナがみられる。S R01の埋土。

- 第⑥層 白色粗砂層 粗砂。灰黃色シルトを層状に含む。ラミナがみられる。第⑩層との境界に粘土がみられる。
- 第⑦層 灰褐色粗砂混じり粘土層 粘土。粗砂を多量に含む。しまりは非常に良い。SK02の埋土。
- 第⑧層 白黃灰色砂層 極細砂～細砂。しまりはやや悪い。第1遺構面のSD01・02をはじめとする耕作痕の埋土。
- 第⑨層 淡灰色シルト層 細砂～シルト。上層ほど粒子が粗い。ラミナがみられる。しまりはやや悪い。
- 第⑩層 暗褐色粗砂混じり砂質土層 細砂～粗砂。流路の埋土。
- 第⑪層 灰茶色砂層 細砂～粗砂。ラミナが顕著にみられる。しまりは悪い。流路の埋土。
- 第⑫層 茶黃色粗砂層 細砂～粗砂。しまりはやや悪い。流路の埋土。
- 第⑬層 白黃色砂層 シルト～粗砂。第7層を削るようにラミナが観察される。しまりは悪い。SK01の埋土。
- 第⑭層 淡灰色粘土混じり細砂層 細砂・粘土。しまりはやや悪い。
- 第⑮層 暗茶色粗砂混じり砂質土層 極細砂～粗砂。下部に灰色粘土がみられる。
- 第⑯層 黄灰色細砂層 細砂。ラミナがみられる。炭化物を含む。
- 第⑰層 淡黃灰色細砂質土層 細砂。鉄分が若干みられる。
- 第⑱層 白灰色細砂層 細砂。下部に暗灰色シルトを層状に含む。しまりは良い。鉄分がみられる。ラミナが顕著にみられる。第3遺構面土坑状遺構の埋土。
- 第⑲層 暗褐色粘性砂質土層 極細砂～中砂。炭化物含む。第3遺構面土坑状遺構の埋土。
- 第⑳層 明褐橙色礫混じり粘性砂質土層 粘土～細砂。径5cm程度の礫を含む。鉄分がみられる。
- 第㉑層 暗褐色粘性砂質土層 極細砂～中砂。炭化物含む。畦畔2。
- 第㉒層 灰色粘土層 粘土。しまりは良い。
- 第㉓層 黄緑灰色シルト層 シルト～粘土。しまりは良い。
- 第㉔層 灰色粗砂混じり粘性砂質土層 極細砂～粗砂。畦畔1。
- 第㉕層 黄灰色砂質土層 細砂～中砂。畦畔1。
- 第㉖層 暗黃灰色粘質土層 粘土・細砂。ラミナがみられる。径10cmの礫を含む。植物遺体を含む。SR02の埋土。
- 第㉗層 黒色粘土層 粘土。粘性が強い。植物遺体を含む。SR02の埋土。
- 第㉘層 淡灰色細砂質土層 細砂。ラミナが若干みられる。
- 第㉙層 黒灰褐色粗砂混じり粘性砂質土層 極細砂～粗砂。しまりは良い。第32層によく似ているが、粗砂が多い。
- 第㉚層 淡黃灰色粗砂混じり砂質土層 極細砂～細砂。淡灰色粘性砂質土ブロックが含まれる。しまりはやや悪い。SX02の埋土。
- 第㉛層 暗灰色粘性砂質土層 極細砂～中砂。径15cm以下の礫を含む。SX02の埋土。
- 第㉕層 黑灰色粗砂混じり粘性砂質土層 極細砂～粗砂。しまりは良い。
- 第㉖層 暗灰色粘土層 粘土。しまりは良い。SK03の埋土。
- 第㉗層 暗黃灰色粗砂混じり砂質土層 中砂～粗砂。暗灰色粘土を層状に含む。SK03の埋土。
- 第㉘層 暗褐色粗砂混じり粘性砂質土層 極細砂～細砂。しまりは良い。
- 第㉙層 暗灰色礫混じり砂質土層 細砂～粗砂。径15cm以下の礫を多く含む。ラミナが若干みられる。しまりはやや悪い。SR02の埋土。刀装具・土器・牛の臼歯・自然木などが出土した。
- 第㉚層 黑灰色粘土層 粘土。しまりは良い。SR02の埋土。北壁の第㉖層・第㉗層に対応する。
- 第㉛層 明茶灰色粗砂混じり砂質土層 細砂～粗砂。暗灰色砂質土ブロックを含む。ラミナが顕著にみられる。しまりは悪い。SR02の埋土。
- 第㉜層 暗灰茶色砂質土層 細砂～粗砂。径10cm以下の礫を含む。やや粘性がある。鉄分が斑状にみられる。SR03の埋土。
- 第㉝層 淡黃灰色砂層 中砂～粗砂。径20cm程度の礫を多く含む。暗灰色粘性砂質土ブロックを含む。ラミナが顕著にみられる。しまりはやや悪い。SR03の埋土。

第⑪層 黒灰色粘土層 粘土。S R 03の埋土。

第⑫層 黄灰色砂層 細砂～中砂。S R 03の埋土。

第⑬層 暗黄灰色粗砂混じり粘性砂質土層 粘土～粗砂。径5cmの礫を含む。粘性が強い。ラミナがみられる。S R 03の埋土。

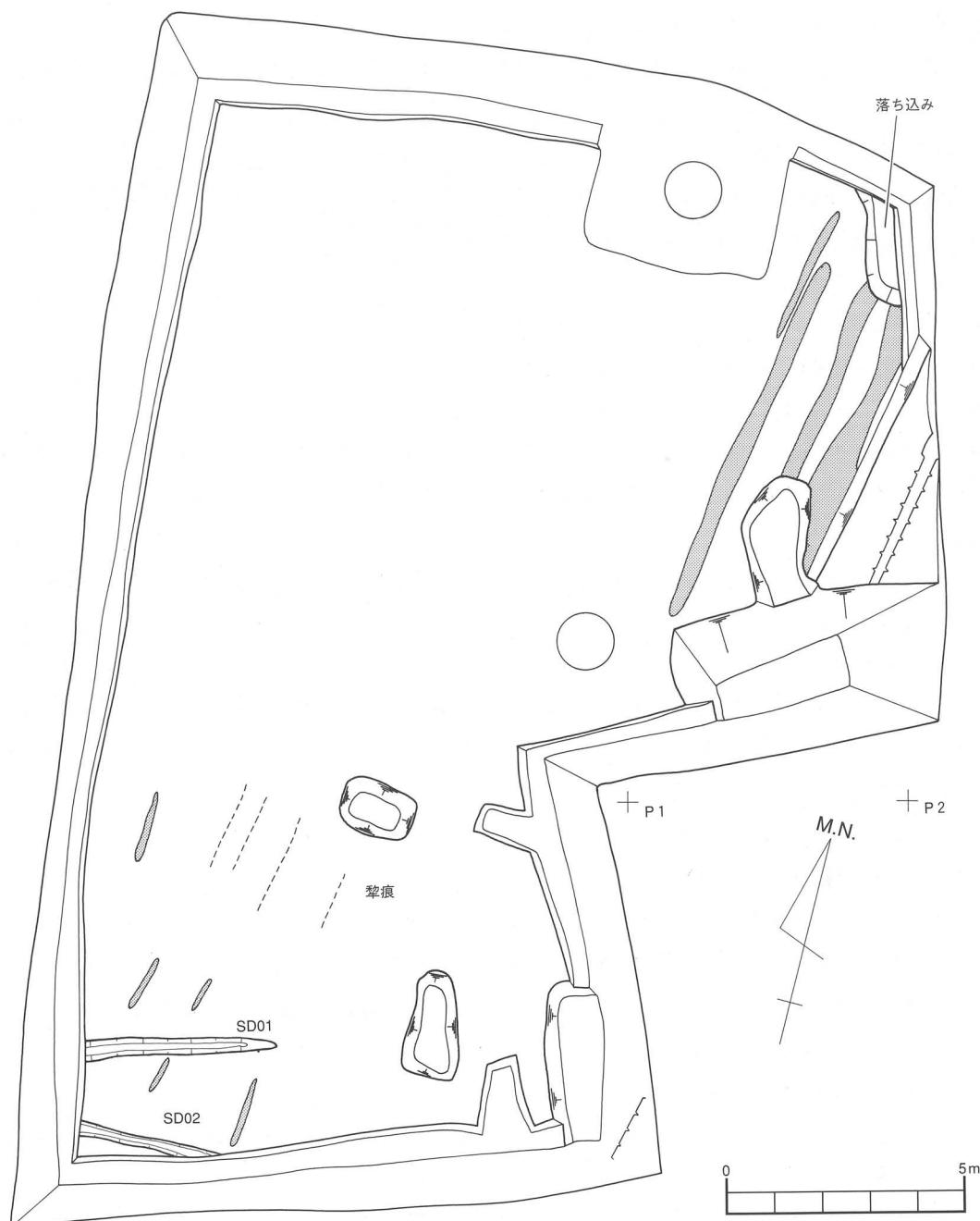
第⑭層 明黄橙色砂礫層 極細砂。径20cm以下の礫を多く含む。鉄分を多く含む。

(竹村)

3) 検出遺構

①第1遺構面

第5層に覆われ、第6層をベース層とする遺構面である（第122～125図）。残土の搬出に手間どつたために、機械掘削が終了していない北半部は遺構を検出することができなかった。遺構には、溝2



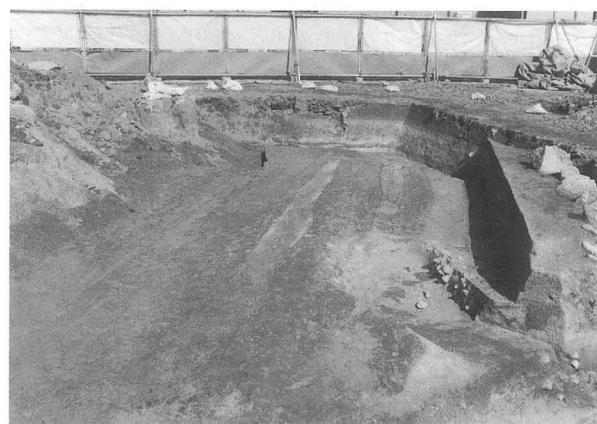
第122図 第1遺構面平面図（網点部分は犁痕） 1/150



第123図 第1遺構面全景（北から）



第124図 SD01・02検出状況（南から）



第125図 調査区北東部犁痕検出状況（南から）

条（SD01・02）、落ち込みと犁痕がある。

溝 SD01・02は、調査区南西部で検出された東西方向に走る溝である（第122・124図）。SD01は磁北より73° 東偏して走っており、幅40cm、深さ6cmを測る。東端は検出されたが、西側は調査区外までのびており、長さは不明である。埋土は、白黄灰色砂層（第⑧層）である。SD02は磁北より83° 東偏し、幅28cm、深さ4cmを測る。調査区外までのびており、全体は不明である。埋土は、白黄灰色砂層（第⑧層）である。

落ち込み 落ち込みは、調査区北東隅で検出された。大半が調査区外となっているため、遺構の全体を検出することができなかったが、不整形である。深さは3cm程度で浅い。埋土は明黄色粗砂混じり粘土層（第①層）である。

犁痕 調査区南西部では南北方向に走向する犁痕が検出されてた。走向は磁北より1°30'～4°

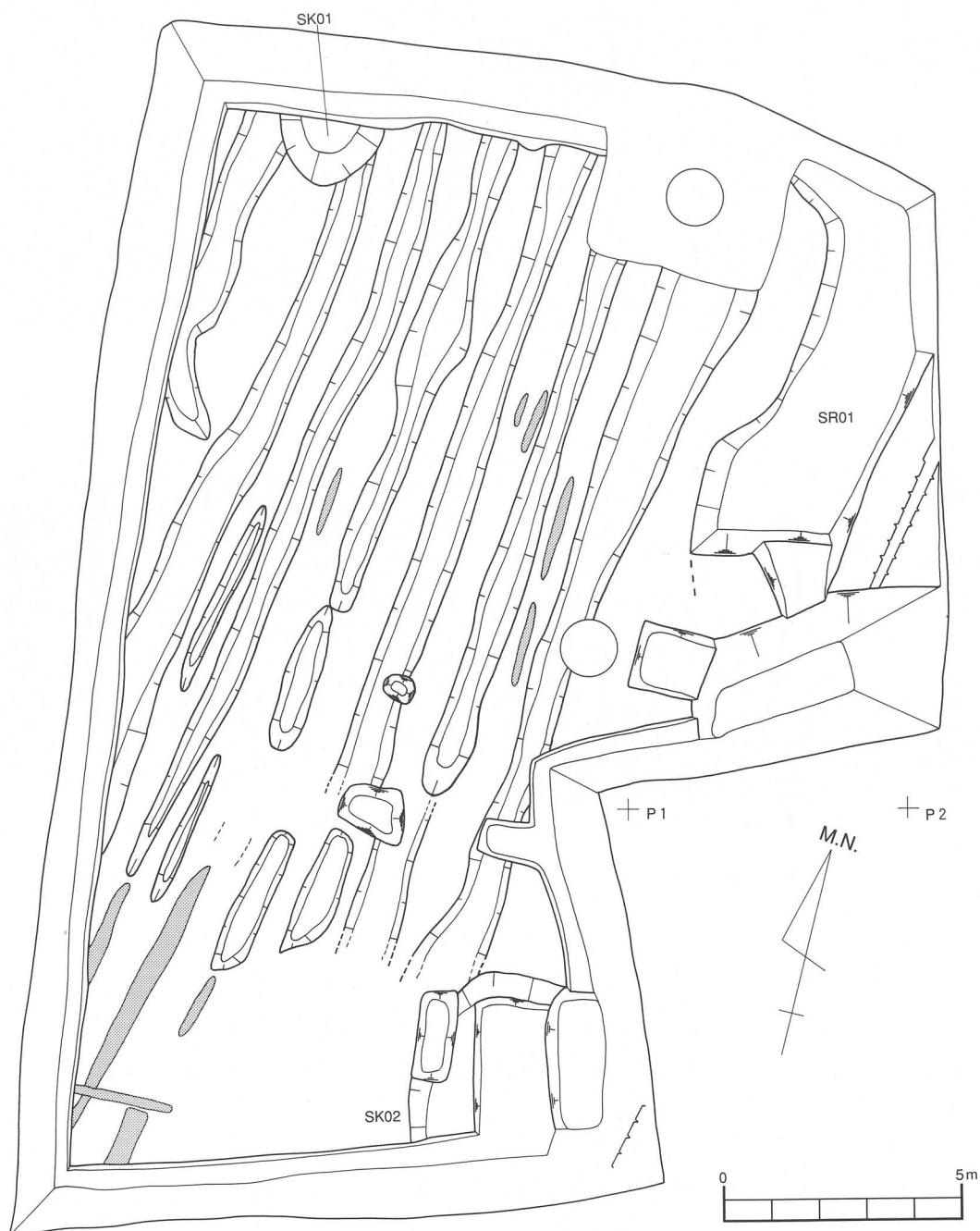
東偏するものと13~15° 東偏するものに分かれる。犁痕は白っぽく筋状に検出され、遺構の肩は不明瞭である。その幅は、10cm前後である。また、調査区北東部では、磁北より9°~10° 東偏し、南北方向に走向する犁痕が検出された。幅は40cm前後であり、南西部のものより幅が広い。

当遺構面の時期は、遺構面の覆土層とベース層に包含される土器から室町時代後半（16世紀代）であると判断される。

②第2遺構面

第6層に覆われ、第7層をベース層とする遺構面である（第126~131図）。調査区全面で、南北方向に走る耕作溝が検出された。また、土坑2基（SK01・02）、流路1条（SR01）が検出されている。

耕作溝 耕作溝は、走向が磁北より3°~9° 東偏し、西に行くほど磁北からずれる角度は大きく



第126図 第2遺構面平面図（網点部分は犁痕） 1/150



第127図 第2遺構面全景（南東から）



第128図 耕作溝（北から）



第129図 耕作溝埋土土層（南から）



第130図 SK02（南東から）



第131図 SR01（北から）

なっている（第126～129図）。幅は50～100cm程度であり、深さは8cmを測る。埋土は第6層（灰色砂質土）である。この耕作溝は、畠畝の下部と考えられる。

土坑 SK01は、調査区北西部で検出された（第126図）。遺構の北半部は調査区外となっているが、楕円形を呈すると推測される。東西径が254cm、深さ30cmを測る。埋土は、ラミナが認められる白黄色砂層（第13層）である。

SK02は、調査区南東隅で検出された（第126・130図）。遺構の半分以上が調査区外となっており、遺構全体を検出することができなかった。深さは47cmを測る。埋土は、灰褐色粗砂混じり粘土層（第7層）である。SK01・02はいずれも耕作溝を切っていることから、それより新しい遺構である。

流路 調査区北東部では、南流する流路SR01が検出された（第126・131図）。調査区では西肩のみ検出された。幅は5.5m以上、深さは40cm以上を測る。第10-2地点で検出された当流路の東岸と合わせて検討すると、流路の幅は25m程度になる。埋土からは土器のほか牛の臼歯が出土している。調査ではSR01が人工流路であるか、自然流路であるかを判断することができなかったが、第2遺構面を検出するために掘削している時に、当流路西肩に沿って高まりがあった。記録ができていないので根拠に乏しいが、この高まりは堤であった可能性がある。埋土からは、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼）・瓦が出土している。

当遺構面の時期は、遺構面の覆土層とベース層に包含される土器から、室町時代後半（16世紀代）であると判断される。

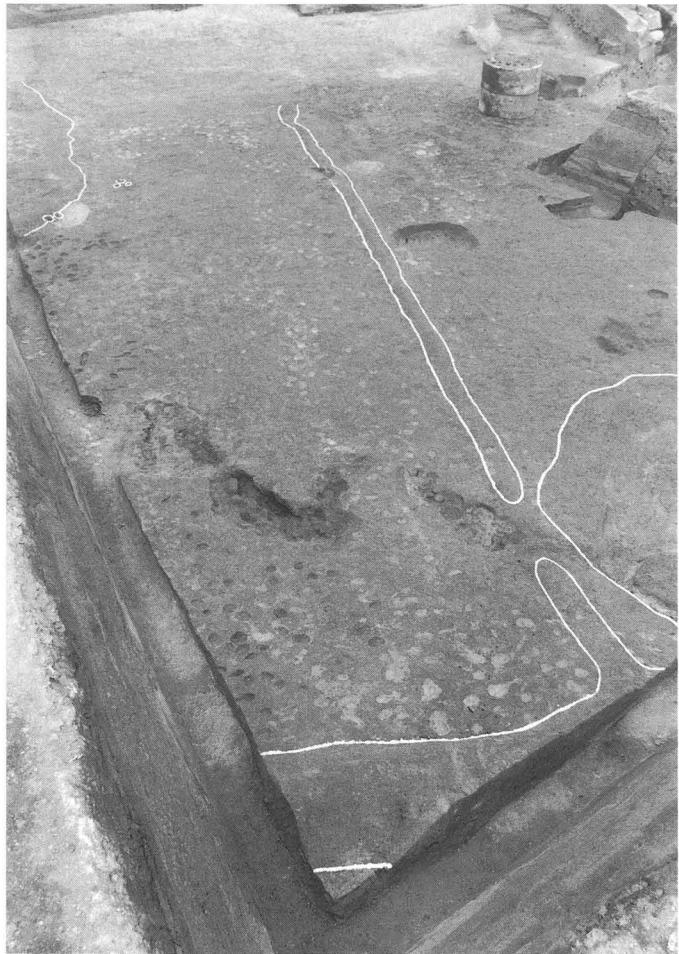
③第3遺構面

第7層に覆われ、第8層をベース層とする遺構面である（第132～138図）。水田の畦畔を3条検出した。水田畦畔には、大畦畔（畦畔1・2）と小畦畔（畦畔3）がある。

畦畔 畦畔1は調査区西壁に沿って磁北より3°西偏して南北方向に走っており、その西半部は調査区外となっている（第138図）。南部で調査区外に向かって、西方に屈曲する可能性がある。断面は台形を呈し、基底部の幅は140cm以上、高さ13cmを測る。畦畔1の南部では、直径10cm程度の杭が5本打ち込まれていた。

畦畔2は調査区南西隅で検出されており、磁北より83°西偏し東西方向に走っている（第132・134・135・138図）。断面は台形を呈し、基底部の幅は130cm、高さ21cmを測る。畦畔1と畦畔2は走行方向から、調査区外で直交すると推測される。土師器・須恵器・瓦質土器・磁器（青磁）が出土している。

畦畔3は、畦畔2より北へのびる小畦畔で



第132図 第3遺構面畦畔（南西から）



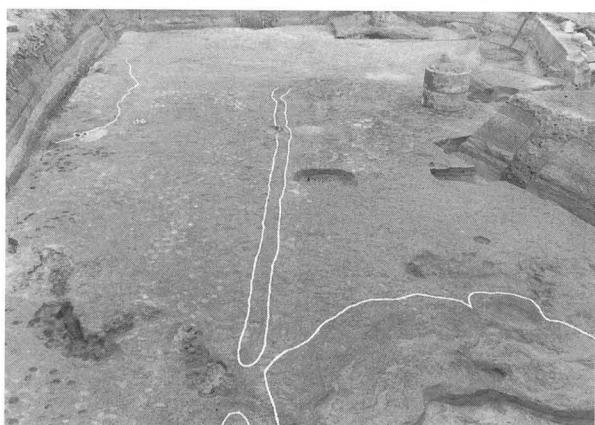
第133図 第3遺構面全景（南東から）



第134図 畦畔2・3（西から）



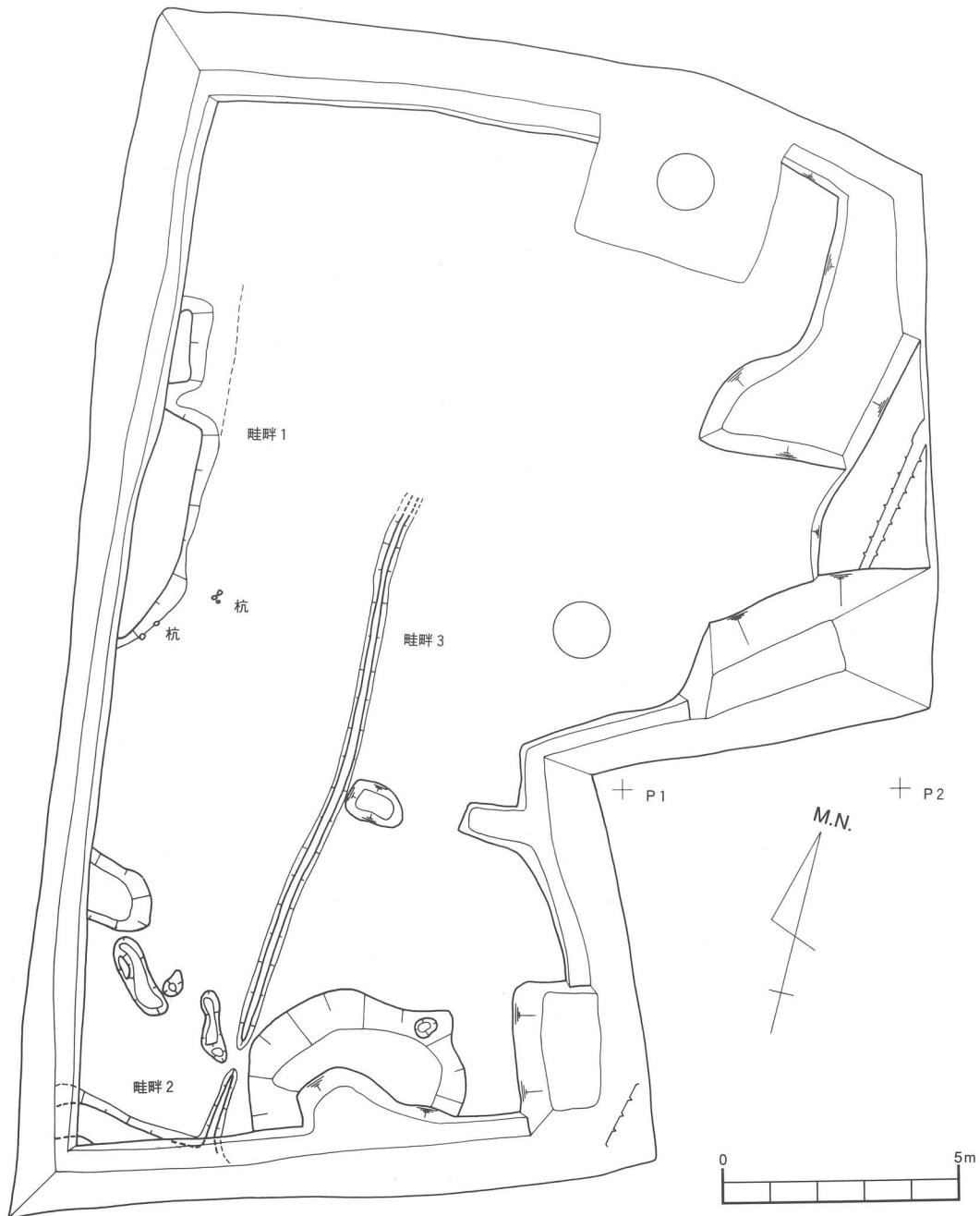
第135図 畦畔2土層断面（東から）



第136図 畦畔3（南から）



第137図 足跡検出状況（北から）



第138図 第3遺構面平面図 1/150

ある（第132・133・136・138図）。基底部の幅24cm、高さ8cmを測る。畦畔2基底部から北へ14.1mの付近で肩が不明瞭になった。畦畔3の南部には水口が設けられており、幅42cm途切れている。

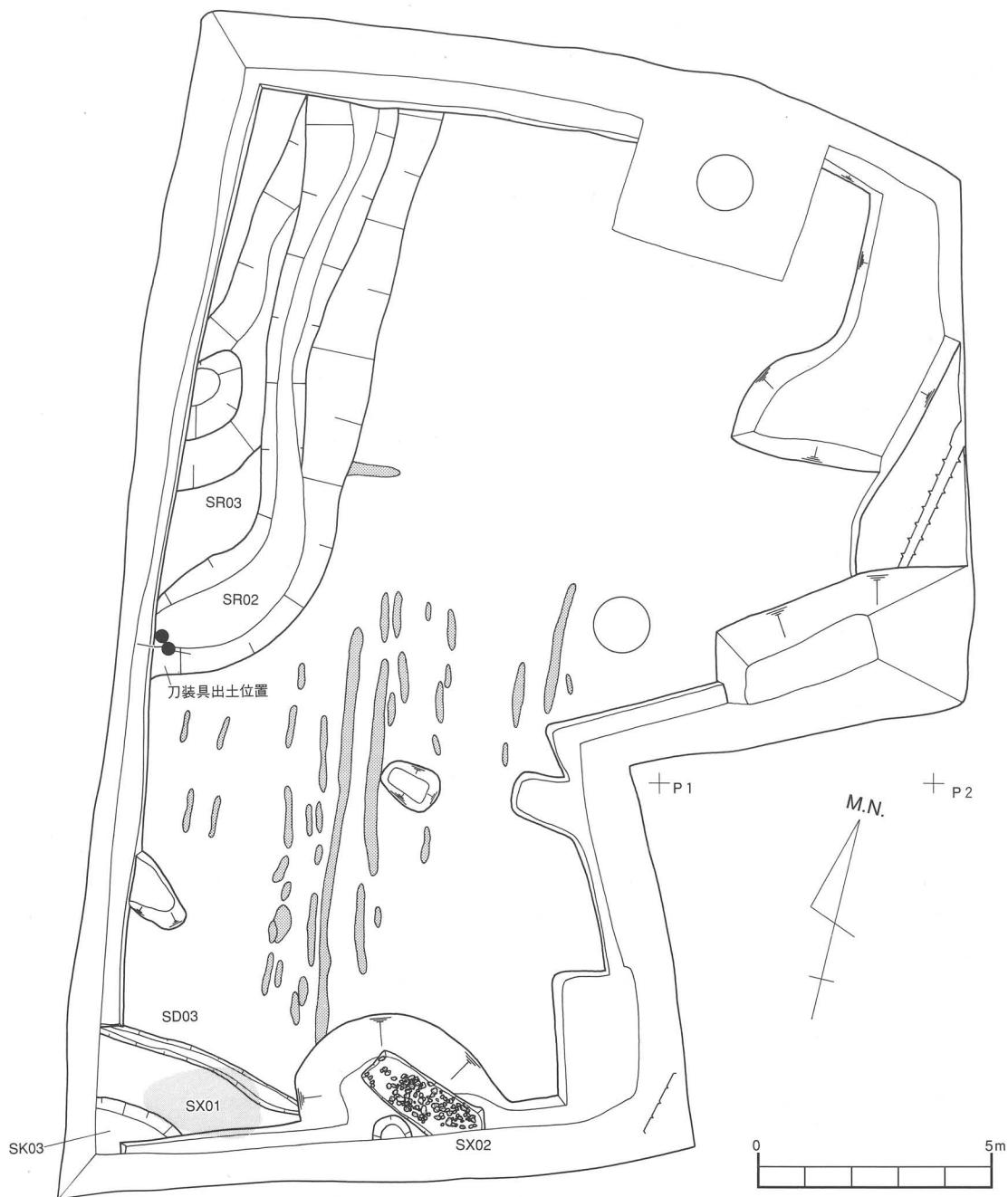
調査区南部には、粘土ブロックを多く含む5基の土坑状の遺構がある。当遺構からは土師器と須恵器片が出土している。

調査区南西部では第7層の白黄色砂層が埋土となる人と牛の足跡が良好に遺存していた（第137図）。

当遺構面の時期は、遺構面の覆土層とベース層に包含される土器と第4遺構面に15世紀代の遺物がみられることから、室町時代（15世紀代）であると判断される。

④第4遺構面

第8層に覆われ、第9層をベース層とする遺構面である（第139～153図）。土坑1基（SK03）、溝1条（SD03）、流路2条（SR02・03）、性格不明の遺構2基（SX01・02）、南北方向の犁痕が検



第139図 第4遺構面平面図（網点部分は犁痕） 1/150

出された。

土坑 SK03は、調査区南西隅で検出された（第139・141図）。大半が調査区外となっており、遺構全体を検出することはできなかった。深さは26cm以上である。埋土は、上層の暗灰色粘土層（第33層）と下層の暗黄灰色粗砂混じり砂質土層（第34層）の2層である。

溝 SD03は、調査区南西隅から畦畔2とSX01の下から検出された（第139・141図）。磁北より81°西偏し、東西方向に走る。幅30cm、深さ16cmを測る。埋土は暗灰色粘性砂質土層（第8層）である。

流路 SR02・03は、調査区北西部で検出された（第139・142～144図）。重複して南流し、調査区半ばで西方へ屈曲する。切り合い関係からは、SR03の方が古く、SR02の方が新しい。SR02は、幅2.5m前後、深さは北側の方が深く59cmを測り、南側では19cmとなっている。埋土には砂層と粘土



第140図 第4遺構面全景（南から）



第141図 SK03・SD03（東から）



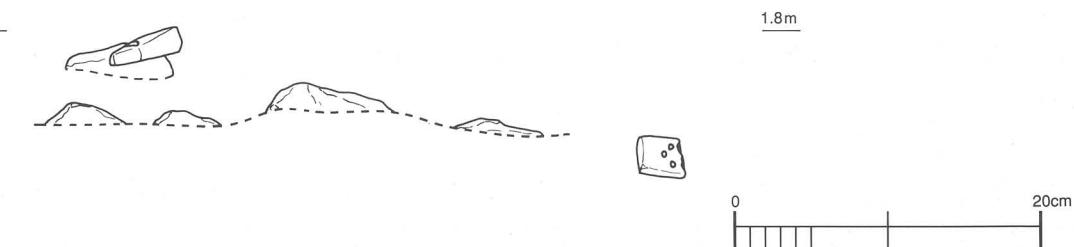
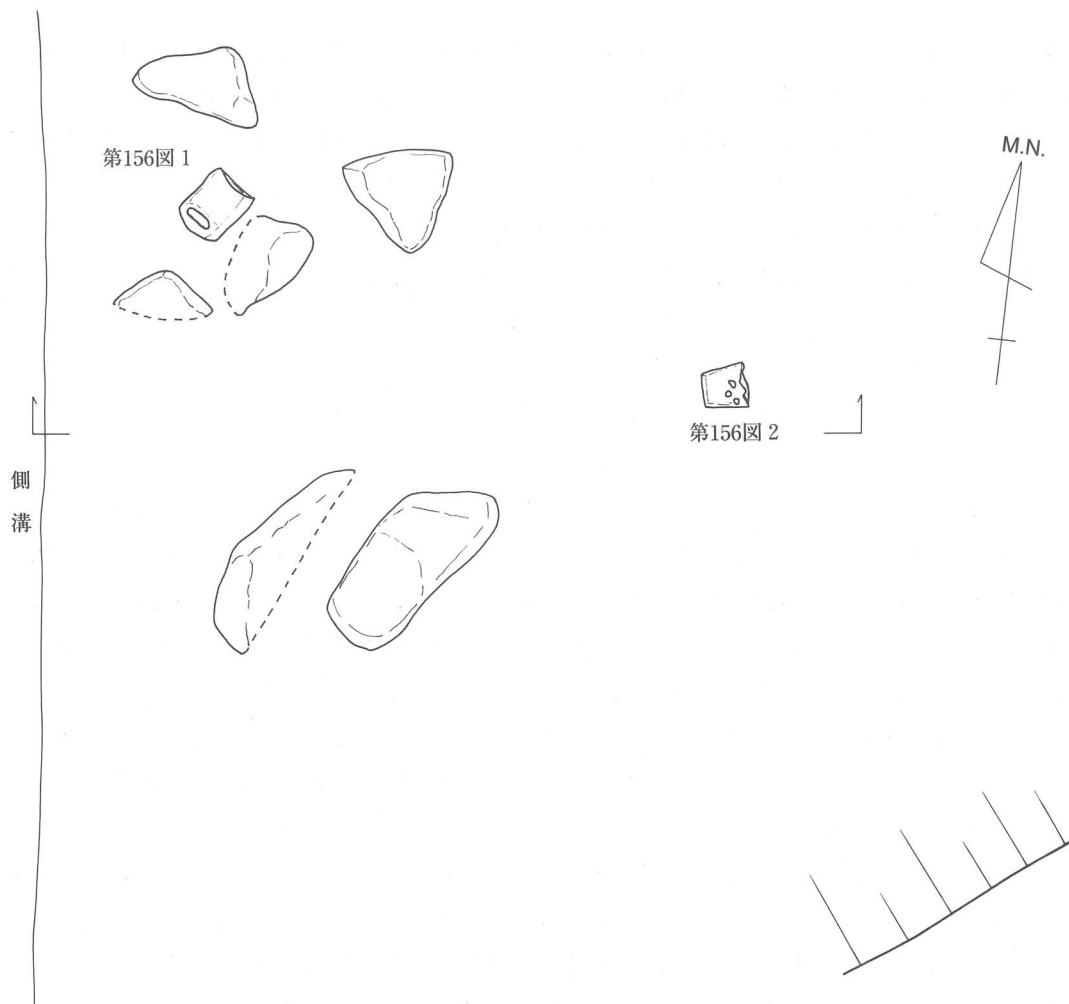
第142図 SR02・03（南から）



第143図 SR02土層断面（東から）



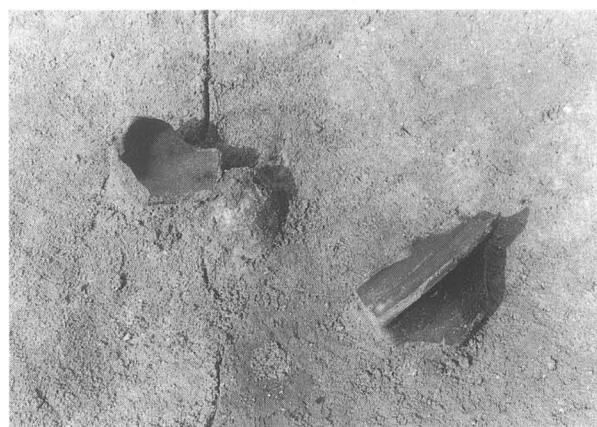
第144図 SR03土層断面（東から）



第145図 SR02刀装具出土状況 1/5



第146図 SR02刀装具出土状況（南から）



第147図 SR02土器出土状況（南から）

がみられ（第②⑥・②⑦・③⑥～③⑧層）、水が流れていた時と滯水していた時があるようである。埋土からは、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器が出土している（第147図）。土器のほかに刀装具である柄頭1点、鞘尻1点が出土している（第145・146図）。また、牛の臼歯をはじめ、牛骨が多数出土している。S R02の埋没時期は、出土した土器から15世紀頃のものであることがわかる。

S R02に削られているS R03は、幅2.8m、深さ45cmを測る。当流路もS R02と同じく埋土に砂層と粘土層がみられ（第③⑨～④③層）、流水期と滯水期があったと推測される。埋土からは、土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼）・瓦が出土している。当流路からも牛骨が出土している。出土した土器から15世紀頃のものであることがわかる。

なお、今回の調査では、これら2条の流路が人工のものなのか、自然のものなのかを確定させることができなかった。

性格不明の遺構 調査区南西部では、第8層上面において焼骨の細片や炭化物が集中した状況で検出された（第139・148・149図）。明瞭な肩は確認されていないが、性格不明の遺構としてS X01と名付けた。S X01はおおよそ長軸2.7m、短軸1.5mの楕円形の範囲で炭化物が多く分布しているものである。当遺構には焼骨の細片が多く認められ、その中にはシカの骨が含まれる（奈良国立文化財研究所、現奈良文化財研究所 松井章氏の御教示）。当遺構では、焼土面や焼土などは確認されていない。

調査区南部で検出されたS X02は長方形を呈するが、南部は調査区外となっており検出することができなかった（第139・150～153図）。そのため、土坑となるのか、溝の一部となるのか、その性格は不明である。幅は96cmを測り、長さは2.7m以上となる。埋土からは、焼骨の細片1点と炭化物が出土している。また、土師器・須恵器・サヌカイト剥片が出土した。底には、径10～20cmの礫がみられた。底に礫が多くみられる状況は、第10-2地点・第17地点のS D01とよく似ている。

犁痕 犁痕は、調査区南半で検出された。磁北より3°～15°西偏し、南北方向に走る。また、磁北より79°東偏する東西方向の犁痕が、1条のみ検出されている。当遺構面のベース層である第9層は砂層であり耕作面とはならないと推測されることから、これらの犁痕は第8層上面より刻まれたものであると考えられる。

当遺構面の時期は、遺構面の覆土層とベース層に包含される土器から、室町時代（14～15世紀代）であると判断される。

⑤深掘トレンチ

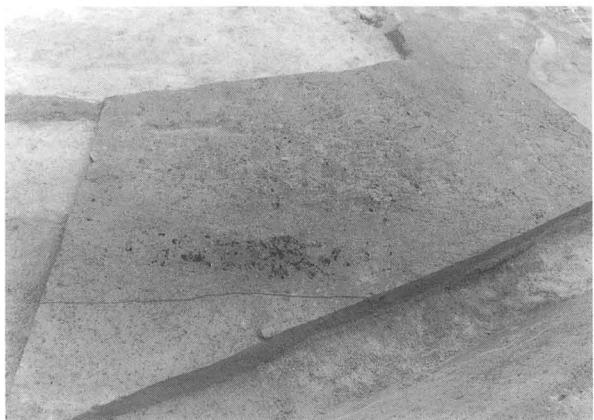
第4遺構面より深部については、遺構面や遺物包含層の有無を確認するために、調査区中央部に南北方向に幅2mの深掘トレンチを設けた（第154・155図）。第4遺構面検出面より1mの深さまで掘削し、厚い砂層が検出された。砂層にはラミナが認められ、洪水堆積物であると推測される。弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式）の土器を含んでいることと、須恵器がまったく含まれていなかったことから、弥生時代頃の洪水砂であると考えられる。 （竹村）

4) 出土遺物（第156～158図）

コンテナ3箱分の遺物が出土した。その大半は中世の耕作土中に含まれていたものであったため、細片が多い。第5層では細片のため図化できていないが、土師器・陶器片が出土している。陶器の中には備前焼擂鉢が含まれる。包含遺物の中心時期は、16世紀代になると考えられる。

①刀装具（第156図）

S R02から2点の刀装具が出土した。1は柄頭で、銅製である。厚さ約1mm以下の銅板を曲げて製作されている。先端部および側面の一方には、銅板の接合部が認められる。表裏には、同じ意匠の透かしが施される。



第148図 SX01検出状況（南から）



第149図 SX01検出状況（西から）



第150図 SX02検出状況（北西から）



第151図 SX02埋土土層断面（北西から）



第152図 SX02完掘状況（北西から）



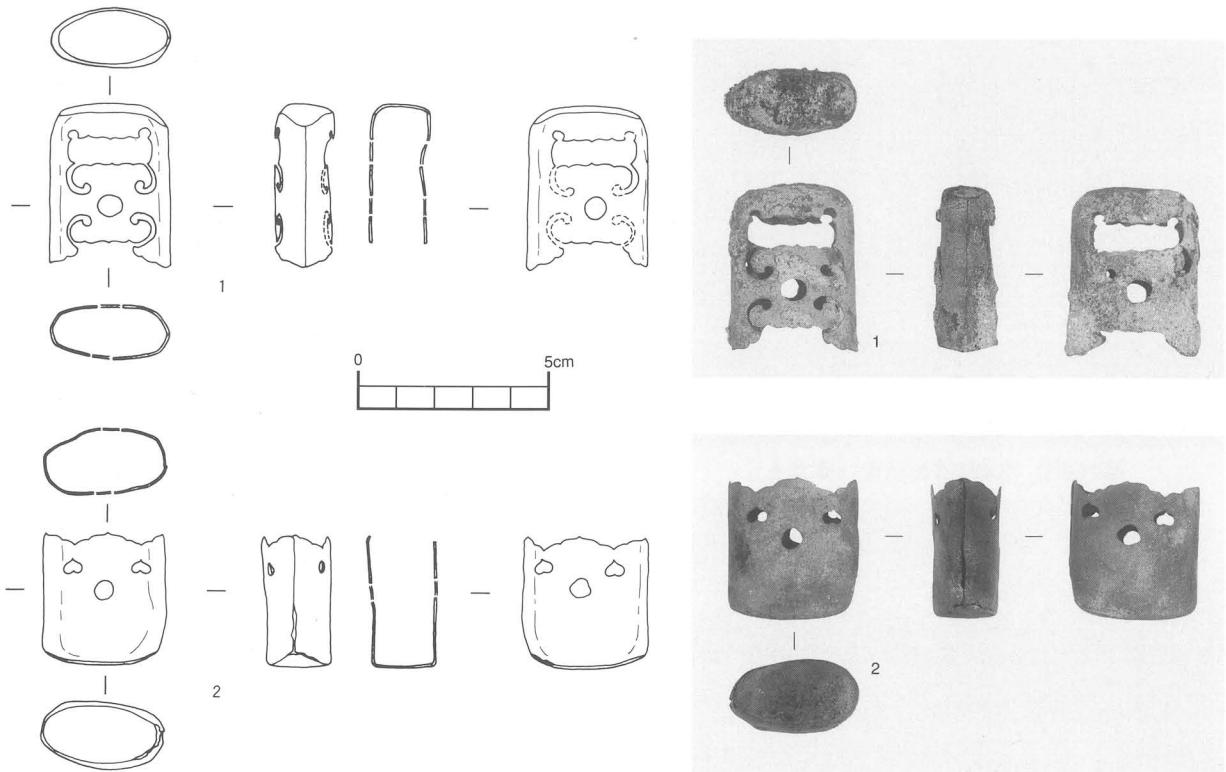
第153図 SX02完掘状況（北東から）



第154図 深掘トレンチ（南東から）



第155図 深掘トレンチ第9層土器出土状況（北西から）



第156図 出土遺物実測図(1) 1/2

2は鞘尻で、鉄製である。鞘の反りに合うようにつくられており、線対称ではない。厚さ1mm以下の鉄板から製作されている。先端部および側面の一方には、銅板の接合部が認められる。表裏には、同じ意匠の透かしが施される。

SR02からはこれらの刀装具に伴って14世紀代の瓦質羽釜が出土しており、刀装具の時期を示すものと考えられる。

②第6層出土土器（第157図）

土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼）・磁器（白磁・青磁）・瓦が出土している。

3は高台を付ける須恵器杯身の底部である。器表はローリングを受けている。4は平底の須恵器の底部である。胴部はロクロ回転ナデで成形され、底部はヘラ切り未調整である。

5は端反りの白磁皿である。施釉により青みがかった白色を呈する。高台疊付および高台内は露胎にし、淡橙色を呈する。16世紀頃のものであろう。

6は陶器の口縁部で、強いロクロ回転ナデにより、屈曲しながら立ち上がる。口縁端部は水平な面をもつ。丹波焼の可能性がある。7は備前焼擂鉢の底部である。

8は土師質の管状土錐である。9・10は平瓦片である。凹面に布目の圧痕がみられる。凸面はナデで仕上げられている。中世瓦であろう。

第6層出土土器の中心時期は、16世紀代と考えられる。

③SR01出土土器（第157図）

弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼）・埴輪・瓦が出土している。

11は高台を付ける須恵器杯身の底部である。12は土師器小皿である。13は東播系須恵器の捏鉢である。口縁部は直線的で、口縁端部は上下方向に拡張が認められる。14世紀前半のものである。

14は形象埴輪、15は円筒埴輪の破片である。

④第7層出土土器（第157図）

土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼）・磁器（白磁・青磁）・瓦が出土している。

16は須恵器杯蓋であり、口縁部内面にかえりを有する。復元口径は16.7cmを測る。中村編年Ⅲ型式Ⅱ段階に比定される。17は土師器小皿である。口縁部に炭化物が付着しており、灯明皿として使用されていたと推測される。18は白磁碗の口縁部である。

19・20は土師質の土壙で、口縁部に突帯を貼り付ける。19は突帯以下に煤が付着する。

21は瓦質の羽釜である。口縁部はやや内傾し、外面は段により成形される。口縁端部は面をもつ。胴部外面には鍔の下端までヘラケズリが右から左方向へ施される。内面は口縁部までヨコハケが施される。内面には口縁端部まで炭化物が付着している。

第7層出土土器の中心時期は、14～15世紀代である。しかし、下層の第8層の中心時期が14～15世紀代となっており、当層の堆積時期は15世紀代と考えられる。

⑤第8層出土土器（第157図）

土師器・須恵器・陶器（備前焼）・磁器（白磁・青磁）・埴輪・蛸壺・瓦が出土している。

22は土師器杯である。器表はローリングを受けている。23～29は土師器小皿である。28の口縁部には炭化物が付着しており、灯明皿として使用されている。30は土師器皿である。復元口径は13.3cmを測る。

31は口縁部に突帯を貼り付ける土師質の土壙で、口縁端部は外方に肥厚し端面を形成する。32は瓦質羽釜で、口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁部外面はヨコナデによって段が形成される。内面には粗いハケが施される。鍔下面は煤化している。

33は東播系須恵器捏鉢である。口縁部は外反し、口縁端部は上下方向に拡張させ、内面に折り込むように肥厚させておさめる。14世紀代のものである。

34は白磁皿である。外面上半および内面は施釉され、白色を呈する。体部下半は露胎にする。口縁端部に面をもつ。35は青磁碗の口縁部である。色調は灰緑色を呈する。36は外面に細蓮弁文が施される青磁碗である。15世紀代のものと考えられる。

37は朝顔形埴輪の口縁部である。38は、土師質の釣鐘形の蛸壺である。39は平瓦片である。器表はローリングを受けている。

第8層出土土器の中心時期は、14～15世紀代である。

⑥畦畔2出土土器（第157図）

土師器・須恵器・瓦質土器・磁器（青磁）が出土している。

40は口縁部に突帯を貼り付ける土師質の土壙である。内面に粗いヨコハケが施される。

⑦S R 02出土土器（第157図）

弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器が出土している。

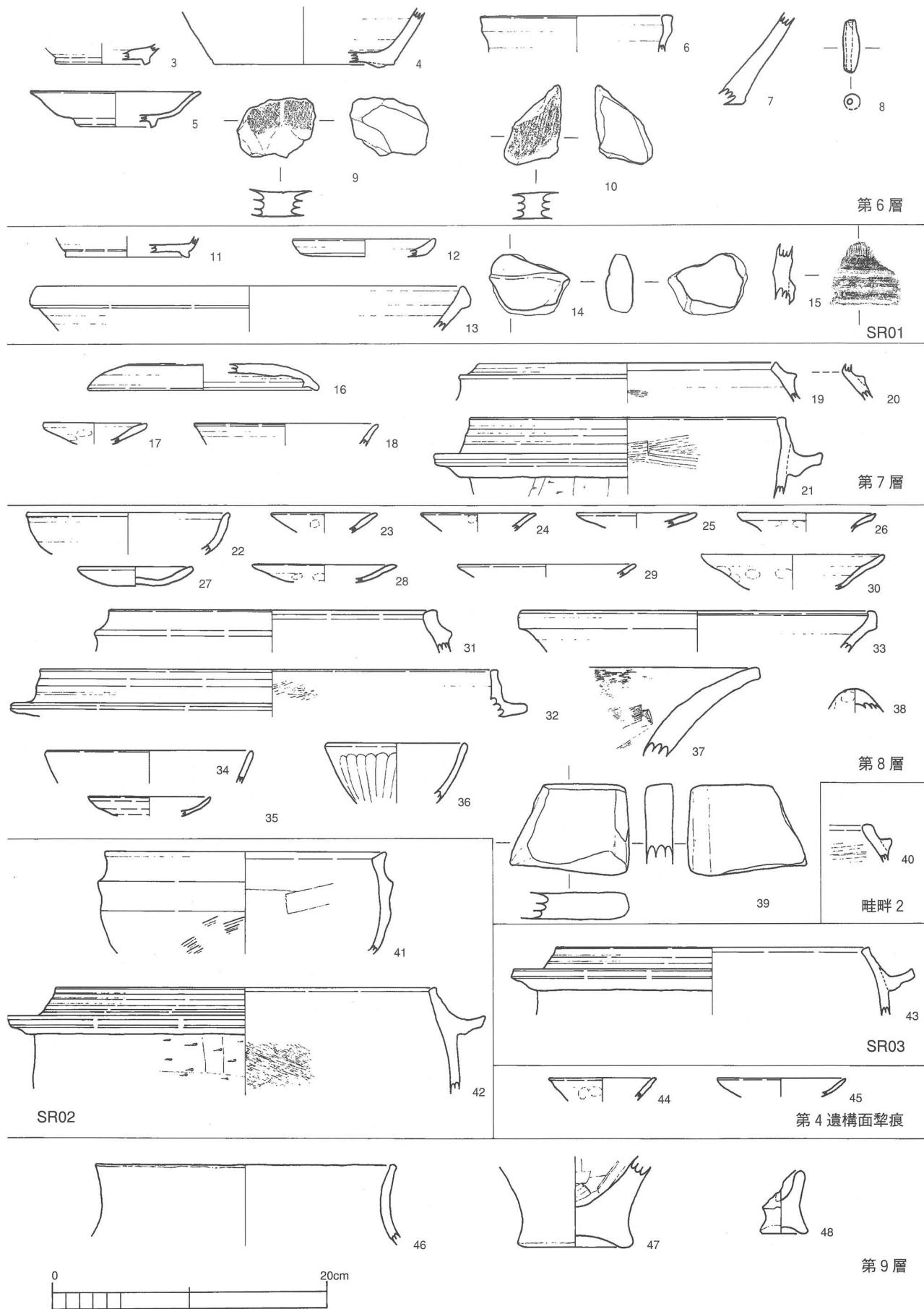
41は土師質の土壙で、口頸部に強いヨコナデを施すことによって稜が形成されている。口縁端部は内傾する平坦面をもつ。胴部には、右上がりのタタキが施される。内面は板ナデが施されている。口縁部内面は、ヨコナデが施されることによって板ナデが消されている。外面には煤が顕著に付着している。

42は瓦質羽釜である。内傾して立ち上がる口縁部外面には段が形成されている。胴部にはヘラケズリが左から右方向へ施される。内面には左上がりの細かいナナメハケが施され、口縁部内面はヨコナデが施されることによって、ハケ目は消される。14世紀代のものであろう。

⑧S R 03出土土器（第157図）

土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼）・瓦が出土している。

43は瓦質羽釜である。口縁部はやや内弯しながら立ち上がる。口縁部外面には、段が形成される。



第157図 出土遺物実測図(2) 1/4

胴部はヘラケズリが施される。14世紀代のものであろう。

⑨第4遺構面犁痕出土土器（第157図）

土師器・須恵器・瓦質土器・磁器（白磁）が出土している。44は土師器小皿である。45は白磁皿である。

⑩第9層出土土器（第157図）

縄文土器・弥生土器が出土している。

46は縄文土器深鉢である。肩部で緩やかに屈曲して、外反する口頸部をなす器形になると考えられる。口縁端部に面をもつ。滋賀里Ⅲ b式に比定される。

47は、弥生土器壺の底部である。48はミニチュア土器である。北方に位置する若宮遺跡第2地点の出土遺物との関係から、畿内第Ⅰ様式新段階もしくは第Ⅱ様式のものであると推測される。

⑪第6層出土石製品（第158図）

49は不明石製品で、赤色の砂岩製である。突起部をもち、その両側は研磨による擦痕が観察される。小口面には擦痕を伴う溝が認められる。

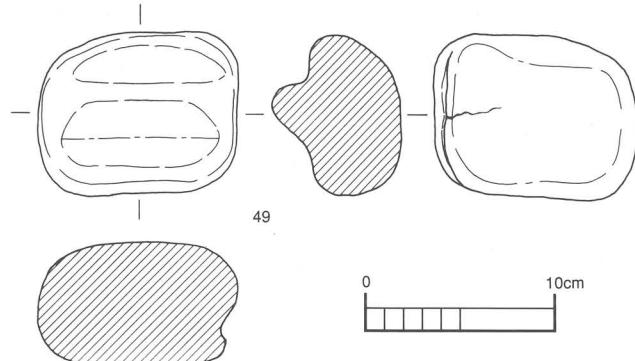
（竹村）

5) 小結

当地点の調査によって、若宮遺跡の分布範囲が国道43号線付近まで確実に広がっていることが確認された。調査では4面の遺構面が検出された。第1遺構面では、室町時代後半（16世紀代）の耕作に関連する遺構などが検出された。第2遺構面では、室町時代後半（16世紀代）の耕作に関連する遺構が検出された。第3遺構面では、室町時代（15世紀代）の耕作に関連する遺構が検出された。第4遺構面では、室町時代（14～15世紀代）の耕作に関連する遺構が検出された。これらの遺構面から、調査地周辺は14世紀頃から耕作地として開発・利用されたと推測される。また、耕作土は洪水砂層に覆われており、洪水により耕作地が幾度も被害を受けていたことがわかる。第4遺構面で検出された流路S R 02・03は、当該地が耕作地になる以前の遺構である可能性がある。S R 02からは刀装具や牛骨が出土している。

第9層は弥生時代に堆積した砂層であり、当地が河川が供給する砂が堆積する場であったことがわかる。第9層以深は確認できなかったが、第10-2地点では遺物を含まない粘土・シルト層が確認されており、当調査地もおそらくこれらの層が連続して広がっていると推測される。このことから、若宮遺跡第1～4地点で検出された縄文時代晚期後半および弥生時代中期初頭の遺構の分布は、当地点にまで広がらないと判断される。

（竹村）



第158図 出土遺物実測図(3) 1/4

4 第10-2地点の調査

1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法

第10地点は、鉄筋コンクリート造4階建である市営若宮町住宅（3号棟）の建設によって遺構面・遺物包含層の損壊を回避することができないため、記録保存を目的とした事前の発掘調査が必要となった。しかし、第Ⅲ章第3節でも述べたとおり、事業計画の関係で建物建設による損壊範囲の全域を一度に発掘調査することができなかつたため、損壊範囲を東西に分けて発掘調査することとなり、西側のものを第10-1地点、東側のものを第10-2地点とした。本節では第10-2地点について報告する。調査期間は平成11年4月26日から5月31日までとし、東側に隣接する第17地点の発掘調査も併行して実施することとなった。本調査は阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、「基本方針」に基づいている。

発掘調査の範囲については「基本方針」にしたがい、遺構面・遺物包含層が損壊を受ける範囲（147.2m²）に限定した（第116図）。調査深度は、工事による掘削深度である現地表面より2.5mの深さまでとした。基準高は、本市道路課設置のマンホール上面基準高（T.P.3.50m）より得た。遺物包含層数・遺構面数などの基礎データは、平成10年8月18・19・24日に実施した確認調査の結果および隣接する第10-1地点の発掘調査結果から得た。

掘削の方法は、近世以降の堆積土層（第4層まで）を重機により掘削した。第5層からは、人力により一層ずつ掘削した。残土は敷地内に仮置きした。

遺構面は、中世の耕作面が3面検出された。さらに深掘トレンチを設定したところ、自然堆積層である灰色・黒色粘土層が検出された。
(竹村)

2) 層序（第161～165図）

本調査地点は、第10-1地点の東側に隣接しており堆積環境は同じである。近代以前の耕作面（第2層上面）では、両地点の間を流れる流路S R01を境として本地点の方が低くなっていた。おそらく、西が高く東が低い自然地形に耕作地が開発された結果、S R01を境として段差が設けられたためと考えられる。

確認調査の結果をもとに近世の耕作土である第4層までを重機で掘削し、同時に第1遺構面を検出した。したがって第1～4層はいずれも耕作土と考えられるが、包含される遺物や各層の境界面にあった遺構の詳細は確認していない。

第4層は、第1遺構面を覆っている。極細砂～細砂からなっており、鉄分を多く含んでいる。畠の



第159図 調査風景（南東から）



第160図 浜風小学校生徒の調査見学風景

耕作土であろう。調査区北壁西半では、第4層と第1遺構面である第5層上面との間に第15層（黄白色砂層）が挟まれている。S R01の埋土である第14層と連続しており、S R01から供給された砂である。第5層は、第1遺構面のベース層である。やや粘性があり、鉄分を若干含んでいる。水田耕作土と考えられる。第1遺構面では、犁痕が検出されている。ベース層である第5層には16世紀代の遺物が含まれていることから、第1遺構面は室町時代後半（16世紀以降）の水田耕作面と考えられる。

第6層は、水田耕作土と考えられる。土層断面では、第5層との境界面に犁痕と推測される砂層を充填する凹みが確認されている。遺構面としては検出していないが、耕作面であろう。第7層は第2遺構面を覆っている。細砂～粗砂からなる砂層で、洪水砂であると考えられる。第8層は第2遺構面のベース層である。粘性がある。水田耕作土と推測される。第2遺構面からは、犁痕と溝が検出されている。ベースである第8層からは14～15世紀代の遺物が出土していることから、第2遺構面は室町時代（15世紀代）の水田耕作面と考えられる。

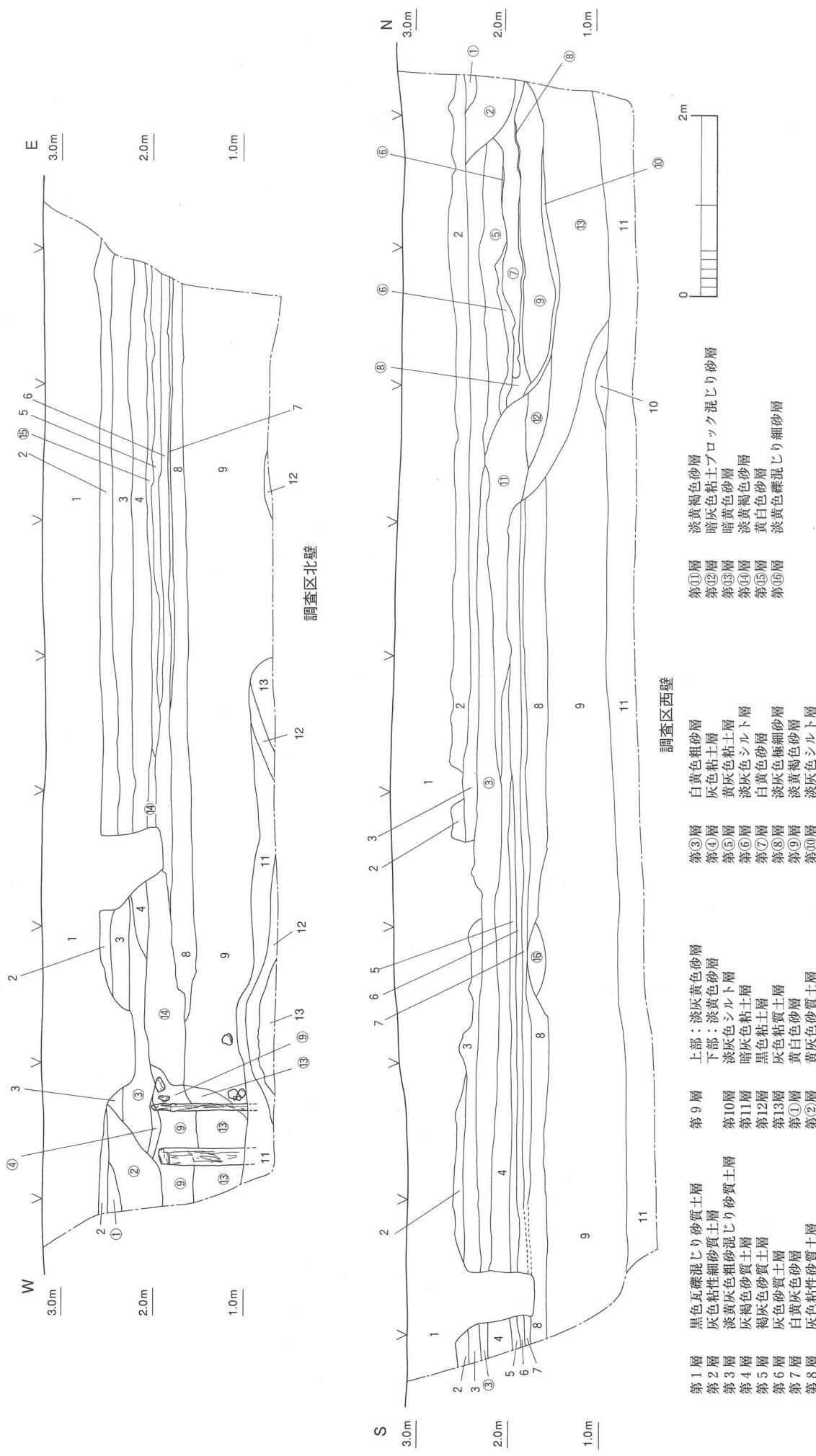
水田耕作土と考えられる第8層は第3遺構面を覆っている。当遺構面のベース層は、第9層である。第3遺構面では、犁痕が検出された。第8層からは14～15世紀代の遺物が出土しており、当遺構面は室町時代（14～15世紀代）の水田耕作面であると考えられる。

第9層は、層厚90cmを測る厚い砂層である。第10-1地点において当層に対応する層（第10-1地点の第9層）からは弥生時代中期初頭の土器片が出土していることから、弥生時代中期初頭以降に堆積したと考えられる。第9層より深部は深掘トレンチを設けて、土層を確認した。第11層は暗灰色粘土層で、上部は褐色を帯びている。粘性が強い。植物遺体を含んでいる。後背湿地の堆積物であると考えられる。第11層上に部分的に堆積する第10層はシルトからなっており、ラミナがみられる。第13層は灰色を呈する粘質土層で、しまりは良い。当層上に堆積する第12層は第13層が土壤化したものと推測される。植物遺体を含んでいる。

なお、第161図の土層の註記は、次のとおりである。土層は、上層から順に土層番号を付けた。その際に基本土層と遺構埋土に分け、前者にはアラビア数字、後者には円囲いのアラビア数字で通し番号を付した。土層註記には、土層番号の次に土層名、続けて粒度・包含物などを順に記し、最後にその土層の性格を述べた。

【第10-2地点 土層】

- 第1層 黒色瓦礫混じり砂質土層 現表土・搅乱土。
- 第2層 灰色粘性細砂質土層 極細砂～細砂。近世末～近代の水田耕作土。
- 第3層 淡黄灰色粗砂混じり砂質土層 粘土・粗砂。灰色粘土と黄色粗砂が混ざっている。
- 第4層 灰褐色砂質土層 上半部：細砂。下半部：極細砂。鉄分が多くみられる。第1遺構面を覆っている。近世の畠耕作土。
- 第5層 褐灰色砂質土層 極細砂～細砂。やや粘性がある。鉄分を若干含む。当層上面が第1遺構面である。中世の水田耕作土。
- 第6層 灰色砂質土層 極細砂～細砂。第5層との境界面に犁痕と考えられる砂を充填する凹みがみられる。中世の水田耕作土。
- 第7層 白黄灰色砂層 細砂～粗砂。洪水砂。第2遺構面を覆っている。
- 第8層 灰色粘性砂質土層 粘土～細砂。粘性がある。当層上面が第2遺構面である。中世の水田耕作土。
- 第9層 上部：淡灰黄色砂層 細砂～粗砂。下部：淡黄色砂層 細砂。ラミナが顕著にみられる。
- 第10層 淡灰色シルト層 シルト。ラミナがみられる。
- 第11層 暗灰色粘土層 粘土。粘性強い。上部が褐色を帯びる。植物遺体を含む。
- 第12層 黒色粘土層 粘土。第13層が土壤化したものと考えられる。植物遺体を含む。



第161図 土層断面図 1/60



第162図 調査区北壁土層断面（南東から）



第163図 調査区北壁土層断面（南から）



第164図 調査区西壁土層断面（北東から）



第165図 調査区西壁土層断面（南東から）

第13層 灰色粘質土層 粘土。細砂を含む。しまりは良い。

第①層 黄白色砂層 細砂～中砂。しまりは悪い。

第②層 黄灰色砂質土層 粘土と細砂が混ざる。黄白色砂層のラミナがみられる。

第③層 白黄色粗砂層 細砂～粗砂。

第④層 灰色粘土層 粘土。

第⑤層 黄灰色砂層 細砂。S X01の埋土。

第⑥層 淡灰色シルト層 粘土～シルト。炭化物を含む。S X01の埋土。

第⑦層 白黄色砂層 細砂～粗砂。ラミナがみられる。S X01の埋土。

第⑧層 淡灰色極細砂層 極細砂。ラミナがみられる。S X01の埋土。

第⑨層 淡黄褐色砂層。細砂。ラミナが顕著にみられる。S X01の埋土。

第⑩層 淡灰色シルト層 シルト～極細砂。S X01の埋土。

第⑪層 淡黄褐色砂層 極細砂～細砂。ラミナが顕著にみられる。S X01の埋土。

第⑫層 暗灰色粘土ブロック混じり砂層 細砂。粘土ブロックが混じる。S X01の埋土。

第⑬層 暗黄色砂層 細砂～粗砂。ラミナが顕著にみられる。S X01の埋土。

第⑭層 淡黄褐色砂層 極細砂～細砂。ラミナが顕著にみられる。S R01の埋土。

第⑮層 黄白色砂層 細砂。しまりは悪い。洪水砂。第1遺構面を覆っている。

第⑯層 淡黄色礫混じり細砂層 細砂。径3～15cmの礫を多く含む。S D01の埋土。

(竹村)

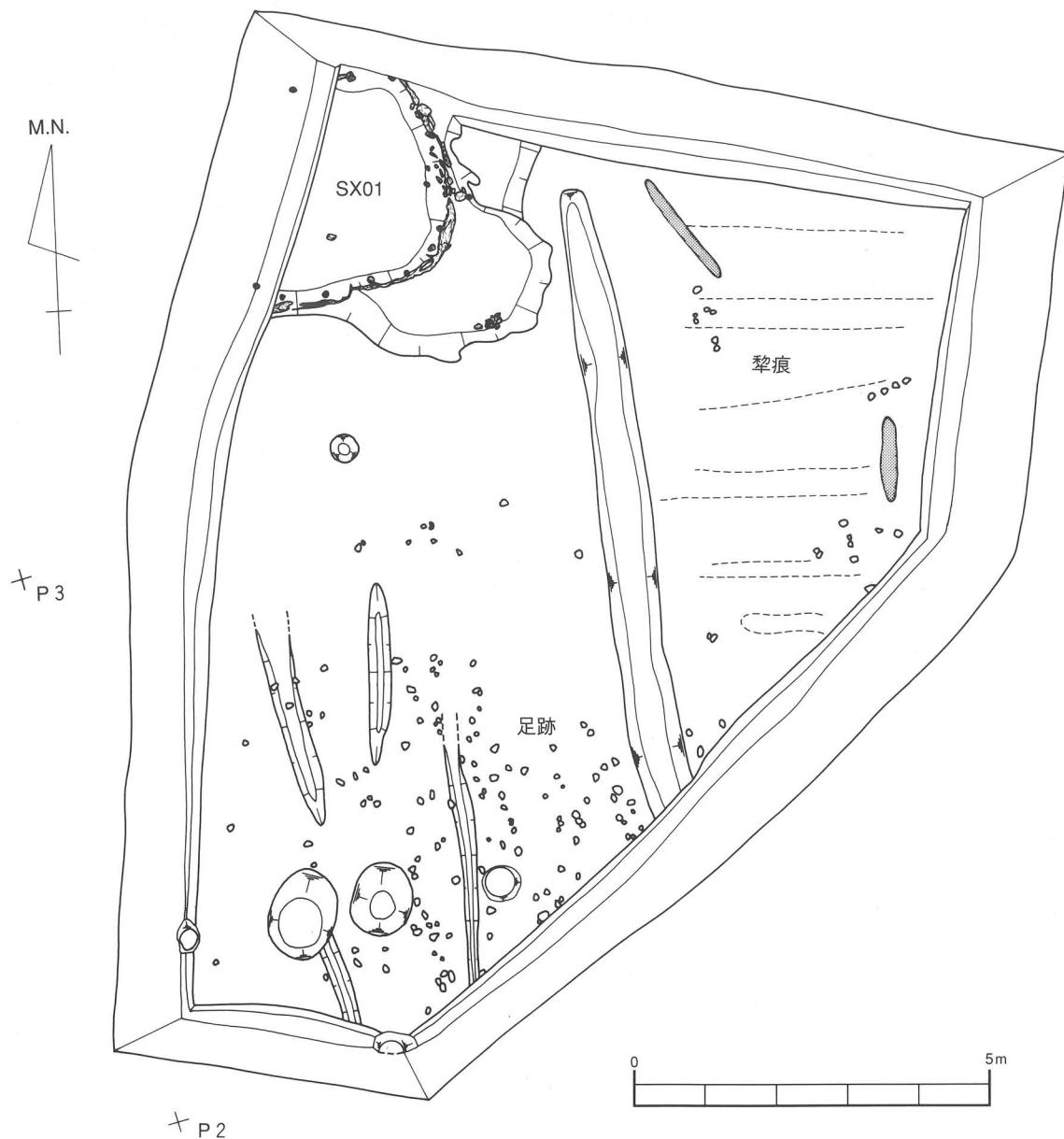
3) 検出遺構

①第1遺構面

第4層に覆われ、第5・6層をベース層とする遺構面である（第166～169図）。ベース層である第5・6層には16世紀代の遺物が含まれていることから、室町時代後半（16世紀以降）の遺構面であることがわかる。

当遺構面からは、牛の足跡や犁痕などの耕作痕が検出された。牛の足跡は、南半部を中心に検出された（第168図）。犁痕は調査区の南西部では南北方向に走っており、磁北より 1° 東に振るものから 13° 西に振るものまでみられる。東半部では東西方向に走っており、磁北から 81° 東に振るものから 87° 西に振るものまで認められる。南北方向に走る犁痕の方が東西方向のものよりも遺構の肩が明瞭で、幅が広く深い。東西方向の犁痕は、ベース層に白色土が筋状にみられる状態で検出され、遺構の肩は不明瞭である。

調査区北西部では調査区西壁にかかるように、流路S R01が検出された。当流路は第10-1地点との間を南流しており、本調査地点で検出されたのは当流路の東側肩にあたる。埋土は、第⑭層である。



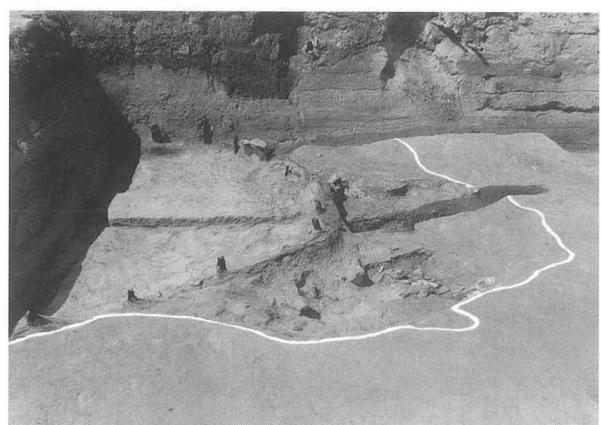
第166図 第1遺構面平面図 1/100



第167図 第1遺構面全景（南東から）



第168図 足跡検出状況（南西から）



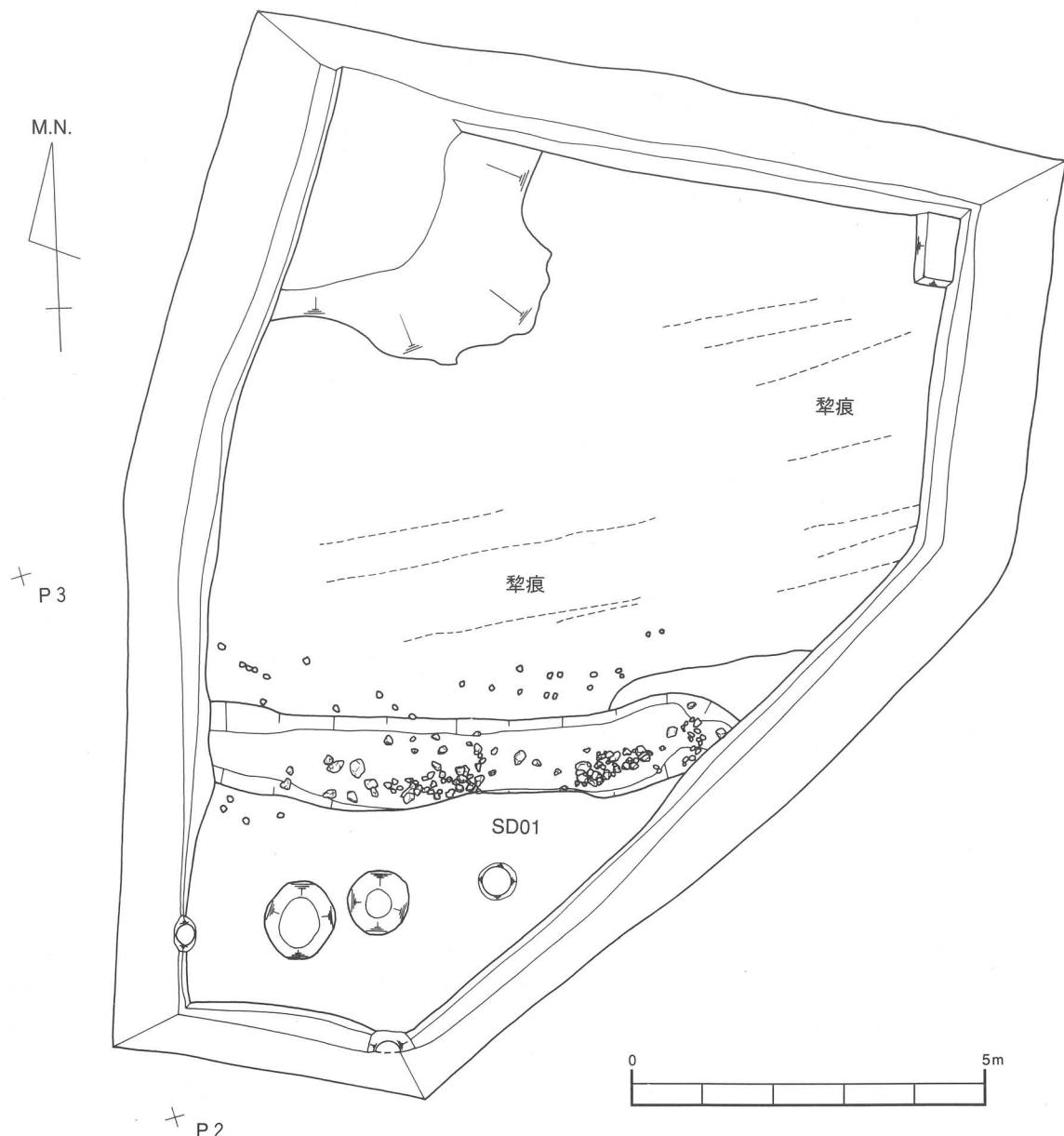
第169図 SX01（南西から）

第10-1地点の調査結果と合わせると、幅は25m程度になると考えられる。

円形杭列遺構 SX01は、調査区北西隅で検出された（第166・169図）。西半部は調査区外となっているため、全体像は不明である。埋土からは近世～近代の土器類が出土している。規模は南北方向では直径約4mを測る。断面は椀状で、深さは約90cmである。構造は南北方向4m以上の掘形に径10cm以下の枝木を杭として11本以上打ち込み、杭列の外側に沿って直径2cm前後の枝木を5段にして横方向に設けていた。SX01内埋土には黄色砂と灰色粘質土が交互に堆積しており、流水期と滞水期があったことがわかる（第④～⑬層）。SR01と重複する近世の流路の水を利用する施設であった可能性が高い。

②第2遺構面

第6・7層に覆われ、第8層をベース層とする遺構面である（第170～175図）。覆土層とベース層



第170図 第2遺構面平面図 1/100

に包含される土器から、室町時代（15世紀代）の遺構面であると推測される。

調査区全面に、東西方向に走る犁痕を検出した（第170・171図）。方向は磁北より $71^{\circ} \sim 80^{\circ}$ 東に振っている。第1遺構面の東西に走るものと同様に、ベース層に白色土が筋状にみられる状態で検出され、遺構の肩は不明瞭である。

調査区南部では、真北に直交して東西方向にのびる溝SD01を検出した（第170・172～175図）。近接する第17地点で検出されたSD01と連続するものと考えられる。最大幅は1.3mで、深さは約20cmを測る。埋土である第16層は細砂で、径20cm以下の円碟を多く含んでいる。SD01東部で深さ4.8cmのシルトが堆積する窪みがみられた。切り合い関係から窪みの方がSD01より古い。第3遺構面まで掘り下げた時点で、当流路の両肩に沿って、幅22cm、高さ13cmのベース層のなだらかな高まりが認められた。出土遺物から、SD01は15世紀代のものであると考えられる。

③第3遺構面

第8層に覆われ、第9層をベース層とする遺構面である（第176～178図）。調査区北東部には東西方向に走る犁痕が多く検出された。犁痕の方向は、磁北より 64° 東に振るものから 76° 西に振るもの



第171図 第2遺構面全景（南東から）



第172図 SD01検出状況（南東から）



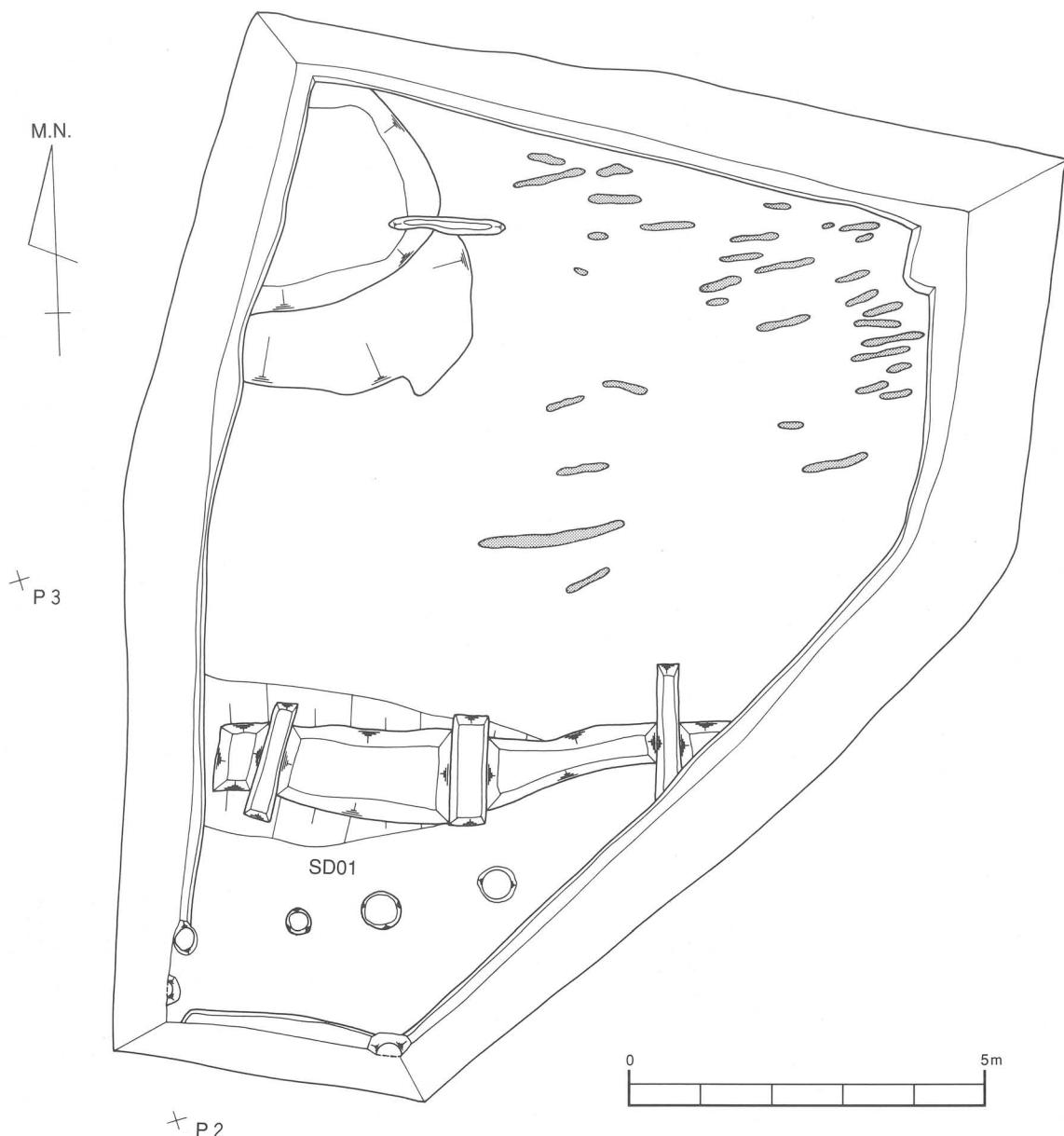
第173図 SD01（南東から）



第174図 SD01（南から）



第175図 SD01（北西から）



第176図 第3遺構面平面図 1/100

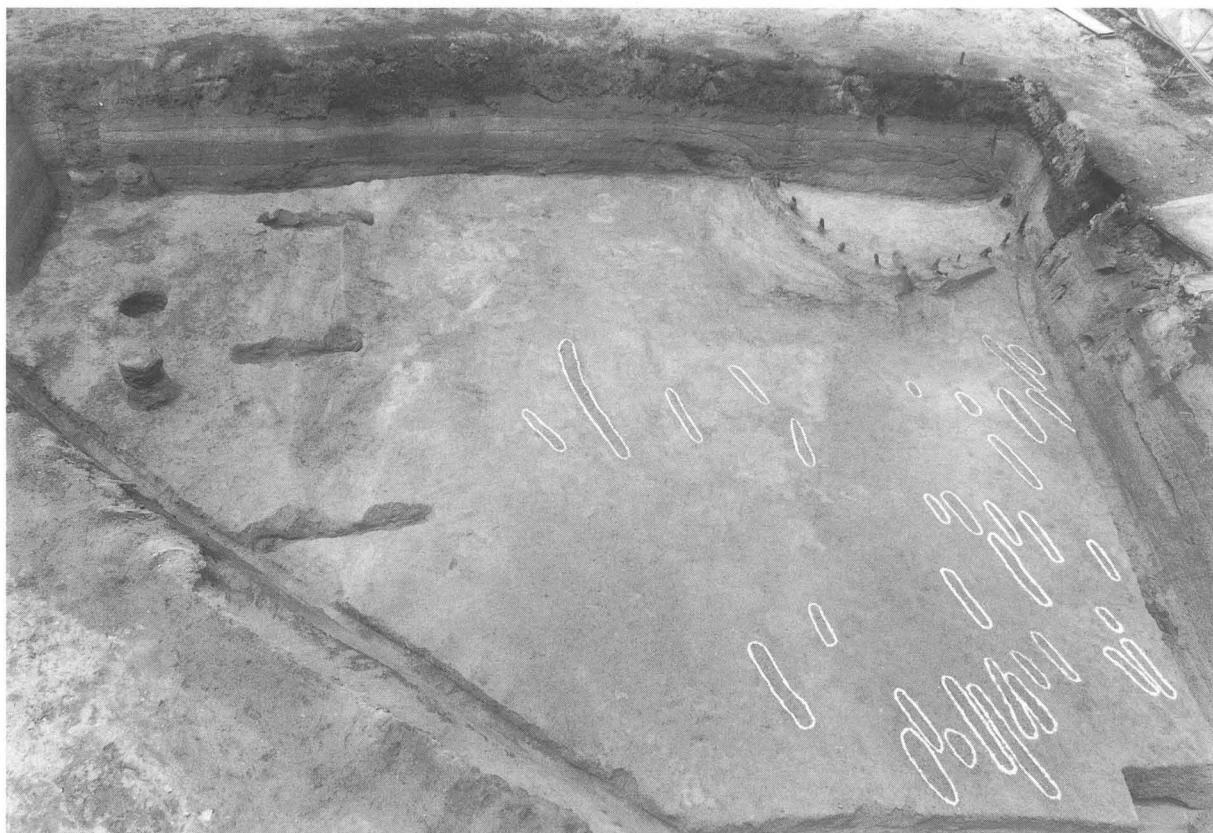
まで認められる。犁痕の幅は10cm前後である。

覆土である第8層には14～15世紀代の遺物が含まれており、当遺構面が当該時期の水田面であったと推測される。

④深掘トレンチ

建物基礎掘削深度である現地表から深さ2.5mまでを確認するために、調査区の北壁と南壁に沿ってL字形に幅2.5mのトレンチを設定した（第179図）。その結果、第9層の下層から粘土～シルト層（第10～13層）が検出された。これらの土層は当地点の北方に位置する若宮遺跡第1・2・3・4・11・16地点等で確認されている縄文時代晩期の遺物包含層（灰色シルト層）と弥生時代の遺物包含層（黒色砂質土層）に似ている。

第10～13層の堆積時期は、遺物が出土していないことから不明と言わざるを得ない。しかし、当遺構面を覆っている洪水砂である第9層からは、わずかながら弥生土器片が出土しており、第9層を弥生時代頃の洪水砂と考えるならば、第9層直下の第10～13層は若宮遺跡北半部の縄文時代と弥生時代の遺物包含層に対応させることができるとされる（竹村）。



第177図 第3遺構面全景（南東から）



第178図 第3遺構面全景（南西から）



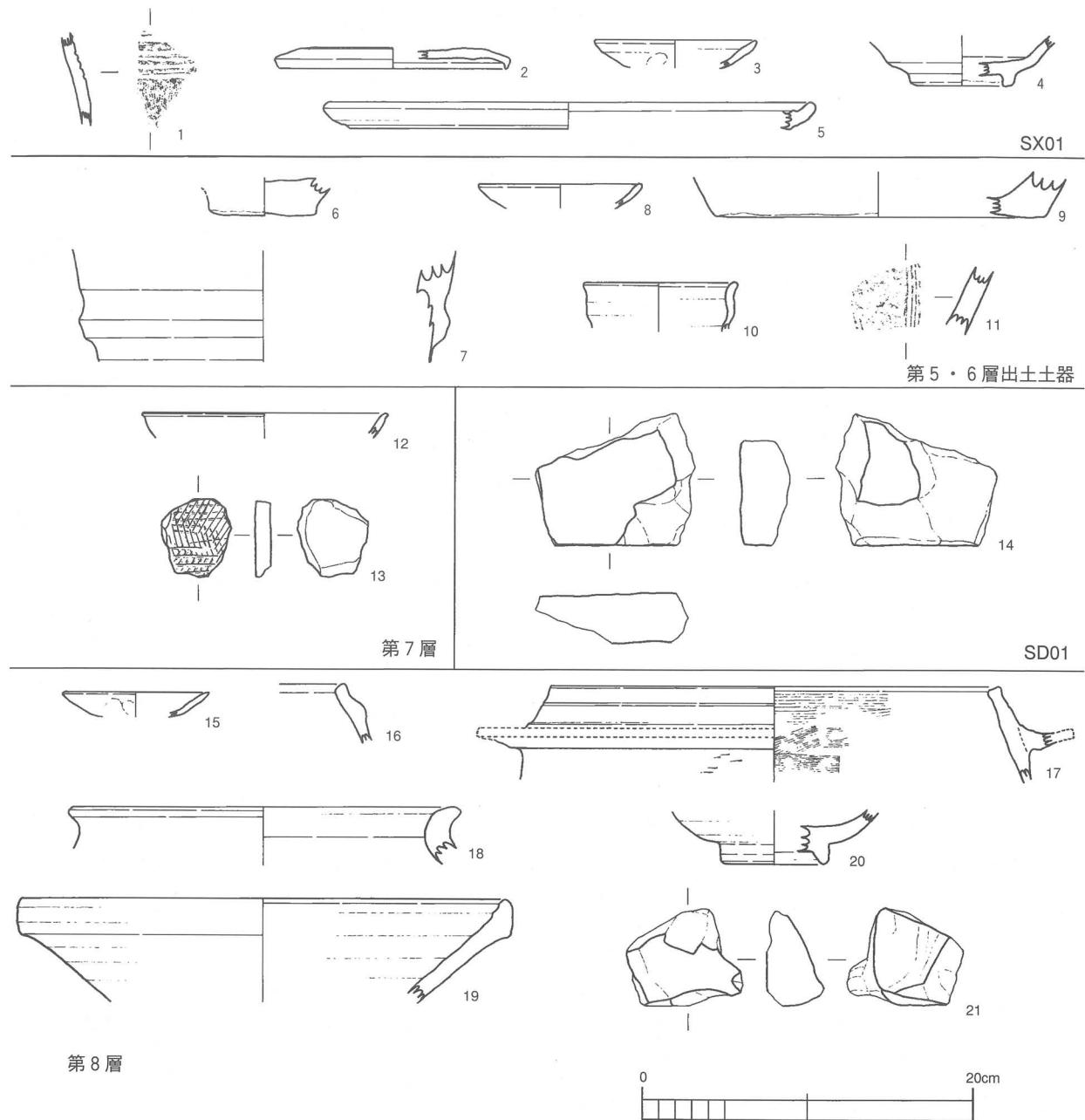
第179図 深掘トレンチ（南西から）

4) 出土遺物（第180図）

コンテナ1箱分の遺物が出土した。出土土器は、第10-1地点と同じく耕作土に含まれていたため、細片が多く図化できるものは少なかった。

① SX01出土土器

弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器（青磁・染付・近代の磁器）・瓦が出土した。1は弥生土器の甕である。6条以上のヘラ描沈線文が施されており、畿内第I様式新段階に比定される。2は須恵器杯蓋である。中村編年IV型式3段階に比定される。3は土師器小皿である。口縁部の内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと推測される。4は青磁碗である。内外面に施釉し、淡緑色を呈する。高台内面は露胎し、暗青灰色を呈する。5は無釉の陶器である。器種は不明。



第180図 出土遺物実測図 1/4

黄茶色を呈する。

当遺構の時期は、出土土器から判断して、近世～近代のものであると考えられる。

②第5・6層出土土器

弥生土器・土師器・須恵器・陶器・円筒埴輪が出土している。6は弥生土器壺の底部である。器表はローリングを受け、摩耗している。7は円筒埴輪で、ローリングを受けている。8は土師器小皿である。9は土師器の底部である。器種は不明。10は陶器の鉢である。内外面に緑褐色を呈する釉が施されるが、剥落しているためか器表の大半は露胎し、赤褐色を呈している。11は備前焼擂鉢である。内外面は暗赤灰色を呈し、断面は暗赤色を呈する。

第5・6層出土土器の中心時期は、15～16世紀代である。

③第7層出土土器

土師器・瓦質土器が出土している。12は土師器塊である。口縁端部は外側に肥厚している。13は中世須恵器甕の破片を用いた加工円盤である。

④SD01出土土器

土師器・須恵器・陶器（備前焼）が出土している。14は形象埴輪の破片である。

⑤第8層出土土器

土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼など）が出土している。15は土師器小皿である。16は土師質の土壙である。外面および口縁部内面に煤が付着している。17は瓦質羽釜である。口縁部は内傾し、外面には凹線状の段がみられる。胴部はヨコ方向のヘラケズリが施される。内面はヨコハケ調整である。18は須恵器甕の口縁部である。19は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部は上方へ拡張している。14世紀前半のものである。20は青磁碗である。内外面に施釉し、淡緑色を呈する。畳付および高台内は露胎し、淡赤褐色を呈する。

第8層出土土器の中心時期は、14～15世紀代である。

(竹村)

5) 小結

当地点では、第10-1地点と同時期の耕作面が3面検出された。第1遺構面では、室町時代（15世紀以降）の耕作に関連する遺構が検出された。第2遺構面では、室町時代（15世紀代）の耕作に関連する遺構が検出された。第3遺構面では、室町時代（14～15世紀代）の耕作に関連する遺構が検出された。また、深掘調査では現地表より2.3mの深さで、遺物を含まない粘土・シルト層が確認された。

第10-1地点との対応関係は、基本層位では、第10-1地点の第1～9層が第10-2地点の第1～9層に対応している。遺構面では、第10-1地点未検出=第10-2地点第1遺構面（16世紀以降：下層に16世紀代の遺構面があるため）、第10-1地点第1遺構面=第10-2地点未検出（16世紀代）、第10-1地点第2遺構面=第10-2地点未検出（16世紀代）、第10-1地点第3遺構面=第10-2地点第2遺構面（15世紀代）、第10-1地点第4遺構面=第10-2地点第3遺構面（14～15世紀代）という対応関係になる。

以上のことから、第10-1地点でも述べたとおり、当調査地周辺は14世紀代から耕作地として開発・利用されはじめたことが追認された。両地点で異なる点は、SR01を境として、その西側にあたる第10-1地点では南北方向に犁痕が走っているのに対して、東側にあたる第10-2地点では東西方向に犁痕が走っていることである。

また、当地点では第10-1地点でみられた牛骨は確認されておらず、その分布範囲から外れていると判断される。

深掘トレーニングで確認された粘土およびシルト層は、その様相から若宮遺跡北半部でみられる縄文時代晩期と弥生時代前半～中期初頭の遺物包含層と対応する可能性が高い。第10-1地点の深掘トレーニングでは当層は検出されていないことから、洪水堆積物である第9層は第10-1地点の方が厚いことがわかり、本流に近いと考えられる。

(竹村)

5 第11地点の調査

1) 調査の方法

今回の調査は、工事によって遺構の破壊される深度までを調査した。調査した深度は地表面から約1.5mである。

調査にあたっては、盛土と近世～近代の水田土壤層を機械により掘削し、中世の遺物包含層から下層をすべて人力により掘削した。

標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を使用し、その移設は、調査区北西約40mの市道に設置された仮B.M.4.10mを利用した。

調査は弥生時代後期の遺構面を検出したのち、その下層の縄文時代の遺物包含層を掘削し、無遺物層に達するまで行った。
(山田清朝・服部 寛)

2) 層序

土層は、調査した範囲では大きく9層で形成されている（第182・183図）。

調査地では、基本層序として上層から順に以下のように分層した。

第1層 盛土層と搅乱（第182図1に対応、以下同じ）

第2層 10YR6/2 灰黄褐色シルト質中砂～粗砂（旧耕作土層、部分的に洪水砂をはさむ）

第3層 10YR5/2 灰黄褐色シルト質細砂～中砂（土壤層、中世の遺物包含層）

第4層 7.5YR4/2 灰褐色シルト質細砂～粗砂（土壤層、古代の遺物包含層）

（第5層 7.5YR3/3 黒褐色シルト質粗砂（弥生時代後期の溝埋土））

第6層 7.5YR3/2 黒褐色粗砂～細礫混じりシルト（土壤層、腐植質、細礫が密に混じる、弥生



第181図 調査区配置図 1/500

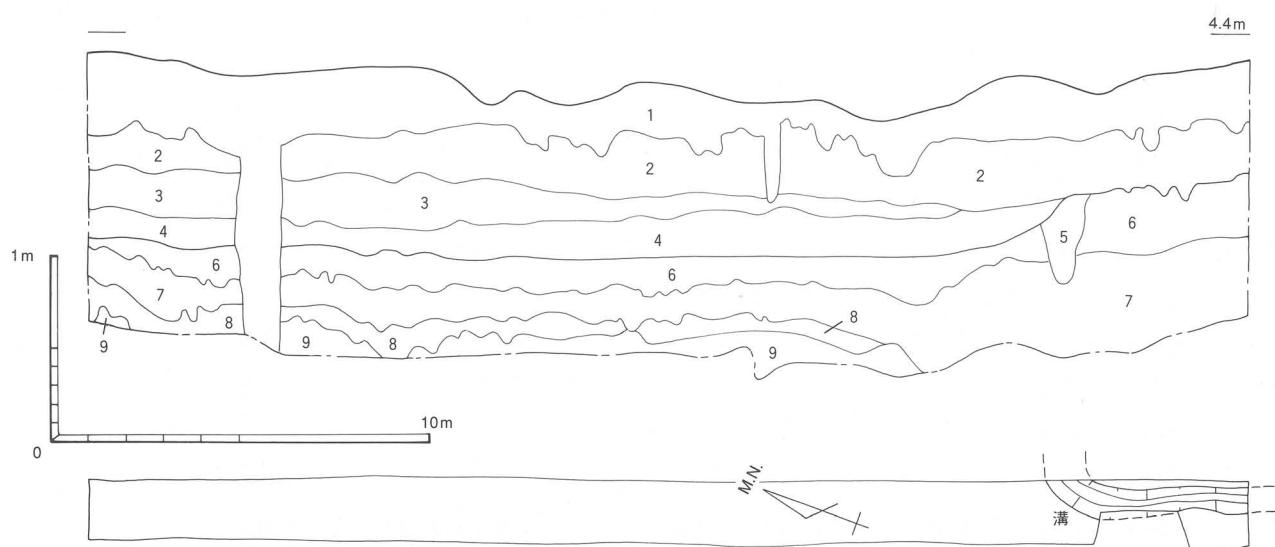
時代の遺物包含層、調査区南半では黒褐色粗砂)

第7層 10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト (洪水起源の堆積層、調査区南半では橙色粗砂、自然堤防を形成する層)

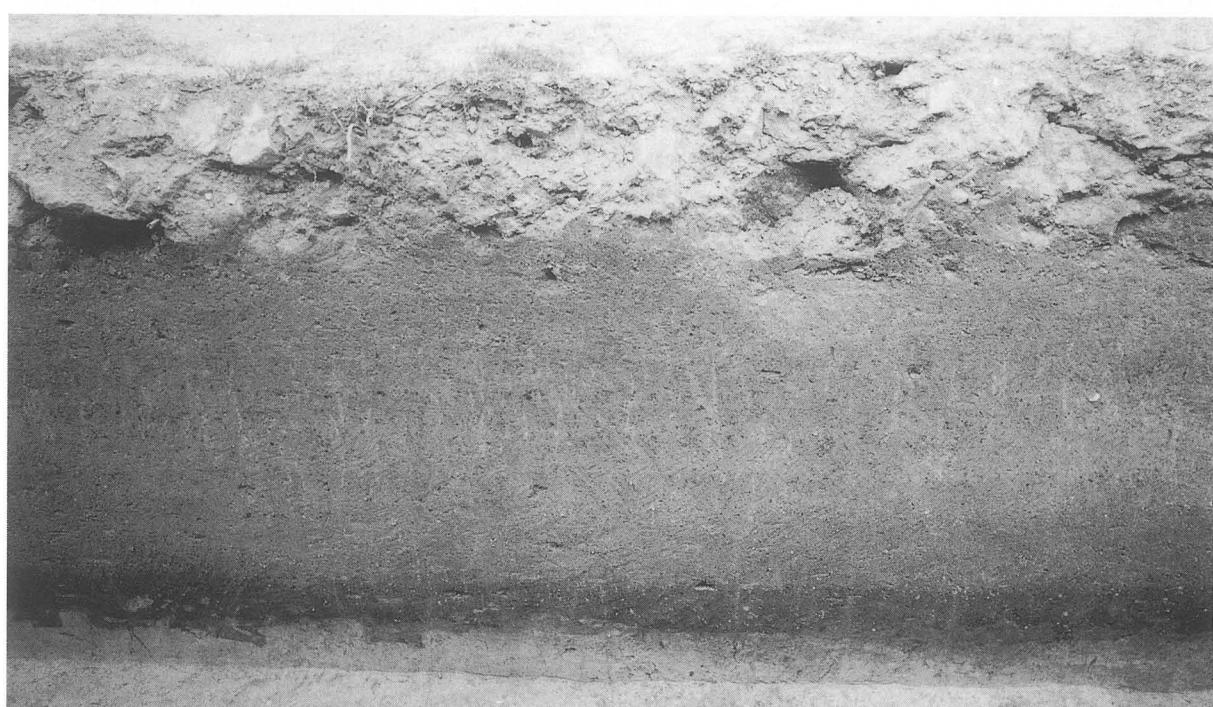
第8層 10YR4/1 褐灰色極細砂混じりシルト (土壤層、縄文時代晚期の遺物包含層)

第9層 10BG5/1 青灰色極細砂混じりシルト (洪水起源の堆積層、自然堤防を形成する層、無遺物層)

(山田・服部)



第182図 遺構平面図 1/200, 土層断面図 水平:1/200・垂直:1/40



第183図 基本層序 (西から)

3)検出遺構

第4層を取り除いた段階で遺構面を検出した。検出した遺構は溝1条である（第182・184図）。

溝を調査区南端で検出した。溝の両端は調査区外に延びる。方位はほぼ南北方向を示すが、調査区南壁から北へ5mの付近で東西方向に向きを変える。約4.7mを検出した。溝の横断面はU字形を呈する。検出面における幅は0.6～1.1m、底の幅は20～50cmを測る。検出面からの深さは最深部で約50cmを測る。底部の標高は3.1m前後で、特に傾斜はしていなかった。

溝からは、弥生時代後期の甕が3個体分出土している。

また、下層で縄文時代晚期の遺物包含層（第8層）を確認した。特に、部分的ではあるが、調査区中央付近で土器と炭の塊（径1cm前後）が比較的集中する箇所を検出した。さらに、その箇所では、第6層～第9層では認められない川原石がまとまって検出された。住居跡である可能性も考えられたが、平面・断面とともに住居跡のプラン、柱穴などは確認できなかった。 （山田・服部）

4) 小結

今回の調査の結果、調査地の地形環境の変化とそれに対応した土地利用の変化を捉えることができた。以下に列挙する。

- (1) 縄文時代晚期以前： 洪水起源の無遺物層（第9層）が堆積する。北西方向からの土砂の供給により堆積したものである。自然堤防が形成される。
- (2) 縄文時代晚期： 縄文時代晚期の土器を含む土壤層（第8層）が第9層上に形成される。また、遺物などの出土状況から、居住域として使用された可能性も考えられる。
- (3) 弥生時代以前： 洪水起源の堆積層（第7層）が堆積する。北西方向からの土砂の供給により堆積したものである。第7層には不連続面が認められ、少なくとも2度の堆積により形成されたものであることがわかる。第7層の堆積により、自然堤防は南側に拡大する。



第184図 溝（北から）